

【学位論文】

消費社会における
エスニック・ヒエラルキー
画一化＝多様化相克論再考

氏名：前田悟志

指導教官：玉野和志教授

目次

序 章.....	5
1 問題の所在.....	6
2 本論文の課題.....	8
3 方法.....	11
4 本論文の構成.....	12
第一章 第三のカラー・ラインと「日本人」カテゴリー – <帝国>の振る舞いコードの共有 度合いによるヒエラルキー.....	13
1 本章の課題.....	14
1-1 背景.....	14
1-2 本章の目的.....	15
1-3 第三のカラー・ライン, 新しい人種差別の概念.....	16
1-4 「日本人」をこの議論にのせる意義.....	16
2 第三のカラー・ラインと「日本人」.....	19
2-1 第一の問い: 第三のカラー・ラインの研究に「日本人」が対象になってこなかった のはなぜか.....	19
2-2 第二の問い: 実際には「日本人」は待避的人種差別の対象になっているのか.....	20
2-3 第三の問い: エスニック・ヒエラルキーに綻びはみられるか.....	23
3 小括.....	26
注と資料.....	28
第二章 文化ビジネスとグローバル消費社会の力学.....	30
1 先行研究の検討に代えて.....	31
1-1 第三のカラー・ライン/待避的人種差別という概念の位置づけ.....	31
1-2 ソースティン・ヴェブレンとピエール・ブルデューの枠組みのなかでとらえる.....	33
2 ジグムント・バウマン.....	37
2-1 リキッド・モダニティ.....	37
2-2 ブルデュー批判.....	38
3 一層の消費社会化とエスニック・ヒエラルキー.....	39
3-1 市場経済の深化.....	39
3-2 教育, ハビトゥスによる差異化とエスニシティ/人種.....	43
3-3 「寛容」な態度についてのバウマンの視点.....	44
4 リキッド・モダンな時代のプチブル.....	48
4-1 ミレニアルズのプチブル.....	48

4-2 多様性を管理する技術.....	49
5 小括.....	55
注.....	56
第三章 <帝国>の首都における東アジアと東アジア系を取り巻くダイナミクス.....	57
1 本章の問いと仮説, およびキーワード.....	61
2 状況の変化: 韓流の先行研究から.....	63
3 状況の変化: 局地的な人口比率の増加.....	70
4 音楽と人種.....	77
5 状況の変化・無変化: コスメティクス.....	79
6 米国におけるアジア系の歴史概観.....	81
7 待避的人種差別とハビトゥス.....	86
7-1 第一章とのつながり.....	86
7-2 AZN プライド.....	87
7-3 感覚的溝, 米国での K-Pop, 分断から緩やかな連帯へ.....	91
7-4 残る境界線.....	112
8 トランスナショナル・メディアとアジア系米国人.....	116
9 小括.....	120
注.....	123
第四章 エスニシティ属性を超えて画一的に共有されている「普遍性」: 「モダン」さの序列.....	125
1 Los Angeles 郡での調査.....	126
1-1 調査と分析方法上の制限.....	126
1-2 目的と仮説.....	126
1-3 本章の読み方.....	128
2 データセットの概観.....	129
3 分析.....	132
3-1 「審美的に Desirable」な距離.....	132
3-2 「恋愛対象として Attractive」な距離.....	142
3-3 「(親しい友人関係をもつのに) Comfortable」な距離.....	151
4 仮説検証その1: クロンバックの α による一致度の分析.....	161
5 接触量.....	164
6 政治的に正しい回答傾向.....	165
7 仮説検証その2: Foreign-born Korean 視点をめぐって.....	166
7-1 「審美的に Desirable」な逆社会的距離.....	166

7-2 「恋愛対象として Attractive」な逆社会的距離.....	169
7-3 「親しい友人関係をもつのに Comfortable」な逆社会的距離.....	171
8 小括.....	173
終 章.....	174
文献.....	180
資料：第四章について.....	191
1：第四章の調査対象のその他の基礎的なプロフィール.....	191
2：American Community Survey によるロサンジェルス郡.....	197
3：第四章の調査票.....	209

序 章

1 問題の所在

この論文は、グローバル社会において文化は画一性が拡大しているのか、多様性が拡散しているのか、という社会学の典型的論点をエスニック・ヒエラルキーという概念によって再考することを主題とする。

画一性の拡大が進んでいるのだろうか、それとも多様性の拡散なのか、この問いは長らく多くの論者を巻き込んできた。いずれの論者も今日的社会が現れる直前には画一性が支配的であり、諸々の異質性を取り込むか駆逐して画一的な様式を一般化したという点においては見解を一にしており、論議が始まるのは次の点においてである。つまり、画一的なものが拡大伸張した後に、画一性の限界ゆえに多様なものが広がっていて、いずれ画一的なものを凌駕するという議論と、そうではなく、多様なものは、画一性に再度取り込まれるという見方の相違である。いまひとつの立場は、より広範な支持を得られているようにみえる。すなわち、多様性を共通のフォーマットないし様式の内に取り込んで、差異は一定程度保全されつつも、よりメタな視野では画一性が広がっているという見解だ。上記の議論には多くの研究者から理論的、実証的なアプローチが試みられているものの、議論が尽くされたわけではない。

画一性とはモダニティの特徴であり、多様化とはポストモダニティの特徴の一つであるが、ポストモダニティという言葉自体は、特に 80 年代からおそらく新世紀に入るまでの間に盛んに言われ続け、この第一の立場をとる論者らは現在もポストモダンという区分と考えている。ことグローバル化とのつながりでの多様化論は、グローバル化による画一化を否定しているマイク・フェザーストーン (Featherstone 1995) や、ジョン・アーリ (Urry 2003)。文化帝国主義批判をのりこえるコスモポリタニズムの試みという文脈においてはジョン・トムリンソン (Tomlinson 1991=1997, 1999=2000) など挙げられ、いずれも脱構造化に焦点が当てられており、脱領土化、多様性という共通する主張がみられる。

第二の立場、画一性が多様なものを再度凌駕して、画一性が唯一の様態になるといっているのは、マクドナルド化論のジョージ・リッツァ (Ritzer 1993=1999) である。彼の場合、アメリカを中心とした文化帝国主義的なグローバル化の結果、ポストモダンのものを提供している個人事業や小規模事業者を大企業が駆逐していき、マクドナルドに代表されるような画一性が拡がるとしている。彼は大企業がマーケティングで使用するポストモダンの手法は画一化の一つに過ぎないと考えているためだ。

そして第三の立場は、ポストモダン論同様に脱構造化、脱領土化、多様性をキーワードにしており、大別すれば同じ区分にされているのだが、異なる点はその含意が多様性を残しながらも、再度の画一化への収斂も同時に起こっているという点から本研究においては第三区分とする。

一般にポストモダン論ではモダンとポストモダンの間には断絶があると想定しているが、次に挙げる論者らによると、ポストモダニティはモダニティへのカウンターファクチュア

ルへの要請であったとみるのが適切で、それに続く再帰的近代の嚆矢であったとしており、別の構造化を目指す連続的な過程であるとポストモダニティを再定義する。彼らは、人や集団、制度が自らのあり方を振り返り、修正していくことを再帰性と呼び、既存の制度の自明性への懐疑と自己選択性、個人化の傾向を強め、リスクと個人への負担、不安が増大し、近代的なものを自己修正し続けていくとしている。ジグムント・バウマン（Bauman 2011=2014）はそれをリキッド・モダニティと呼び、アンソニー・ギデنز（Giddens 1992=1995, 1999=2001）、ウルリッヒ・ベック、スコット・ラッシュらは再帰的近代ないし第二近代（Beck et al. 1994=1997）と呼ぶ。これらの解釈はR.M.R.・マグダ（Magda 2001）のトランスモダニティでの整理の仕方がわかりやすく、弁証法的トリアーデを使って説明している。つまり、モダニティはテーゼ、それに異を唱えたポストモダニティはアンチテーゼ、そしてトランスモダニティはそれらを統合するジンテーゼとして説明している。また、人口学的なアプローチで東アジアは欧米諸国に比して短期間で近代化を強引に進めたために弊害がでてきているという、圧縮近代化論を唱えるチャン・キョンスプ（Kyung-Sup 1999, 2010）や落合恵美子（2013）の切り方においても、プレモダン、近代、第二近代（ベックの用語）と区分している。第二近代はそれが示す脱主婦化などの脱構築という内容から、第三の立場の再帰的近代と大きな違いはないと考えて差しさわりはない。さらに、グローバル秩序という側面に重点があるが、アントニオ・ネグリ&マイケル・ハート（Hardt & Neguri 2000=2003）の〈帝国〉論も第三区分に入れるべきだろう。本文中においては脱工業化社会という言葉が使われており、ポストモダン論であるが、内容的には再構造化の現象を指摘しており、国民国家という枠が後景に下がった後にリベラリズム、多様性、脱領域という枠組みで世界規模の新秩序が形成されつつあるとしている。また、間々田孝夫（2007）の第三の消費社会という概念もそうだ。

上記の論争の第三の立場が、示唆的包摂のなかに差異と「普遍性」が構築されることの別の表現であると考えると、普遍性に異議申し立てをする一連の議論も関連する。たとえばウォラーステインやウェンディ・ブラウンである。

ウォラーステインは「ヨーロッパ的普遍主義」（Wallerstein 2006=2008）の中で西洋文明批判を行っている。同氏の世界システム論を刷新したものである。16世紀の「文明」の暴力、18世紀のオリエンタリズムの暴力、19世紀、20世紀に確立した「科学」の暴力を一連の西洋の普遍主義による暴力であるとその連続性を論じている。グローバル秩序というテーマでネグリ&ハートの〈帝国〉論に似ているが、こちらの方はよほど西洋文明批判色が濃厚である。ウォラーステインの言う「ヨーロッパ」には米国などの欧州起源の勢力も含まれており、近代の暴力装置は常に西洋が「普遍性」を纏い、時代ごとにコンテンツは変われども何が普遍的であるかをそのつど制定し、そのシステムを世界規模で拡散することで、非西洋に向けられる暴力を正統化してきているという主旨である。その中では、「普遍性」と個別性の対立であると切り取られていて、つまり、これは画一性＝多様性の緊張関係と対応していると見られるが、画一性の一つの側面が強調されて言い換えられた「普遍性」が志

向しているのは、ある時期を境にして政治的・軍事的・経済的に他を圧倒することができるようになった力を背景とした西洋的価値観で、それはこれまでしばしば暴力的であったという 16 世紀以降の連続性が強調されている。ウェンディ・ブラウン (Brown 2006=2010) も、「寛容」という概念を中心において、西洋リベラリズム批判をおこなっており、誤解を恐れずに言ってしまうえば大まかにはヨーロッパ主義的普遍性批判のウォラーステインと似た範疇に入る。

ウォラーステインのこの議論は 2006 年に発表されたが、2003 年のイラク戦争の翌年、2004 年の同氏の講義を土台としており、また、ブラウンのこの議論も 2006 年に出版されたのだが、やはり土台にしているのは同氏の 2000 年から 2004 年間の諸発表であり、時的にも、共にブッシュ政権批判という性格がとて強い (ブッシュ批判は両書の至る所に見出せる) ため、上記の諸論とウォラーステイン、ブラウンの議論とは一見して距離があると見えるかもしれない。だが、ウォラーステインとブラウンに共通している近代の理解が、普遍主義的普遍性ではなく、ヨーロッパ主義的普遍性が近代性を形作ったとしていることを踏まえて、その西洋世界発の近代性が本研究で言う文化の画一性の発端となる枠組みを用意したと解釈すれば、つながりは割と明白である。彼らが批判しているのはそのような「近代性」は必然性が伴わず、恣意的で公正さに欠いていることにある。

2 本論文の課題

上記のテーマには、画一性はどこに向かっているのかという問いが必然と付随する。以前まで、つまり近代の前期において同化を推進していた主体が方針転換をし、現在の後期近代においては多様性の管理者をしている。多様性は一定の画一性のなかで戯れるように企図されているようである。恣意的に設定されたある基準、価値、システムが「普遍的」、あるいは「モダン」であるという認識が広く参加者の間で共有されることで、画一性は拓がるため、画一性を社会的に構築される類の「普遍性」であると読み替えることはさほど苦しくない。

ここであつかっている括弧つきの「普遍性」とは、われわれがコミットし、そのより一層の洗練を望んでいる民主主義、自由、平等の普遍的価値についてではなく、特定のハビトゥスである。本研究が問題にした序列とは、より「普遍的」、より「モダン」という表象を獲得しているハビトゥスと、その程度が低い表象しか得られていないハビトゥスによるものである。たとえば何が審美的に望ましいのかとか、振舞い方である。したがって、画一化とはそのより「普遍的」なり、より「モダン」な表象が特定系統のハビトゥスに一元的に集約されることで、多様化とは、その「モダン」らしさなり「普遍」的な表象が諸々の方向性をもつ多様なハビトゥスに多元的に分配されることを指す。

「モダン」な表象の一元的な集約は (すわなち大枠での文化の画一性は)、第一章で確認

したように、日本列島出身の日本人が経験する待避的人種差別を招いていると判断でき、それが軽減されそうな、大枠での画一性も多元的になる兆しを見出すことに本研究全体のねらいはある。そのため、第三章では、同様の障壁を経験する韓国系の LA への移民たちを対象にした。本論の展開を先取りして少しだけ説明すると、LA において（フィールドを LA にさだめた理由は後述の第 3 項のとおり）、現時点で大きな変化があったと見られるのは日本人でなく、韓国系であるからである。この時期に韓国系の中で起きた変化は、韓国生まれで西海岸に来た韓国人と、アメリカ生まれの新 2 世韓国系米国人の関係性である。

その変化には、のちほど第二章、第三章でみるように、消費社会の力学が作用していたが、それは、特定の国民国家内の領域に限定されるものではなく、グローバルなひろがりつつながりをもつ消費社会である（もちろん地域間で濃淡はあるのだが）。

画一性の方向性を定めている主体は、従来の覇権国のように特定の単体の国民国家によって担われているわけではなく、そのため明確に主体を名指しできず、その所在を示すには段階のある階層図の方が表現として適している。端的に言うと、「普遍」的と看做されている主体の所在をエスニック・ヒエラルキーが示している。その場合、括弧つきの「普遍性」は当然にカント (Kant 1787=2010) が言うようなアプリアリな普遍性であるとは言えない。

「普遍性」を主張する強弁とイデオロギーである。冒頭のように、その「普遍」なる基準は、以前の同化一辺倒とは異なり、今では一定の枠内であれば多様性を礼賛し受け入れる、「寛容な」姿勢をみせているため見えづらくなっているし、またエスニック・ヒエラルキーは人種にもとづいた序列ではないため、これも見えにくくなっており、従来の素朴な文化帝国主義批判は有効とはもはや言い難い。

しかし、人々がそれを序列と認識する、しないに関わらず、その序列は漠然とではあるが日常に溢れている。消費行動はその人がどのような記号表現を選ぶのかを示し、その人の序列内での場所を決める。消費行動での嗜好を規定しているのは生まれ育ちによるハビトゥスであるが、周知のように、これは人の選好のみならずその人の振る舞い方までを規定する。振る舞い方や、何を消費するかによってその人がどのソーシャルな層に属することが相応しいかが決められる。その境界線は単純に「違う」だけではなく、何が「普遍的」かの共通認識と一組で、車の両輪のように対になって意味をなすエスニック・ヒエラルキー上での場所である。その「普遍的」なるものを中心とした「ズレ」の程度で序列づけがある、というのが本研究の仮説の前半である。

続く仮説の後半は問いの体裁をとっている。リベラルで多様性を称揚する言説により、あるいは文化産業・文化政策により、エスニック・ヒエラルキーが消失するか、変化する兆しはあるのか。それともむしろ階層間の分断を維持するか創造することで、多様性の増進に一役買っているのかである。後期近代ではより一層、社会の市場化が多方面で深化しており、消費社会然としてあらゆるものが商品化されて市場価値を持つ。リベラルで多様性を称揚する潮流が明示的になる場合は消費と、それを支える生産の場においてである。

前半と後半を併せて立証を試みる（一部のフィールドワークに依拠するため、あくまでも部分的という条件付だが）過程を通し、一定の画一性の範囲内で多様性が管理されているという構図がより詳細に見えてくるだろう。つまり、冒頭で紹介した論争は、エスニック・ヒエラルキーを鍵として問い直す必要がある。また、グローバル秩序が一昔前とは様相が異なっているが、それがエスニック・ヒエラルキーにどのように反映されているかを精査することで、人々が体感する水準でのグローバル秩序の変化の兆候を捉えて記述することを本研究の最終的な目的としている。

念のため、別の言い方をして全体を整理すると、後期近代が近年いよいよ高まり、統治機構や主体は超領域的な存在となり、同化路線が放棄され、残されたのは多様性の異種混交な状態であった。そのような状態は不安と対立がつきもので、緩和剤として注入された「寛容」は、直接的な対立を多少減らす役割は果たしたが、同時に人々を分節化して分断統治を可能にもした。こうした枠組みを用意し、一定の画一性を与えているのが、西洋世界発の「普遍性」であり、そこからの「ズレ」度合い／具合によって示唆的な包摂があり、それはエスニック・ヒエラルキーに図示されうる。しかし、その西洋世界発の「普遍性」の強弁は18世紀以降の政治的・軍事的・経済的な強大さを背景としていたのだから、そのバランスに大きな変化が生じようとしている現時点では、「普遍性」そのものがこれまで程には統一的ではないかもしれない。したがって、本研究では、現在のグローバル秩序を云々するには、その公正さなり、非公正さなりの議論をこれ以上深めるよりも、新たなハードパワーに裏打ちされた新興勢力のソフト・パワーの影響を追うことで、エスニック・ヒエラルキーの変容の可能性なり、兆しなりを追及することを選んだ次第である。

本稿は全編にわたって、ネグリ&ハートの〈帝国〉論を下地にしており、ここで、ネグリらの議論と、本研究のつながりを述べたい。彼らのいう山括弧でくくられる〈帝国〉とは、国民国家全盛時代の特定の覇権国家による帝国主義批判とは異なる。山括弧でくくられる方の〈帝国〉は、そうした帝国主義が国民国家の主権の衰退とともに、過去のものとなったときに現われた新しいグローバル規模の主権と秩序管理の諸々のネットワークによるシステムである。そこでは、国境という境界が希薄になり、第一世界のなかに第三世界が頻繁にみいだされ、産業は工場労働からコミュニケーションと協働と情動労働に軸足を移している。そのなかで、常に現状に抗い、刷新を求めて運動を展開する人々（その間に緊密な連帯はない）を総称してマルチチュード（群集／多数性）と名づけているが、ようするに再帰性の一端を担う主体の言い換えだと思われる。つまり、冒頭で触れたようにポストモダン論、後期近代化論である。〈帝国〉においては、多様性は礼賛され、創造性に駆動させられるとされるが、一方で、新しい人種差別についても言及されている。新しい人種差別とは、ジムクローなどの古典的な人種差別が倫理的にも制度的にも否定された後により顕著になる、習慣、感覚、価値観の違いにもとづく差別とされる。これが、『〈帝国〉』論のなかでは、一節を使って、近代から後期近代への移行と、古典的人種差別から新しい人種差別への

移行が対応しているという話にとどまっていたが、本稿においては中心的命題にしている。〈帝国〉は欧米が中心となっていた帝国主義時代の覇権的諸国家とは異なると書かれているが、しかし、〈帝国〉のなかでも米国は特別な立ち位置を占めているとされ、その米国はヨーロッパ帝国主義を刷新した形で引き継いだとされているため、ネグリらの言っている〈帝国〉はなおも西洋的な色合いが濃厚であると考えられる。それは次ぎの想定にも顕れている。〈帝国〉の中心にはその首都としてグローバル都市が 3 つあるとされる。政治的首都はワシントン D.C.、経済の首都はニューヨーク、そしてエンターテインメントの首都はロサンゼルス、ということになっている。いずれもアメリカ合衆国内なのである。

本稿でロサンゼルスを選んだのは、そういうことを背景にしている。Herbert I. Schiller (1979) は前世紀のグローバル勢力間での米国の強大化の一つの要因に、アメリカ（主にハリウッド）のエンターテインメントによる世界規模での躍進というソフト・パワーが果たした可能性を挙げている。その現在のエンターテインメントの〈帝国〉首都で、韓流という東側のエンターテインメントのソフト・パワーがどのように受容されているのかは、〈帝国〉の中心の軸のゆらぎを調べることになる。もっとも、本稿の関心の中心はすでに述べたように、韓流の受容そのものというよりも、それを媒介したエスニック・ヒエラルキーへの影響である。あえてネグリらの〈帝国〉論になぞらえて表現するならば、第三章で試みたのは、〈帝国〉の現状に抗う韓国系のマルチチュード的な再帰的活動をすくいとることであるとも言える。

3 方法

仮説の後半を構成する問いに対しては、いずれも経営学とその周辺の分野に属する理論を参照する。消費社会に対応するマーケティング論、生産の場における多様性の増大に対応するダイバーシティ・マネジメント（あるいは異文化コミュニケーション論）およびリーダーシップ論を社会的視点からみつけ、リベラルで多様性を称揚する潮流がエスニックな差異を縮減するのか、分断するのかを問う。

仮説の前半に対しては、文化産業・文化政策の影響については、文献調査ならびにフィールドワークにより、ロサンゼルスにおける近年の韓流の影響を追う。ロサンゼルスを選んだのは、この街が世界のエンターテインメントの首都の一つとされているからであり、また少し前までのような覇権国ではもはやないが、それでも特権的な地位にある米国の二大都市のひとつであるからであり、また、米国のなかでは最もリベラルな都市と言われており、東アジア文明に最も開放的なアメリカの都市であるからである。とは言え、当然に一都市での局所的な事象と接するのみであるため、脱領域的な規模におよぶ問いに対する回答を用意することはできない。そのため、回答はこのフィールドに限定されるという条件付である。聞き取りおよび文献調査から立ち上がる人々の分断や包摂および、序列、「普

遍性」神話が健在であることを示す。また併せて、参考程度ではあるがアンケート調査も同フィールドで実施し、社会的距離（正確には逆社会的距離）から人々を分節化している軸の示唆と、「普遍性」の方向性を図示する。

4 本論文の構成

第一章では、新しい人種差別、待避的人種差別、第三のカラー・ラインという概念に着目し、人種という生物的差異にもとづく制度的差別、経済的・職業機会的な差別や格差を乗り越えても、それでも残る文化的な差異にもとづく境界線の形成をたどり、それが、グローバル秩序という個人に外在する要因にあることをみる。この章で主な分析の対象としたのは日本および「日本人」である。

第二章では、その第三のカラー・ライン、待避的人種差別なるものが、ハビトゥスという概念に親和的であることを確認する。また、消費社会論の流れを確認し、ハビトゥスと消費社会とのつながりをみる。さらに、理論的に導ける範囲内で後期近代のプチブルの特徴として、多様性の管理を挙げる。具体的にそこに含まれるのは、マーケティング、ダイバーシティ・マネジメントならびに、それに関連する異文化コミュニケーション論とリーダーシップ論である。また、「寛容」とリベラリズム、差別論・抑圧論についても言及し、第二章全体で、本研究が理論的に依拠する枠組みを総合的に示す。

第三章においては、文化産業・文化政策としての韓流を確認し、そのアメリカ市場での様子をフィールドワークからの聞き取りもあわせて描く。この章で、韓国系アメリカ人と韓国からの新移民の分断と接合に、韓流がいかに媒介要素として少なくともシンボリックに機能したのかを素描する。ここでも、第一章と類似して、個人に外在する政治的なり社会的な要因が人々の分節化の説明力をもっていて、それが平坦な分断ではなく、明らかに序列をもっていることを読み取る。

第四章では、ロサンジェルス郡でのアンケート調査から読み取れる序列を確認する。設問の中心は各種の社会的距離で、併せて政治的に正しい回答も分析の対象にしている。また、「モダン」のステレオタイプも問い、社会意識として広く共有されている序列を図示する。

終章では結論として、各章からの知見を総合して論述する。エスニック・ヒエラルキーという補助線を引くことで得られる収斂から、既存の画一化、多様化論に接続し、本研究の仮説に回答を示し、最終的な目的に言及する。最後に本研究の限界と今後の研究の方向性について論じて締めくくる。

第一章 第三のカラー・ラインと「日本人」カテゴリ¹

—〈帝国〉の振る舞いコードの共有度合いによるヒエラルキー—

1 本章の課題

1-1 背景

グローバリゼーションと言われて久しいが、異なるエスニック・カテゴリ間（内の差異の存在を否定しているわけではないが）の感覚的、振る舞いコードの共有は進んでいるのだろうか。進んでいるとしたらどの方向に向けて通約され、その方向性を指定している主体はどこなのだろうか。この振る舞いや感覚の距離感を考察する上で有用な概念に第三のカラー・ラインがある。パーソナルなつながり、関係領域を防衛する線である。シカゴ学派第三世代ハーバート・ブルーマーの1965年の用語で、一番外側の政治的利益を守る第一の線、経済的利益を防衛する真ん中の第二の線と合わせ、3重の線は欧米での人種間の境界線の侵食度合いを示したものであった。後に、この三つのカラー・ラインの概念はLouk Hagendoorn（1993）によって再発見され、古典的人種差別の概念とあわせ、80年代以降の象徴的人種差別、待避的人種差別の三つの概念とのパラレルな関係を見出された。象徴的人種差別と待避的人種差別をあわせて「新しい人種差別」²と呼ばれ、あからさまな古典的人種差別的表現が規制された脱工業化社会において現れた分かりにくい漠然とした人種差別であるといわれている。

パラレルというのは次の類似である。カラー・ラインの一番外側の線、そして古典的人種差別の概念はいずれも人種にもとづいた隔離、分離で、使えるトイレや交通機関での席や飲食店内での席が人種によって分けられているなどが一例で、政治的文脈、公的な文脈での闘争である。第二のラインと象徴的人種差別はどちらも経済的平等から人種のマイノリティが排除されている境界線であり、経済的、社会的機会の不平等分配が争点となる。最後のパラレルな関係は、情緒的な境界線を取り扱う第三のカラー・ラインと待避的人種差別である。

第二のカラー・ラインという用語は使用してなくとも、それに相当する経済的権益や社会的機会不平等という争点は従来の差別や排除の問題で繰り返し語られ、取り組まれてきたが、地理的に世界を覆うような枠組みのなかで、「日本人」を対象とした第三のカラー・ライン、あるいは待避的人種差別に相当する分断についてはすくなくとも、日本の学会においては等閑視されてきた。

本章のみならず、本研究のキーワードに「人種差別」の文字があるが本研究はアクティビスト的なスタンスを志向していない。それにもかかわらずこの用語を使用するのは、第三のカラー・ラインは文化中心主義的な視点と密接に関係しており、どちらにしても払拭されているとは言い難い現状を描写するのに有用であること、また欧米における待避的、あるいは新しい人種差別概念をあつかった一連の研究、そして同用語を使用するアントニオ・ネグリ & マイケル・ハートの〈帝国〉³概念（Hardt & Neguri 2000=2003）と接続するためである。

通常語でもあるカラー・ラインとは人種間の互いに対する姿勢（黒人の白人に対する劣位）を規定し、アクセスの度合いを制限し、それぞれの行動の様式に対して人種間で共有されて

いる通念を指す。ブルーマーによると、米国においてこの境界線は、ピア白人のなかから境界線規範の逸脱者が現れないようにする拘束力をもっているし、また、黒人側の白人層に対する怒の表出を隠蔽する効果もあるとしている (Blumer 1965)。つまり、境界線を挟んで社会的分離がされており、その分断には両側の人々に共有されている明確な序列が存在する。ブルーマーの独自性はこの境界線を上述の三つの段階に分けたことである。ブルーマーの時代、ラインは黒人と白人間の分離をもっぱら指していた。政治的参加、公的空間における排除を示す第一の線、社会的機会、経済的機会からの排除を指す第二の線、それらは法的に規制することが可能であったが、本稿で主として取り上げる一番内側の第三のラインは原理的にこうした外部からの攻撃は無効で難攻不落とされている (Blumer 1965)。この最も内側の親密で私的な社会関係の防壁の例としてブルーマーが挙げるのが、社交仲間、小さな友人グループ、プライベートクラブ、家族親族、恋愛関係、結婚などである。

この第三のカラー・ラインと、Hagendoorn がそれとの類似を示した新しい人種差別の一つである待避的人種差別は、本稿においても本質的に同じであるとみなす。また、本稿においてはこの社会的分離の概念が日系米国／カナダ人を対象とするものとしてではなく、ネグリ&ハートの〈帝国〉における新しい人種差別の視座を援用することで、日本列島出身の「日本人」が「西洋圏」⁴においてその第三のカラー・ライン／待避的人種差別の対象となりうることを論述する。

1-2 本章の目的

本章での根本的な目的は一連の「新しい人種差別」研究の対象に「日本人」というエスニック・カテゴリも位置づけるべきと主張することにある。アメリカの覇権凋落と、非西洋世界の台頭という移行期を迎えたグローバル秩序の中で、エスニック・カテゴリ（グループではなく⁵）としての「日本人」は西洋圏においてどのような立ち位置をもっていて、第三のカラー・ラインはどれ程解消・変容しているのかを追うことで、グローバル社会の動態の質的变化を嗅ぎ付けることができるだろう。この根本的な目的にあたり、次の3つの問いに回答することで議論を展開する。第一に、「新しい人種差別」の研究に「日本人」が対象になってこなかったのはなぜか。そして第二に、実際には「日本人」は待避的人種差別の対象になっているのか。第三に、その序列に綻びはみられるのか。グローバル社会の動態要因には台頭してきた中国と比較される「日本人」という概念がキーとして聞き取り調査の語りから浮かび上がった。このキーが「日本人」と「西洋圏」との境界線形成にどのように働いたのかを考察した。

次に、第三のカラー・ライン、新しい人種差別の概念を概観し、この概念に「日本人」をのせる意義を挟んでから本論へと続ける。

1-3 第三のカラー・ライン, 新しい人種差別の概念

「新しい」というが、用語としては1970年にJoel Kovelによって使用されたのが初出で、しかし実質においては、公民権運動を受けて新旧の人種差別を明確に変遷として区別する報告は1965年にすでにあった(Blumer 1965)⁶。北米の黒人コミュニティの平等への闘争は、次の三重線を順に攻撃してきた。ブルーマーによると、黒人を対等ではない市民であるという信念が白人間で集合的に共有されており、また同調圧力が強力にある。このようなエスニック・ヒエラルキーは差別的な人も、またそうでない人の間でも共通していることが報告されており、ブルーマーのそれは社会圏で共有される集合的意識・集合的信念という説明とHagendoorn & Hraba (1987)による80年代オランダでの実証は整合的であることが確認されている。この題目は心理学の領域でも取り扱われることが多く、彼らが実証から出した処方箋のひとつは待避的人種差別者の良心に訴えるもので、自らは人種差別に反対であるという自己認識と、自身の実際の行動との乖離を認識させることで一時的に改善され、自己内省を継続的に促し、訓練することで持続的なものにする方法(Dovidio et al. 2000; Hing et al. 2002 など多数)が概ねの共通回答だった。そしてもうひとつは、身近に他のエスニック・グループとの接点を常にもっておく(Abersson & Haag 2007 など)というものであった。

後者については単純接触仮説と同様であるが、前者は実験群への効果が確認されただけでなく、なにより実際の待避的人種差別者の大半にそれだけの善意にもとづく意図的な訓練を自らに課すことを要求するのは困難である。加えて、Pearson et al. (2009)の待避的人種差別批判の理論的支柱のひとつは、多国籍企業などにおける多文化チームのパフォーマンスが待避的差別によって大きく毀損されているというものである。待避的差別解消の正当化図式が経済的効率性追求に回収されることの違和感については次章に譲る。しかし、このような目的から異文化の差異に対処し、差別をのりこえようという言説や研究(他の例はDiStefano & Maznevski 2000)は非常に多い。これはネグリ&ハートのいう<帝国>の特徴であり、その駆動源である多様性の管理になっている⁷。

新しい人種差別の概念は80~90年代にはその他のエスニック・カテゴリをふくめた序列を扱う概念として用いられるようになったが(Hraba et al. 1989; Hagendoorn & Hraba 1987),以降で触れるように、「日本人」が被差別対象として研究上でとりあげられる場合はあくまで日系アメリカ人・日系カナダ人であったのである。

1-4 「日本人」をこの議論にのせる意義

次に、なぜ「日本人」をこの議論にのせて語ることができるのか、そしてその意義を示したい。そのためには、ブルーマーの時代においては、黒人-白人間という生物的人種間の問題として扱われていた第三のカラー・ラインがその後の議論においていかに、生物学的異なりから離れ、さらに領域内的枠組みからも抜け出した概念に展開されたのかを簡便にでも

たどる必要があるように思う。そのために、Hagendoorn らとネグリ&ハートの新しい人種差別概念を中心に振り返ることにする。

Hagendoorn (1993) のこの分野における仕事は、新しい人種差別概念にブルーマーの 3 重のカラー・ラインの議論を接続させることによって、古典的人種差別から新しい人種差別への連続性を示したこと、また、生物学的差異よりもステレオタイプにもとづく社会文化的差異の方がよりエスニック・ヒエラルキーの認識に寄与していたことをオランダを例に実証したわけで、彼をことさらにここで引用するのもそのためである。つまり、下層に位置づけられているエスニック・グループほどに、カラー・ラインの外側に近いところしか受け入れられていないことが見出された。また、前述のエスニック・ヒエラルキーとは社会圏で共有される集合的信念であるという 1965 年のブルーマーの主張が裏づけられたわけだが、それはこのヒエラルキーは差別的である人もそうでない人からも同様の序列が引き出されたという知見に拠っている。

「新しい人種差別」の概念にはさまざまな論者がいるが、共通している見解は (Hagendoorn 1993; Hardt & Neguri 2000=2003; Pearson et al. 2009; 関根 1994; Balibar & Wallerstein 1990 など) 60 年代の人種主義撲滅の流れによって、生物的差異にもとづく明示的な差別・排除行為にむしろスティグマが伴うようになり、法的にも規制されるようになったため、差別的表現は深く潜行し、生物的差異にもとづかず、規範、世界観、振る舞いなどの異なりを根拠に社会的分離が図られるようになったことを指している。

生物学上の差異と社会文化的差異のどちらがエスニック・ヒエラルキー構成上の決定力をもつのかという問いは、すでに見たように Hagendoorn & Hraba のオランダでの調査報告結果 (1987) では、生物学的差異も一定の影響力を持つが、ステレオタイプにもとづく認知された社会文化的な差異の方が決定的であるという仮説が支持された。実証にもとづかないがネグリらの見解では、分離・隔離の原則は生物的差異ではなく、文化などの社会構成主義風に説明され、生物的差異は必然ではなく偶然的とみなされるものの、社会的分離を固定する有徴性として機能しているとしている。どちらの見方が妥当であるかの検討は本稿では扱わないが、ジェンダーと身体をめぐる類似の争点⁸があるように、この分野にも存在する。この点を考慮すると、近年のアジア系北米人とアジア圏からの新移住民の関係性も見えてくる。詳細は次章で展開するが、社会的差異に求められる新しい人種差別の定義は、共通のエスニシティを有する人々の間での“FOB⁹”や“Whitewashed”などの差別用語や現象 (Pyke & Dang 2003) にもあてはまることを指摘したい。生物的差異に派生し関係はあるものの、表現としては生物的差異から一定の距離を置いている新しい人種差別は、例えば、米国生まれのアジア系 (例えば中国系や日系) と (こちらも例えば) 中国あるいは日本で育ちで米国にやって来た新移住民とのケースである¹⁰。以上に見たように古典的人種差別は生物学的差異に重きが置かれていたが、新しい人種差別は生物学的差異と決別したわけではないものの、より社会文化的説明に重心の乗ったヒエラルキーになったことが確認された。

次に、ネグリらを見ることで新しい人種差別概念が脱領域的広がりの中でも語ることが可能になったことを示したい。ネグリ&ハート (Hardt & Neguri 2000=2003) によると、新しい人種差別は「帝国」の駆動原理に適合的で、あるいはそれに使役されるために上記のような人種差別の変化は、リベラルで、多様性を礼賛する態度が招いた新しい形態の社会的分離と統合のあり方であるというわけである。彼らの「帝国」概念は実証困難だが、グローバル秩序の中心のひとつに米国があり、それを取り巻くような諸々の影響力発信源たるアクターネットワークがあり、今でも世界の多くの文脈の中で西洋世界の影響は至る所で健在であることは否定し難い。この一連のグローバル世界の秩序のひとつの潮流である多様性の管理では、「帝国」の駆動原理ゆえに異種混交が政治的適切さの上ではリベラルに等価値を与えられつつ、諸々のエスニック・カテゴリは示唆的包摂、すなわち、中心的な規範との差異の度合いにもとづいた包含 (Hardt & Neguri 2000=2003: 252) のなかに取り込まれる。「帝国」と呼ぶか否かは別としても、現在のグローバル秩序は西洋世界から派生し、現在もいまだに米国がその中で特権的な位置を占めていることを認めるならば、そのなかでの示唆的包摂とは、西洋世界を頂点とし、そこからの近似の度合いによって序列づけられる諸々のエスニック・カテゴリである。このエスニック・ヒエラルキーは、70年代から続く一連の「待避的人種差別」をめぐる研究に前述に見るように接続していた (Hagendoorn 1993)。すなわち、その序列の下位ほど距離を置かれるということだ。そして、このヒエラルキーは前世紀までのような国民国家全盛の時代と異なり、「帝国」における新しい人種差別はネーションの枠を超え、脱領域化した。

ここまでで、生物的差異にもとづく古典的人種差別が人種差別撲滅運動と脱工業化社会の「帝国」時代において、生物的差異を根拠としない差別あるいは社会的分離に移り変わり、さらに脱領域的なイシューとなっていったことを確認した。次は日本がそこにどうかかわるのかである。

近代化は西洋化を意味しなかったと繰り返し言われている。多様な近代化が観測されるようになり、そのひとつに日本も数えられ、西洋的ではない近代化を遂げた。ネグリらの想定する地理的に全世界を覆うフレームワークの中で3重のカラー・ラインを適用すると次のようになる。つまり、経済的な繁栄を達成し、いまだ西洋圏の影響力が強いグローバル社会での経済的利益を防衛するカラー・ラインの二番目の線を日本は踏破した。しかし近代化とは主に工業化のことであり、それは直接的には第二のカラー・ラインしか破れないこと、そして同時に新しい人種差別のなかでもプライベートな領域での接触を回避する第三のカラー・ラインをめぐる闘争がはじまり、待避的人種差別の対象に入れられたことを意味していたという見方が可能になるだろう。

待避的差別、第三のカラー・ラインの変容は、グローバル秩序の質的变化である。今もなお西洋側に乗っている世界秩序のその重心が移動・分散されるならば、エスニック・ヒエラルキーに反映される。序列付けの視座が、つまり評価者軸の多元化が「西洋圏」でも進むならば、それはグローバル秩序の根本的な変革を意味する。エスニック・ヒエラルキー、待

避的人種差別の変化を追うことにはこうした意義がある。これまでもエスニック・ヒエラルキーの変動の研究は多いが、日本列島からの「日本人」をアウトグループの一つとしたこの系統の調査は管見の限りなかった¹¹。それは一つには脱領域的な視点を欠いていたためと思われる。この一連のエスニック・ヒエラルキーの研究の系統に「日本人」を対象として入れるべき次のような理由がある。

世界秩序の表舞台では西洋諸国のみが主要国とされていた時代、非西洋文化圏では日本だけが先進国クラブに出入りをしてきた。また90年代後半に入るまでのジャパンバッシングの時期を経て、今、中韓、東南アジア諸国など他アジアの隆盛の時代に入り、日本を取り巻く状況は大きく変化している。このようなグローバル秩序のなかでのその特異な立ち位置ゆえに、第三のカラー・ラインへの侵食がアジア圏の中の非欧米言語圏では「日本人」が相対的に近いことが予想される。それゆえに〈帝国〉内で脱領域的な場で対外接触をするエスニック・カテゴリとしての「日本人」を対象として、ヒエラルキーの中で彼らがどのように位置を変えてきたのか、第三のカラー・ラインが消失する兆しを調べることにはこうした意味がある。

2 第三のカラー・ラインと「日本人」

2-1 第一の問い：第三のカラー・ラインの研究に「日本人」が対象になってこなかったのはなぜか

それでは最初の問い、なぜ「日本人」をエスニック・ヒエラルキーのアウトグループとして扱った研究がこれまで無いのか。「新しい人種差別」のなかでも、象徴的差別の方は積極的是正措置をめぐる衝突であるため、移民を除けば「日本人」がその対象として語られようがないことは言うまでもないが、一方の待避的人種差別／第三のカラー・ラインについてはその対象として語られてこなかったことは考察を要する。

第一にアカデミズム外の文脈における一般の人々にとって、「日本人」を対象としていなくとも、待避的人種差別は、人種差別という既成概念と認識上一致し難く、わかりにくい差別になっていることは Pearson et al. (2009) が指摘しているとおりで。つまり必ずしも生物的な人種間の差異を基盤にしていなかったため、人種差別とは認知されない。友情も道具的な文脈がある場合は支障なく成立するし、社会的交換財が豊富な個人が適切な社会的環境にいる限りは、概ね不快な経験はしにくい。多くの日本の人々は商業的なつながりこそあれ、情緒的には西洋世界から距離があり、本稿で問題にしていることが社会問題として認識されにくいだろう。後述の第三の問いで紹介する今回の聞き取り調査全体からもうかがえたのは当事者がそれを人種差別としては捉えていないことが多かったことだ。認識がある場合でも漠然としたものがほとんどであった。これは第二の問いと重なり、むしろ個人の適応の問題として扱われることが多い。ちなみに繰り返すが、本研究においてこ

の類の人種差別への糾弾は全く意図するところではなく、境界線の様式の変化と移動・変質に関心を置いている。

第二には、アカデミア内にも適用できるとは断定できないが、時代を包む風潮である。日本の多くの人々にとって、日本や日本人、日本の「文化的」特徴が待避的差別や、嘲笑の対象になっているとは考えづらい状況にある。事実、ネグリらの〈帝国〉の支配的アクターの一環に日本が取り込まれていたりする。また、日本人が消費する主なメディア情報は「日本人」に耳あたりが良いもので溢れていることは、阿部潔の「彷徨えるナショナリズム」（2001）に詳しい。このように様々な状況が、被差別対象になっているとは考えにくい状況があることの一因になっている。しかるに、それゆえに、「日本人」が「西洋圏」で受ける待避的差別の実態は、奇妙でもあり、また経済的な成功だけでは無力な第三の境界線が皮肉にもより一層浮き彫りになるのである。第一と第二の要因をあわせて当事者が外在的な問題として顕在化させにくい状況であり、それがアカデミアでも社会学的命題と認識されづらい背景だろう。

そして第三の要因は、下部構造のみが説明変数として偏重される場合、経済的側面のみが問題視されがちで、その場合は第二の防衛線が突破された時点で、第三の防衛線については取るに足らない些細な境界線として認識されるか、そもそも関心が向きにくいことが予想される。

第四の要因には、指摘内容そのものはその通りであるものの、文化の異質性への言及、あるいは文化的差別の問題化は皮肉にも再帰的に文化の可塑性を奪いがちであり、通文化性の認知を阻害してしまう危険を考慮する語り（吉野耕作 1997 など）があることも無関係とは言いきれないだろう。つまり、待避的差別は文化相対主義的な態度が招いている一面がある（Hardt & Neguri 2000=2003）のだから、その陥穽を避けようとするあまり、言及せずに、あたかも待避的差別の実態がないかのように扱われてきている可能性だ。これに類似の例に、Shelton et al. (2005) の指摘にもあるように、北米において黒人が白人に対して抱く不信感そのものが白人黒人間のインタラクションに負の効果をもたらし、自己成就予言的に黒人が被差別的に扱われたと認識する確率が高まる一面がある。どちらをとっても、それは個々人が実際の相互行為において考慮すべき面であり、研究上において、文化的相対主義から招来される待避的差別、あるいは文化的差異の諸側面を取り扱うことを抑制する論理にはならないだろう。

2-2 第二の問い：実際には「日本人」は待避的人種差別の対象になっているのか

あらためて英文で modern racism あるいは new racism, neo racism を、aversive racism を CiNii で調べると、この分野の研究は非常に多く、日系移民についての言及（竹沢 1993 など）も散見されるのだが、「新人種差別」あるいは「新しい人種差別」研究の J-Stage 上の和文文献は関根政美（1994）を例外にほとんどみあたらない。その関根にしても「日本人」を被差別対象としていない。「新しい人種差別」の研究の中では日系移民

を例外として、「日本人」はほとんど対象にされてこなかったのだ。では、実態としては日系人以外の「日本人」が西洋圏において境界線を経験することはないのだろうか。次に「日本人」が境界線を感じる場合を文献から辿る。

ポスト戦後～中国台頭前の時代の「日本人」の扱われ方を手始めにマクロな国際関係の文脈から確認すると、周知のとおり、80年代に経済的な脅威として日本は欧米でとらえられ、ジャパンバッシングのピークもこの時期だ。諸々のネガティブなイメージと同時にやたらミステリアスな技術立国としての評価という対照的なイメージを同時に投げかけられた(Thorsten 2012)。しかしそれも90年代後半になると先進国入りすると陥る低迷期になりバッシングも落ち着いた。入れ替わるかのように2000年代も後半に入ると欧米圏でチャイナバッシングが目立つようになる¹²。

例えば、80年代の様子を記した稲村博(1980)の「日本人の海外不適応」は参考文献としてこの手の研究において頻出である。この文献中では待避的人種差別に該当するだろう事例が複数挙げられている。一つ挙げると次のものである。

やはりある駐在員夫人の話であるが、この主婦は最近いささかノイローゼ気味になっている。その理由は階下に住む大家さんからしょっちゅう騒音についての注意を受けるからである。子どもを泣かせるなとか、家の中で子どもを走らせるな、歌を歌うな、テレビは低音にしる、等々である。(中略)みそ汁をつくっていたところ、醜悪な臭いをたてないで欲しいと上の階からねじ込まれた。(稲村 1980: 42)

稲村自身のそれらを指して「人種差別とは言い切れない」(1980: 42-44)という主張¹³からみるに、古典的な人種差別との差異に気づいてのことだが、それは単に当時の稲村が待避的人種差別という概念とそれの古典的な人種差別との連続性に未知であったためだと思われる。

「不適応」を説明する文献は2000年以降の状況を示す記述になると豊富で、今世紀に入って直後の嘉本伊都子(2006, 2007)は、新移住民が母国日本にもなじめないが、アメリカ人とも相容れない、アメリカ社会に溶け込めないという状況におかれていることを伝えるし、サーマン他(2001)、津久井要(2001)や、岩崎信彦他編(2003)からも豊富な事例を確認できる。待避的人種差別は「文化」的な差異にもとづく境界線を基盤にしている(関根 1994 など)ため、「不適応」あるいは「適応不全」と相互入れ替えが可能である。

一方の「人種差別」として取り扱っている和文献は稀で、櫛本崇恵(2009)の報告では人種差別の新旧の区分がされていないが、2004～2007年の事例で挙げられている英語圏(米、加、豪だが、分析上の区別はない)での日本人渡航者が経験している境界線を人種差別であるとしている。多くの事例を取り上げていて、内容はまさに待避的人種差別と同等できるものを多く含んでいる。その内の一つを紹介する。カナダの某大学の学部生であ

る日本人女性Bさん，当時21歳の2006–2007年の事例で，グループワークのドキュメンタリーテレビを製作するという課題で，イギリス人二人，フィンランド人一人の全て女性のグループに入った。

3人はBさんを完全に「ルックダウン」し，無視した。撮影の予定を組むのもいつも3人であった。

B：「いつ，どこに来て」と言われて行くとすっぽかされたことがありました。あとで，どういうことなのか聞くと「昨日やったよ，あなたは予定を聞き間違えたのね」と言われました。予定を聞き間違えたわけではないと文句を言っても，「ごめんごめん」で，ごまかされました。最初は落ち込んで，私の何が悪い？とふさぎ込みました。

その3人グループは，Bさんがあいさつしても気分しだいで無視した。他の学生から，「彼女たち，日本人は嫌いと言っていた」と教えられた。

B：日本人はなぜ嫌われるんだろうと思いますね。こういうことが続くと，陰で何を言われているのかなということに過敏になりました。

Bさんが寮に入る3年程前は，寮内でジャパニーズ・バッシングがあった。現地のアメリカ人学生が日本人の持っているMDプレーヤーを盗み，その上壊して部屋に戻したり，郵便物が隠されたりした。「日本人は冷蔵庫に物を入れすぎる」と文句を言われるなど，日本人の一举一動すべてが怒りの対象だったようである。（櫛本 2009: 24）

この櫛本論文（2009）には類似の事例が多く紹介されており，諸々の差異からニューカマーに対する異質性嫌悪（Memmi 1982=1996）が発生しているという解釈だった。そこに紹介されている事例は第三のカラー・ラインの中でも差別側が意図して行った場合が多い。正確に言えば有意図か否かの判断は困難だが，被差別側の視点からは悪意を感じたということだ。第三のカラー・ラインにはそのような明白な悪意が必ずしも伴わないということは既出の Pearson et al. (2009) の指摘にもみるように，善意を持っていても作ってしまう社交での境界線という性質からも読み取れる。

このニューカマー差別は旧来は移民意識の希薄な白人層がメルティングし難いアジア系（やヒスパニックなど）をFOB（メキシコ系には別称）と蔑んで行うものに限られていたが，先述のように近年ではしばしば従来の二世以降のアジア系移民からもより新参のアジア系移住民や滞在者に対して行われる面もあり（Pyke & Dang 2003），生物的差異ではなく，規範／常識／振る舞いの非共有が対象になりうる「新しい」人種差別であることが鮮明だ。この事実からも古典的人種差別からの連続性を示すなかで「人種」/“race”の単語が残ったのだろうが，もはや修辭的で，実態としては記号的な序列を伴う社会的分離であることを確認できる。先の同人種（同エスニック・カテゴリでも）の新旧移住民間の差

別と同根なのは、習慣や振る舞い、諸々の価値観のモードの差異に序列をともなった記号的価値がその時の強者によって付与されていて、これまではその強者はたいていの場合は「西洋人（特定の人種に必ずしも限定されず）」であったということである。待避的差別の背後にはこのような構造¹⁴がある。

このように文献だけでも中国の台頭以前まで、継続的に「日本人」は疎外されることが多く¹⁵、ホスト側の異質性嫌悪と呼ぼうと、参入側の不適応あるいは劣等感と呼ぼうと、それは待避的差別と通低する内容の経験をしていることが確認できる。しかし、研究上ではこの現象を第三のカラー・ラインや待避的人種差別という概念に接続されてこず、主に不適応／適応という枠組みの中で、個人の資質や訓練可能な能力に帰属されがちな現象として取り扱われてきたことがわかる。ひとつそのような諸研究のなかでも著名なものを紹介する。端的に表現すると、価値観の多元性を認識する習慣の獲得までの訓練方法で、**Mitchell Hammer et al.の Intercultural Development Continuum (2009)** という概念^{16,17}がある。一元的な規範フレームワークを相対化することで、異なる思考習慣を持つ人々との相互作用で発生しやすい摩擦を縮減することを目的とするが、この技術は訓練によって、1.差異の否定、2.差異の極端な認識／差異からの防衛／自文化の否定、3.差異の最小化、4.差異の許容、5.差異への適応、という五つの段階を追って変容する面があるとされている。真にそのような面があることは否定し難い。しかし、非主流文化の人々が訓練対象になる場合、三つ目の差異の最小化という段階（つまり、価値観の差異は取るに足らない程度であるという認識）に留まる傾向が報告されている（**Hammer 2012**）。これは、そのような属性による訓練経過の違いから個人に外在する要因が示唆されているのではないだろうか。

「新しい人種差別」は消えていないか、あるいは古典的差別が影を潜めたからこそ（視点や捉え方は異なるものの）内容的に類似する「不適応」を扱った文献が目立つようになってきた可能性を疑ってみる価値はありそうである。これらの「不適応」の研究は第三のカラー・ラインの概念に接続して語られるべきものではないだろうか。

すでに見たように、現代的課題である異文化「適応」はグローバル社会の中の相対的なパワーバランスの変化の影響が大きいはずで、個人の適性や心理的な「日本人」側の劣等感に全面的に回収できると措定しては社会学的側面を捨象してしまっている。

以下で、適応の問題が新しい人種差別の言い換えであると仮定した上で冒頭に挙げた第三の問いを検討する。グローバル社会の環境要因とのつながりを見るが、ここでは数あるグローバル環境要因のなかでも中国（台湾、香港除く）の台頭が媒介変数として聞き取りの中から浮かび上がった。

2-3 第三の問い：エスニック・ヒエラルキーに綻びはみられるか

実施した事例調査から立ち上がった知見から、本稿で展開した視点の有効性の提示を試みる。聞き取り調査の対象者の属性は注に記したとおりである。本稿が拠って立っているネ

グリらの非・場、脱領域的な拡がりを含み取るため、「日本人」と「西洋人」の接触の場や状況を幅広くとつてもなお共通して対象者の経験の語りから読み込めるエスニック・ヒエラルキーの陰を推しはかった。解釈の枠組みは次の通りである。まず、序列の定義は単元的な評価軸があり、単線的に並べられていることとする。次にその評価を下している主体だが、それは対象者の語り中にあらわれた「西洋人」である。最後に誰の認知なのかだが、それは語り手である対象者に属する。また、今回の聞き取りは「日本人」への聞き取りに限定されたので、序列付けをされているという対象者の認識のみで、「西洋人」側が序列づけを行っているのかを問題としていないために上述のような「ヒエラルキーの陰を推しはかる」という表現になった。

2014年に実施した調査で分析に使用する聞き取りは12人から得た。対象者の「西洋圏」とかかわりのある部分のライフストーリーと「西洋人」との情緒的にかかわり、受けいれられている／られていない様子に焦点をあてた。そこから次の三つの知見が得られた。

一つめは2000年代後半になると都市部における「中国人」のプレゼンスはそれまでと様相を異にし、「日本人」は「中国人」との対比において「西洋的」なものにより近似的に受け取られていると対象者が解釈する経験が珍しくない。すでに前半で記述したとおり、日本や「日本人」は少なくとも前世紀末までは奇妙で非合理的、理解困難で集団主義的であるというラベルを貼られていた。それが近年になって日本と同様の高額消費者として対比可能となった中国／中国人をキーワードとして、「日本人」が以前よりも「理解可能」とみなされていそうなことが珍しくなくなっている。

二つめに、「西洋的」なものへの近似度による一元的な評価軸は変わらずあり、そこからエスニック・ヒエラルキーの存在が類推される。

三つめに、語りの中から中国の台頭以前から「西洋圏」での日韓の連帯はみられ、また中国の台頭後には日中の連帯も見出すことができるようになった。

一つめの知見を導いた手順を簡便に一つの事例紹介を通して以下に示す。HS氏のケース¹⁸は、中国の台頭以前からの交流ではあるが、2002年頃、HS氏が通っていたニューヨーク市内の高校教師の言で、『中国や韓国、台湾などの他のアジア人留学生と日本人は何か違う、何がと言われてもうまくいえないが。』と言われた。HS氏のこれに対する解釈は「歴史的経緯からして日本には“西洋”が入り込んでいるから。」であった。2002年とは本研究で設定している2000年代後半（※これと同じ時期に、LAの韓国系の間で大きな変化があったことは第三章、項目7-3および8で論じられているとおりである。）という中国台頭よりも時期がわずかにずれるが、場所がニューヨーク市であったことは考慮されるべきである。価値の類似度の同心円状からの距離にもとづく序列のなかの差別は「新しい」人種差別の特徴である（Hagendoorn 1993）。

上記の場合、高額消費者としての中国人留学生の存在が確認されることから（少なくともその高校教師が比較対象として認識するくらいの程度でいたということ）、本稿においては、実質的には中国台頭後の事例として扱う。この事例は、高校教師の発言を受けて、HS氏（レ

スポンダント)が「西洋的」度合いという単一尺度をもって解釈していることから、本研究において序列があると判断する。

次の語りは同じくHS氏のもので、補足として提示する。HS氏の私見では、近年になってアメリカの高級レストランに中国の人々が入りやすくなった。「そうした場でかれらがテーブルの上にどかーんと荷物を置いたり、大声で話し合ったりするのは西洋社会から良く見られていない。」という語りがあった。中国の経済的成功が達成され、「中国人」も「西洋」社会において「新しい」人種差別の対象に新規登録された事例と見てよい。冒頭で紹介したように「新しい」人種差別は経済的上昇に伴って問題となる (Hagendoorn 1993)

19. 高級レストランのエピソードは待避的差別ととれる。

この他、別の二人の事例でも日中が直接比較される言葉を「西洋人」に言われたという語りが得られた。その内、ひとつを至極簡便に紹介する。NI氏のケースは、インタビュー時20代前半男性。学部生時代に一年間(中国台頭後の2011~2012年)、ロンドンに交換留学。現地の日本好きがあつまる日本文化クラブ(課外活動)の現地人を中心に受け入れられた。NI氏ご自身は中国にももとは嫌悪感をもっていなかったものの、イギリス人は中国(人)にたいして嫌悪感をもっており、自分が日本人であったから現地人に受容されたと明確な認識を持っていた。

筆者：イギリス的な価値観に馴染めないということはありませんか？

NI：イギリスやヨーロッパの人よりもむしろ、中国の方との差が激しすぎて、むしろ欧米の(人)に親近感が沸いたというのがありますね。(中略)中国の人との価値観的な距離を感じました。

筆者：それは、イギリスやヨーロッパの人が、NIさんや他の日本人に対して接する時も中国の人に対するときとは態度が違いましたか？

NI：少なからずあると思いますね。周りの欧州人にアジア人ってどういう風に見られているのかと聞いたことがあったんですね。

日本人は動作とか挙動とかで、中国人とかと区別できるって、それがポジティブな意味で区別できるって言ってて。中国ってあれだよって、僕が思っているような意見と同じようなこと言ってたんで、やっぱり日本って、そういう意味で位置が高いっていうか(笑)受け入れられている人たちなんだなと感じました。

「周りの欧州人に聞いた」というくだりについては、「日本人」であるNI氏自身が聞き手であったことは忘れてはならないが、日本と中国が振る舞いの部分で比較対象にされることがあったということである。

また、それを間接的に支持する事例は別途二人おり、その内一人は中国台頭前後をまたいだ語り、2007年ごろから日本在住の米国人らの間でチャイナバッシングが始まったよう

な印象を持っていた。ここから、HS氏やNI氏の抱いた「西洋人」から中国との対比で受ける評価のエピソードは珍しい事例ではないと調査者は判断した。

次に二つめの知見の導出の提示を試みる。上記のHS氏のエピソードと同一箇所を使うと、『中国や韓国、台湾などの他のアジア人留学生と日本人は何か違う、何がと言われてもうまくいえないが。』と言われた。』というHS氏の語り中の二重鉤括弧内がニューヨーク市内の高校教師の言である。一つ目の知見の導出過程の説明内でもすでに触れたようにここからHS氏は「西洋社会」への近似度という「西洋人」の評価尺度を感じ取っていた。NI氏の事例についても既出の同一箇所からの読み取りになるが、NI氏の場合、親近感／距離感を抱いていることが明白なのは、NI氏自身であるが、「(中国人よりも日本人の方が)位置が高い」と感じ、比較の上でイギリス人に社交の場で受け入れられていると感じていた。ヒエラルキーと評価基準の存在(少なくともその陰)を対象者が感じ取ったことを示している。これらのエピソードは中国台頭後(扱い)で、台頭前と比較する。

台頭後の事例と異なり、台頭前の事例においては「中国人」との比較エピソードが調査者があえて問わない限りは語りに現れることはなかった。それは日中が比較対象になっていなかったという可能性もある。こちらから問うと、中国人に間違えられたというエピソードは珍しくないが、そのときに出てくる中国人は高額消費者ではない。つまり、中国台頭前の時代に「西洋人」に日中が比較される場合は高額消費者か否かの点で、本稿に沿った用語で言い換えるとそれは第二のカラー・ラインの侵食度合いによって区別されている事例であった。先ほどみたように、より近年の中国台頭後に分類された事例における比較では第三のカラー・ラインの侵食度合いによって区別されているという違いがみられる傾向が強い。いずれの場合も西洋的なものへの近似度という尺度が参照されているといえ、これにより第二の知見とした。

以上の過程で得られた一つめ、二つめの知見と先述の三つめの知見により、第三の問いに対して次の回答を用意することが可能になった。一見してエスニック・ヒエラルキー、あるいは「日本人」に対しての新しい人種差別的態度の変化としても見て取れる。しかし、台頭後も、西洋世界に重心が乗っている視座からの示唆的包摂は根本的に変わっていなかったため、綻びはまだ見えたとはいえないが、中国の台頭は西洋側のアジア認識を刷新し、日本の立ち位置をわずかに変えた可能性がある。

3 小括

以上が示唆するところから、冒頭の一連の問いに対する一定の回答が推測の範囲内ではあるが可能となった。

第一の問い、新人種差別の研究に日本人が対象になってこなかった背景として次のことが指摘できる。新人種差別のなかでも日本人が対象の場合、特に問題となるのは待避的差別

／第三のカラー・ラインの方であるが、当事者がそれを人種差別の問題としては捉えていないことが多い。認識がある場合も漠然として明瞭でないことがほとんどであり（古典的差別は明確に人種差別と認識された）、問題として顕在化してこなかった。

第二の問いの、実際には「西洋圏」において、日本人は「新しい人種差別」の対象になっているといえるのだが、先行研究の変遷からその対象になっているケースは珍しくないと言えそうである。

第三の問い、エスニック・ヒエラルキーの綻びはみられるのか。聞き取り調査から「中国／中国人」というキーワードが散見された。グローバル社会における脅威としての日本の負のイメージが後退し、いくつかの事例にみるように、入れ替わりに中国の台頭により「新しい（待避的）人種差別」の対象に「中国人」がなりえるようになったため、日中比較しやすくなり、「西洋」の視点からしたら相対的に日本（人）が理解可能の領野の中に見え始めた状況が示唆された。聞き取り内容からはあくまでも「相対的に」受け入れられ易くなったに過ぎず、それは別言すると、示唆的包摂という序列付けのなかで「西洋的視点」においては順位があがっただけであると言え、依然として新しい差別が用意するグラデーションの範囲内にとどまっているに過ぎない。そして、この中国の隆盛は日中が同種の被差別対象としての立場の共有を文脈によってはもたらしうる可能性がみられた。その意味で部分的にエスニック・ヒエラルキーに変化はあったと言えそうである。しかし、西洋的なものへの近似度という尺度に変化はみられなかったことから、根本的な綻びは確認できなかった。

総括すると、文献や聞き取りからは実態として「日本人」は待避的差別／第三のカラー・ラインの対象になっていると言えそうだが、それが当人たち、一般の人々、研究者においても明確に認識しづらい諸状況があり、しばしば適応の問題として扱われている。それが2000年代後半から日常的な生活空間においても誰の目にも中国の台頭が明確になり、それがひいては「西洋圏」における「日本人」の立ち位置に影響を及ぼした。しかしながらネグリらがいうところの西洋的なものへの近似度合いを尺度とした示唆的包摂の構造にはまだ変化がなさそうであった。

本稿で試行したように、この「新しい」人種差別、特に待避的人種差別／第三のカラー・ラインの概念を持ち込むことにより、エスニック・カテゴリとしての「日本人」がこれまで「西洋圏」においてどのように扱われてきたかを、古典的人種差別からの連続性と変遷のなかで、また文化的覇権があるグローバル社会のなかでの示唆的包摂というグラデーションのなかの昇降現象としてとらえることができた。これによりこれまで「適応」という個人の資質・能力として語られがちであった事象をマクロなグローバル社会の動態とのつながりの中で捉えることが可能になり、本章での知見は今後の変容を追う下地を準備したといえる。次章以降で待避的人種差別／第三のカラー・ラインの侵食作用が、魅力を構成するソフト・パワー的諸要素にあるのか。また、その具体的内容の特定もさることながら、それらの魅力を定義づける権力がどのように委譲されるのか検討を加える。

注と資料

- 1 本章は社会学論考第 35 号に掲載された前田悟志 (2015) の論文に大幅な加筆修正をくわえたものである。
- 2 Hagendoorn や関根, ネグリ&ハート以外にも, エティエンヌ・バリバル (Balibar & Wallerstein 1990) も「新しい人種差別」という語を用いて問題提起しており, 内容も重複する。
- 3 <帝国>と括弧付で表記する場合は, 米国帝国主義などの概念とは異なり, 脱領域的に地球全体を覆うようになったグローバル秩序であるとされるネグリ&ハート (2000=2003) の概念を指す。
- 4 「西洋」「東洋」というダイコトミーにはエドワード・サイード (Said 1978=1995, 1993) が指摘するような問題があることは承知しているが, ここでは便宜上, おおざっぱに指示するために使用した。また, 本研究が参照しているネグリ&ハートの<帝国>論においても, 現在の<帝国>的なグローバル秩序は, 西洋世界にそのルーツを見いだせるとされていることも念頭においている。
- 5 エスニック集団とエスニック・カテゴリーの違いについては宮原浩二郎 (1994) 参照。
- 6 ただし, 新旧の区別はつけられてないが, 1933 年の E.S.ボガードス(Bogardus 1933)にも, 価値的な違いによる待避的態度という概念はみられる。しかし, 古典的差別が潜行したという扱いはないところが決定的に異なる。
- 7 「階級の人種主義」という概念であれば, ネグリら以前から類似の指摘はマルクス主義のなかに見出せる。C.f.『マルクスを読む』(植村 2001)。
- 8 Judith Butler (1993) など。
- 9 Fresh Off the Boat の略で, ボートピープルから来ている。近年は Fresh Off the Boeing などとも冗談で言われる。元来は蔑視語である。
- 10 旧来からのアジア系米国人からすれば, この新移民との差異を示すシンボリックな生物学的有徴性を欠いているからこそ, それを補うために第三のカラー・ラインが強調されることは十分に考えられることを付け加えておく。
- 11 エスニック・ヒエラルキーという位置づけではないものの, 国際情勢という構造から国民国家間の文化的序列をとらえる, という主旨とも解釈できる研究であれば, 例外的にいくつかみいだすことはできる。高野陽太郎 (2008) は日本人=集団主義的というステレオタイプについて反論している。小坂井敏晶 (1996) は 19 世紀以降の西洋圏と日本の力関係が日本側の異文化受容という行為にどのような影をおとしているかに言及している。また, 主に西洋人と日本人間の国際結婚を研究した竹下修子 (2000) は, 出身国間の力関係が個人間の婚姻関係にも影響をおよぼすことがしばしばあるという目立たない記述がごく一部だがみられる。
- 12 2005~2013 年までイギリス BBC 放送が毎年行っている世論調査 (BBC Country Rating Poll) で欧米における中国バッシングが高まった時期の大づかみな確認ができる。
- 13 稲村は西洋先進国間をほとんど区分けせずに分析している。ある日本人家庭が西洋圏の集合住宅で暮らしていて味噌汁のにおいや子供たちの大きな声に近所から苦情が殺到し, 大家に追い出されそうになった事例を出し, 「・・・白人たちは大なり小なりみな聴, 視, 臭の感覚に極度の鋭敏さがあり, その中へ, その方面にはかなり鈍感な (もっとも途上国は一般にもっと著しそうだが) 日本人が住めば, 波紋が起きるのも必然といえる。まことに, 悲劇的な出会いといわざるを得ない。」(稲村 1980: 43) とし, 人種偏見とばかり言えない一面と解釈しているが, Hagendoorn の待避的差別に当てはまる。
- 14 ここで言う「構造」とは変容不可能という意味ではない。

- 15 あからさまな差別が強かった戦時中の差別側の主張は、「人種的」のみならず「文化的」にもアメリカに同化できないという記述（進藤 1976）などが繰り返し確認され、これは価値同質性の不共有にもとづく境界線はなにも「新しい」現象ではなく、たんに以前は生物的差異が前面に出ていたがそれが近年になって影を潜め、残った「文化的」に対する差別が強化されたと考えられる。
- 16 もともとは異文化コミュニケーション分野で著名なミルトン・ベネット（Bennett 1993）による概念の実証的試みであった。
- 17 Hammer や上記の注 16 で紹介した Bennett らは異文化コミュニケーション論分野のなかでも、Berger & Luckmann（1966）などの現象学的アプローチから援用した発想が多い。
- 18 引用元は筆者の調査結果による。章末資料に概要紹介あり。
- 19 本稿の主題である最も内側のカラー・ライン、待避的人種差別は関根（1994）やネグリ & ハート（2000=2003）が指摘するように文化相対主義的なリベラルな態度によって分離主義的な状況に至っている現象だ。この相対主義をのりこえることを企て、さらに異質性への忌避が根幹にあるという立場にたつならば、方策は境界線を隔てた相手側にたいする魅力度を高めることになるが、それが相手側の価値や趣向を考慮した自己呈示という戦略だと、消費者側視点に迎合した（しばしば商用に創造された）エスニシティの商品化（吉野 1994, 1997）と大差なく、皮肉な結果になる。

資料

主な交流時の区分	男性	女性	交流相手の国籍	聞き取り時の年齢	主な交流時の社会的立場	交流相手との関係性
中国台頭後	4人	4人	フランス, アメリカ, イギリス	20代～ 30代後半	大学生, 会社員, 事業主	級友, 同僚, 交際相手, 純粋な友人, 相手が教員
中国台頭前	1人	3人	アメリカ, イタリア, スペイン, ドイツ	20代～ 50歳の範囲	大学生, 高校生, 事業主, 会社員	級友, 同僚, 交際相手, 伴侶, 純粋な友人, ホストファミリー

分析対象者（12人）の分布

聞き取り期間：2014年度の一年間を通し、首都圏内にて、四つの起点をもつスノーボール方式で協力者を募り、一人あたり2～4時間の非構造化面接を実施。

第二章 文化ビジネスとグローバル消費社会の力学

本章の目的は、第三章と第四章で述べるエスニックなもの、特定の文化の消費のつながりに理論的な説明を準備することである。ポスト・フォーディズム時代になり、生産より消費が重視されるようになった。まずは文化を消費することの意味の変遷をたどりたい。

社会階級は何をどのように消費するのか、またはライフスタイルの違いによって示差化され、その示差によってヒエラルキーが生じた。それが経済資本の多寡のみならず、学歴資格や育った家庭環境のような文化資本の所有／非所有の程度も参照に供された。これは第一章で論じた第三のカラー・ラインについて別の論者を用いて論じることを意味しており、基本的には同じことを扱っている。

本研究全体のなかでも重要な枠組みになっている、第三のカラー・ライン／待避的人種差別という概念そのものの説明は第一章で展開したとおりだが、知名度の高い概念ではないため、アルベール・メンミなどの人種差別論から始め、関連のある次のあまりにも有名な三人の論者とのつながりをたどり、よく知られている研究体系の中に位置づける。消費社会と生活習慣によるヒエラルキーを論じたヴェブレン、ブルデュー、そしてバウマンにむすびつけて先行研究の検討に代える。

その後で、バウマン以降、消費と生産の間では多様性がどのように扱われるようになったのか、マーケティング論、異文化コミュニケーション研究を応用しているダイバーシティ・マネジメント、そしてリーダーシップ論という近年の多様性を取り込まんとする「リベラル」な動きを論じる。

1 先行研究の検討に代えて

第三のカラー・ライン、および同意義語の待避的人種差別の、本章のみならず本研究全体にたいする意義および、他の先行研究とのつながりをこの項で明示的にする。

1-1 第三のカラー・ライン／待避的人種差別という概念の位置づけ

「新しい人種差別（待避的人種差別）」、「modern racism」および、シカゴ学派ブルーマーの「第三のカラー・ライン」という概念は、第一章で既述のように、重複する部分があり、その共通していることのひとつが、「古典的人種差別」と異なり、生物的な異なりをその論拠にしていないことである。本研究が主軸においているエスニック・ヒエラルキーは、上下の関係を特徴としているのだが、後続の諸章で展開するようにソフト・パワーの研究と接続して上下関係の一部変化を描写するためには、このエスニックな序列が、生物的な差異から、文化的・記号的な差異に依拠する差別への変化を示さなくてはならない。本稿の鍵概念は、待避的人種差別が形作る序列構造であるが、この待避的人種差別というのは、何度も繰り返すが、古典的な人種差別概念とは隔たりがあるし、この項目内で後述する理由により本研究の主たる関心は差別論ではない。しかしたしかに人種差別論の流れを汲む概念であるため、

とりあえずこれまでの差別論を振り返る。

人種に限らず、差別論ではなにが差別にあたるかの定義づけで論争が続いている。客観的に定義することが容易でないからである。アルベール・メンミの定義は人種差別の研究でしばしば引用される。

「人種差別とは、現実の、あるいは架空の差異に、一般的、決定的な価値づけをすることであり、この価値づけは、告発者が自分の攻撃を正当化するために、被害者を犠牲にして、自分の利益のために行うものである。」(Memmi 1982=1996: 161)

従来は差異を焦点化することは人種差別的でよろしくない (Useem et al. 1963, Casmir 1993) と思われていた。それに異を唱えたのが、1960年代後半の差異の政治、新しい社会運動である。新しい社会運動のなかで、エスニシティは以前より増して有徴性が温存されるようになった (Bonilla-Silva 2014)。差異の可視化が進められたのである。一部の支配的人口の擬似的な「普遍性」をあたかも全人類に適用可能なアプリアリな普遍性として扱うな、ということである。この流れはしかし、排外的な分離主義を呼び覚ましたり、特定のアイデンティティを固定化する本質主義の陥穽を招きやすい。ラベルによる括りをつけずに差異を無視すれば格差は広がり、逆に括りをつけても本質主義・分離主義を通じて格差が保持されるという、「差異のディレンマ」というおなじみのアポリアにぶつかることになる。

80年代のメンミ以前の時代、再び差異は差別的であると見られる傾向が強まっていた (Memmi 1982)。こうした変遷を俯瞰したメンミの主張を要約するならば、人種差別は単純に差異を認識する差別化という作業と、それに続いて、差異を嫌悪する差別主義という作業の二つの作業で構成される過程があるとしている。差異そのものには、嫌悪感も序列もないが、その差異を根拠として自らの立場を利する差別主義的態度 (異質性嫌悪) が続くことで人種差別が起こるということである。メンミは差異の根拠は主として生物学的なものであるとしていたのだが、本研究でとりあげている第三のカラー・ライン／待避的人種差別が根拠にしているのは、一般的に周知されているメンミの枠組み内というならば、人種差別の第一作業である認識される差異が、生物学的ではなく、文化的なもの・振る舞い・嗜好・価値観などハビトゥスに依拠するようにすり替えられた (または、その部分だけが強調されるようになった) ことを意味している。この移行は生物学的差異に依拠した不平等の撤廃を求めた1960年代後半からの「新しい社会運動」の影響であると論じられている (関根 1994, Bonilla-Silva 2014 など)。

つまり、次のように言い換えることも可能だろう。60年代後半の公民権運動ではメンミの言う二段階のうち、第一段階の差異を認識する行為は生物学的側面も、文化的側面についても支持されるように変わったが、異質性を嫌悪する第二段階の対処は、生物学的差異に依拠した排除を制度的に規制するにとどまり、私的領域での文化的な差異に依拠する排除の制度的規制はなされなかった。ゆえに、第一段階の差異の指摘はそれ以前より目立つように

なり、第二段階の異質性嫌悪が、生物学的差異に依拠した場合は制度的に規制されたゆえに、社会的に「品が良い」という自己認識がある人々ほど、素朴にあからさまな表現をすることが少なくなった。しかし、そうした人々の間でも文化的側面については制度的にも規範的にも規制されにくかったため、文化的差異を指摘して嫌悪するという新しい人種差別が顕著になったのである。

つまり、悪さをしているのは差異では全くなく、「異質性嫌悪」の態度であるということだ。その嫌悪感を梃にして、差異(事実である場合も、事実無根な神話であることもあるが)を抑圧構造を維持する自己正当化言説に利用することが問題の中核であるため、山本崇記(2009)は人種差別という用語よりも、アイリス・ヤング(Young 1989)の言う、より広範な射程をもつ「抑圧」概念の方が適当ではないかとしている。

人種差別の定義はメンミ自身も不完全な用語であると指摘しているが、定義をめぐって諸説紛糾している。「ある集団ないしそこに属する個人が、他の主要な集団から社会的に忌避・排除されて不平等・不利益な取り扱いをうけること」(三橋 1988: 337-8)などあるが、大筋ではいずれも特定の集団か社会的カテゴリに帰属している成員に対しての不利益が不当に生じている、というところにある。しかしその不当であるか否かの判断基準が状況によってまちまちであることが定義の難しいところになっている。つまり、時代、場所、社会によって恣意的な判断から逃れられないことが不当性を客観化する上での難問である。この手詰まりを打開しうる一つの手がかりとして、差別される側とする側の非対称性と捉えなおしているものに佐藤裕の定義がある。「差別行為とは、ある基準を持ち込むことによって、ある人(々)を同化するとともに、別のある人(々)を他者化し、見下す行為である」(佐藤 2005)。

この佐藤の定義中の「ある基準」を次のように設定すると、本研究の主旨と合致する。すなわち、非対称的に人々を序列化する基準を「モダン(通俗的な用語としての)」さ、あるいは括弧付きの「普遍」さであるとするのである。つまり、本研究でいう待避の人種差別の度合いによるエスニック・ヒエラルキーとは、「普遍的ないし、モダン」という記号性の非対称的な配分であると表現できる。これを本研究におけるエスニック・ヒエラルキーの定義とする。

1-2 ソースティン・ヴェブレンとピエール・ブルデューの枠組みのなかでとらえる

この基準をもってきた背景を説明するために、ここまでの議論のなかでそもそもの発端として類推される「異質性嫌悪」という感情をふりかえる。用語は違えども、内容はヴェブレンが『有閑階級の理論』(Veblen 1899=1961)で論じている支配階級で育った者がもちやすいある種の嫌悪感を彷彿させる。

富の多寡と消費性向の関連について言及した初期のものが、ヴェブレンの有閑階級の顕示的閑暇(Veblen 1899=1961)であるだろう。富める者はその富の多さを示すべくいくつかな特徴的な行動にでる。労働しないか、最低限にとどめる。伴侶には華美な衣装を用意し、

もちろん労働を禁ずる。浪費をこれみよがしに行い、こうした行動やライフスタイルが可能であることを示すことで自らのステータスをさらに高める効果があった。このような消費性向、ライフスタイルと富の関連はブルデューに引き継がれ、洗練をみた。

ヴェブレンによる富裕な階級が下の階級の人々の示す諸々の弁別的特性を好まない保守主義の説明は、一般的には、富裕層が持つ既得権が引き合いに出されるが、という前置きがあり、続いてそれを否定するヴェブレンの解釈が続く。

「下劣な動機のせいにしてしようとするものではない。文化的図式の変化に対するこの階級の反感は本能的なものであって、ひたすら物質的利益を重んじた計算に依拠しているわけではない。それは、承認済みの行動様式やものの見方から離反することに対する本能的な嫌悪なのである。」(Veblen 1899=1961: 223)

異質性嫌悪をメンミ (Memmi 1982) のような人種差別の文脈というよりも、ヤング (Young 1989) のように複数の階層的な序列にある上層の下層にたいする抑圧であると捉えれば、非物質的な正負の記号性による分断と抑圧であるため、富の多寡に限定されることなく、エスニシティ・人種という枠組みをも含む広範な抑圧の序列における現象にも適用可能になり、したがって上記の本能的な嫌悪感というのがメンミの異質性嫌悪と重複する概念であると考えることができる。

ヴェブレンによるその本能的な嫌悪感の説明は、誰しもが備えているとされる「変わること・異質なもの」への拒否感で、経済的な富のおかげで、生活習慣や思考習慣の変化を免れた、あるいはしなくても済んだのが富裕層。そしてひとつ下層の階級のその選択肢の欠如によって変化を余儀なくされたために生まれたのが革新性とされ、それぞれの文化的特徴は、革新性は下層の卑しさと、保守主義は富裕層の美德という記号を帯びるようになったとされている (Veblen 1899=1961)。しかし実際には革新性を担うには一定の経済的ゆとり (必要性からの距離) が必要で、日常生活を遂行するのにも窮乏しているさらなる下層ではその資源が搾取されて不足しているので、革新性が弁別的になるのは中間層においてである (Veblen 1899=1961) としている。

物質的な利益集団というわけではなく (もちろんその側面も否定し難いものの)、下層の習慣、ものの見方、振る舞いという文化的側面、記号的側面による序列をヴェブレンは論述したのである。そして階層間に横たわる感覚、ものの見方、振る舞い、趣味の違いにもとづいた序列をブルデューに先んじて明示的にした論者であった。しかし、そのような感覚の違いの発生は、富の多寡によって生まれた生活習慣・思考習慣の違いであるとしながらも、育ち方との詳細な連関には踏み込んでおらず、そこをより明らかにしたのがブルデューのハビトゥスの概念 (Bourdieu 1979) であった。

ブルデューが社会的権力とするものに、経済資本、学歴資本、社会関係資本がある。ハビトゥスは、これらの社会的権力の取得時期が人生のどれくらい早い段階にあったかとい

う履歴の古さを示す弁別的なものである。学歴資本、社会関係資本は本質的に後天的であるが、経済資本はそうとは限らない。所作や言動、趣味嗜好と、それらを「自然に」身体化している度合いで、その人の経済資本の所有と非所有、そして獲得時期が生まれながらであったのか、どれくらい早い段階で獲得したのかを示す。

『ディスタンクシオン』(Bourdieu 1979)において描かれたことは、次のことである。「文化」の嗜好に階級差があらわれ、嗜好の「貴賤」が社会階級の上下を定義し、その境界線を維持する。

文化の嗜好を構成しているものは学歴などの人的資本の蓄積によって獲得したり、さらにそれよりも根深く身体化されている生まれ育ちなどから獲得した文化資本である。これらの資本を持つ人々によって「良い」趣味がなんであるかの規定がなされる。このような前期近代における「通俗的」な趣味は、その人がミドルクラスであることの表明となり、「悪趣味」な消費傾向を示す下層な階級との境界線を維持した。エリートがそうした「悪趣味」や「通俗的」な趣味を見下すことで境界線が示され、維持された。審美的な消費のためのこれらの諸文化の価値と、何が美しいかを定めるのはこのエリートであり、エリートや上位層の消費嗜好、価値観に近づこうとするより下位の人々の上昇指向によって、いくつかの層を順に、より下層の人々による一つ上層の模倣で伝播していく、ゲオルグ・ジンメル (Simmel 1919=1994) が流行論のなかでトリクルダウン (滴下) と呼ぶ現象が起こる (経済学でいう同語と文脈・用法は異なる)。さらに、その都度、エリートや上層は境界線の維持のために、新しいものに乗り換えるというサイクルを含める、追跡・逃避 (chase and flight) (McCracken 1988) があった。

このようにして文化は社会的な区分、社会的ヒエラルキーの創造、保護のためのツールとして重要な機能を果たしていた。本稿全体の主旨に照らして言い換えると、それは多様性が序列づけられながら保全されるということになる。

ここで一度メンミの二段階をなしている人種差別概念に戻って言い換えると、ハビトゥスによって生じた諸々の感覚の違いによる断層と、本能的に異質性を嫌悪する人間の傾向とすることができる。その異質性を嫌悪するだけであるならば、双方向に向けられるはずである。しかし実際には単元的な軸によるヒエラルキーになっている。双方向でなく単元的な軸が共有されている現象は、価値が大枠基準からの近似度合いによって不平等に配分されていて、その大枠基準にはすべての階層が同意していることが要件となるはずである。本稿ではその大枠基準を括弧付きの「普遍性」とし、ウェンディ・ブラウンとウォラーステインを主に参照しながら本章以降で詳述した。

では何が「普遍」的たりうるのかをめぐる闘争をとおして、それぞれの階層なりエスニシティが担っている記号性の序列内の位置が交渉され、決められる。ブルデューが象徴闘争と呼んだものと多分に重なる現象であると思われる。

「正統的生活様式を相手に押しつけることを目標とする象徴闘争——その典型的な例は贅沢財や正統的文化の財、あるいはそれらの財の正統的な所有化形式など、『上流性』の標章の独占をめざす闘争のうちにみいだされる」(Bourdieu 1979=1990(1): 385)

つまり優れている、序列の上を占めているという記号性の獲得・維持をめぐる闘争なのである。そしてその序列を定める軸を定義する力(強制力)は支配者層の恣意的な強弁であるとされている。

「正統性の最も確実なしるしは、その正統性が主張されるにあたっての自信、よく言われるように『相手を圧倒する』自信であるから、はったりというのは、もしうまくいけば、そして何よりもまず相手もはったり屋であった場合には、自分の存在状態の限界をまぬがれる唯一の方法となる。」(Bourdieu 1979=1990(1): 390)

また、何が不当であるかの定義をめぐって、坂本桂鶴恵(2005)は、構築主義的視点を導入して次のように喝破している。つまり、差別というものに共通の原因など存在せず、何か差別的であるとする人々がいる一方で、それは差別ではないと否定する人々もいるという不一致を告発し、この告発に賛同する人々が当事者以外にも支持されるまで認識が広まったものが「差別」として認知されうるものに成るといっているのである。

そこにいくと、ソフト・パワーをあえて言い換えるならば、既述のような記号性の既成の価値をズラしていく構築主義的前提をもったパフォーマンスな対応である。

否定的な記号を貼られていても、肯定的な自己呈示によって言説自体を好ましいものに刷新し、少しずつリアリティを差し替える。強制よりも、魅惑・魅了への変化、物質的なものから非物質的な記号的価値重視の変化という、近代を語る上で必須の変化に符号し、同時に当然に、同様の变化を受けて生じた古典的人種差別から待避的人種差別・第三のカラー・ラインへの移り変わりに対応している。

本研究は、第一章では第三のカラー・ライン／待避的人種差別が日本人にも適用でき、異文化適応／不適応という現象はむしろこの枠組みで捉えなおすべきことを論じた。また第三章以降では、第三のカラー・ライン／待避的人種差別へのパフォーマンスな対応であるソフト・パワーがどれほど効果をもったのかを検討した。特に韓国の韓流ソフト・パワーと韓国というエスニシティに付着している記号性に焦点をあてた。〈帝国〉のエンターテイメントの首都、ロサンゼルスでは、韓流の受容の程度によって韓国系人口の下位分類を分断したり接合したりしていたという知見を示した。そこでは従来の「普遍性」が維持されていると同時に、新たな東半球の経済力と政治力に裏打ちされたソフト・パワーの隆盛を受けて、新規の「普遍性」の萌芽も見受けられ、サミュエル・ハンティントンの『文明の衝突』(Huntington 1997=1998)ではないが、複数の「普遍性」の乱立と、さらにその多様性を包含しようとする従来の「普遍性」の刷新という進化が今後より明示的になる可能性がみい

だされた。したがって、本稿が独自の知見を踏まえて提供しうる結論は、人種差別のとらえ方として、「普遍」的記号性の非対称な分配であると言い換えたほうが適している、ということである。そしてそれを捉えるとき、文化・価値観がなんらかの「普遍」なるものに向かって収斂しているのか、逆に多様化しているのかという枠組みで見つめる方がより現状を反映していると言え、その実証を試みたのが本研究の意義である。

このように、第三のカラー・ライン／待避的人種差別論の通常差別論との位置づけを試みた。以降に続く項目 2 と 3 ではバウマンを中心とした論述でさらに「普遍性」の中身に迫り、以上の議論を深めたい。

2 ジグムント・バウマン

2-1 リキッド・モダニティ

広くいえばポストモダン論の一つである。ポストモダニズムはそれまでのモダンな時代との非連続の独立した別物という立場をとっているが、ベック（1992）の第二近代や、ギデンズ（1999=2001）の後期近代と類似の概念で、それまでの近代を再帰的に刷新したという連続性を想定している。バウマン（Bauman 2011, 2000）がリキッド・モダニティで対置しているソリッド・モダニティとは、アドルノとホルクハイマーら（Horkheimer & Adorno 1947）によって批判された一昔前の近代で、マックス・ウェーバー（1987）の官僚制とか、パノプティコン的管理による自由と不自由の関係とか（Deleuze 1986）、フォーディズム型生産など、没個性、合理化、制度的規制によって特徴づけられ、ビッグブラザーと国民国家制が重厚に機能している、どちらかといえば全体主義的な雰囲気につつまれた、あの近代である。第一近代（Beck 1992）とも呼ばれる。

フランクフルト学派によってかつて行われた近代批判は、上記の 20 世紀初頭に現れた（前期）近代に向けられたものであった。それに対し、後期近代に今も向けられている批判は著しく方向性が異なっている。リキッド・モダニティやそれと類似の近代観とは、各個人は自らの運命を自在にデザインし、どんなアイデンティティも本人の努力次第で獲得できるという言説が流通し、またそれを信じさせるに足るような諸々の制度的強制の後退により、社会の矛盾や不条理を個人の自己責任に帰し、市民的な団結、集团的請求という行動をできるだけ無効化たらしめようという、いわゆる昨今優勢なネオリベリズム的なものへの批判である。

リキッドな近代は、それまでのソリッドな近代を成り立たしめ、堅固にみえていた諸制度が溶解し、規制緩和と諸々の民営化の波が必然となった今の近代で、いずれの側面も液体のように長期間その形を維持することができないことを強調しての命名である（Bauman 2011: 22）。この変化の契機は、資本と労働の関係性が変わったことと、再帰性である。前期近代においては、労使がともに特定の場所の中で対立しながらも、妥協しつつ共生してい

た。後期近代における鉄の檻の中にはあいかわらず労働・労働者が留められているが、しかし資本の側は超領土的移動力を得て場所に縛られることが減り、刹那的な契約が労使を結ぶようになった。資本側は場所の固定に付帯していた諸々のリスクとコストから解放されている。一方で、そのような一握りの幸運な立場に恵まれなかった大多数の人々にとっては、未来が不透明に、一層不確実に、永続性が崩されて一過性を帯び、変化の激しく予測し難いものになり、リスクが増大した。そうした不確実性と刹那性は個人生活のあらゆる断面、仕事、恋愛、家族、交友関係などにまで浸透し、不安と自己責任の論理が以前にも増して、個人にのしかかるようになった。

一度は解体されたと思われた共同性らしきものは、個人を襲う増大する不安のなかで、返す振り子のように復活させられ、今度は所与のものとしてではなく、個人が「選択する」共同体があらわれるようになった。それらの共同体は不安と不確実性の社会の要請により選択されたため、異質な部外者にたいして必要以上に不安を覚え、自分たちの周囲に防壁をめぐらし、共同体同士はすくなくとも無関心か、潜在的には敵対した。

2-2 ブルデュー批判

「ブルデューは沈みゆく太陽に照らされた風景を観察していたのだ。その陽はせまりくる黄昏の中に溶けていくその輪郭を一時的にくっきりと浮かび上がらせた。」
(Bauman 2011: 21)

バウマンは、ブルデューが『ディスタンクシオン』で示したことは、モダニティが「ソリッド」な状態の時の終盤のことで、その後すぐにソリッドからリキッドな社会に変容したため、『ディスタンクシオン』で示されたことはすでに有効ではないとしている。バウマンが今の近代を液状のようだと強調し、それまでの階級間の示差性をもっていたものは溶けだして変化しており、今の文化的エリートは、高級な文化も、低俗な文化も雑食するという。リキッドなモダニティにおいては、雑食性が文化的エリートの特徴となっている。

「厳格な基準や潔癖さを排除して、あらゆる趣味を公平かつ選り好みなく受け入れること、言い換えれば嗜好の柔軟性こそが、選択の一時性や一貫性ととともに、今日、もっとも賢明で正しいと推奨されている戦略の印である。今日、文化的エリートの一員である証拠は最大限寛容で最小限気難しいことである。文化的な俗物は俗物性をことさら否定しようとするが、今日の文化的なエリート主義の原則は雑食性、言い換えると、あらゆる文化的な環境に家庭的なくつろぎを覚えながら、いかなる家庭も家庭とはみなさないことである。」(Bauman 2011: 25)

リキッド・モダニティの時代の文化的エリートと大衆の区別は、何を消費するのかではな

く、雑食か、単食かによると言っている。以上がバウマンの主張であった。

3 一層の消費社会化とエスニック・ヒエラルキー

3-1 市場経済の深化

『文化』の概念をしだいに変容させてリキッド・モダンを体現するものにしようとする力は、市場を社会的・政治的・民族的要素のような非経済的制約から解放しようとすると同じものである。」(Bauman 2011: 27)

近代化論と消費社会論を等号によって即結びつけることは躊躇われるが、しかし、多くの論者(ラッシュを筆頭(Lash 1990)に、ベック、ギデンズ(Beck et al. 1994)など)が多かれ少なかれ、少なくとも密接に関連のあるものとして扱っていることは事実である。

消費社会の記号的消費を行う主体は、ゲマインシャフト的な共同体からの脱埋め込みを経験しており、個人化されているという点、また、かれら個人は再帰的な目線で自らの消費行動も刷新していき、近年では、嫌消費という行動や、自己選択としての共同体的なものへの再接近という行動がみられる点も、やはり、2つの概念は関係が深いと考えられ、本稿においてもそのように措定する。

ソリッドな近代性では権力は国民国家に集中しており、秩序を壽ぎ、事前に定められたコースを維持する。しかし、それがやがて資本と情報の世界的な配分に具現されている権力が超領土的なものになる中で、政治はローカルなままにとどまる。この政治と経済、文化の不均衡により、各国政府は規制緩和を進めることになる。経済と文化的プロセスに対するコントロールはより一層、超領土的に「市場の力」に委ねられることになる(Bauman 2011: 117-8)。つまり、リキッド・モダニティとは、市場経済の深度が一層深いところまで到達した時の、文化の性質の変容を言っているのだ。

以下では、市場経済と資本の影響がより一層に強化された世界における多様性と画一性への作用項を2つの視点から解きほぐしたい。まず、資本・経営と市場・消費者の関係について、経営学の一分野であるマーケティング論から。続いて、資本・経営と労働者の関係からはこれも経営学の一分野で昨今話題のリーダーシップ論および、多様な労働者の管理に供されるダイバーシティ・マネジメント／異文化コミュニケーション研究からの視点で論じるが、後者については論旨の流れの都合上、「多様性を管理する技術」の項目(4-2)で論じることとする。消費社会が一層深化し、市場の影響力がより強力なものになっているため、資本側や経営側が、市場や労働に働きかける手法を確認するのは必然であろう。

消費社会が一層その度合を強めたリキッド・モダニティにおいては、啓蒙する対象として

の大衆は不在であり、代わりに顧客が存在する。文化的供給物は市場において顧客を魅了し、魅了し続けようとする。いわゆるポストモダン的なマーケティングによって担われる仕事が増える。マーケティング論は、企業が販売活動をする上で参照している（中小企業よりも、大きな販売網をもつ大企業ほど参考にしているようだ）経営学の一分野である。「近代的マーケティング論の父」とか、「マーケティングの神様」とその分野では言われているフィリップ・コトラーの著書（Kotler et al. 2010）を参考にすると、彼はマーケティング手法の変遷を3つの段階として分類している。初期のマーケティング 1.0 では、作った商品を市場に供給する際には、同質的な商品提供を指し、製品の存在とその性能を告知する手法で、その次の時代、1970年代以降の 2.0 では、消費者のニーズを調査によって把握し、市場のセグメント化、ターゲット設定、それに対応するような自社製品・サービスのポジショニングという開発と宣伝方法などのいわゆるポストモダンな時代の多様化する市場の要求への対応で、商品・サービスの差別化という方法を通して需要を喚起するというものである。1.0 から 2.0 への販売側の手法変化は、モダンからポストモダンの移行と時期も内容も概ね対応していると考えてよいだろう。

しかしここでは終わらず、コトラーは 2.0 をさらに深化させた 3.0 という概念も出している、今は 2.0 と 3.0 の移行期としている。例の一つとして、ガラケー（注：ガラパゴス化した一昔前の日本の多機能携帯電話の略）が 2.0 の申し子であるとする、それを退場させた iPhone は 3.0 的マーケティングの嚆矢であったという。別名だと Cause-marketing と呼ばれるが、つまり購買者が使用価値を超えた価値を見出せるような意義（革新性であったり、環境に良いなどの社会貢献であったり、使用することで好ましいアイデンティティが獲得できるなどだろう。自己実現欲求への機会提供に近いと思われる）を商品・サービスに付与方法である。iPhone は消費者の需要に応えるというよりも、むしろ「世の中を良い方向に変える」というコンセプトが先行して開発がおこなわれた。そこには、2.0 よりもさらに明確にプロボノ的なシニフィエの重要性と、消費者側の再帰的志向をリードしようとする努力が増していることが垣間見える。供給はそれに等しい需要を作り出す、供給が需要を喚起するという、一度は放棄された大昔のセイの法則が再び見いだされる時代と言い換えられるのではないか。つまり、今の時代は制作側、販売側の提案が市場の需要に先行し、リードしているということである。

コトラーは 3.0 的手法の中心軸の一つに、グローバル化した市場では文化（ナショナルやエスニックな意味で）に対応した売り方を強調している。グローバル化の画一化に向かう力と、それへの反作用としての先鋭化されたナショナリズムや地域主義が招く社会的問題に鋭敏に対応する方法として 3.0 が提案されている。つまりグローバル企業に抱かれがちな否定的なイメージの払しょくのために、「公正」なグローバル社会の推進という社会的意義を掲げることで、消費者の反感を逸らし、意義達成のために消費者の協力および協働の場を設けるという主旨である（Kotler et al. 2010）つまり、消費者の再帰性をマネタイズ（マーケティング用語で、収益化の意）の対象とするマーケティング手法であると言ってもよいだろう。

う.

リキッド・モダンの消費者志向型の経済は、消費者の嗜好と供給物の需要を前もって予測することが困難であるため、リスクヘッジの観点から、また個人化が進んで他者との差異化を志向する消費者の特徴から、新製品・新サービスの開発による多産多死型の生産供給を行い、供給スパンも短く、回転のサイクルは早くなる。多種の小ロット生産はポスト・フォーディズム経済の特徴そのものである。

バウマンがいう超領土的、あるいはネグリ&ハートが言う脱領域的とはスーパーリッチや統治機構の非一場化のみならず、昨今のあらたな民族大移動をも含んでいるし、それに先立つあらゆるグローバル化の現象も含まれていると言ってよいだろう。またそうしたことが、消費社会が一層深まったこととあいまって、エスニシティが商品化することもよく知られている。エスニシティの商品化とは、端的に言って、ナショナルやらエスニックな有徴性が、ユニークな記号を備えるために商品価値を持つことである。

エスニシティの商品化の一つの例としては、食があきらかである。日本食、ほんの一昔前までは、西洋圏では寿司は火を通さずに食すので野蛮であると考えた人の方が明らかに多かった。普通に考えても有徴性が高く、敷居も高いと思われるような寿司が、今では世界のあらゆるところで人気であり、例えば LA などの東の文明にも開けた大都市では、むしろ寿司に偏見を持っている人の方が時代錯誤のようなラベルを貼られかねない。ラーメンブームしかり。寿司については、ヘルシーだと考えられているため（実際に健康的か否かよりも、一部の人のにとっては「ヘルシー」という記号を備えている）、健康を気に掛ける時代背景から、その側面による説明もかろうじて可能であるが、ラーメンブームはあきらかに健康を気にしての消費ではない。韓国料理のコリアン・バーベキューの人気も同様である。

ところで、以前よりも多くの人々が健康を気に掛けるようになったこと自体が、リキッド・モダニティゆえである。不確定要素が高まり、従来の安定した家族関係に期待を抱けず、かといって、国による保障も充分とは程遠い（オバマ・ケアにより多少ましになったとしても）。投資先として回収が確からしそうに思われる自分自身に関心が集中し、自分の健康が投資対象として相対的にリスクの少ないものになった。

しかし、そのような健康的だから、という消費行動と、ラーメン、コリアン・バーベキューに向けられている熱量は説明できない。むしろ雑食性によって理解されるべきである。寿司も少なからずそのような要素があったはずである。繰り返すが、ほんの少し以前までは一部の人びとを除くと、火を通さずに食すことには、野蛮であるとか、後進的であるとかの大きな負の記号性がともなっていたのだが、ある時を境に受け止められ方が変わった。また今では、もはや日本的な要素が薄れてローカライズされているという点も大きい。

アメリカ全般にも言えるが、LA では特に食の雑食性は極まっている。各種の中南米の食は当然として、それらをローカライズした版はそれ以上に人気であるようにみえる。タイ、インド、中華、モンゴル、ベトナムの各種料理もローカライズされ、根付いているし、最近

では韓国とメキシカンのフュージョン料理も話題を呼んでいる。バウマンの言う雑食性は、文化的エリートの特徴であったが、どうやら食については、そのような文化的エリートの性向がトリクルダウンを起こしているようだ。

食の場では、世代に関わらずいかに発揮されている LA の住民らの雑食性はしかし、次の第三章で詳述するように、韓流の受容には明らかに抵抗なり、無関心を示している。一部を除いて、主流に入り込めたとはいえないこと、また明らかに序列の下位に置かれていることから、雑食性はこの領域にはまだほんの一部しか入ってきていない。韓流とここで括ったものには、韓国ドラマ、K-Pop、韓国コスメティクス、K-Style ファッション（髪型含む）を指している。

ではなぜ食には発揮され、映像コンテンツ、大衆音楽、服飾、美容に関しては雑食性が発揮されず、いまだディスタクシオンの世界が成立しているのだろうか。食に関してだけ、プチブル以下が受け入れてトリクルダウンが起こったのだろうか。いやそうではなく、それ以前の問題で、バウマンの言う文化的エリートの雑食性が向けられる対象の領域が限定的なもので、彼らも韓流全般を雑食するわけではないと考えた方が自然であろう。その部分的な韓流支持がトリクルダウンを起こしていたとしても、プチブル以下に流れるまではごくわずかで、広範な層に消費習慣が拡大するためのティッピングポイント（流れをいっきに変える水準）を超えていないと考えた方がよい。食に関して、たとえば中華料理の中だけでも受け入れられているものと、そうでないものがある。大衆音楽にしても、またファッションにしても第三章で詳述するように韓国的なものには「悪趣味」という否定的なラベルが（少なくとも少し前までは）付与されていた。そもそも大衆向けとして作られているため、「洗練」とはもともと無縁であるが、広く受容されている西洋の大衆向けなものよりも、輪をかけて否定的な象徴性を付与されているということである。こうした下位の文化を消費する人々は文化的ヒエラルキーで下位におかれる。つまり、ナショナルな文化の諸製品や消費対象に向けられる性向を規定しているものには、一つにはハビトゥスがあり、例えば服装にしても美的な価値観においても、育った環境、社会に馴染みの薄い系統のものに対しては単純に消費意欲が削がれる場合。そしてもう一つは、ディスタクシオンのように、ハビトゥスと特定の階層（ここではエスニシティや人種）によるコノテーションが結び付けられ、上位の「洗練」された消費対象と下位の「低俗」なものがあるという記号消費の特徴によって説明できる場合がある。後者の場合は第三章で詳述するが、こうした視座にたてば、エスニック・ヒエラルキーが消費対象や消費行為に記号性を直接与えている場合もおおいに考えられるということだ。

また、もちろん商材として市場に支持されている場合も、エスニックな有徴性がエキゾチックな記号性の消費対象となっていることが往々にしてある。つまり、本質主義の立場は論外としても、通俗的に「オーセンティックなもの」と著しい乖離があるような場合もあり、例えば幅広い客層を集めている LA のリトル・トーキョー全体の醸し出す雰囲気（これは、けして筆者だけの主観とも言い難く、リトル・トーキョーを含む周辺のデベロッピングも担

っている日系人を中心とした NPO 組織のデベロッパ担当者の言でもある。) など、商業活動は消費者側のエキゾチシズムというバイアスが入りこんだ需要, あるいは消費者側の期待に応えるかたちで有徴性が捻じ曲げられて市場に提供されることも多々あるが、それが市場における文化という商品の一側面であるといえる。

エキゾチシズムはなにも、エスニック・マジョリティの専売特許ではない。マイノリティ側も自己エキゾチシズムという本質主義的態度を自らに投影する傾向は知られている。阿部 (2001) によると、「セルフ・オリエンタリズム」¹⁾は、「日本文化」や「日本人であること」への誇りが、西洋という「他者」の眼差しに映る「ジャパン」像を意識する結果、欧米の抱く「日本らしさ」を日本自身が演じることである。これは「日本人」「日本」の場合を一例に挙げているのだが、ようするに、「サムライ・ジャパン」とか、「撫子」だとか、そういった類の現象を指す。日本はたんなる一例で、他の国やその国民にも広くみられる現象だと考えてよいだろう。行為主体が市場での功利的目的のために、マーケティングの一環として進んでエスニック性を捻じ曲げて自己呈示をすることと、自覚なく、素朴なセルフ・オリエンタリズムによる市場での自己呈示を行う場合の二通りがあると思われるが、外部からの観察で両者の間に截然とした見分けがつかないとは考えにくい。

消費社会論は 80 年代に記号論的な一過性の流行があり、その後はすたれたという一面はある (松井 2001)。しかし全面的に否定されるのは誤りであり、後期近代においては物質的有用性もさておき、記号消費は説明力を持っている。そのような社会では、エスニシティやエスニックなサービスや消費材は記号性を帯びて消費対象となり、エスニック・マジョリティが、エスニック・マイノリティ性という記号 (が付帯されたサービスや財) を消費せんと欲すれば、それは多様な方面に関心を持ち、開放的な文化エリート性を獲得する消費行動になる。また、それを主として消費している (とされる) エスニックな人々が社会空間での序列をともなった位置づけと相互に結び付けられる。

やはりバウマンはこうみるといささか雑食性を過度に強調したようだ。バウマンは雑食性を過分に見積もっていたためか、『ディスタクシオン』を過少評価していたようだ。前述の経緯で流通している寛容のイデオロギー雑食性は適用されるのは一部の分野に限定され、それ以外では『ディスタクシオン』で描かれた図式はコンテンツこそ違えども有効である。

3-2 教育、ハビトゥスによる差異化とエスニシティ／人種

こんどは市場ではない、『ディスタクシオン』的な意味でのハビトゥスによる序列を如実に示す例を挙げ、今でもブルデューが生きていることの一例としたい。教育を通じて、学歴資本を獲得しようというのは、ディスタクシオンでも述べられているように、特定のエスニシティに限定されず、普遍的な行動であるはずだが、エスニシティ／人種と結びつけて語られる場合も散見され、グローバル化が進んだ脱領域な社会においてはエスニシティ／

人種が階級として扱われる一例である。

第三章で具体例を挙げてまた述べるが、教育方法の違いも職業生活でのグラスシーリングが取り払われない理由の一つとして挙げられるほど、文化的ヒエラルキーが現れる。つまり、アジア的教育方針は詰め込み型で、創造性を養わない（とみられている）点である。中国系に至ってはタイガーマム（Tiger mom）という言葉が一般に知れ渡っているほどに、東北アジア系の家庭は教育熱心であるという言説があり、北米では良きにつけ悪きにつけ、それがモデルマイノリティというラベリングにつながっている（Rosenbloom et al. 2004）。極端に言えば、カリフォルニア・イデオロギー（遠藤編 2010）のような、反体制、フォーマルよりカジュアル、クリエイティビティが称揚される生産体制に、アジア的な教育方法という「文化」が部分的に対応していない、という解釈もなりたつだろう。

経済資本をある程度までは蓄積済みの彼らが、高度な学歴資本を獲得するも、身体化されたハビトゥスによって差異化され、境界線をひかれる構造は、まさに3つのカラー・ラインと相似する。

3-3 「寛容」な態度についてのバウマンの視点

ここで、バウマンの現在のグローバル秩序についての認識を「寛容」の概念と交えながら確認したい。

大航海時代以来、ヨーロッパ人が世界中に大量移住するようになるなかで、移住先での現地人を啓蒙し、「文化的」な水準にまで引き上げるという「白人の使命」というイデオロギーがあった。その「教化」が完了する以前に、植民地帝国の衰退によってそうした「教育者」の祖国への帰還が始まると、「文化的洗練」がまちまちな人々が宗主国の都市に移住するようになった。この段階においても同化政策のもとに移民たちを対象に「教化」の継続がなされた。そして次に到来した段階は、もはや植民地時代の経路とは無関係に様々な場所から先進諸国への人々の大量移動が始まった。

この現在のディアスポラの段階においては、バウマンによると（バウマンはここでは特にヨーロッパの状況について述べているのだが）、多様性を生きる術、つまり違いに我慢をするだけでなく、互恵的な関係を取り結ぶ術にヨーロッパ人が関心を寄せるようになった。この新しい傾向は、同化主義の底流をながれていた文化が進歩するという前提を覆し、「従来の文化間の上下関係を弱める」（Bauman 2011: 59）方向性をもっている。ここに至って、「文化同士の関係はもはや垂直ではなく水平である。すなわち、いかなる文化もその優越性や『先進性』を根拠にして、他の文化に従属や卑下や服従を求めることはできないし、その資格もない。」（Bauman 2011: 59）という。

従来あったような、「安定していて、疑問の余地のないヒエラルキーと一方向的な進化の道」という考え方も、今日では、異なっていることへの承認を求める闘いに席を譲っている。これは帰趨が予測しにくく、その確実性を当てにできない衝突であり、闘いで

ある。」(Bauman 2011: 59)

こうした現状認識をバウマンはもっていたようだ。

「教育水準が高くて影響力があつて政治的にも重要な階級が、この不確かな時代にどのような価値を育み、どの方向に進むべきか尋ねられると、決まって答えるのが『多文化主義』である。この回答は『政治的に正しい』地位まで格上げされ」たとしている。

(Bauman 2011: 59)

このようになった背景として次のことを述べている。一部のスーパーリッチの行動範囲が超領土的なものに拡大し、ローカルな政治と場所から距離をとっており、以前の啓蒙時代や同化主義時代のエリートと異なり、「教化」やら、他者の主義を転向させることに無関心である。

不確かな時代、つまり液状化近代では多文化主義を戦略とすることが新しいグローバル・パワー側には有益である。同等とされた各文化のコミュニティ間で争いが起こっているかぎり、分割統治の原則が働くからである。かくして実質は分離主義の「多文化主義」が「寛容」という名のもとに、政治的に正しいという言説が流通することになったという。

また、バウマンは、先に述べた雑食性の文化的エリートの態度についてリチャード・ローティ（Rorty 1999）を引用し、「すべての差異を、ただ他の人々と違っているという理由だけで、同じように賞賛すべきとしてしまっている」（Bauman 2011: 68）とし、これは実質的な分離主義路線に至りやすいと批判している。文化的エリートが雑食になった直接的な因果は明確に論述されていないが、リベラルで開放的、寛容な態度が良しとされるようになったのは、脱領域で場所からの呪縛から解放された〈帝国〉の支配層が再帰性からの批判を無効化し、同化政策などという非効率的な事業から撤退した後の管理の形態であった。そして、雑食性という傾向とリベラルで開放的、寛容なことはすぐにつながる概念である。

以上は、グローバル・パワーや、スーパーリッチなど超領土的な行動半径をもった人々の視点、グローバル秩序の視点であった。これにより、イデオロギーをもたないというイデオロギーが流通するようになると、プチブル以下、その新たなイデオロギーをもたないイデオロギーの消費者たちの視点ではどうか。

アラン・トゥレーヌ（Touraine 1997）を引用し、バウマンは、次のように二種類の多文化主義を峻別している。一つは、「文化的資源に恵まれた人々への制限のない選択の自由に対する尊重」や「個人が自らの生活様式や忠誠のよりどころを選ぶ権利の尊重を前提としている」多文化主義。もう一方は、「個人の忠誠心が、原初的なコミュニティへの帰属という」マルチ・コミュニタリアニズムであるという（Bauman 2011: 70-71）。

ここで、ウェンディ・ブラウンの西洋リベラリズムの寛容が何を意味しているかの論述を接続したい。ブラウンは、西洋リベラリズムは個人の自律的な選択を意味しているとし、こ

これはバウマンの多文化主義と通底している。しかし、ブラウンは、次のような場合、西洋リベラリズムはその奥の姿をさらけ出すという。

「数少ないイスラーム系社会での強制的なヴェールの着用と、アメリカの十代の少女たちのほとんど強制的な肌の露出を比べてみると、前者はきまって『あちら側の』選択の絶対的な欠如、つまり圧制として、後者はきまって『こちら側の』選択の絶対的な自由として描かれる。」(Brown 2006=2010: 257)。

ブラウンは、このような権力の作用の説明にミシェル・フーコー(Foucault 1975=1977)の権力観を援用している。つまり世俗的な市場によってつくられている女性らしさやファッションに縛られることについて次のように言っている。

「世俗的で、解放的で、自らの生をコントロールする」西洋女性という神話が介在することで、強制ではなく、自律的な個人の選択である信じることができる。そのような自分たちは自由であるという神話を成立せしめるには、「抑圧された第三世界」の原理主義に強制を受けている非自由な女性像を必要とするということだ (Brown 2006=2010: 258)。

ここで、バウマンによる「美とは何かを決めるのは彼ら自身だったからだ」(Bauman 2011: 13) という見立てはブラウンの指摘とシンクロする。何が「普遍的」で、何が「特殊」であるかを恣意的に決める際の確信の強さをマジョリティは有している。

これに沿うと、帰属への埋め込みを外された個人は自由な選択が可能になる、というよりむしろ、それまで帰属していたコミュニティなり文化的行為以外を(半ば強制的に)「自律的」に選択してはじめて、西洋リベラリズムから承認を取り付けられる唯一の選択肢のように見える。とすると、マルチ・コミュニタリアニズムはもちろん、バウマンのいう個人の自律性を貴ぶ方の多文化主義を採用している社会でさえも、結局は、序列をともなった境界線を作ることに終着していることになるし、また同化への圧力にもなる。

ここであくまでも、例示の一つとしてだが、インタビュー中の会話の一部を引用する。韓国系 2 世米国人の 22 歳の男性である。S さんは、民主党派の主張への反感を述べている。穏やかな S さんもこのときだけは感情をあらわにしていたように見えた。LA に代表されるアメリカのリベラリズムを不快に思っていることを話してくれた。

本章で引用するインタビューはごく一部のため、協力者の紹介はインタビューからの考察を中心にとりあげた第三章の冒頭を参照されたい。

S さんの話 : (S-0) (※本稿中で参照のために、引用したインタビューのまとめりに番

号を振る。以下のインタビュー部分は「S-0」とするが、S-1以降と別の機会に得た情報を意味せず、本稿上での分類によって数字を変える。アルファベット部は協力者を指す。したがって、アルファベットが同じであれば同じ協力者である。また、左端の「I:」はインタビューワー（筆者）の発言を示し、「アルファベット一字:」はインタビューイーの語りを示す。）

（政治的信条について尋ねていて）

S: 共和党を支持しています。同性愛結婚に反対しています。私は保守的です。

I: LAだと... つまり....

S: LA はとてもリベラルなので、LA の全体の雰囲気には反感を覚えることがあります。民主党の言う「寛容」の中に非寛容さがあるのが嫌いです。彼らの言い分は、結局、彼らの意見に同意しろ、と言っているのです。本当に寛容ならば、意見の不一致も含まれているはずですよ。

また、別の人とのインタビューからは、韓流の影響で、韓国という国の存在がよく知られるようになったという話と、また LA においても同化した方が便利な場面の一つを紹介したい。

Br さんは、韓国系 2 世米国人で、LA 生まれの（2015 年のインタビュー時で）26 歳の男性。UCLA の卒業生で、現在は R さんとともに K タウンにある韓国系の NPO で働いている。R さんは、11 歳のときに韓国から LA に移住、K タウンで育った韓国系 1.5 世米国人の 28 歳の男性。K タウンの NPO で社会福祉の仕事にたずさわっている。

下記は、筆者も含めた 3 人での会話の一部である。インタビューは 2015 年 4 月 24 日、彼らが勤める NPO の会議室で 1 時間半にわたっておこなわれた。

Br さん、R さんの話: (Br/R-0)

（韓流の LA での影響をたずねていて）

Br: LA 以外から来る non-Korean の人々とたくさん会う機会があるのですが、私が韓国系だと知ると、「ああ、K-Pop」という反応を最初にするので、韓流の影響で確かに韓国の名前は広まっていると思います。

（中略）

I: 韓流が西海岸にきて、韓国系が魅力的だと思われるようになったと思いますか？

R: 非韓国系がセレブリティを見て魅力的だと思うことはあるでしょうが、韓流のセレブリティと一般の韓国人は外見もとても違うので。メディアのせいで魅力的に思われるようになったとは思いません。ただ、韓国系の女性たちは人気です。韓流の前から。

Br: 私の non-Korean の友達の多くは、韓流以降、韓国の女性をより魅力的だと思うよ

うになったと思います。メディアで見た情報が頭に残る何かがあるようで。

R：そうかもしれない。Non-Koreanにとっては、韓国の人を見たことないかも。韓流の動画が拡散して、韓国人だとわかるようになったのはあります。でも魅力的に思うようになったかどうかはわかりません。

R さんとの会話で、同化に向かわせる力はどのように現れるのかの一端が垣間見えた会話は次であった。

R さんの話：(Br/R-1)

I：R さん、ご自分の服装は、アメリカナイズか韓国風なのか、どこらへんだとお考えですか？

R：半々の真ん中らへんです。アメリカナイズされようと意識しています。

I：アメリカナイズされた服装をする理由はなんですか？

R：仕事だと、いろんなバックグラウンドの人々に会う機会があります。韓国人だけでなく。

仕事以外でも、多様な人々と交流する機会があるので、アメリカン・スタンダードのが良いと。

I：韓国ファッションだと悪目立ちすると？

R：まあ、そんな感じです。

上の二つの話は、直前で述べたブラウンとバウマンの議論の一例だが、LA 在住の韓国系の2世と1.5世の生活の輪郭が、LA でさえもアメリカ的な「普遍性」によって縁取られている場合である。

4 リキッド・モダンな時代のプチブル

4-1 ミレニアルズのプチブル

話が分岐してしまったがここで路線をもとに戻し、順番としては「市場経済の深化」の項に続く内容を論述する。

「ディアスポラの間で生活を送っている。『違いがありながら生きる技』が初めて日常的な問題になりつつある」(Bauman 2011: 58)。バウマンはヨーロッパの状況についてこの文章を記述しているが、北米においても、ましてや LA においてはまことに当てはまりすぎるほどに当てはまる。ディアスポラ時代に要請される技術は多様性を生きることである。実際、どれほどこの技術がどの分野で発達し、応用されているのかを足早にでもたどる。前項までと異なり、生産－消費の場ではなく、この項では生産側の労働力管理の場を扱い、それが、

前項までの市場の変化に対応した労働力管理の変化であることを確認する。

後期近代のグローバル化の結果、『ディスタンクション』で描かれたことは脱領域的になり、特にエスニシティ、人種に結びつけられがちなハビトゥスになった。バウマンのいう雑食性は一部の人々に過ぎないし、その雑食性のトリクルダウンはごく限られた分野、比較的脅威のなさ気な性質の領域にしか見られない。ただし、多様性への嗜好は文化エリートに準ずる層の特徴となっている。

リキッド・モダン時代のスーパーリッチが非関与、無関心をモットーとし、文化的エリートが雑食性を示している（Bauman 2011）ならば、それを追いかける同時代のプチブルは次のような関心をもっているだろう。多様性を組織し、経営などに供するためのダイバーシティ・マネジメント、およびその組織成員への啓蒙としての異文化コミュニケーション研究、そして組織の多様性の増加に対応するリーダーシップ論。リーダーシップ論は創造産業の隆盛も受けているので、ポスト・フォーディズム時代の申し子である。これらはすべて差異に「オープン」で平等志向なリベラルな発想を特徴としている。プチブルの性向と言ったが、『ディスタンクション』のような実証ではない。リーダーシップ論とダイバーシティ・マネジメント、どちらも多様性に向き合っており、雑食性志向に追随したい、今の時代のアップーミドルクラスなり、ローワーアップーの人の関心事であるだろうという仮定は容易に浮かび上がる。

4-2 多様性を管理する技術

ダイバーシティ・マネジメントと呼ばれる組織論の一分野は、経営学の範疇に入る。多様性を活用しようという経営側の工夫の背後には、労働者の多様化が一つにあり、性別、性的指向、人種、エスニシティ、世代、身体的ハンディキャップの有無などを取り込んで、総体としての生産性を上げることがあるが、労働者の多様化が増大すると、マイノリティ側が同化する際にかかるコストが甚大で、マイノリティ側の生産性が同化への努力と負担に削がれて著しく減少してしまうし、また対立や誤解から生産性が下がるため、それに対応したマネジメントが必要であるという後ろ向きの説と、また、変化が著しく、多様化する市場の要求に多様な組織は同質的な組織よりも応えられ、創造性の活力もあるため、生産性が高いという前向きな説の2種類があり、今日の隆盛をみている。ただし、日本におけるダイバーシティ・マネジメントはおおざっぱに言うと、女性とシニアの包摂に焦点が置かれており、本稿にそったナショナルや、エスニック、人種的な違いによる文化的多様性も含めて対象にしているのは、当然ながら欧米の経営学に目立つようだ。したがって、本稿では後者を分析対象とする。

昨今では通念となっているダイバーシティ・マネジメントは、公民権運動にその契機があり、1964年の公民権法の制定から民間の企業をも対象にした雇用機会の平等と積極的是正措置が対策された。その規定の曖昧さから、企業はEEO (Equal Employment Opportunity) & AA (Affirmative Action) スペシャリストを雇うことになった。後に、レーガン政権にな

って、雇用側を縛っていた法的な規制が緩和されたのだが、その時にはすでに大方の企業では EEO に関わる大部分の方針が根付いていたため、コンプライアンスのために不承不承従うというよりも、むしろ営利的な目的を拡大するための積極的な経営方針になっていた。

90 年代には一般的になっていたこのような企業の積極的な姿勢の背後には、レーガン政権による規制緩和への対抗策としての EEO & AA スペシャリストらによる、80 年代から始まった、ある種の営業活動のような「啓蒙活動」があった (Kelly & Dobbin 1998)。つまり法令遵守など関係なく、被雇用者の多様化を進めると、多様な市場に対応できて顧客層を広げられ、また創造性も高まるため、利潤が増えるというレトリックである。加えて、法的な強制が緩和されたことも、企業側の自主性を促進したとも言われている (Kelly & Dobbin 1998)。90 年代には、経営学の分野では代表的なジャーナルである Harvard Business Review などに著名なビジネスコンサルタントによる、ダイバーシティ・マネジメントの営利的側面を強調する論文 (Thomas 1990) が掲載される動きもあり、ダイバーシティは HR (人事) の主要関心事のひとつとなった。

また、少子化が進む先進国では止まらない人口減少を補うために、外国人の受け入れとその包摂が課題となっている。G8 のなかでは、そのシフトに先行して対応している米国、英国、カナダが移民の受け入れによって人口増加傾向を維持しており、それを受けて企業におけるダイバーシティ・マネジメントは、経営上の優先課題に押し上げられている (Bassett - Jones 2005)。

つまり、当初は 60 年代の公民権運動を受けた政策的な介入であり、その後の紆余曲折を経て、倫理的な意義よりも、むしろ営利的な目的、企業活動の合理化・効率化の手法として、経営コンサルタントや、経営学からの言説を経由して、資本・経営側に広く受け入れられるダイバーシティ・マネジメントと変化していった。

ここで、ダイバーシティ・マネジメントで使われる技法のひとつを具体例として紹介したい。Joseph J. Distefano & Martha L. Maznevski (2000) は、実証的な論文ではないが、方向性を示す上でダイバーシティ・マネジメントの説明に使われることがある。その中での多様性とは、広くは、性別、性的指向、世代、身体の障害なども含まれているが、主として念頭に置かれているのは人種、ナショナリティ、エスニシティである。そのような多様な混成チームは、同質的なチームよりも、生産性に劣る場合が多いが、ダイバーシティ・マネジメントを取り入れると、同質的なチームよりも飛躍的に生産性を伸ばすことができるという例示がある。いくつか例が掲載されているが、いずれも視点の主体はアングロ西洋圏であり、それが異質性の高い、東側の文明圏と商取引をする上での障害を取り除くことに力点が置かれている。その方法は、主体のチームが取引相手の文明圏の人も含めた、混成的なチームであること。混成的なチームは成員間でのミスコミュニケーションが多発するが、それは意思疎通上の前提や期待、習慣が異なることにあり、まずはその違いのマッピングを行い共有する。具体的には、ステレオタイプは極力排除して、ミーティング風景を録画し、それを各自が再度見直して、自分の振る舞い、他者の振る舞いを客観的に見直すなどで、例えば、

不賛成の時の反応の仕方の異なりに気づく（口頭で反対を言う人もいれば、話題を変えたり、目線をそらすことで反対を間接的に伝える人がいるなど）。必要に応じてこのマッピングは常に改変される。次に、マッピングした結果に基づいて、相手によって意思疎通の体裁、方法、手順、場を変える。例えば、参加者によってはミーティングの前後に、個々人がもう少しカジュアルな場なり、メールでなりで意思疎通を図っておくなど、相互の方法に歩み寄りの工夫をする。相手の方法を生産性が低いであるとか、時間がかかるなどの否定をしないように注意する。最後は、多様な視点を持つ成員から多様な意見を引き出し、議論の俎上にのせる。戒めていることは、多様な成員間の根底にある同質性を期待し過ぎる傾向、ステレオタイプ化、差異を嘲笑なり、敬意を示さない傾向、混成的なチームに対して同化路線をとると生産性は落ちる。それはたいてい、そのチームにおける支配的なノルムへの同化が行われるため、そこからの異質性の高い成員は馴染みのない基準・規範に同化する労力が割かれる上に、異質性ならではの発想を提供できないためである。異質性の包摂には時間と労力が当初は割かれるが、その成果はそれを上回るとされている。こうした環境を率先して整え、成員間の仲介者たりえるリーダーシップが求められる。

このような作業が必要だという主張は、育った環境の違いにより、人の趣向や、何に居心地の良さを感じるかが異なるという前提に立っている。社会学では所得や、学歴、階層の違いに主として差異を見出すが、ダイバーシティ・マネジメントでは、そうした違いよりも、ナショナリティやエスニシティ、人種の違いが育ち方に与える影響の方が強いという立場をとっているようだ。どちらの説明力が大きいかはさておき、上記の例をみれば、ダイバーシティ・マネジメントが成立し、求められているのは、異なる文明圏の市場の拡大成長を受けて、そこからの利潤を最大化せんとする、どちらかと言えば西側文明資本に偏ったようにも見える要請にあることがわかる。また、第二章、三章を通じていずれも市場の深化と、東側文明の市場拡大が併せて変化の中心にあることもより明白になりつつある。

ダイバーシティ・マネジメントが援用している分野に、異文化コミュニケーション研究がある。第一章でも触れたように、その成立は先の大戦後の、アメリカ内務省の下部組織、**Foreign Service Institute (FSI)**にある。外交や軍事などの国外公務や、民間企業のアメリカ人が外国で勤務するうえで必要な知識やコミュニケーションの技術を訓練する機関である。エドワード・ホールなどの文化人類学領域からの知見が応用された（石井他 2001）。

異文化コミュニケーション研究は、吉野（1994）が指摘するように、ナショナルやエスニシティにもとづく意思疎通の習慣的差異の本質化を（オリエンタリズムや、自己オリエンタリズムを通して）助長してしまう一面があることは否定できない。ただし、異文化コミュニケーション研究の分野にも、**FAE**、基本的帰属過誤という概念があり、階層なり、人的資本の蓄積量による差異をあたかもナショナルやエスニシティの違いに誤って帰属して説明してしまう場合が多いことに警鐘を鳴らしているため、この概念を知っていれば、本質化への危険は和らげられるはずである。吉野（1994）が異文化コミュニケーション研究領域を知悉した上で、危険性についてあえて批判したのかはわからないが、たしかに、ダイバーシテ

イ・マネジメントが営利目的である以上、ビジネスの現場の実践者が異文化コミュニケーション研究の理解をどこまで深めているかは大いに疑わしい。

先ほどみたように、ダイバーシティ・マネジメントには、昨今流行りのリーダーシップ論と接続されている面がある²。リーダーシップ論は、変化のサイクルが激しく、流動性が高まった時代に対応すべく広まっている。少し以前まで、日本経済の調子が良く、チームワークを重視する日本的経営、組織論が、世界のモデルとして注目を浴びたほんの束の間の瞬間が過ぎ去った後にリーダーシップ論は支持されるようになった。組織が柔軟にすばやく変化に応じるための技術である。つまり、リキッド・モダニティ時代の要請、今まで以上の変化の速さのために予測しがたいことによって生まれた。

前期近代を後期近代に移行させたのは再帰性によってであり、そして今も再帰性によって常に現状が刷新されつづけている。社会的な意義を志向する市民性によると言ってもよいだろう。それは行為の社会的な大義 (Cause) を求める原理で、素朴に結びつけるならば、最近のリーダーシップ論もこの潮流を多かれ少なかれ受けていると想像できる。リーダーシップ論のバイブル的な扱いを受けている Max DePree による「Leadership is an Art」

(1989) で描かれる、今望まれるリーダー像は組織的営為の意義を示し、フォロワーには生きがい、労働の社会的な意義を与える役割という方向性を指している。高まる再帰性に対応したリーダーシップの在り方でもあるし、また同時に、労働の場に以前は入り込むような性質ではなかったそうした生きがいであるとか、あるいは自己実現などは、労働・職業生活の文脈において調達されるべきものと言われるようになった変化にも対応している、というよりも、むしろ、そのような金銭的対価などの外発的動機づけ以外ではなく、内発的な目的を労働者から引き出し、労働の場で見出させるように誘導するのが良い (生産性を上げる) リーダーであるとされている。DePree の精神論的 (著者自身が本文中に明記しているように、リーダーシップは科学ではなく、部族的なものに近い、とたとえられている) な上記の著書の主張の一つは、「How you do it」ではなく、「Why you do it」を与えるのがリーダーシップとされている。これは「コーズ・マーケティング (cause marketing)」, 3.0 マーケティングと重なる。後者が社会的意義や自己実現の消費者への訴えかけで、前者は生産側労働者への同じ内容の訴えかけである。

このリーダーシップ論が描くリーダーの役割の一部に、多様性の包摂も強調されているが、それは、ステレオタイプは排すが、差異の把握と承認を通してすべての成員の可能性を最大限に引き出し、全員を巻き込むこととして記載されており、先述のダイバーシティ・マネジメントの主旨と重なる。また、ダイバーシティ・マネジメントとクリエイティビティ／イノベーションの関連を論じた Bassett-Jones (2005) によると、多様性の高い組織は、そのままであれば衝突しやすく脆弱であるが、創造性と革新性の貯蔵庫でもあり、その可能性を引き出すための適切な訓練を受けたマネジャーらのリーダーシップが必須であると結論している。ここまでの議論をまとめると、リーダーシップ論もそれと重複するダイバーシティ・マネジメントも、多様性を温存しつつ包摂し、異種混交から収益をあげる手法であると

言えるだろう。

創造性、革新性、多様性などのキーワードをみていれば、経営学以外でも同じ潮流があることはわかる。創造都市論の「クリエイティブ・クラス」などで著名なリチャード・フロリダの議論も重なってくるのである。

「密度が高く、外部に閉じたコミュニティや社会は経済的発展とイノベーションを抑制する傾向がある。」「密度の低いネットワークと弱い紐帯をもつ社会は新参者に開放的で、そのため各種の資源と発想の非伝統的な組み合わせを促進する。」(Florida 2003: 5-6) (※原文の英語の和訳は筆者による)

フロリダの議論はロバート・パットナムの密度の高いネットワークが高いソーシャル・キャピタルを産み出し、それが社会の安定と成長をもたらすという知見 (Putnam 2001) への反証であった。しかし、立場が逆にしているかのようなそのパットナムも、長期的には多様性の方が大きなアドバンテージがあると言っており、橋渡し型の社会関係資本の重要性を強調する。現在のアカデミアの言説では多様性は基本的に好ましいが、それをどのように混交させ、その副作用をどうしたらコントロールできるかに興味が向いている。

単純な人数増加にとどまらず、所得も増加し、新興の富裕層を形成している多様な文化・エスニシティ／人種の人口動態的变化は、労働市場と消費市場の多様化をもたらし、液状化近代と符号して、変化のサイクルは早まり、企業の営利活動は、柔軟性と多様性の獲得に向かった。経済学者によく見られるような、自由市場の原理が各種の差別を排除するという主張を多かれ少なかれ支持するかたちで、ダイバーシティ・マネジメントは進められている。

このように、法的・制度的規制は弱められ、功利的視点から行われる多様性の包摂は、しばしば批判されている。公民権運動直後の法令よりも、女性やマイノリティの立場が保証されておらず、経営側の都合によって左右されがちであること。公民権運動当初の目的が部分的に逸らされてしまっているというものである (Kelly and Dobbin 1998)。

もともとは市民的な運動だったものが、市場原理にその運用が任されるように変化した構図がここにも確認することができた。そして、その変化はある意味では当初の運動の目的に供する作用があり、また、一方ではその不完全さを示している。また、本稿全体の論点から言えば、ダイバーシティ・マネジメントの存在意義は、その差異の活用にあり、差異がなくなってしまうような方向性を持たない。少なからず差異を本質化する作用は否定できないが、しかし同時に差異を対立しない範囲で保存しつつも、協働の場で引き合わせる枠組みを用意する技術である。やはりここでも、大きな枠組みでは画一化が進められつつ、差異がその中で維持される構図が見える。

リーダーシップ論とダイバーシティ・マネジメントの分野では、創造性の蓄積が革新をもたらす、多様性が創造性を増進するという考えは、すでに自明であるかのように扱われてい

るようだ (Bassett-Jones 2005)。文脈が異なるが、経済学の立場からそれに共鳴しうる主張をしているのが、グローバル化社会における文化産業と市場の関係に言及したタイラー・コーエン (Cowen 2009=2011) である。彼は多様性が創造性を豊かにすると考えている。もともと、交換が良いものである、というのは経済学の根本的な態度で、積極的な多様性の増加が支持されている。例にもれず、コーエンの主張も、交換によって一つの社会圏内の多様性は増え、社会間の差異は減じるという。コーエンの主張が、経済学的視座にたった、マクロなスコープをもつ社会全体の議論であるならば、ダイバーシティ・マネジメントとリーダーシップ論がミクロな経営側のそれに対する対応である。異なる二つの次元を貫くこの大原則は、大枠では画一化が進むが、その内部には多様性が維持されるという、本稿中の他の諸々の知見との整合性を示す。

しかし、このコーエン (2009=2011) が語っている多様性³は、商品 (音楽などのメディアコンテンツも含め) やサービスを指しており、けして特定のハビトゥスの影響を受けた人々の趣向、振舞い方の違いを語っているわけではないため、そのまま直接に結び付けるわけにもいかない。ただ、既述の「市場経済の深化」の項目 (3-1) で展開したように、商品やサービス・財は、その有用性自体のみならず、それらに付与されている記号性をも不可避に消費される。消費主体である人々の在り方は、何を消費するかによって自らのアイデンティティが補われ、社会的な位置づけを獲る／維持する。ここでは、物品やサービスの多様性と、それを消費する人々の多様性は無関係ではなく、密接に関連のある概念であるとして議論を進めたい。

コーエン (2009=2011) が引き合いに出す「異文化」による多様性の例は、趣味グループも含めて様々な水準を扱っているのだが、それでも主にはエスニックやナショナルな違いによるものが多い。またそれらの独自性は各文化が持つエートスから発生していると考えているようだ。それらの異なるエートスから異なるライフスタイルや物品が生まれ、異文化交易によって交換が進み、社会圏内の多様性は増大するが、社会圏間の差異には均質化が起こるということだ。彼の見立てによると、歴史的にそのような異文化間の邂逅とそれに続く均質化は繰り返し起こっており、異質性はそれでも絶えず新たに興るもので、世界を総体で見れば多様性が消えることはないという見解だ。

コーエンの議論は実証的な調査にもとづいているわけではなく、大雑把な事例に拠っている (事例調査というわけでもない) のだが、その主張大筋は、交換の有用性という経済学での一般的な定理に沿っていると思われる。貿易は市場規模の拡大を意味するため、多様な消費者を対象にした商品・サービスが出回り、それらは万人受けする最小公分母的なものを生産するようになる、つまり画一性を押し進める。しかし同時に拡大された市場は多様なニッチな嗜好の市場化をも準備する流通網につながり、少数の嗜好者は拡大した流通網によって互いに結び付くことで、それなりの規模の市場を築くことが可能になり、多様性が担保されることになる。また、異文化交易という交換を通じて、生産力に余剰が出て、それも多様な文化を支える余力につながるという。さらに現在では、インターネットなどで固定費を

抑えつつも世界市場への流通が以前よりも簡便になっており、ニッチな嗜好も以前よりも多くの支持者を集めやすくなっており、多様化が進んでいるはずだという。つまり、基盤部分という大きな枠組みで画一性が進んだため、その中でうごめく多様性は以前よりも増したという話である。これが、新たに絶えず発生する異質性の契機である。それを、次章以降で独自のデータを引用しつつ詳述していく。次章で取りあげる、韓流という文化産業は、まさに国外の市場を生産の当初から想定して作られているため、異種混交による普遍性をある程度意識しながらデザインされている。しかし、実態として韓流の消費者には、否定的なラベリングがされる場と社会圏が存在しており、そのために、それを消費する特定の人々と、それを消費しない人びとの間で境界線が作られていた。

モダンからポストモダンへのシフトを別の言い方で表現すると、ジル・ドゥルーズ (Deleuze 1986) による、規律権力から管理権力というフーコーの権力シフト観がそうである。監禁環境から権力が解放されて、空間的に偏在するように変わったことを示しており、もはや個人に内在化された規範による統治ではなく、アーキテクチャという環境の操作・管理による管理社会になった。フーコー、ドゥルーズのこの議論を下地の一つにしているネグリ&ハートの管理社会論 (Hardt & Neguri 2000) では、ダイバーシティ・マネジメントが管理社会的な生産の場の在り方であるとされている。地球規模で活動する多国籍企業などが脱領域的で、異種混交的なネットワークを組織する際に必要とされて顕著になる様式であり、彼らのいう<帝国>を構成する一つの核として位置付けている (Hardt & Neguri 2000: 202)。

5 小括

本章では本研究全体の理論的枠組みを明確にした。まず、本研究全体の鍵概念である第三のカラー・ライン／待避の人種差別をより一般的な抑圧論のなかで位置づけ、あわせてエスニック・ヒエラルキー概念も「モダンさ」や「普遍的」な記号性が各エスニックなりナショナルなり人種的有徴性に結びつけられがちなハビトゥスにもとづいた差異に非対称に分配されることによる序列化と定義づけた。

続いて、ヴェブレン、ブルデュー、バウマン等の消費社会と近代化の理論と、エスニックな序列の関連を示すなかで、バウマンの指摘する文化の雑食性傾向は限定的で、いまだに有効なブルデューのハビトゥスにもとづく序列は、グローバル消費社会においてはエスニシティ・人種の序列に顕在化したことを確認した。

そして、リキッドなモダニティの中のリベラルな諸力が生産と消費の両局面、すなわち資本・経営—消費者、そして資本・経営—労働者という二つの関係性への作用を確認した。それぞれの関係性に対応する多様性を包摂し管理する技術には、異文化コミュニケーション

論からも応用されているダイバーシティ・マネジメント、リーダーシップ論、そしてマーケティング手法が使役されていることが文献からたどることであきらかにされ、より具体的なリベラルな人々の像が浮かび上がった。いずれの技術も営利的な目的に結びつけることで多様性を取りこみつつ保全していた。

市場が一層深化した社会における一見して文化的雑食性とフラットな文化間との関係という特徴を備えているかにみえる現時点のリベラリズムは、画一性に人々を向かわせると同時に、有徴性が市場社会の原動力であるために、それを固定するなり、創造する方向にも働いている。また、生物的ではないものの、ナショナルやエスニックという文化的なヒエラルキーが、恣意的な「普遍性」の言説の強固さによって、維持されているようだ。つまり、第一章でとりあげた第三のカラー・ラインは、多様性が生成され、序列のなかに配置される過程のなかで問題視されるようになった副作用であると考えられる。

次章では、より多くの事例とマクロなデータから韓流にスポットをあて、文化産業がソフト・パワーとして第三のカラー・ラインをどのように侵食しようとし、しきれていないかを追う。それにより、本章で問題にしたリベラル社会の多様性管理が序列を伴うことと、画一性と多様性を生成することを確認したい。序章でききどって説明したように、第三章で主な考察の対象になるのは、韓国および、LAにおける韓国出身の1世、1.5世、そして米国生まれの2世以降の韓国系米国人である。それは、第一章で問題提起した「FOB」にたいするハビトゥスによる序列がこの時期に明白に動いた流れの中心にいたのが、日本人や日系米国人ではなく、韓国人と韓国系米国人だったからである。

注

- 1 酒井直樹ほか編（1996）や、落合恵美子（2013）で使われている「自己オリエンタリズム」は「近代家族の伝統化」を指しているもので、似ているが詳細は少し異なる。
- 2 ただしリーダーシップ論の論者、John P. Kotter（1999）によると、リーダーシップとマネジメントは異なる役割を担うとされている。
- 3 地理学のデイヴィッド・ハーヴェイ（Harvey 1989）もまた、加速度的に圧縮される空間というポストモダニティにありながらも、独自の魅力を保つ各都市の個性の維持について、ネグリ&ハートと似たマルクス主義的切り口で言及している。

第三章 <帝国>の首都における東アジアと東アジア系を
取り巻くダイナミクス

前章の第二章においては、バウマンのいう雑食性傾向について論述し、感覚の隔たり、第一章で述べた第三のカラー・ラインが一部で溶解しているようにみえることと、それに対する反論の可能性を検討したが、この第三章においては、いったんはもはや有効ではないとバウマンに否定されたブルデューの感覚による序列が残っていることをより詳細に論述する。特に、韓国を中心にその周辺東北アジア諸国、およびそこをエスニックなルーツとした米国における移住民とその子孫らを取り巻く世相を中心に置き、マクロな状況の記述から入り、次第にミクロな現象に言及する。

本稿の中での本章の位置づけだが、第一章で取り上げた価値観・感覚の違いが序列をとまなうという概念の、米国、ロサンゼルス郡における状況を述べる。特に東アジアからのソフト・パワーの隆盛に影響を受けたアジア系米国人がどのように振る舞ったのかに焦点をあて、感覚・価値観の違いが建前通りとはいかずフラットではなく、序列をとまなっていることで、承認をとりつけるための動きが発生するという多様化と画一化のウロボロスの関係を記したい。最初に、本章で引用するインタビュー協力者の紹介を手短に行い、次いで本章におけるキーワードと問い、仮説を示す。その後、仮説に沿って順に論述する。なお、本章において無前提に「LA」と表記される場合、それは市ではなく、カリフォルニア州ロサンゼルス郡を指す。

インタビューは本論の主旨上、もともと韓国系を対象の中心としていたのだが、調査全体においては章末注に示すように、この他にも多くの韓国系米国人、韓国人、黒人系米国人、白人系米国人、中国人、日系人、日本人、メキシコ人、東欧人、カザフスタン人、ホンデュラス系 1.5 世など、その他もろもろ多様な計 53 人を含めることとなった。しかし、インタビューの長短や聞き取りの内容は統一されていなかったこと、また、今となっては連絡がつかない人も多々いるため論文で引用可能な人は絞られ、さらに、論旨を明瞭にするために、ここで考察の対象となっているのは次の 9 人の対象者である。やはり本稿の主旨からして韓国系の人々が中心であり、また韓国系のなかでも 1.5 世/1 世と 2 世以降の間の社会的距離を聞き取るため、両者を含めた。さらに 2 世以降でも、韓国的なものに親しみを持っている派と、むしろそれに距離をとって米国化した派がいるため、その両者を含めた。成人してから渡米した韓国人とも何人かとインタビューはもったのだが、協力していただいた方々は、たまたま、言語的な障壁が高かったり、あるいは渡米してきてまだ数ヶ月未満であることが多く、論旨を不明瞭にするおそれのため今回の考察には含めていない。本稿で紹介できるインタビューに関してはすべて英語で行われたが、協力者本人の同意を得た上で、筆者が訳した日本語で記している。

S さん（協力者にはすべて仮にアルファベット一文字か二文字をあてる）：

韓国系 2 世米国人。S さんへのインタビューは、2015 年 4 月 8 日、ハリウッドは Chinese Theatre 付近のアメリカ化した寿司レストランで 2 時間行われた。LA のコリアタウン（K

タウンとも呼ばれる)にある韓国系 NPO 法人 (Br さんのとはまた全く別の団体) に飛び込みで立ち寄った際に、責任者の方に S さんをご紹介いただいた。S さん自身はその NPO 法人のジュニア部門 (若年層で構成される下部組織だと思われる) のリーダーを以前していた。インタビュー時、S さんは 22 歳、男性。彼自身はとても「白い」富裕な Calabasas 地区で生まれ育ち、コミュニティカレッジ卒業後は長老派教会のあるヴァリーと通称される地区のひとつ、Northridge を主な活動拠点としている。Northridge も富裕層が多いが、韓国系が多い点で Calabasas と大きく異なる。両親は韓国系 1 世だが、アメリカナイズされているとのことで、家庭内言語も英語で、S さん自身は韓国語は挨拶程度。両親は裕福であるという。長老派のクリスチャンで、2 年制のコミュニティカレッジ卒業後は特に教会 (韓国系がほとんど) での活動が生活の大きな比重を占めている。4 年制大学への編入学 (アメリカでは一般的である) を予定している。専攻は (身体) 運動学。将来は病院などで子供たちの身体育成を手伝いたいという。筆者の彼の印象は人助けを進んで行う人物。

Br さん :

インタビューは 2015 年 4 月 24 日実施。Br さんは韓国系 2 世米国人で、LA 生まれの (2015 年時点で) 26 歳の男性。UCLA の卒業生 (専攻は社会福祉だった)。R さんとともに、K タウンの NPO で社会福祉の仕事に従事。Br さんの働く NPO 法人のオフィスに飛び込みで調査協力を依頼した際に、現場責任者の許可をとって休憩中に聞き取りに応じていただいたのが Br さんである。インタビューも、NPO 事務所の会議 / 応接コーナーで行われた。Br さんによると、この NPO 法人は韓国コミュニティのなかでとてもリベラルであるとのこと。一時間半のインタビューの中盤で、同僚であり、友人である R さんもインタビューに同席した方がいいかもしれないと提案していただき、その場で R さんをご紹介いただいた。

R さん :

R さんは韓国系 1.5 世の (2015 年時点で) 28 歳の男性である。11 歳のときに韓国から LA に移住。K タウンで育った。現在は Br さんとともに K タウンにある韓国系の NPO で働いている。なるべくアメリカナイズされているようにみられるよう心がけているとのこと。Br さんが説得するかたちでインタビューにご協力していただいた。R さんの発言はすべて Br さんも含めた場で行われた。

M さん :

韓国系 2 世米国人男性 24 歳 (インタビューがおこなわれた 2015 年時点で) 韓国系協力者のなかで韓国的なものから比較的距離を置いている人である。野太い声、鍛え上げられた体格のアスレチックな人で、小学校～高校までの体育教師を非常勤でしているかわら、ライフガードの仕事もしている。インタビューにもフィットネス用の服装で現れた。また韓国

へは毎回2週間程度の滞在であるが、何回か行ったことがあるとのこと。だが、必ずしも同化一辺倒かというところもなく、相手が1歳でも年上であれば、ヌナや、ヒョンという敬称を使って呼ぶようになったとのこと、またコリアタウンで育ったため、韓国語も完全ではないがかなり話せるというから、志向は「Twinky」に近いものの、韓国性も備える。

インタビューは2015年4月27日に1時間40分間、Kタウンのカフェで行われた。Mさんとは、たまたま知り合った日本語を学習中のメキシコ系米国人男性に友人をご紹介いただいてインタビューを設定する運びとなった。

Kさん：

韓国系1.5世。Kさんはロサンゼルス、K-Town（韓国人街）にある有名美容院のアドミニストレータをしている。インタビュー時点で26歳、男性。上記Sさんの言っていたAZN世代にあたる男性である。日本生まれだが日本語はほとんど話せない。4歳の時、韓国に移住し、10代になってロサンゼルスに移った。父は日本人で現在は韓国在住。韓国人の母はロサンゼルス在住である。韓国語は流暢（であるとのこと）で、英語は多少の韓国語なまりが残っていたり、文法上の正確さや単語選びがネイティブ程ではないものの流暢である。

筆者自身が散髪してもらった美容院であるが、後日再訪し、受付でインタビュー依頼をした際に対応していただいたのがKさんであった。インタビューは2015年4月15日、コリアタウンにあるKさん勤務の美容院内の待合室にて営業時間後に英語で1時間弱行われた。

Jさん：

Jさんは、韓国移民一世の両親のもとシカゴで生まれ、シカゴで育ち、現在もシカゴ在住の韓国系2世米国人。インタビューが行われた2015年3月17日時点で30代後半の女性で、PhDを取得した大学の教員である。専門は神学とCreative writingである。インタビューはスカイプを通じて一時間少々おこない、その後にEメールで追加質問をしている。2世協力者のなかでは最も韓国的なものに親しみをもっている。AZNプライドという用語は聞いたことがないとのこと、シカゴの人であるためとおもわれ、AZNプライドが先行研究の通り、西海岸に特有の用語であったことがうかがえる。筆者が「FOB」という用語でネット検索している際にヒットしたブログの主である。ブログのコメント欄から依頼をかけ、その後、メールのやり取りのなかで日時を設定してスカイプインタビューとなった。ブログ自体はずいぶん以前に書いたきりで放置していたとのこと。

Cさん：

韓国移民一世の両親のもと、シカゴで生まれた2世。大学から西海岸（UC San Diego）。インタビューが行われた2015年4月24日時点で27歳、女性。インタビューは20分弱の短いもので、Cさんが（2nd degreeのために）通うSanta Monica Collegeのキャンパス付

近のベンチで行われた。協力者の中では韓国的なものから距離を置いている方である。たまたま通りがかった際に、声をかけて依頼した。

Xさん：

日系米国人で、USC (University of Southern California) の理系の学生である日系4世アメリカ人 (父が日系3世で、母は中国系2世である) の女性。2015年4月27日のインタビュー時点で22歳。インタビューは1時間20分ほどで、USC付近のカフェでおこなった。Xさんは、韓国的なトレンドには興味がないということを何度か強調していたし、また、J-pop やアニメなどにも興味をもっているわけでもないとのこと。しかし、大学内サークルの日系クラブに所属。Xさんは、リトル・トーキョーの日系NPO法人を訪問した際に、そこに勤めている日系人男性から友人としてご紹介いただいた。そのNPO法人自体もまた別の日系人にご紹介いただいた。

Oさん：

1.5世韓国系米国人男性。インタビューが行われた2016年2月24日時点で21歳。一時間程、UCLAキャンパスの近くのベンチで行われた。OさんはUCLAの学生で4年生。韓国で生まれ、11歳の時にボストンに移住。大学になってからLAに引っ越した。英語はKさんと同様、不安定な部分が目立った。韓国語は、少し前に4週間韓国に行った際に、以前の友達らにアクセントがおかしいと言われた程度とのこと。Oさんとの出会いは、筆者が第四章で紹介するアンケート調査をしている際に、声をかけた一人であるが、アンケートへの回答のみならず、インタビューへも応じていただけという話になり、後日、日時を定めてインタビューをもった。

1 本章の問いと仮説、およびキーワード

以下では、重要なキーワードをまずいくつか紹介してから、議論へとすすめたい。

FOB: まず、2世以降のアジア系が主に使用し、1世および滞在者の米国基準との感覚の「ズレ」を指摘して嘲笑するとき用いられるFOB (Fresh Off the Boat) という言葉がある (Pyke & Dang 2003)。今でもその意味で用いられることが多く、両者の距離が未だあることを示す。しかし近年そうした上記の両カテゴリ間の感覚の乖離に変化がみられる。次のようにFOBには新しい用法が現れている。

Wannabe FOB: 「FOB」は1世を指すが、Wannabe FOBは2世以降のアメリカ生まれのアジア系にもかかわらず、1世のような振る舞いやポップカルチャーの消費をする傾向を持つ人々を指す。

AZN：2000年前後に発生した（諸説あるが）とみられるアメリカ西海岸のアジア系新2世以降の感覚で、Asian Pride（オリジナルは1960年代後半）を刷新した。

K-Pop時代：AZNの感覚が終わった頃に訪れて、アジア系の1世、1.5世が中心に、さらに2世の若年層も巻き込んで現在も進行中の現象。

本章において後述する、大勢を揺るがすほどではないが、たしかにみられるアジア系アメリカ人らの心性の変化の要因には、韓流と、その脱領域的な拡散に多大な貢献をしたYouTube（やSNS）、そして東アジアから米国西海外への移住人口の近年の増加という大きく3つの要因の組み合わせによると考えられるのではないか。

第1の要因は韓流だが、韓流は西洋圏において全面的に否定されているわけではない。ゲームやキャラクター商品（Puccaがその成功例である）など、文化的有徴性が比較的目立たないか（Puccaの目はあからさまに東洋人ステレオタイプのそれを彷彿させるのだが）「無害」な分野で健闘している。21世紀のアジア系アメリカ人はアジアのポップカルチャーの消費者という特徴がある（Wong 2010）と言われるが、K-Pop音楽はアジア系米国人はもとより、非アジア系の間でもほんの一部だが、確かにファン層を獲得した。それ以上に在外韓国人にとっては、長い海外生活で失われがちな自分のアイデンティティの確立の支えとなる（日本貿易振興機構 2011）もので、若年層を中心に広く流通している。

第2の要因は、デモグラフィックな変化である。一度は激減したアジアからの移住民を親にもつ2世の人口が増えたのは1980年代と90年代が皮切りで、その後も増加傾向は続いている。この増加した新2世らは、やはり増加した新1世、新1.5世若年層と就学時期を同じくしていた。彼らは当初衝突したが、新2世にとってもドミナント社会との間の漠然とした隔たりが完全に消えなかったことで、次第に新1世、新1.5世に影響を受けていった。

第3には、ICTの発達により生まれたメディアはアジア系米国人がトランスコンチネンタルなつながりを形成する大きな要因となっている。従来、移民や移住民、滞在者が祖国とのつながりを維持する媒体というエスニック・メディア（白水 1996）が取り上げられることが通例であったが、それらに加えて、昨今の情報技術革新によってエスニック・メディアではなく、トランスナショナル・メディアの著しい普及という状況が生まれている。その最たる例の一つに2000年代中頃以降、人口に膾炙したYouTubeが挙げられる。YouTubeは誰でも簡単にオリジナルのチャンネルを作成し、自作の動画をプラットフォーム上で公開し、インフラが整っていないとか、YouTubeへのアクセスを禁じている国・地域を除き、視聴者の場所を問わない。凝集性が決して低くはないアジア系米国人コミュニティに与えた影響力は多大であったと頻りに言われている（Jang & Paik 2012; Kocca Korea Creative Content Agency USA 2014 など多数）。米国の状況に限って述べると、韓流が在外韓国人、あるいは1世、1.5世の獲得的に米国人になった韓国系に限定されず、生まれながらに米国人である2世以降の韓国系にも、そして韓国系以外のアジア系米国人、例えば中国系2世以

降や1世にも若年層であれば韓流が広く流通するようになったのは YouTube を通してであった (Kocca Korea Creative Content Agency USA 2014)。また、インタビュー協力者の話 (S さん, J さん, K さん, O さん) から YouTube が視聴の契機および継続のよくある方法となっていた。

以降で、各要因の詳細と要因間のつながりをみていき、第一章で提起したカラー・ラインの三つの線が段階的に解除されてきたが、最後の三つ目が残っている様子を示したい。

2 状況の変化：韓流の先行研究から

第1の要因。GDP で測られるような経済力による力関係の変化は言わずと知れたことである。西洋中心であった資本主義世界の拡がり次第に外部を内部化する程度を高め、その結果、少なくともナショナルな区分における経済力は西洋世界中心であるとは明言できなくなった。物質的な、タンジブルな商品でいえば日本製品は一昔前ほどの活力はないが、かわってサムソンなどの韓国製、ハイアールなどの中国製の方は世界中の市場を席卷していることはやはり誰の目にも明らかである。

もう少し非物質的な商品、その機能性というよりはむしろそのシニフィエの方が消費の主たる対象となるような性質のもの一つに文化産業が挙げられる。その一つのメディア・コンテンツだと、日本のアニメ・マンガやポップ音楽コンテンツは国外でも人気を博している。一般的に日本においては思われているふしがある。しかしながら、欧米においてはやはり胸をはって J ポップが大好きだと公言してまわれる程の市民権は得ておらず、アニメ・マンガの普及度は並々ならぬものがあるが、それでも文字通りの下位文化である。加えて、J ポップと K ポップの区別は欧米においては周知されているわけではなく、それは軽度のファン層の間においてもそのようである。

海外での売上額だけで判断すればマンガとゲームが最も堅調である (経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課 2016)。メディア・コンテンツではないが、日本発のこうした文化産業という大きな括りに入るもので元気なものはむしろ日本食である。物質的な商品ではあるが、同時にエスニック・フードは記号消費の対象としての性格も大きいだろう。寿司や、近年では特にラーメンは文字通り人気を博している。エスニック・フードのこうした明確な人気に比べると、J-POP は後発である K-POP の後塵を拝しているようだ。エスニック・ヒエラルキーのような人を対象とするステレオタイプに対して影響が大きいのはフード産業なのか、あるいはポップミュージックやドラマなどのメディア・コンテンツ産業なのか、論じるまでもないと思われる。

K ポップ、そして K ドラマと呼ばれる韓国メディア・コンテンツ、それに付随した韓国ファッションおよび韓国コスメティクス産業は国外市場においても盛況である。韓国の文化産業でもゲームが圧倒的な外貨稼ぎ手である (韓国文化体育観光部 2013) が、売上額だ

けでいえばコンテンツ産業の輸出額はハード産業のまだ 1%弱（2012 年時点のコンテンツ輸出額を貿易輸出総額で割ったもの）であり、現段階において文化産業を語る上では売上額はまだ重要ではなく¹、また本稿においては消費者が形成するステレオタイプに介入できるかの方により重点を置いている。そのためやはり日本版と同様の理由でゲームは分析対象にはなりにくい。

韓国政府がコンテンツ産業にかかる政策予算は全体の 1%程度である。手厚い政府支援が顕著になったのは 1997 年の経済危機後の 1999 年である（岡崎他 2015）。主な狙いは輸出による経済性向上、幼稚産業保護論、そしてソフト・パワー強化の三つと言われている（日本貿易振興機構 2011；高橋 2014；岡崎他 2015）。

一つ目の経済性向上とは、特に中でもメディア・コンテンツ産業は複製、転用が低コストで可能なので、一つのヒットコンテンツができれば大きな収益につながる OSMU（One Source Multi Use）型の高付加価値産業である（高橋 2014）。人件費が高騰している先進諸国において、高付加価値産業を中核産業として育成することは共通してみられ（日本貿易振興機構 2011）、韓国においても通貨危機以来、従来の製造業の限界を補完し、IT 産業と並んで次世代の基幹産業とすべく文化産業育成への取り組みが本格化した。

二つ目の幼稚産業保護論というのは、未成熟だが将来の成長が見込める産業を政策的に保護し、保護貿易や税制優遇、補助金支給ほかの支援などを講じることである。

三つ目のソフト・パワーとはジョセフ・ナイ（Nye 2004）の言葉として有名であるが、それまでは韓国製品がその高品質な割に低い評価しか受けない「コリアディスカウント」を受けることも多く、輸出額の伸び悩みの一因となっていた。また、GDP の高さや世界トップクラスの治安の良さにもかかわらず国際的知名度の低さから観光業が低迷していた。つまり、一般的に韓国という国やそれに関係するものに対するイメージが良くなかったり、知られていなかった状況から魅力ある国家イメージに変えるという戦略である。

このような一連の「クール 코리아」政策は 2000～2006 年には日本、中国、台湾、東南アジア諸国などで韓流ブームとして結実し（イ 2010）、後発の「クールジャパン」という日本の類似政策のモデルにもなった。世界市場へのコンテンプラリーな文化産業商品の流通は日本関連の方がずいぶん早かったのであるが、政策的に支援する施策としてはクールジャパンの方が後追いである。この日韓のクール+国名（英語）の国家プロジェクトには少し性格の異なる面がある。クールジャパンの目的はそれを担当している経済産業省の通称クリエイティブ課が公言するように、日本の魅力を発信し、海外にファンを作る→現地で稼ぐ→観光業などインバウンドの消費量増加にある。最も重点が置かれているのは観光立国路線で、従来のハード産業の減少を補うことを期待されている。一方のクール 코리아でも大まかにはすべて重なり、やはり外貨獲得量増加が最終目的ではあるのだが、より強調され、現時点において重点が置かれているように見受けられるのが韓国という国、人のイメージ向上であり（高橋 2014）、今はイメージ向上の波及効果により、ハード産業製品などの売上

増加にまで効果が出てきた段階と思われる。すなわち、ジャパンにしても 코리아にしても、クール+国名（英語）プロジェクトの趣旨やシーケンス、最終目的は共通しているが、今どこに重点を置くかの現段階が異なっているとみても良いだろう。クールジャパンについては（その認識の正誤はともかくとして）日本ブランドにすでに一定の自信があって、イメージ向上の段階はそこそこに、早々と次のマネタイジング（サービスの収益化の意で、IT業界のマーケティング用語。当初は投資として無償・格安でサービスを提供し、ファン層が確立された後に収益化に移行する）の段階に入っており、一方のクール 코리아は販売促進の段階からマネタイジングに移行したくらいの時期にあると捉えるのが妥当だろう。2006年時点では無償やリクープ（ビジネスなり、金融業界の用語で、先行投資元本の回収の意）できない程に安価でアジアやアフリカにテレビドラマを支給している（岡崎他 2015;イ 2010）が、それまでは格安だった価格の大幅値上げや、あるいはドラマやポップ音楽でスターになった有名人をLGなどの製品の現地CMに出すなどして投資の回収をしている（イ 2010）。

さらに性格の異なる点を2つ挙げる必要がある。一つはポップカルチャーと政府・国の距離感である。日本においてはポップカルチャーに政府やら国やらが介入すること自体に創造産業従事者や消費者から反発があり、国が入ってくるとクールでなくなるという声が強（三原 2014）。これはソフト・パワーで著名なジョセフ・ナイ自身もそのように考えているようである（Nye 2004）。そのためか日本の国からの支援は韓国に比べ手薄であり、例えば日本のコンテンツ関連予算は2010年度301億円、2011年度244億円、2012年度218億円と下降傾向。韓国のコンテンツ関連予算は円換算で2010年258億円、2011年262億円と増加傾向（内閣官房知的財産戦略推進事務局 2013）。絶対額においては大差ないが、国家予算全体（支出）の規模が2011年であれば日本は韓国の5倍以上であったことを考慮すると歴然である。これに加えてクール 코리아関連事業（例えばWishTrendなどの化粧品業界など）は税制が優遇されているが、そのような業界全体がフリーライドに近い状態でも外貨獲得のためにと国民はおおむね支持している。これはChang Kyung-Sup（1999）が指摘する圧縮近代化の構図を彷彿とさせる。つまり少数の巨大企業の利潤拡大を最優先することで社会福祉政策が手薄になり、そのしわ寄せは家族と個人の自己責任言説に押し付けられている一面である。このように儒教的伝統を自己オリエンタリズム化しながら新自由主義的な富国政策がそれに乗りかかるかたちで韓国文化の国外への輸出に国を挙げて支援するような国家プロジェクトという性格が強い。

二つめは、クールジャパン関連にされている日本の文化産業はもともとは内需に向けて作りこまれているものが多いのに対し、韓国の文化産業は最初から外国からの需要を主要な市場とみなして作られていることである。自給自足経済の実現には人口が一億人を超えている必要があるが、韓国はその意味で内需のみでは経済が動かないため国外市場に打って出ることが不可避である。内需の弱い国は放送産業の輸出に不利であるというのが通説であった（Dupagne & Waterman 1998）が、TVドラマの制作費用の回収を内需のみからではなく、最初から外国市場での売上からの回収を見込んで大きな予算が組まれるという

現象が韓国ドラマ制作の場に現れ、逆説的に輸出の推進力になっている（イ 2010）。

韓流が外国市場を指向している一例として K-Pop 音楽では、2012-2013 年に文字通り世界中（西洋圏含む）を席卷した「Psy」の『Gangnam Style』は記憶に新しい。アーティストの「Psy」が Barkley College of Music という米国の大学で音楽教育を受けていたことは、彼の作品がポップ音楽の（特にミュージック・ビデオの）「グローバル・スタンダード」の様式に適合的であったこと（アーティスト本人の意図は別としても）と無関係ではない。

下記は、韓国系 2 世米国人男性 24 歳（インタビューがおこなわれた 2015 年時点で）、M さんの語りである。「Psy」の『Gangnam Style』の成功についての言及はまことにごく一面ではあるが、どのように消費者がとらえているのか多少なりとも雰囲気は伝わるだろう。

M さんの話：(M-1)

I：「Psy」の世界規模での大成功はどう思われますか？誇りに思いますか？それとも複雑ですか？

M：いい気分にはなりません。韓国のアーティストが世界中で大ブレイクすれば気分良いです。でも、「Psy」のブームは過剰です。

I：なぜ、「Psy」は西洋圏で成功したとおもいますか？

M：グループとかバンドではなくて、一人だからです。アメリカで人気があるのは、たいてい一人です。90年代だとバックストリートボーイズとかありましたが、最近は一人の歌手が多いように思います。アジアのアーティストはグループとかバンドとかで一人が少ないので。あとは、「Psy」の『江南スタイル (Gangnam Style)』はアメリカの歌に似ている。

I：どんな点が似ているのですか？

M：なにも考えていない (mindless) ところです。お馬鹿なんです。そこが似ている。アメリカの歌というのは、お金、金をたくさん稼ぐとか、女子をゲット (get) するとか、飲むとか、そういうのだから。

ほとんどの場合、歌手は朝鮮半島出身の韓国人だが、時には帰国子女や、中国人、台湾人など目標市場のローカル人も意図的にユニットの一員に入れられたりする。日韓の領土問題が再燃した一時期のために、K-Pop の最大市場である日本では、韓流が下火になったという特殊事情があるものの、領土問題と歴史問題にひとつの妥協点、あるいは先延ばしを迎えた 2015 年暮れには日本人が K-Pop アイドルになるという新しいケースも確認できる。また単純に外国語に堪能なアーティストも多いようで、中国向け、英語圏向け、ベトナム向け、タイ向け、インドネシア向けや日本向けなどにローカライズされたものが散見され、外国市場を強く意識して構成されていることがうかがえる。

このような一連のクール 코리아 政策による韓国のイメージアップという目標は成果をあ

げているようだ。「東南アジアでは、韓国ドラマと K-POP が地上波放送でも流れているので、金額は違うけど、日本よりも韓流が普及していると聞いています」（日本記者クラブ 2014; 7）。韓国コンテンツ振興院日本事務所所長、金泳徳氏は日本記者クラブとの対談でこのように述べている。また、既述のように、東南アジアやアフリカには無償か安価で韓国の TV ドラマなどを提供するかわりに広告枠を独占して、韓国製品の売上増加によって先行投資を回収するモデルが取られており、輸出額に直接反映されにくいのが、韓流という雰囲気醸成する役目は充分以上に果たしていると思われる。タイでの「以前までの韓国に対する『男性優位』『国家主義』『偏狭さ』などの否定的イメージは、韓流の影響で肯定的なものに変わった。」（日本貿易振興機構 2011: 11）であるとか、「韓国社会は、この数年間、東南アジアからの結婚移民者の数が急増して（略）」（イ 2010）いるなどや、ベトナムの少数民族コトゥ族の間で、子供に韓国風の名前を付けることがはや」（イ 2010）るなどもその熱気を伝える。また、中国でも THAAD 問題（後述参照）発生より 10 年も前から韓流ブームの過熱が中国当局に脅威ととらえられ、部分的に放送枠が規制されてきたのは、それ程の人気ぶりであったことを物語る。日本においては、内閣府が毎年実施している外交に関する世論調査の時系列データを確認すると、2012 年の政治レベルの関係冷え込みを受けて国民感情は一気に冷却したが、韓流が日本を本格的にとらえた 2006 年から領土問題が激化する直前の 2011 年までは韓国に親しみを感じているという回答が増加の一途であった（内閣府大臣官房政府広報室 2016）。東アジア、東南アジアにおいては総じて韓流はイメージアップに功を奏したと言える。

東アジア・東南アジアでは狙い通りに、その後は中東や南米の一部でさえ韓国・韓国人に対するイメージアップに一定の貢献をした韓流だが、北米や西欧においてはどうか。歌詞は多くの場合が韓国語であるが、ふんだんに英語の単語やフレーズが混入される傾向がある（J-POP にも混入はみられるのだが）。とはいえ、韓国語を知らなければ多くの楽曲の歌詞の大部分の意味はわからないのだが、それでも韓国人以外のしかも韓国語を解しない人々からの需要は多い。Psy が米国のコンテンポラリー文化に通じていて、西洋圏の大衆音楽シーンに親和的な音楽的趣向をもつ人々が好むコンテンツを作れたのは一例だが、韓流は西洋文化圏も意識していることはいくつかのことから言えるだろう。他の K-POP 音楽もヨーロッパなどの外国人作曲家に依頼することが多く、またダンス要素が強いため振付師も外国の著名な振付師（主に欧米が多い）に発注している場合が多いようだ（Jung 2009）。実際に、K-POP に好意的評価を寄せるロサンジェルスの方々の印象を問うと、リズム感の良さを挙げることが多い（Kocca Korea Creative Content Agency USA 2014）。リズム感を挙げる場合は J-POP と区別ができる消費者であることも多いような印象をうけた。そしてもう一点は Eye-candy や、Well put-together と表現されることが多く、視覚的に好評だとわかる。それはダンスやファッションである。R & B やラップ路線の楽曲が目立つのも K-POP の特徴となっている。

しかしながら、韓国のコンテンツ産業の地域別輸出額でみる限り、韓流の有徴性そのものの代表ともいうべき音楽と放送が北米では全くふるっていない。2011年の記録(Park 2014)では、北米向けの音楽が587千ドル、放送が3,562千ドルに対し、日本向けは音楽が157,938千ドル、放送が102,058千ドルで桁が二つ三つ違う。売上額だけでみれば日本と中国が韓流の最大市場であり、次いで東南アジアという順になる。韓国コンテンツ振興院日本事務所長の金泳徳氏は新聞社からのインタビューで答えている。「・・・韓流の3大マーケットは、中国、台湾、日本です。欧米はなかなか難しいです(略)・・・」(朝日新聞社メディアビジネス局 2013)。

既述のようにK-Popは外国市場を強く意識したマーケティングがなされているはずだが、西洋圏においては未だ周縁的な位置づけであるといえそう。一方で、2000年頃を皮切りに中国、台湾、ベトナム、タイ、インドネシアや、マレーシア、フィリピン、シンガポールなどの音楽シーンを席捲しはじめ、さらに中東も範囲に入っている。K-DramaはK-Popよりわずかに先行して同様の拡がりを見せた。北米、オーストラリア、ヨーロッパなどでは先述のように少ない例外を除くと存在感は希薄であるが、移住民または移民の次世代以降のアジア系人口、中でも若年層には消費されている。当然、アジア系以外にも多様な人種・エスニシティにファンを獲得しているが、後でより詳細に述べるように、それは決してアジア系内におけるような主流扱いではない。

K-Pop, K-Dramaを含む韓流系商材の流通が国際情勢に左右されることは珍しくない。それ以前から韓国においては反日感情が高めであったのだが、前述のように、市場側である日本の日本人一般の目にも日韓の政治的冷え込みがより一層明らかになったのが2012年からである。日本の国内向けポップカルチャー市場の規模は米国と並んで世界最大級の充実ぶりである。他のアジア諸国とは様相は異なっているが、そのコンテンツ市場規模の受け皿の大きさからも韓流の主要市場となっている。

中国も大きな韓流市場であるが、音楽についてはそれほど大きな輸入額ではなく、日本の21分の1程度である(高橋 2014)。しかし、海賊版などが横行していることもあり、売上額よりも実際にはずいぶんと流通しているようである。2016年9月1日から中国において「禁韓令(韓流禁止令)」が始まった。韓国政府が北朝鮮の核ミサイルを警戒するという名目ではあるが、米軍と歩調を合わせ対中国網の一翼として最新鋭地上配備型迎撃システムTHAADの国内配備を受け入れる決定にたいする、中国政府の報復だとする推測・憶測も飛び交う程である(産経新聞・産経デジタル 2016)。中国の場合、中国のすべての放送局やケーブルテレビ局を統括しているSARFTという公的な組織があり、2006年などにも国内のテレビ番組保護政策のために韓流の流入制限をしている(イ 2010)。今回の処置により韓流スターらの活動が大きく制限されるが、中国側としてはこの機に未成熟な感を残す自国のポップカルチャーの育成を計画しているという真偽は定かではない一説もある(産経新聞・産経デジタル 2016; 中央日報 2016)。これまで中国国内のTV音楽番組も韓国側と共同制作したり、C-pop(中国のポップ音楽)とK-popが交互に歌を披露するという進行をす

るなどの共同路線も見受けられていた。

しかしながら、日本や中国で直面したこのような政治情勢による影響によって、韓流の西洋圏による不振を説明できないことは言うまでもない。イ（2010）がそれまでの韓流研究を総括し、東南アジアにおける韓流が広く流通するようになった理由に「文化的近似性」や「アジア的な同質性」などを挙げている。日本貿易振興機構（2011）によっても、韓流のアジア市場における優位性の一つに「文化的類似性」、親を慈しみ、目上を敬う同じ儒教文化圏に属することから欧米のテレビ番組よりも文化的な近接性、類似性が高く、国際交流の範囲を制限する文化的割引（Cultural Discount）（Lee, F. 2009）²が低いとされている。北米や西欧での不振はそれと真逆に、その文化的な「非近似性」や、アジア的と西洋的なものの間の「異質性」を指摘することも可能だろう。その隔たりは必ずしも人種間、エスニシティ間の違いに回収しきれず、感覚の違いによる説明が相対的に説得力を増している。

K-POP に対して米国の人々が眉をひそめやすい背景がある。誰の目にもすぐ目に付きやすいのは登場する女性が男性視聴者の領土化の対象になっているとみえる点だろう。そして今ひとつは楽曲やユニットが大量生産されるシステムである。アーティストへの還元が少ないようで、特に国内市場からあがる利潤に対してプロダクション側との特約条項を取り付ける交渉ができるほどの売れっ子でもない限りは、アーティストの権利は軽視される傾向がある。韓国コンテンツ振興院日本事務所長は、日本記者クラブとの対談で次のように述べている。「放送局に有利な著作権改正になりました。例えば、映像制作に協力した者は、いかなる権利も放送局及び番組プロダクションに譲渡するとみなす、という規定」（日本記者クラブ 2014）もあり、ドラマ制作に限らず、音楽アーティストにしても所属事務所から支払われる国内市場からの売上に対する報酬はあまりにも割にあわないという。そのような西洋リベラリズムが特に非難を向けそうな国家主義的、全体主義的な性質や、国家主導とも受け取られかねない文化産業の生産体制を K-POP（や K ドラマも）は有しており、知韓派の西洋人の間では話題にのぼる³。

もちろんそうした背景もおそらくあるだろう、しかし実際の消費者の反応はもうすこし単純なのではないだろうか。後述の項目 7-3「感覚的溝、米国での・・・」で述べるように、David C. Oh（2012）の調査によると、韓国系の人々は非韓国系に韓流について語ることをとても躊躇うことが多いという。それは経験から非韓国系、特に白人の友人らにそうした話題を振るとからかわれたことが多く、あるいは拒絶、よくてもあからさまな無関心など否定的な反応が返ってくることを体験から知っているからだという。これを本研究の主旨に照らすならば、それは感覚的な溝があるといえるだろう、しかもその溝には少なくとも一方の側（米国主流の市場における消費者の視点）から言えば序列があり、「低い」のではないだろうか。

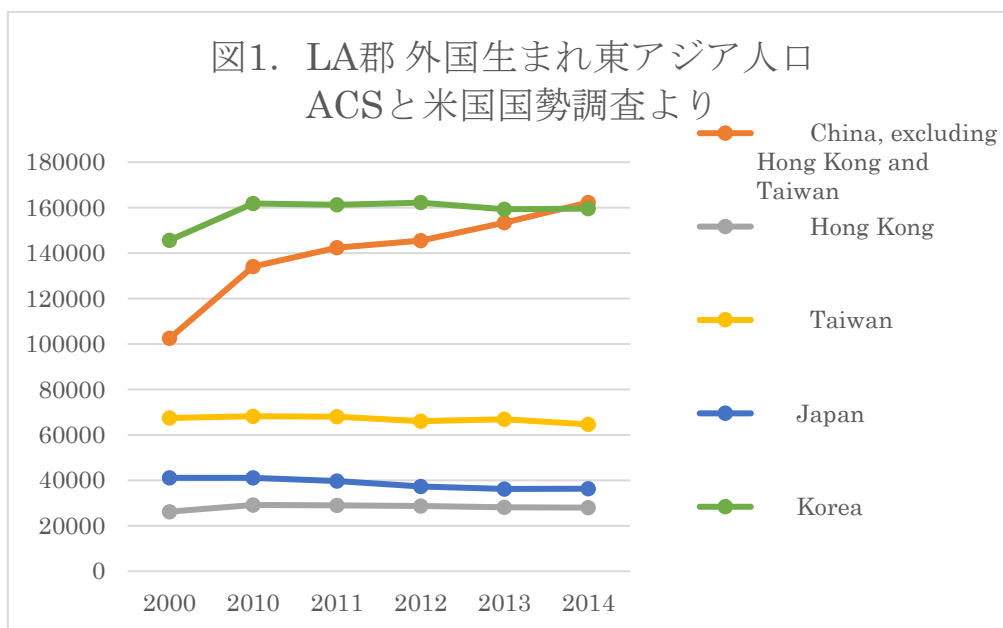
3 状況の変化：局地的な人口比率の増加

第2の要因として、アジアからの「FOB」人口（本項目で関連のあるのはこの中でも特に若年層）の流入が増加したこと、同時にハート・セラー移民法後のアメリカ生まれのアジア系2世が増加した時期が重なり、この二つのグループは就学期間が重なったというデモグラフィックな側面について論ずる。

人口の局地的な増加の、局地的というのは、アジア系は特に米国の西海岸に流れたということで、さらに西海岸の中でも特定の地域、または就学年齢の人々は特定の学校に集中したという意味である。彼らの多くは若年層であれば韓流に多かれ少なかれ影響を受けているだろうアジアからの学生層で、単純に数の上でもその存在感は大きくなっている。AZN世代（この用語は後述するが、2016年時点で30歳前後を指す）からすぐ下のK-Pop世代（これについても後述を参照）への移行が起きるうえで、韓流が主流、あるいは人気が出ている東アジアからの人々が、中でも若年層が草の根レベルのポップカルチャーのアンバサダーとでも呼びたくなるような役割を担った（項目7-2で詳述）。彼らの流入ボリュームの推移を確認したい。近年のアジアから西海岸への移住民の流入を下図に示した。韓国出身の人口が一番多かったようだが、それが中国からの流入が追い付いている。韓国は近年の国内の発展が十分に進んだことで日本と同様に国外流出の量が頭打ちになっており、今後は減少すると想像される。もちろん中国も経済的には発展しているのだが、もともとの本国の桁違いの人口量からしてロサンゼルスへの流入は増加の一途である。

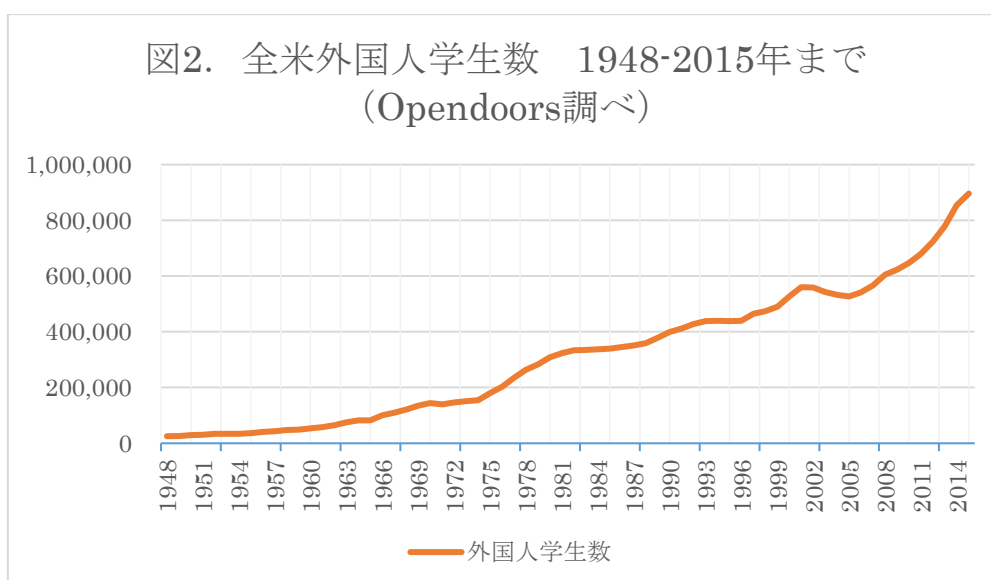
1979年、鄧小平時代に国交を正常化した米中では、改革・開放政策も影響し、法整備後の1985年以降、人材の中国から米国への移動も急増した。クリントン政権以降、「知識経済」に重点をおきかえるアメリカは、高度スキル人材の国外からの移住を優遇し、結果、中国からの流入は留学を経由して、卒業後に高度技術を要する就労ビザ取得をし、その後、永住権に切り替えるケースが多い。戴二彪（2005）によると、一時、中国側は頭脳流出を懸念したが、結局は頭脳流出しても米国内での中国系の高度スキル人材の活躍は中国にも経済的に利するところが多いという判断から規制をかけず、今でも多くの留学生が中国から米国へと流れている。米中の政治経済的背景をうけてのものである。

本項で重要な点は中韓ともに2000年から2010年の間に増加したことである。



(2000年および2010年の米国国勢調査, 2011-2014年のAmerican Community Surveyの推定値発表から筆者作成.)

それでも上図の人口からみれば中国本土から以外はさしたる増加にはみえないだろうが, 本稿の対象である若年層にとって, 学校は第一の社会的つながりを持つ場である. 下図は米国全体になってしまうが, 外国人学生 (International Students) の数である. 9.11の時期に少しだけ低迷したが, その後もうなぎ上りだ.



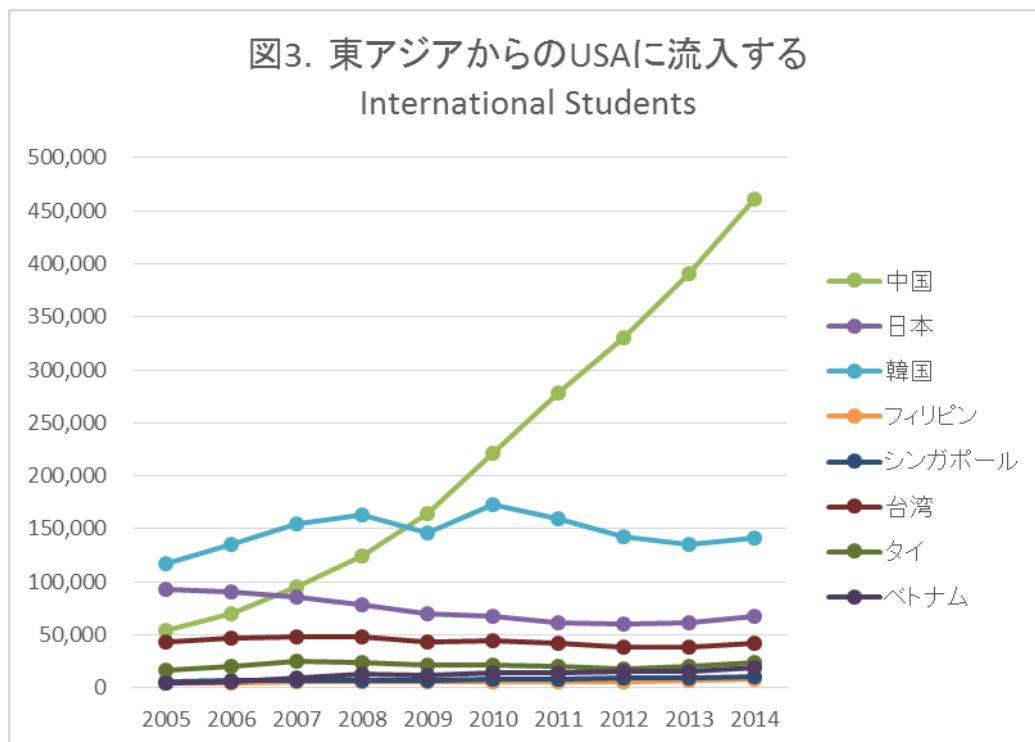
(Institute of International Education, 2016, "International Student Enrollment Trends, 1948/49-2015/16." Open Doors Report on International Educational Exchange. (2017年3月6日取得, <http://www.iie.org/opendoors>) からグラフは筆者作成.)

次の表とその下の表の数値の食い違いは著しいが、最初のものは International Student 枠でのカウントであり、その次の表の数値は International Students 本人とその扶養家族も含まれているため大きくなっている。なお、合衆国全体の数字である。中国と韓国からの米国の教育機関への流入は群を抜いて多い。※インドも多いが、韓流の影響が少ない。

Rank	Place of Origin	2013/14	2014/15	% of Total	% Change
	WORLD TOTAL	886,052	974,926	100	10
1	China	274,439	304,040	31.2	10.8
2	India	102,673	132,888	13.6	29.4
3	South Korea	68,047	63,710	6.5	-6.4
4	Saudi Arabia	53,919	59,945	6.1	11.2
5	Canada	28,304	27,240	2.8	-3.8
6	Brazil	13,286	23,675	2.4	78.2
7	Taiwan	21,266	20,993	2.2	-1.3
8	Japan	19,334	19,064	2	-1.4
9	Vietnam	16,579	18,722	1.9	12.9
10	Mexico	14,779	17,052	1.7	15.4
11	Iran	10,194	11,338	1.2	11.2
12	United Kingdom	10,191	10,743	1.1	5.4
13	Turkey	10,821	10,724	1.1	-0.9
14	Germany	10,160	10,193	1	0.3
15	Nigeria	7,921	9,494	1	19.9
16	Kuwait	7,288	9,034	0.9	24
17	France	8,302	8,743	0.9	5.3
18	Indonesia	7,920	8,188	0.8	3.4
19	Nepal	8,155	8,158	0.8	0
20	Hong Kong	8,104	8,012	0.8	-1.1
21	Venezuela	7,022	7,890	0.8	12.4
22	Malaysia	6,822	7,231	0.7	6
23	Thailand	7,341	7,217	0.7	-1.7
24	Colombia	7,083	7,169	0.7	1.2
25	Spain	5,350	6,143	0.6	14.8

表 1. Institute of International Education, 2016, "Top 25 Places of Origin of International Students, 2013/14-2014/15." Open Doors Report on International Educational Exchange. (2016年10月30日取得, <http://www.iie.org/opendoors>) から筆者作成.)

さらに、下図はその出身別の人数の推移である。韓国からの流入ももちろん多いのだが、中国からの流入は2000年代後半から天井知らずである。（本題とは関係ないが、ちなみに日本からの流入が下がっているのもこの時期からである。）

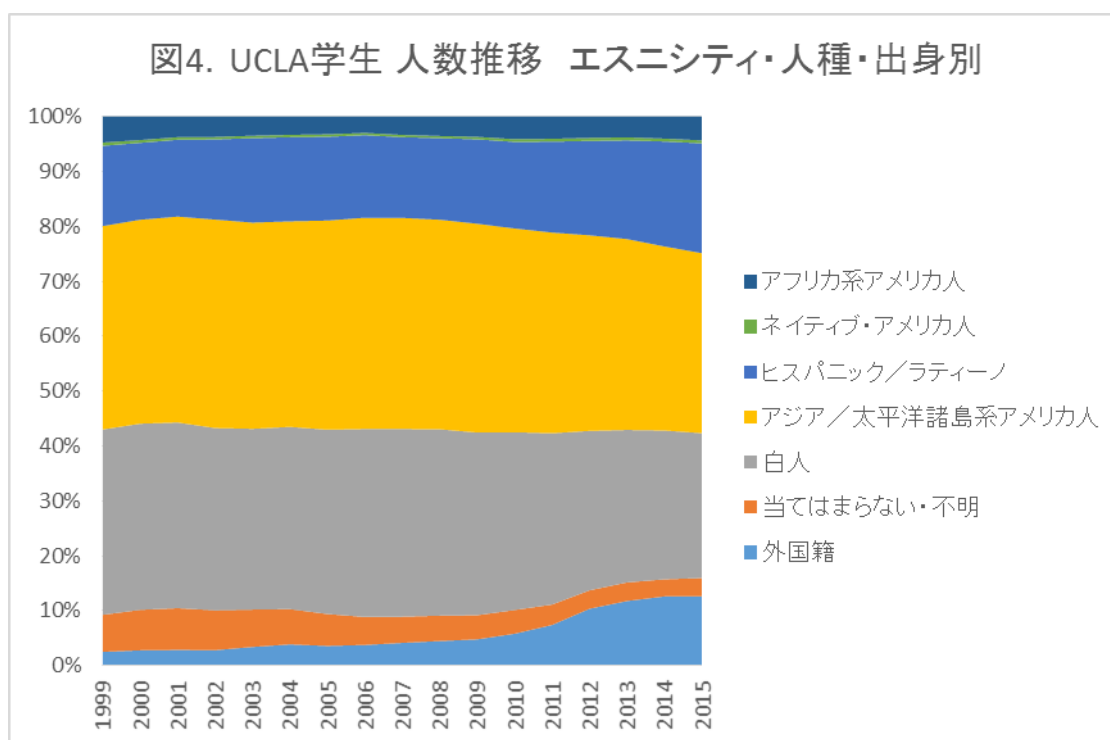


（上の表と出典は同じ。 ※ NONIMMIGRANT ADMISSIONS (I-94 ONLY) BY SELECTED CATEGORY OF ADMISSION AND REGION AND COUNTRY OF CITIZENSHIP: FISCAL YEAR 2014-2005 より筆者作成。）

外国生まれ以外の学生数との比率を見てみる。ランド研究所とならぶ（方向性は著しく異なるが、著名だという意味で）米国の代表的なシンクタンクであるブルッキングス研究所の報告（Ruiz 2016）によると、合衆国の西海岸のキャンパスでの外国生まれの学生数は、1000人中で50～60人前後のようだ。それほど大きなインパクトを与えない数のように思えるが、この数字は教育機関をまとめて均した数字である。もともとエスニックな移動はばらばらに離散することが珍しく、たいていは凝集性がみられる。また、西海岸、とくにロサンゼルスであればアメリカ生まれのアジア系が多く、やはり彼らもある程度の凝集性をもって教育機関に所属する。それらを勘案すると学校によってはキャンパス上でのとりまとめたアジアからの International students はかなりの比率になる。

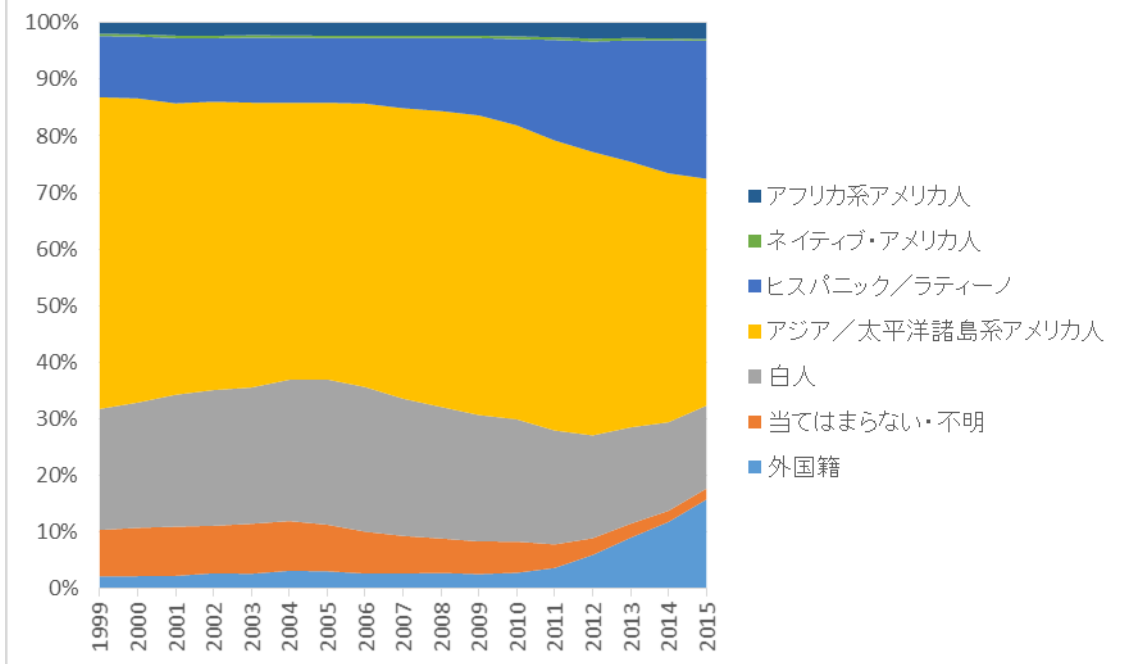
USC (University of Southern California) では2015年時点で International Students が全体の23.8%で、その内の約70%が中国、インド、韓国、台湾などのアジアからである。

UCLA (University of California LA 校) では 2015 年時点, 外国人学生 15%中やはり 75%以上が東・東南アジアからである. LA 郡に限らず西海岸の近隣の地域を入れると UC Irvine では 2015 年時点で外国人学生約 17%中, 東・東南アジアからは約 80%. 他にも UC San Diego や少々遠いが UC Berkeley ではそれと同等かそれ以上の割合である. 下に示した二つのグラフは学部生の構成比の時間軸変化を示しているが, これから明確にわかることは, 2011-2012 年頃から International students の比率が端的に増加している点である. 下記で示した二つのキャンパスに限らず UC 系列ですべてその傾向になっている. そして LA に戻って短大であれば Santa Monica College, 高校でいえば先述の Granada Hills Charter High School, あるいは Fairfax High School などがその好例である. このような数字にみられるように, 近年ではアジア系米国人の高等教育への進学率は非常に高く, 同時にアジアからやってくる学生も一層その数を増しており, 合わせて特に西海岸の特定の大学キャンパスでは人口割合をはるかに上回っている.



(※ UC System Fall Enrollment at a Glance から筆者作成 , <http://universityofcalifornia.edu/infocenter/fall-enrollment-glance>).

図5. UC Irvine学生 人数推移 エスニシティ・人種・出身別



(※ UC System Fall Enrollment at a Glance から筆者作成, <http://universityofcalifornia.edu/infocenter/fall-enrollment-glance>).

AZN 時代から K-Pop 時代への移行がみられた時期と学生比率の変化が現れた時期は数年間のずれがあるもののほぼ一致している。S さん (後述のインタビューS-1 より) は 2004 年に AZN のピークがあり、つまり 2005 年以降に下降、K-Pop 時代は 2008-2009 年に始まったと言う。S さんより 4 歳年上の K さんは AZN 時代が目立たなくなりはじめたのが 2004 年で、K-Pop 時代になったのが 2007-2008 年だと言っている。K さんより数歳年上の FungBro (後述) らは 2005 年に AZN が終わったと言っている。J さんおよび、M さん (M-2) は別の事柄について言っていて、東アジア系 (「FOB」も 2 世以降も併せて) がマジョリティのアメリカ社会からの風当たりが良くなったのが 2010 年頃だとのこと。

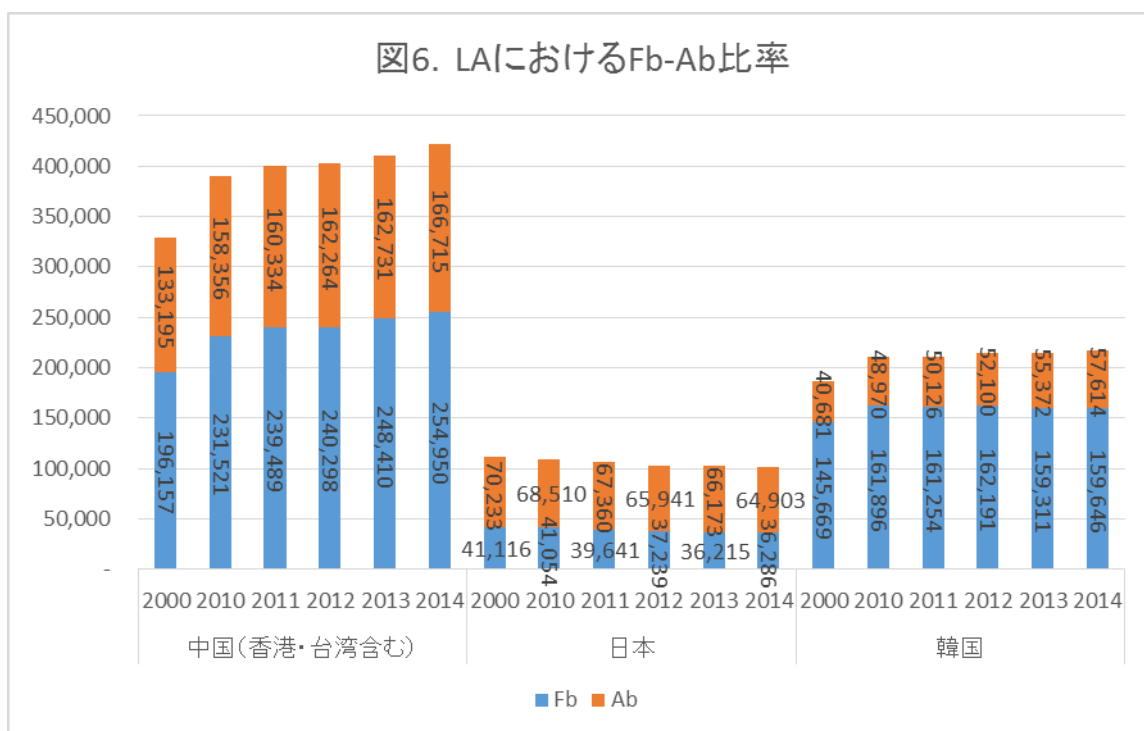
アジアからの高校生の流入数は明確にはつかめなかったが、しかし、彼ら 1 世若年層が影響を与えた対象となる Zhou & Bankston (2016) が言う New 2nd Generation Asian Americans の人口増加は時期が一致する。Zhou らの言うこの層はハート・セラー移民法以降にアジアから流入した人口のアメリカ生まれの子供たちで、決して貧しくはなく、また教育熱心な両親をもっている。彼らは 1980 年代、1990 年代で急増し、その後も増加中である (Zhou & Bankston 2016: 29-30)、1995-2005 年時点で最初の波は高校入学～大学卒業直後くらいの年齢になっていた。この New 2nd Generation Asian American たちが同時期に増加したと思われる 1 世 (と 1.5 世) たちと対立し、後に緩やかに結びつき、続く 90 年代生まれたちは 2007 年～2010 年以降には高校や大学キャンパス内でもさらに増加した 1

世（と 1.5 世）たちとも緩やかに結びついたと考えることは可能である。

ただ、一つ付け加えなければならないのは、UCLA にも 70 人ほど構成員（アジア系米国人が大半で、韓国系米国人は一人か二人しかいないとのこと。）がいる K-Pop ファンクラブはあるものの、一般的に言えば、K-Pop はそのキッチュさゆえに、UCLA などに通うエリート層に対してはアジア系だろうが求心力は弱いだろう。

参考のためロサンゼルス郡のアジア系総数の割合を挙げておく。American Community Survey の 2014 年の推定値（5 年間）によるとアジア系総数で 1,394,349 人、ロサンゼルス郡全体の人口が 9,974,203 人で、約 14% で国全体 6% の 2.3 倍以上である。このアジア系の中にはアメリカ生まれも外国生まれも含まれる住人で、エスニシティには Asian Indian, Chinese（香港、台湾、マカオも含まれる）、Filipino, Japanese, Korean, Vietnamese, Other Asian が含まれる。ちなみに中国、日本、韓国だけに絞ると、740,114 人で 7.4% である。それがさらにキャンパス内においては増大するため、その凝集性の高さは想像に難くない。

また、これも参考までに LA 郡における東アジア系のアメリカ生まれと外国生まれの比率を下図に示す。韓国と中国については外国生まれの人口の方が明らかに多く、彼らのアメリカ生まれの Co-Ethnic 人口への影響はその数と比率によってもある程度まとまったものであったことが予想できる。



(※American Community Survey, B05006: PLACE OF BIRTH FOR THE FOREIGN-

BORN POPULATION IN THE UNITED STATES - Universe: Foreign-born population excluding population born at sea 2000-2014 より筆者作成.)

このように、ポップカルチャーのアンバサダーとなりうる層の急増は 2010 年以降には大学キャンパスでは確認できた。高校でのシフトは S さんと K さんの言によるのみであるが、その数年前に見られたと考えられる。

4 音楽と人種

韓流の代表物はドラマと、そして K-Pop 音楽である。第 1 の要因の一つで挙げた K-Pop が米国の韓国系、そしてアジア系にとってどのような意味があるのか示すため、音楽と人種について述べたい。まずは 1960 年代、70 年代のイギリスにおけるレゲエ音楽と黒人層の関係について言及し、現代のアメリカ西海岸における K-Pop とアジア系の関係との類似性に少し言及する。

黒人音楽の成り立ちは苦難の歴史で文化的にも経済的にも搾取されることが多かったことは知られている。音楽とエスニック、人種的なものはしばしば本質化されて結びつけられながら語られ、それに対して反本質主義的な否定が繰り返された。両者の関係を語る際には構築主義的作用を無視できない。そもそもブラック音楽というのは一枚岩でもないし、黒人性は多様であることは言うに及ばない。イギリスにおいて、それまでは出身国やコミュニティ毎の分断があった諸々の「黒人」の若年層がゆるやかなネットワークを形成したのは、レゲエ音楽を通してであったようである（毛利 2012: 137）。一枚岩の「黒人」という虚構のステレオタイプを助長しはしたが、音楽によってステレオタイプに付随する「黒人」というアイデンティティとマイノリティ間の連帯が形成されたケースとして考えてもよいだろう。そのような連帯を醸成する背景は当然あった。毛利嘉孝（2012）によると、それは 60 年代に始まり、70 年代を通じて続いた不況で、イギリスでは移民層と下層労働者階級を直撃し、欲求不満がかつてなく高まっていた。そうした中では当然、白人低所得者層と移民が職を奪い合うという状況が現れ、それは排外的人種差別と結びついて移民層を弾圧した。分断していたというより、元々別個の集団であった諸々の「黒人」移民らの間でつながりが、抵抗するために強化されたのは当然の流れで、彼らはレゲエ音楽をアンセムとして共有していた。レゲエはジャマイカの音楽というイメージがあり、イギリスの移民にジャマイカルーツの人々が多かったからだと思われるかもしれないが、当時のイギリスに入ってきたのは、ジャマイカのレゲエというよりも、それにブルースや、近隣のカリブ系の音楽、そしてブラック系ではないがパンクの影響を多分に受けて変容しており異種混交的ブラック・ミュージックであったのだという（毛利 2012）。

つまり、これは言い換えると、連帯を醸成する構造があり、それを強化する媒体(乗り物)として疑似レイシャルな音楽があり、それは異種混交的であったため、多様な諸「黒人」間を結合しえたということだ(パンクが混じっていることから、白人系パンクバンドとの共演も試みられている)。

これは項目6(後述)と同じく、60年代70年代のAsian American運動と符合している。ただ、当時のAsian American運動が接着剤として使用した音楽は米国の黒人系音楽と言ってよいものを借りてきていた。のちの1999-2000年頃に起こったAZNプライド(後述の項目7-2参照)も汎アジアという連帯を掲げ、やはり米国の黒人系音楽を用いた。たしかに汎アジアを呼びかける感覚ではあったが、その効果はいまひとつだった。そして2000年代後半に入るとAZNにかわって韓流の時代になった。K-Popが先にみたように異種混交的であることには疑念を挟む余地はなく、汎アジア系の連帯とさらにトランスパシフィックな繋がりを促進する媒体となった。ただ、後者の異種混交性はやはり先にみたように資本主義的なマーケティングの結果で、時代の流れとともにより純粋な意味でのエスニック・人種運動から資本主義のシステムに包摂されながら、より穏やかなエスニック・人種の機運に変化しているといえる。穏やかではあっても、アジア系アメリカ人が同化路線に以前ほど魅力を感じなくなってきている。それは東アジアの親のルーツ国の経済的な台頭が前提としてあるが、それに加え、東アジアのポップカルチャーがアジア系米国人を魅了する力を増していることも大きな要因となっている。本章の項目7-3「感覚的溝、米国での…」で後述するように、同化路線の後退時の契機には、メインストリームからの部分的拒否があった。その部分的拒否は感覚、価値観の違いにもとづいている。

マルクス主義的立場のテオドア・アドルノ(Adorno [1956]1991=1998)は大衆向け音楽が大量生産ゆえに文化を均質化し、受動的な消費者を作り、大衆は下部—上部構造からくるイデオロギーに従順になるという趣旨の批判を行ったが、彼はその後のブラック音楽もった公民権運動への効果を予測していなかった。もちろん、安直にエスニックなものへのエンパワメント効果があるという議論は本質主義の危険があるのだが、ここではブラック音楽の辿った道と比較しながらK-Popの持つナショナルな、そしてエスニックなエンパワメント効果を簡単にでも確認したい。

対抗文化という性格が強かったブラック音楽と、資本主義色の強いK-popとはずいぶん異なるように見える。ここで少しヒップホップの使用のされ方の推移をみる。ヒップホップは、米国の都市部スラムからアフリカ系アメリカ人の文化として1970年代の末に登場した(毛利 2012: 264)。ヒップホップが対抗文化であることには、大方の論者が合意している(Gilroy 1993=2006; 栗田 2007; 中村 2010)ようで、栗田知宏(2007)によると、黒人やラティーノなどの人種的マイノリティが、差別や同胞の連帯を訴える手段として機能してきており、それを紡ぐラッパーたちのヒップホップ「らしさ」を維持するために「Keeping it real」という規範がある。「リアル」とは、スラムの現状や、世の不条理、建

前を赤裸々に暴露し続けるという意味である。これはサブカルチャー研究で有名なディック・ヘブディジ (Hebdige 1995) が述べている対抗性の本質と一致し、権力側の人びとと、従属位置や二級市民の地位しか与えられていない人びとの間の、本質的な緊迫状態についての表現となっている。ヒップホップのルーツにはジャマイカの文化や、西アフリカの吟遊詩人の文化などが融合していると一説には言われる (栗田 2007; Gilroy 1993=2006)。それが、米国でアフリカ系の対抗文化となり、公民権運動で人々の連帯を促進し、また後年、西海岸のアジア系アメリカ人らの AZN という気分のアンセムになった。そしてついにヒップホップは K-Pop の中に生まれ変わったと言っても大げさではないだろう。「おおざっぱに言えば、J-POP, K-POP はいずれも R&B, ヒップホップ, レゲエ, ファンクといったグローバル・スタンダードに準拠した自国語の国内音楽である。」 (大西 2003: 66) と言われるほど、K-Pop は洋楽の影響を受けており、また Kocca Korea Creative Content Agency USA (2014: 34) 調べでは、米国のどのエスニック・カテゴリの聴取者にも K-Pop はヒップホップ/ラップが他のジャンルよりも飛びぬけて人気を博していたことも示唆的である。ただ、もともとヒップホップは栗田 (2007) が言うように、それまでは商業主義の浸透したポピュラー音楽において常に<アウトサイド>性をもっていたのだ。それがこうして現状をみると、商業主義の旗手になっているというおもしろさがある。脱領域的になった現在のグローバル規模の資本主義社会のシステムのなかで流通しうる画一性の諸特徴を備えてその中にしっかりと入り込みながらも、それでも米国のアジア系 (特に韓国系) にはエスニックプライドに近いものを呼び起こし、同化路線から距離をとる契機になっている (インタビュー S-1, J-3 参照)。そして、そうした彼らのほとんどは中産階級であり、なかにもむしろ経済的には恵まれている人々も少なくなく⁴、その面では、もともとヒップホップが人種と結びついた階級闘争を象徴していたことを思えば、アジア系米国人にとって、経済的な境界線がほぼ消失しかかっている場合でも、メインストリームからの「好ましくないズレ」がある種の序列で低位置にあるとして扱われることを示していると考えてよいだろう。またそのような背景があって韓流が支持されるため、さらに有徴性は強化され、<帝国>内の多様性は維持される。

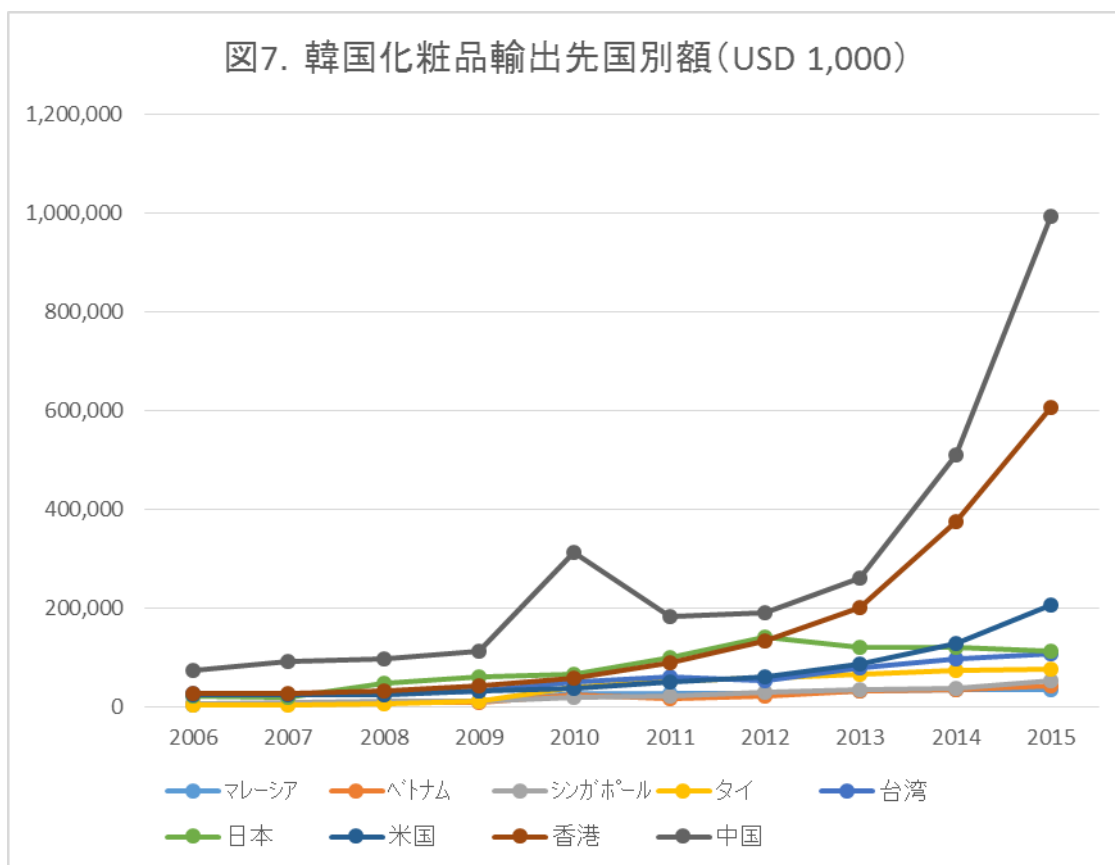
5 状況の変化・無変化：コスメティクス

さて、ほぼ全員のインタビュー協力者らの話 (S-1, K-1, C-1, J-4, M-2, Br/R-1) にも繰り返し現れているように東アジアからのメディアのグローバル的な拡散は北米のアジア系にも影響を与えている場合がある。ヘブディジによると、音楽がたんに「音楽」だけにとどまらず、政治、思想、ライフスタイルや、ファッションと分かちがたく結び付いているという (Hebdige 1995)。政治、思想と結びついていることは上で見た通りだ。韓流の場合、音楽の K-Pop のビジュアルもあるし、TV ドラマについては視聴者たちのファッション、ことに

コスメティクス（の商品とメイク方法）に影響を与えていることが実証されている。Youg-Seaon Park (2015) の量的調査や、ジェトロのエリアリポート韓国（百本 2015）によると、ASEAN 諸国においては韓国の TV ドラマの人気の韓国コスメティクスの輸入量に明瞭に結び付いていた。ASEAN 以外になるとおそらく FTA などの影響で韓流との因果関係は不明瞭になる（Park 2015）。2012 年から韓米 FTA が発効している。韓国は中国とも FTA を 2015 年に発効しているが、化粧品については特約があり、関税引き下げにはなったが撤廃には至っていない。

KITA.ORG が公開しているデータから抜き出すと、下記のようになっている。2015 年の最大輸入国は中国、次いで香港、そして第三にアメリカ合衆国が入っている。日本は二国間の政治的対立が激化した 2012 年をピークに、以降は下降の一途であるが、アメリカへの額は FTA が発効した翌年の 2013 年頃から上昇している。全体として 2013 年から 2015 年への跳躍は目覚ましく、百本和弘 (2015) によると、アジア圏での韓国コスメの成功は韓流の成功によるものと、文化的近似性が指摘されている。つまり、アジア圏では美白が好まれ、韓国の美意識と一致することや、メイク方法についても東・東南アジアにおいてはあどけなさを残すことが良しとされており、これも韓国の美意識と一致することである。ところが、米国など西洋圏においては、女性は美白ではなく、ほどよく日焼けしていることが規範に一致し、さらにメイクの仕方も、成熟したルックスが目指され、またそもそも化粧の程度と頻度が少ない。このような東西の美意識の不一致は大きい。若年層のアジア系人口の中でも先に述べた韓流の影響を受けているアジア系米国人が韓国コスメの新たな消費者になっていることは想像できるが、アメリカ市場での伸びがメインストリームに韓国的美意識が入り込んだか疑問が残る。実際、2015 年の合衆国全体のコスメティクス市場の規模は 605.8 億ドル（Statista 2016）で、韓国からの同年の輸入額の 2.07 億ドル（Korea International Trade Association 2016）は全体のわずか 0.34% である。アジア系人口だけでも 6% いる。

液状化近代の流れにより、自分自身への投資傾向が高まった。それはアンチエイジングや健康志向を促進し、関連するオーガニックフードやオーガニックヘアケアなどの消費につながっている。これが化粧品をアンチエイジングの一つであると認識すれば米国の消費者行動は日本や韓国のコスメに興味を向けると思われ、そうなったときに東西の美意識の距離感が縮小していることになるのだろう。



(※Korea International Trade Association, KITA.ORG のデータ 2016-2007 年から筆者作成 : Commodity Code : 3304 (Beauty or make-up preparations and preparations))

6 米国におけるアジア系の歴史概観

本研究において欠かすことができない米国におけるアジア系の歴史を駆け足でも確認する必要がある。

19 世紀後半から 60-70 年代の公民権運動手前まで :

ここで少し時間を遡って米国のアジア系の歩んだ苦難と闘争を概観し、米国のアジア人口若年層をとらえている今日の K-Wave Craze が意味するところを考察する。

19 世紀半ばからまとまった人数のアジア人が米国へ移り住むようになり、その後の紆余曲折を経て、分水嶺となったのは 1965 年の移民法改正 (ハート・セラー移民法) で、人種による制限を取り払われ、さらに 1979 年帰化法により中国からの受け入れ数が拡大したことでマスイミグレーションに至った。政治経済的要因に回収するプッシュ&プル図式で説明されることが通例である人の移動だが、特にこの頃の東アジアから米国への流れもおおまかにはそうした説明が有効であった。それ以降も指数的に数を増やし現在は全米の 6% である (U.S. Census Bureau 2015) (※アジア系に含まれるのは主にインド系、中国系、フ

イリピン系，韓国系，日本系，ベトナム系，その他系で，申告は自己申告のアイデンティティに拠る．一世に限定されず米国生まれも含まれる．）ハート・セラ移民法の成立した経緯からして，もちろん当時の冷戦構造を受けての戦略であった面も強いのだが，公民権運動がもたらした成果でもある．公民権運動は主に黒人系米国人によるアイデンティティの政治であるが，これにはアジア系米国人も大いに関係があった．

もともとハート・セラ移民法以前までの米国におけるアジア人の扱われ方は押しなべて酷いものであった．最大人数の中国系には人種差別法と言われる（園田 2006）排華法が1882年に成立し，入国がほとんど不可能になったし，家族呼び寄せ枠もなかった．また中国系には帰化が認められなかった（園田 2006，Lai 2004: 20）．

韓国系移民もやはり70年代から急増し，1970年の国勢調査では7万人強であったのが，その後も増加し続け，2014年のAmerican Community Survey (U.S. Census Bureau 2015)によると1,453,807人（全米で）である．彼らの移民としての生活も困難であったようだ（Lee, E. 2015, 299-300）．

日系の場合，先の大戦時では私有財産の没収と収容キャンプへの強制収容という，ルーツや親族が敵性国（人）であるということで市民権を保持しているなどは関係なく人権を踏みにじられるという経験があり，このアジア系の中でも特異な迫害は，戦後の日系アメリカ人らの米国への同化路線を決定づけた．強制収容所から解放され，カリフォルニアに戻った日系人らはその地の反日感情が未だ強いことを思い知らされることになった．

終戦直後から黒人系と日系の共闘は見受けられた．Erika Lee (2015)によると，例えばロサンゼルス，クレンショー地区は当時白人のみ在住が認められる決まりであったが，このルール撤廃に動いた黒人と日系人の人種間同盟がのちの人種をまたいだ運動の基礎をつくった．

Asian Pride Movement :

その後，1960年代後半には，公民権運動の黒人系米国人をロールモデルにし，主に中国系が立ち上がった．黒人系の急進派，Black Panther Party (BPP) をモデルにした Red Guard Party (のちの I Wor Kuen) を1967年に組織した．まさにBPPのアジア版という体で，自決主義，闘争的，反白人帝国主義を掲げ，白人層から搾取にあっているという立場をとり，毛沢東思想にも傾斜していた点で共通していた（Maeda 2005, 2009; Lee, E. 2015: 305）．Red Guard Partyに限らず，先行していた黒人系の公民権運動参加者と交流を持ったアジア系米国人（Yuri Koichiyama氏など）がアジア系の公民権運動につなげていく流れであったため，当然，マルコムXなどとも交流もあった（Lee, E. 2015: 301）とはいえ，いくつか組織を作っていたアジア系アメリカ人運動は全般的に比較的に穏健であったようだ．UCバークレー校の立てこもりは，事態が落ち着いてすぐにEthnic Studies学科が新設されるという成果を得た．

Asian American運動はまた，ベトナム反戦運動にも加わっており，アジアの同胞を爆撃

するなというメッセージを掲げ、トランスパシフィックな連帯を志向した (Lee, E. 2015).

黒人系やベトナム反戦運動、社会主義との連携など、サバルタンな存在を共有しうる他の流れと合流したのが特徴の一つと言ってもよいだろう。Erica Lee (2015: 305) によるとそれまでは相互にたいした関わりもなかったアジア系諸エスニック・グループ間に連帯を呼びかけたのがこの運動であり、ここに **Asian American** という意識が立ち現れた。**Asian American** という汎アジアのカテゴリ名が、この運動の中で使用され始めたとされている。

黒人と自らが似通った立場に置かれているという自覚は、少なくないアジア系が黒人系米国人を様々な点でモデルにする傾向から頻繁に見られる。例えば, Daryl J. Maeda (2005) は **Red Guard Party** と並んで当時の重要なアジア系アメリカ人運動の人物として、劇作家 (脚本家) で批評家のアジア系アメリカ人 **Frank Chin** を挙げている。彼がつくる劇中の主要登場人物はアジア系アメリカ人だが、黒人系の公民権運動に共鳴していて、服装や話し方が黒人系を彷彿させる特徴を備えており、さらに子供時代の憧れのヒーローはアフリカ系アメリカ人ボクサーの **Ovaltine Jack Dancer** であるという設定だ。この設定は偶然ではない。ヒップホップ音楽やそれを連想させる話し方や服装はアジア系米国人の間で比較的流通していることが知られている (Wong 2010; Kim 2007; Zhou & Bankston 2016)。現代においてさえも、2015 年春からアメリカの主要チャンネルで放送されているアジア系アメリカ人家庭を描いた TV ドラマ「**Fresh Off the Boat**」はアジア系アメリカ人たちから熱い視線を注がれているのだが、ドラマ中でもそのような描写が多く、また原作者である **Eddie Huang** は 1982 年にワシントン DC で生まれた台湾系米国人であるが、少年時代はアフリカ系アメリカ人と自らを「ダブ」らせることが多く、ヒップホップ音楽を好み、それに合わせた服装を着ていた。一般的にアジア系アメリカ人はステレオタイプのアフリカ系同様、青少年時代にバスケットボールに精を出すことが多い。後年、その努力は体格的にあまり報われない結果になることがほとんどだが、現在現役の **NBA (National Basketball Association)** 主催の北米における男子バスケットボールのプロ・リーグ) のスタープレイヤーである台湾系 2 世の **Jeremy Lin** は中国系 (および台湾系) 米国人にとっての誇りである。

本研究のねらいから、この第三章では LA での韓国系がその中心になり、大枠の画一性に変化がみられたかを検討するのだが、結論を先取りして少し述べると、そこで見出せた変化は韓国系全般と、非アジア系アメリカ人とのあいだの関係性ではなく、アメリカ生まれの韓国系アメリカ人と、韓国出身で LA に移動してきた韓国人たちのあいだの関係性の変化であった。一部で、アジア系アメリカ人にたいしては韓国系の地位は向上している様子であった。第三章で浮き彫りにされた変化が韓国系のアメリカ生まれと、韓国生まれの移民たちのあいだの関係性についてであり、また主だった調査対象者が新 2 世だったため、かれらがまだ生まれていないか、せいぜい幼稚園生であった 1992 年におこった LA の韓国コミュニティにふりかかった災禍は、それほど関係が深い出来事だったとはいえない。しかし、本研究

全体の主旨にそって LA における韓国系全体と非アジア系アメリカ人とのあいだの関係性についてふれるならば、背景として言及しておくべき出来事であった。

LA 蜂起について本研究との関連で言及しておくべきことは次の 3 点である。1, アメリカでの白人—黒人間の対立が原因であったが、メディアによる偏向報道によって韓黒軋轢に塗りがえられた。2, しかし韓国系の黒人にたいする態度が以前から良いとはいえなかったことも、メディアが利用しやすい土壌にはなっていた。3, LA 蜂起後、LA の韓国コミュニティはエスニシティ間の緊張緩和のための行動にでた。

まず、メディアの偏向報道であるが、1992 年 4 月 29 日午後 3 時 15 分、故ロドニー・キング氏が被害者、殴打した白人警官 4 名が容疑者の裁判の無罪評決がくだされた直後、蜂起は発生した。

ここで関わってくるもう一つの事件がラターシャ・ハーリンズ的事件（あるいはトゥ・スンジャ事件）である。故ロドニー・キング氏が警官らに殴打された事件が発生した 1991 年 3 月 3 日の二週間後、3 月 16 日に、当時 15 歳であった黒人系アメリカ人の少女、故ラターシャ・ハーリンズ氏がサウスセントラルにある韓国系リカーストアに入店し、オレンジジュース 1 本を万引きしようとしていると韓国系の店主に思われて揉みあった末、立ち去ろうとするハーリンズ氏を背後から店主が頭部をショットガンで撃ちぬいて即死した事件である。この件の公判は 1991 年 11 月 15 日に開かれ、正当防衛は認められなかったにもかかわらず、執行猶予 5 年と 400 時間のコミュニティサービスという比較的軽度な判決であった。この時は暴動はおこらなかった。

高賛侑（1993）によると、店内の防犯カメラがとらえた射殺にいたる衝撃的な映像は、ロドニー・キング氏の白人警察による一方的な集団殴打事件とあたかも結びついているかのようなかたちで、繰り返しテレビで放送されたことが、「既存の『韓・黒葛藤』を現実以上に強調し、黒人の感情をたきつけた」（高 1993: 35）。

杉渕忠基（2006）も同様の指摘をしているが、このようなメディアによる白人と黒人間の緊張関係を、韓国と黒人間の対立に描きかえる行為は、1992 年の暴動当日にも明瞭であった。暴動初日の 4 月 29 日夜、一部の黒人グループはサウスセントラルから北上し、裕福な白人地域であるビバリーヒルズを目指して移動していた。地理的にその中間にあったのがコリアタウンである。ちなみにビバリーヒルズ、ハリウッドが山側のふもとにあり、その南隣がコリアタウンで、コリアタウンの南端はサウスセントラルの中でもヒスパニック系の集住地区の北端と接している。そこからさらにサウスセントラルを南下すると黒人系住民が集住しているというならびになっているが、このコリアタウンのロケーションも、LA の支配層が白人系と黒人系の対立の緩衝材として意図されたものであるという一説（高 1993）すらある。暴動目的のグループはコリアタウン入り口で韓人青年団と対峙するが、韓国系も差別を受けている側で黒人グループと同じ境遇であるから、襲撃の対象にするのはおかしいという韓人青年団団長の説得を受け入れ、暴動グループはコリアタウンを迂回することに合意して立ち去っている（高 1993: 40）。しかし、さらに高（1993）によると、

二日目から黒人ギャンググループが 코리아タウンの各店舗の入り口を銃器と自動車破壊し、彼らに誘導された非武装のヒスパニック系一般人らが略奪におよんだ。警察は 코리아タウンに駆けつけることはなく、やむを得ずコリアンらは銃をもって水平射撃で暴動グループを威嚇した。この状況をメディアは映像におさめ、繰り返し放映したため、ロドニー・キング氏事件の判決による白人と黒人間の対立は、ハーリンズ氏射殺と韓黒対立という構図に差し替えられた。メディアを通じて 코리아タウンが「特別無料サービスデー」になっていることを知った近隣のヒスパニック系住民らも加わって 코리아タウンに殺到し、John Salak (1993) によると 1992 年の LA 暴動の被害額のおよそ 65%は 코리아タウンになった。

やはり 2015 年の本研究のために筆者がフィールドにはいった際にも、リトル・トーキョーで地元民の尊敬を集めている日系アメリカ人 4 世の B さんの認識でも LA 蜂起は、韓国系と黒人の対立にメディアによって仕立て上げられたという認識を持っていた。

ただし、LA ではこのような韓国系と黒人系住民間の軋轢は以前から皆無であったとはいいがたかったようである。サウスセントラルでは、60 年代まで、イタリア系やユダヤ系などが黒人系住民を相手に小売業を展開していた。彼らはサウスセントラルに住むことはなく、日中に店を営業し夜には他の地域にある家に帰宅していた。しかし、1965 年にワッツ地区で起きた大規模暴動以降、かれらは閉店し、かわりに韓国系の商店が立ち並ぶようになった。韓国系もやはり、そこを住居にするわけではなく、夜間は 코리아タウンなどの他の地域に帰宅していった。かれらの間では黒人系にたいするいくつかの偏見が流通しており、それに黒人系住民は不満を抱いていた。黒人系住民が集住するサウスセントラルに店をだして、黒人系が主な客層であるにもかかわらず、店番に雇うのはヒスパニック系で、黒人系の来客には万引きするのではないかという疑いの視線を向けるなどであった (高 1993)。

すでにみたように、LA 蜂起とラターシャ・ハーリンズ射殺事件は直接的な因果関係は疑わしいが、メディアによって関係があるように思われてしまったこと、また、黒人系住民のあいだでは、事件以前から韓国系にたいする不満もたしかに皆無ではなかったことから、暴動後に、LA の韓国系コミュニティはエスニシティ間の緊張を緩和する方向性に動いている。まず、暴動後の 코리아タウンの再建工事に、黒人系の要求を韓国系住民が聞き入れるかたちで、黒人系の建築業が部分的に参加することになり、また、 코리아タウンの一角に設置されている無料の健康診断所では、暴動前は韓国系住人の子供だけを対象にしていたが、暴動後は教訓からエスニシティ、人種を問わず受診をうけつけるように変わり、多くのヒスパニック系の子供たちが利用しているし、そのほかにも様々な黒人系住人と韓国系の交流機会は企図されている (高 1993)。こうして、24 年ほど前の暴動以降の韓国系住人コミュニティが他のエスニックマイノリティーグループとの平和的な関係構築に乗り出したことは、2016 年の韓国系と黒人系住民の関係が致命的に悪くないことを部分的に説明していることは念頭においておくべきである。たとえば、2016 年時点で、黒人系住人若年層の女性らは非アジア系のなかでは K-POP にたいする関心が比較的高いことにも無関係とはいえない。

7 待避的人種差別とハビトゥス

7-1 第一章とのつながり

本研究の主題として取り上げ続けているこの待避的差別というものが、ハビトゥスといかなる関係があるのか、先だってここで論じたい。ブルデューの文化資本は家柄、階級によるヒエラルキーを問題にしていた。「振舞いかたに重点をおき、それを通して獲得様式に重点をおくこと、それはその階級における家柄の古さを階級内のヒエラルキーの根拠とする」(Bourdieu 1979=1990: 149-50)、「正統的な振舞いかたを身分上身につけている人々に、絶対的にしてまったく恣意的な承認権または排斥権をさずけることでもある」(Bourdieu 1979=1990: 150)。すなわち、育ちの過程で特定の環境におかれたため、身体化された振る舞いにもとづいた恣意的な序列の中に位置付けられる。「正統的な振る舞いかたと、発音や服装や態度物腰などの価値を決める力とを身分上身につけている人々は、自分自身の振舞いかたに無関心でいられるという特権をもっている」(Bourdieu 1979=1990: 150)。また、そのようなヒエラルキーの上に這い上がろうとすれば、それは「猿真似」であるとされ、「借り物」⁵の行動に陥る。逆に否定的態度にできれば、その反抗そのものが自分の敗北を表してしまうという二者択一に閉じ込められている。これに関連する『ハマータウンの野郎ども』(Willis 1977=1996)の人々は自ら作り出した対抗文化によって、凶らずもヒエラルキーを再生産していた。

このようなハビトゥスによるヒエラルキーは、ネグリ&ハートの言え、ポスト工業社会の脱領域的なく帝国>においては、西洋的なものとの「ズレ」の度合による序列に置き換えられる。この<帝国>のヒエラルキーでは西洋的なものが中心に置かれることも、やはりハビトゥスと同様であくまでも恣意的に決定されている。アジアからの移民はやはり同じ二者択一の境遇に立たされる。自らのエスニックな有徴性をなるべくかき消そうとしても全面的には受け入れられない。先にみたように、米国西海岸のアジア系たちは60年代—70年代にはAsian Pride Movementという対抗文化を作った。ハート・セラー移民法後に大量に移住したアジア系のその子供世代はどのような対抗文化を作っていたのだろうか。彼らはアメリカ的なものへの同化を一度は試みるが、いったん止めて、その後には反抗ではなく、やんわりと距離をとりつつ、新しい世界の拡がりを手に入れている。『ハマータウンの野郎ども』とは少し違う帰結を以下で確認したい。

第一章でも簡単に触れた待避的人種差別、あるいは第三のカラー・ラインと「FOB」という用語のつながりを今一度確認しておく。「FOB」はもともと蔑視語で、人種やエスニシティが同じでも、アメリカ化の有無と、その度合によって序列が作られ、通常はアメリカ生まれのアジア系が、新規に米国にやってきたばかりのアジアからのアジア人を蔑む言葉であった。これは生物的な違いにもとづく差別ではなく、感覚や価値観、振る舞いにもとづいた

待避的人種差別の定義と合致している。本章では、その「FOB」という言葉に付着している蔑視の要素が薄らいでいることを論述しており、この項では、それについて密接な関連をもつ AZN という感覚についてまず述べ、次いで感覚的な溝の存在とその変化、そして残っている境界線について論ずる。

7-2 AZN プライド

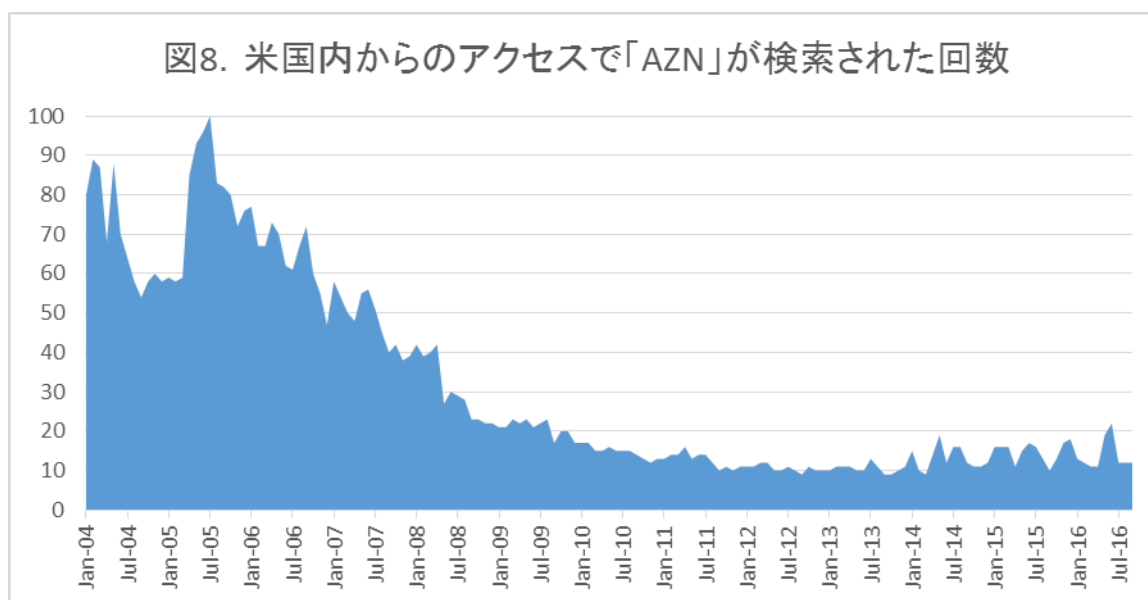
60 年代、70 年代の Asian American 運動から時代は移り 1990 年代後半、Deborah Wong (2010) によると、AZN プライド (「AZN PrYdE」は一例だが、彼らが文章を書くとき、大文字と小文字が本来以外の場所に使われ、綴りにも変更がなされるという特徴がある。) という現象がみられた。西海岸のアジア系アメリカ人の若年層の間での現象で、Wong によると 2009 年の時点で 20 代のアジア系はこの現象を知っているという。Wong 自身が説明するようにこのようなアジア系アメリカ人の若者カルチャーについての研究は手薄で、AZN、あるいは類語の GenerAsian に関するアカデミックな文献は Wong の他に見当たらない。しかし、それをもって些末な現象だったと考えるのは誤りである。メジャーチャンネルにおいて出番が限られているアジア系アメリカ人にとって YouTube は自分たちの声を発信・共有する重要なプラットフォームになっている。そのため、ロサンジェルスのアジア系 2 世以降の若年層に話を聞くと、二人に一人くらいの割合で幾人かの有名なアジア系アメリカ人の YouTuber たちを紹介してくれ、それらの動画が自分たちの感覚をおおむね代表していると話してくれる。そうした有名なアジア系アメリカ人 YouTuber に Fung Brothers (Fung Bro) がいるが、彼らはまさに New 2nd Generation Asian American にあたり、1986 年、1988 年生まれの米国生まれの中国系で、彼らより数歳上の友人 (FungBro によると AZN 世代真っ只中を生きた世代とのこと) からも招き、4 人で AZN 時代を振り返る動画 (FungBros 2014a, 2014b) は興味深い。彼らが AZN プライドについて回顧する動画を作ろうとした契機は、BuzzFeed という Vlog/Blog (動画/文字情報) に AZN 特集 (Wang et al. 2016) が組まれており、話題を集めていたことであった。BuzzFeed がカバーしきれない点を話したいというのが理由として説明されていた。こちらの LA に拠点をおく BuzzFeed というのは 2013 年位 (S さんの見解) から人気に火が付きミレニアルズ世代で (おそらく西海岸での方が知名度が高いと思われる) あれば誰しもが聞いたことがあると思われるほどアメリカ人一般 (エスニシティ問わず) の間で有名である。これらの情報を鵜呑みにするのは問題だが、上述のように、現地のアジア系アメリカ人 2 世以降らの間で支持されていることが多い。

Wong (2010) によるとアメリカの若者研究のなかで、AZN プライドや、GenerAsian がほぼ手つかずなのは、それがアメリカ文化として見られていないからだという。

Wong は AZN プライドが 2000 年あたりに始まったとみており、明記はないが 2009 年時点でまだ終わってないかのように書いてある。しかし、2014 年時点で FungBro (2014 年時点で 26 歳と 28 歳) と彼らより少しだけ年上のその友人らの持っている認識では、1993

年頃に始まり、1999年にピークを迎え、2005年頃には消えていたとなっている。2014年時点の BuzzFeed のサイトでもすでに過去形であり、あの頃を今振り返ると痛々しかったという語りがあふ。また、2014年時点の FungBro は2005年で終わったと彼らは感じていると言った後に、本当に終わったか否かは議論の余地があると付け加えている。推測するに、1999-2000年あたりに誰の目にも明らかになり、2005年で一応の落ち着きを見せたのか変容し、その後は意見が分かれると考えてもよいかもしれない。

あくまでも参考までだが、Google Trends⁶を使うとグーグル上で検索された回数の履歴を地域と年代に絞って調べることができる。システムが整った2004年元旦以降のデータしかアクセスできなかったが、アメリカにおける「AZN」という単語の検索回数を下に示す。アメリカではこの時期を通してグーグルが検索エンジンとしては実質的にほぼ寡占に近い状態であること、またAZNがインターネット使用に最も積極的な世代であったこと、そもそもAZNという用語の成り立ちからしてインターネット上のコミュニティで使われ始めたことなどを考慮すれば、この方法でその収束時期の見当をつけることはあながち間違いではないだろう。Y軸の数値はピーク時が100となっている。実際回数までは入手できなかった。これによると2005年がピークで、2007年からは半減し、2008年の中頃からほぼ20%に、2009年には現在の2016と同じ10%台まで落ちている。これから判断するに、Kさん（後述）の見解が一番近いようだし、2005年までであったとするFungBroの見解も、それほど遠くはない。



(Google Trends , 2016 , (2016 年 8 月 20 日 取得 , <https://www.google.com/trends/explore?date=all&geo=US&q=AZN>) から図は筆者作成。注6を参照。)

どのような特徴があるかについては、Wong も、FungBro も BuzzFeed も一貫しており、AZN という用語が現れたのはインターネット上のコミュニティが始まりであるが、中産階級か下層のアジア系アメリカ人 2 世以降若年層のアイデンティティとなったところが多い。髪の毛をブリーチして黄色 (Blond という言葉が使われているが) にし、強力なワックスでスパイクのように立ち上げ、黒人系かアジア系による R&B や Hip-Hop, あるいはテクノを好み、アフリカ系米国人文化を借りてきてアジア的なアレンジをほどこす (例えば B 系ファッションをするのだが、すべてを黄色で統一するなど。) また、女性は細眉にしてアーチを大きく描いたり (これも当時の黒人系女性の間で流行っていた)、性的アピールをした服装を好む。男女共通して日本製のスポーツカーを改造して高速で乗り回す。AZN というと必ず引用されるのが JIN という中国系アメリカ人 MC で、「Got Rice, Bitch?」というラップ音楽で有名である。歌詞は AZN の特徴である環太平洋的アジア系の連帯を連想させるものになっている。また、(東洋的) ドラゴンや不死鳥のタトゥーを入れることが多かった。ゲットーに住む黒人系少年のステレオタイプにならってバスケットボールの練習に励み、バスケットボールシューズを好んで履き、マイケル・ジョーダンのシューズなどは特に好まれたということだ。そして、FungBro によると、極端なケースではスクワットのようにしゃがみこんだ姿勢でタバコを吸う場合も見られたというから、日本や韓国の少し柄が悪めのサブカルチャーを連想させる。実際、日本のヤンキー文化と部分的な類似を見せる。また、彼らによると AZN プライドのリーダー格はたいがいフィリピン系米国人であったようで、フィリピン系が最もアジア的なものとは距離があるにも関わらず、AZN プライドのリーダーだったことを今振り返ると面白おかしく思っているという語りがあった。

Wong (2010) によると彼らはアジア系であることを全面に押し出し、米国のメインストリーム中ではアジア系がフェミニナイズされていることに反発し、黒人系のステレオタイプに倣って闘争的雰囲気を作る (S さんおよび、Fung Bro の言葉を借りると「Wannabe Gangsta」) ことでマスキュリニティの回復を目指した。また、アジアの文化的優越性を主張し、アジア人の自分は美しいという主張が目立った。一方で東アジアから発信され始めていたポップカルチャーを取り込んでハローキティのタトゥーや、DDM (日本発のダンスダンスレボリューションというアーケードゲーム。足元にボタンを兼ねた複数のパネルがあり、その上で音楽に合わせて踊ってボタンを踏み、リズムとの同期具合を競う) を好んで遊ぶというアジアのアジア男性のような好みも兼ね備えていた。

AZN プライドという現象と 60-70 年代の Asian American 運動の異同を確認する。すでに見たように、1960-70 年代の Asian American 運動もベトナム反戦運動の内容にみるように環太平洋的連帯を志向していた。90 年代末-2000 年代半ばに見られた AZN PryDe (あるいは GenerAsian) という気分も環太平洋的一体感か、あるいは想像の共同体⁷としてみていることが多いことは共通している。異なる点は 60-70 年代のそれはより純粋に東アジアの間エスニシティ連帯と社会主義の色合いがある (Wong 2010) が、90 年代-2000 年代半ばのそれは、資本主義システムに包摂される形で現れているということである。上層階層

のアジア系アメリカ人らは白人層と類似のアイデンティティを持ち、AZN プライドの流れには乗らなかったのだが、AZN プライドはミドルクラスにも普及しており、彼らは全般的には上昇志向が強く大学への進学や高級ホワイトカラー職に就くことに意欲的であったため、モデルマイノリティという称賛と抑圧を兼ねたステレオタイプから自由ではなかった (Wong 2010)。それだけではなく、Wong (2010) が指摘するように、AZN、あるいは GenerAsian という用語はのちにマーケティングに多用されることが多く、トランスパシフィックな行動範囲をもつ広範な意味でのアジア人 (アジア系米国人含む) は購買力が高く、そのセグメント (※マーケティングのポスト・フォーディズム的手法で、市場を分類し、それぞれに訴求力をもつ方法で売り方を変える) に向けた商法は多い。

AZN とその類語の GenerAsian は、General Asian の意味であり、東アジア・東南アジアとの連帯を念頭においているのだが、主に米国生まれのアジア系によって担われた動きであり、アジアに住む諸アジア人にとってはある意味アメリカ的なコンセプトだったはずである。しかし、当時、流入人数を教育機関などで局所的に増していたアジア出身のアジア人たちはアメリカ生まれの 2 世たちと対立することがしばしばだったため、「FOB」という蔑視語がアメリカ生まれかアジア生まれかを峻別する場合に使用されたのだ (項目 7-1 の「FOB」の説明を参照) このように AZN プライドは汎アジアを掲げていたがこうした奇妙な矛盾をはらんでいたのだ。2000 年代も後半に入り、いよいよアジア出身の 1 世「FOB」たちの数と彼らの経済力が増大する時期と、K-Pop 時代の開始時期は重なる。もう一度 FungBro の AZN プライドについての動画に戻ると、彼らの認識では 2005 年に AZN プライドの時代は終わり、動画が公開された 2014 年時点を指して今は K-Pop の時代であると言っている。少なくとも彼らの中では AZN プライドと K-Pop Craze という流れはアジア系米国人を包む雰囲気に移行を示している。

このように一連の流れと各時点でのアジア系アメリカ人がとった行動と気分の流れを追うと、次のように言えると思われる。60 年代 70 年代の運動では同化路線への反発であった、その路線は 2000 年前後の AZN プライドに引き継がれ、アジア人としてのアイデンティティの確立を目指した。どちらも常に黒人系米国人のアイデンティティ闘争を模倣する面が目立ったが、もともと、アジア系アメリカ人を代表するような文化を発達させにくいメディアの構造があったため、抑圧されていることに対抗文化として (ステレオタイプな) 黒人系の模倣という手段をとったのだが、AZN プライドでは人種的に近い日本 (外からみれば一枚岩のように扱われる) 由来のポップカルチャーや技術製品も彼らの自尊心を高めるといふ気分で併せて取り込まれたと思われる。AZN プライドが一段落した 2005 年、入れ替わったのは韓流と親和性のある気分である。政策的支援は遅れたが、違法ダウンロードやコアなファンによる無許可の翻訳などファンベースで広がっていた日本系のポップカルチャーは先行して北米に存在していた。そこにかぶせるように政策的支援を受けて急激に世界中に拡散した韓流が北米にも流れ込んだ。ちなみに、韓国の芸能プロダクションは YouTube などの動画を管理制限するのではなく、むしろ積極的に公開して利用する戦略を

とっている（長崎 2012）。

既述のように、主として韓国から、また韓流がメインストリームとなっているアジア諸国からの移住民一世の若年層が草の根レベルのポップカルチャー・アンバサダーとなり、米国生まれの二世以降韓国系やその他のアジア系米国人の若年層にも伝播していった。韓流は最初にアジア諸国を席捲したのだが、そこで大きな消費者となったのが中国の若年層であるため、中国から北米に移住してくる若年層も韓国系の新移住民と似たような機能を担った（Kocca Korea Creative Content Agency USA 2014）としても不思議ではない。

7-3 感覚的溝，米国での K-Pop，分断から緩やかな連帯へ

次に、朝鮮半島出身の在外韓国人，および米国市民権を取得した 1 世，1.5 世はアメリカ生まれの 2 世以降の韓国系米国人と隔たりがあり，決して一枚岩ではなかったこと，それがどのように近年変化してきたかについて触れたい。まず，両者の隔たりを示すエピソードを 2 つ紹介する。

下で紹介するインタビュー協力者の S さんによると，ロサンジェルスに多くの韓国系は長老派のキリスト教徒であり，熱心に教会に通っている。通っている教会は時間帯によって，英語で執り行う枠と韓国語で執り行う枠が区分されている。またそれぞれに別の牧師（複数）が担当しており，英語の時間帯は 2 世以降が集まり，韓国語の時間帯には 1 世（および滞在者）が集まる。同じ教会に通っているにもかかわらず，この両グループ間の交流はあまりない。言語の違いによって最初に分かれるというが，離れ過ぎている感は拭えない。

分断がどのように緩和されたかの語りの前に，彼より少しだけ年上の世代のアジア系の間に流行った現象について言及している。彼によると，2004 年前後の高校生くらいの年齢層は **Wangster (wannabe gangster)** がアジア系米国人の間で非常に流行っており，チェーンを巻いた服装を着ていたりしていた。彼は当時 11 歳で，彼より 3 年位年上は今でも **Wangster** が抜けきれない人をよくみかけるといふ。2004 年過ぎあたりまでのそうした **Wangster** というのが先述の **AZN プライド** という気分を指していることは明らかである。その後，韓国系の友人の中でも 1 世は以前からだが，2008 年くらいには 2 世らも巻き込んで全員が **K-Pop** を聞くようになっていたという。この移行の時期については多少のずれもあるが，後述の他の人々とほぼ一致している。1 世アジア系と 2 世アジア系の距離感については特に韓国系について語っているが，彼の見解では，1 世と 2 世以降の距離が開いていたのは何よりもまず言語障壁であり，1 世，1.5 世が米国に来てから数年たつと，言語障壁も徐々に薄らいで，会話が発生するようになったという話であった。言語障壁は完全には無くならないため，今でも出かける行き先は 1 世（1.5 世）と 2 世以降では異なるという。

S さんの話：(S-1)

(I が，K-Town で G-Dragon 風⁸の恰好をして，しかも威圧的な雰囲気を漂わせている

男性を見かけたという話をしたら)

S: そういう人はよくみかけます。私がそういう人たちに遭遇すると……。彼らは TV で見たことをしようと思うんでしょう。タフに振る舞わないといけない、誰からも見下されないようにと、そういう人が多かった世代なんです。私の3年位年上のメンタリティは私たちととても違っててヒップホップとかいろいろ。

I: そんなに少ししか年齢離れてなくてもそれほど違うんですか？

S: はい。私が小学生のときの中学生はみんなそんなような恰好してました。

I: それは何年の時でしょうか？

S: 11歳だったから2003～2004年です。それ以前にもヒップホップは人気だったけど、あの頃にはより一層人気になってた。サギング（男性が囚人服を真似てズボンから下着がはみ出す腰パンするファッションで、日本でも90年代後半から2000年過ぎあたりに流行した）とか鎖を身に着けたり。

「Wangster」っていう言葉があって、「wannabe gangster」ということです。知り合いででもギャングの振りをする人たちは大勢います。（本物の）ギャングではないけど。それまでのヒップホップとかの流れをあの時期の子供たちはギャングととらえた。

「俺たちはもう pushovers（騙されやすい、楽勝、押されると倒れる、甘ちゃん）じゃないんだ」「俺たちはタフになるんだ」「俺たちは荒々しくなるんだ」、みたいな感じでした。その頃にこの流行りの影響を受けた世代は今でもそれを引きずっています。何歳か年上の人（おそらくアジア系）に会うとタフガイのような外見です。でも本当はすごく良い人たちなんです。

I: それが2004年頃に無くなっていったんですね。その後は？

S: 私が高校2年の頃（※2008～2009年位）には私の高校の友達（all of my high school friends）は全員がK-Popを以前にも増して聞いていました。「Girls' Generation」もその頃に人気が出始め、あと「Super Junior」とか、「Big Bang.」その時、私は皆が何を話しているのかまったく分からなかったのですが、彼らはK-Popスターだけではなく、K-Popの会社（日本の芸能界でいうタレント事務所に相当する）の話もしていました。高校3年の時に彼らから話を聞いて、内容を把握しましたが、なんでそんなものに夢中になっているのかわかりませんでした。私は「ブリトニー・スピアーズ」とかアメリカ文化の方が好きでしたから。（※しかし現在はSさんのK-Pop知識はかなり豊富の様子だった。）

I: （夢中になっていたのは）それはどちらのグループの人たちですか？1世韓国人？2世以降の韓国系アメリカ人？

S: どちらも混じってました。教会でのことです。1世韓国人の方が、2世以降に影響を与えたんだと思います。「へい、この曲（K-Pop）聞いてみなよ、好きなんだけど、君も気に入ると思うよ。」のように。

あの頃はみな友達を作ろうと頑張っていました。それが二つのグループのつながり

を作っていたんだと思います。

I: しかし、言語障壁があったとおっしゃっていたと思いますが。

S: (「FOB」たちも若ければ、何年か米国にいて、米国の学校の教育を受けているうちに英語が上達し、言語障壁も下がってくるという主旨の話をしてくれて。)

高校の友達と言った後に教会でのことだと言っているのです、クラス内とかではなく、長老派教会での高校生同士の友達のことと思われる。下記で示す K さんや後述の FungBro がいう程の敵対的な雰囲気グループ間になさそうに聞こえるのは同じ教会のクリスチャン間であることで説明できるだろう。

また、1 世韓国人が集まる仕組みは、S さんによると、教育熱心であるため、良い学校がある場所に引っ越したり、あるいは親戚の住所を使って校区を変えて子どもを良い学校に通わせる。中でも韓国系に定評のある学校は絞られていて、韓国人 1 世が 20-30 人と集まることもあるといい、その一例として Northridge 地区にある Granada Hills Charter High School を挙げ、そこでは 1 世と 2 世間の対立は明確だったとのことだ。前述のように確かに 1 世アジア系の人数は増えているが、韓国人の数が多いとは言えどもそれほど極端には増えているわけではないため、このように特定の学校に彼らが集まる現象を見逃してはならない。言語的障壁が経年して低下することはいつの時代の若年層にもあったわけで、この世代に特有ではないため、全体数の増加に加えて、特定地域と特定学校に集中していたことも併せて考えると、二つのグループの軋轢が発生しそれが後に解消されたことは想定できる。この時期に二つのグループの軋轢が明確であったことは後述のほぼすべての人が指摘しており、この時期特有の軋轢とその解消の契機があったと考えるべきだろう。

まず、第一章で既出であるが、再度確認すると、2 世以降のアジア系が主に使用し、1 世および滞在者の米国基準との感覚のズレを指摘して嘲笑するとき用いられる「FOB」(Fresh Off the Boat) という言葉がある (Pyke & Dang 2003)。今でもその意味で用いられることが多く、両者の距離が未だあることを示す。しかし近年そうした上記の両カテゴリ間の感覚の乖離に変化がみられる。まず、「FOB」には新しい用法が現れている。

二つめのエピソードだが、K さんによると、最初は日本のアニメ、マンガなどからコスプレが発生し、アジア系が主体だったが、そのうちに非アジア系、白人層とかも参加するようになった。当初は「Crazy」とか「Weird」という単語で表現されがちな風変わりさが興味をひいていた。続いて、韓国のファッショントレンドの LA での受容について尋ねた。
※会話内の「アメリカナイズされた韓国人」とは 2 世以降の Korean Americans を指している。

K さんの話: (K-1)

K : K-スタイルは韓国人に人気です.

I : 韓国系アメリカ人にもですか？

K : そう！今では彼らも K-スタイルが好きになったんですよ. 以前はそんなことなかった. アメリカナイズされた韓国人 (KA) と 1 世の韓国人はとても仲が悪かった. 喧嘩も多かった.

K : 10 年ほど前とおっしゃいましたか？

K : そう, 10 年近くになります. 2007~2008 年. でも今は時間が経過し, 溝がなんとなく埋まっています.

I : 何が理由で (変わったのですか) ?

K : うー. たぶん, 統一感/団結 (unity) が増したのが理由だと思う. 今では, ほかのエスニック・グループ (韓国系以外) も増えて.

以前は, 1 世韓国人は付き合う (デートの) 相手も 1 世韓国人で, 2 世以降は 2 世以降韓国系と付き合っていたけど, 時間がたって, 混じりました. なので, 別々だった. もう全く別々だった. 学校でも二つのグループが口を利くこともなければ一緒に出掛けることもなかった. 時間がたって, 一緒に遊ぶのも大丈夫になった.

「FOB」アジア人と 2 世以降アジア系米国人の若年層の対立とその後の解消については, 先述の S さんの語りの中でも同時期にあったと述べられているし, また既述の YouTuber , FungBro の動画中 (FungBros 2014b) でも触れられており, 対立時期もほぼ一致している. 彼らはその対立はどちらの方がクールなアジア人かをめぐりかなり深刻なものであったということ, また, 解消したのだが, それでも今でさえ多少残っていると語っている.

K さんの語りでは, その軋轢が韓国の厳密な年齢ヒエラルキーという儒教の影響を韓国系米国人が受け入れなかったことに原因があったという.

I : 何が (二つのグループを) つなげたのですか？

K : たぶん K-Pop. たぶん, 一般的に趣味. 趣味が同じなら共通の話ができる. いつもはお互いに嫌いあっていました.

一番の理由は, 敬意 (respect). 1 世の場合, 年齢が一つでも上だと言葉を変えなければならぬ. 先輩とか. それが二世にとっては「なんで? 無理」みたいな. それが 1 世は嫌いだった. 今はもう大丈夫. 今では, 2 世がその習慣を受け入れたので. 彼ら (2 世) は以前は名前でしか相手のことを呼ばなかったのだけど, 「ヨー, ジェイソン」とか.

彼ら (2 世) が韓国のやり方を受け入れたんです. 韓国系ギャンググループの間でさえ, そのシステムを受け入れて, ヒョン (男性による年上男性の呼称) とかヌナ (男性による年上女性の呼称) とか使っています.

私の時代のときは「ヨー, ワッツアップ」で名前でしか呼ばなかった. それが今では

すごく違って、なんか変な感じ (weird).

だから、彼らは受け入れたということです。アメリカナイズされた韓国系が韓国の習慣、アジアの習慣に敬意を払うようになったのです。でも時々、ごく稀にですが,,,,,うーん、やっぱりいない。今では(受け入れていない人を)一人も思い当たらないです。全員が受け入れています。話し方の習慣が受け入れられているのです。

(※「Wannabe FOB」という用語(スラング)について尋ねていて。)

I: それで、アジア系米国人のなかで「Wannabe FOB」と自称する人たちがいると聞いたのですが、この言葉は聞いたことがありますか?

K: オーケーあります。それ少し変なんです。だってもともとは誰も FOB にはなりたくなかった。見下されていました。それが、先ほど言ったように、混じり始めたのですが、まず、アメリカナイズされた韓国系 (Korean American, 以下 KA) の女子の間で FOB のような恰好をする人々が現れ始めました。そのアーリーカマー (※アーリーアダプターの意) たちが「Wannabe FOB」と呼ばれたんです。つまり、アメリカナイズされた韓国系の人々 (guys) の中にはまだそれを受け入れていない層がいたので、彼らが先に (FOB 風に) 染まった人々 (KA 女子の一部) を指して「ああ、(やつらは) Wannabe FOB だ」みたいな。それでその言葉が発生したんです。

I: なるほど。それでより多くの人々が,, (遮られ)

K: (遮って) その用語は、でもその用語はすでに終了してます! その用語は短い期間しか使われなかった。ミックス進行中の期間しか。

I: なるほど。

K: 今はもうなくなりました。(その言葉で揶揄していた) 連中もすでに FOB 風の服装してますから。

I: それは何年のことですか? 変わったのは。

K: たぶん、推測ですが 2007~2008 年頃です。私の高校卒業前後くらい。そのときいろいろなミックスが始まりました。

なにが(彼らの)接合を促したのかということですが、間に入る、ミドルパーソンがいました。

その後、1.5 世である K さん自身もそうだったが、彼のような二つの言語と文化に通じているミドルパーソンらが橋渡しとなって、それまでは完全に断絶していた二つのコミュニティをつないだという。2008 年頃から 2 世男性が 1 世韓国人女性と付き合うことも多く、1 世と 2 世間のカップルが生まれると、カップルの誕生日などに招かれる両グループの友人らは誕生日の場で喧嘩するわけにもいかず、溝が埋まっていったという話であった。やがて、そこに中国系(移民なのか 2 世以降なのか不明)や日本人(※日系か日本人か不明)も入っ

てくるようになり、すべて（アジア系が）ミックスするようになったとのことだった。

先の S さんの語りと併せると、おぼろげながらも次のような流れが浮かび上がる。つまり、AZN プライドというアジア系米国人 2 世たちの気運があったが、それは 2005 年位まで、そのあたりを境に「FOB」系の 1 世、1.5 世らの学校内での増加が顕著になり両グループ間で対立が発生。まったく同じ時期に韓流の世界化が起きた。「FOB」たちが韓流とともにやってきたようにも見えたかもしれない。「FOB」を除いた米国人の中で韓流の最初の消費者になったのはアジア系のなかでも若年の女性だった。そうしたアーリーアダプターたちは他のアジア系 2 世らから揶揄されて「Wannabe FOB」と呼ばれた。YouTube が人口に膾炙したのもちょうどこの時期で、韓流の越境的な拡散がより手軽になったことも手伝って、アジア系 2 世たちに影響を与え、アジア系 2 世の若年層男性がアジア系 1 世韓国人と付き合い始めるという変化が起こった。この頃には「FOB」らの英語力も上達してきていて言語的障壁も低下してきていたこともあった。この異種混交的交際の増加は、当事者の恋愛関係だけでなく、双方の友人グループも巻き込み、友達付き合いにまで広がった。韓国ドラマと K-Pop は両グループをつなぐセメントの機能を果たすと同時に、それまでもアメリカ主流社会から完全には受容されていないことにアジア系 2 世が漠然と抱いていた不満も、親世代のルーツ国に文化的にも急速に接近することに貢献した。この一連の変化は 2005～2008 年位で、2015、2016 年現在においてはすでに常態化しているということだ。

（※K-Style のような韓国ファッションをしたい人々の話の続きで、以前は恰好をみれば「FOB」なのか、2 世なのかすぐにわかったのだが、その韓国系 2 世も今では「FOB」のような恰好をするようになったから、実際に会話してみるまで分からないと、彼はいつている。）

I：いや、メインストリームのたとえば白人層とかなどで韓国風の恰好をしたいという人はあまり多くないと思うのですが。

（※ここで、K さんが白人系米国人であるが K-Pop 歌手をしている人の存在を教えてください）

I：ただ、このような人（その K-Pop 歌手を指して）は多くいないと思うのですが。

K：はい、とても少ないパーセンテージです。でも、確かに台湾系 2 世とかベトナム系 2 世では男性でも K-Style をする人が確実にとても多いのは知っています。白人、黒人ではあまりみません。

Wannabe Fob とは 2 世以降アジア系米国人であっても、心性や嗜好が Fob と類似しているか、それに近づきたいという志向の人々であり、それは当初は揶揄する言葉だったが、後に自称で使われはじめた。つまり、アジア出身 1 世（あるいは 1.5 世）であることが即ステイグマとしてみられない状況が一部に現れている。

次に紹介する C さんは、韓国的なもの、韓流などから距離をとっている人だった。しかし、友人の多くは韓国系 2 世以降の人なので、特に意図的ではないが、服装や髪型などは Facebook やソーシャル・メディアにアップされる韓流の影響を受けた韓国系 2 世の友人らの投稿写真や、対面的な付き合いから自分のファッションの趣味も間接的に韓流の影響を受けているのではないかと、言っていた。

C さんの話：(C-1)

(韓国ファッションの話をしていて、I が C さんは韓国ファッションの影響を受けていますね、と失言してしまったところ。)

I：先ほど、私が C さんのファッションが韓国スタイルだと言ってしまったことで、気分を害されていますか？

C：いいえ。いいえ、ただ予期してなかったから。全然失礼ではないです。うーん、でもたぶん、数年前だったら気分を害してたかもしれない。「FOB」とか呼ばれる時代で、私は FOBBY な (FOB っぽい) ことには興味なかったから。

I：数年前とおっしゃいましたか？

C：えっと、もう少し前ですね。私が高校時代の後半から大学生のあたりまで。2003 年に高校に入学したから、2005 年とか 2006 年のことです。

I：ああ、その頃、Wannabe FOB とかありましたね。

C：そう。それで私はそういうことに興味なかったの。でも今は、いろんな影響がアジアからきて、うーんわからないけど、(韓国ファッションが) 今ではもっとユニバーサルなタイプになったから。受け入れられて (more accepted) います。

(中略)

(韓国のファッションと、アメリカンなファッション、その他のファッションの間でオーバーラップを感じるという C さんの話があり)

C：高校の時は全然違いました。服装をみればその人が「FOB」なのか、韓国系アメリカンやアジア系アメリカンなのかがすぐにわかりました。あれから韓国ファッション自体が、たぶんいろんな文化の影響をうけて、わかんないけど、変わってきています。あの頃は「Tacky (悪趣味)」に見られていました。

I：なるほど、悪趣味だと思われていたのは間違いないということですね。

C：はい。

I：では、今なら韓国ファッションをしていても「悪趣味」であるとは思われないということでしょうか？

C：時間の経過とともに韓国ファッションが変わってきているので。

I：アメリカナイズされてきていると？

C：たぶんそうでしょう。わからないけど。以前よりスタイリッシュだと思います。

(中略)

I: クールであると考えられているのでしょうか？

C: 自信ないです。ファッションはヨーロッパから始まり、アジアを経由して、こっちにまた戻ってくると、少なくとも、ここではそのように考えられています。みんな知ってると思うけど。(中略) だから今はいろんなものが混じっていると思います。

Cさんは、Sさんよりも、韓国に寄っていない。(高校のとき一時的にK-Popファンだったことはあるとのことだが、)今は寄っていない韓国系2世アメリカ人である。Cさんの話からだと、2006年までの韓国ファッション、K-Styleなるものは、悪趣味であるとみられており、以来、韓国ファッションの方が、アメリカ的なり、西洋的なりに歩み寄ることで、否定的なコンnotationを払拭したことがわかる。2006年とは、SさんやKさんの言から推測すると西海岸におけるK-Pop時代の黎明期であり、AZNプライドの気分の終息期である。「悪趣味」などのスティグマが今では、異種混交的な韓流スタイルがアメリカ社会とも親和性を高めてメインストリームの市場にも入ってきているということだった。このCさんの話は、先のSさん(S-1)やKさん(K-1)、下記んのJさん(J-1)も同様に言っている、もはや「FOB」なのか、Asian AmericanなりKorean Americanなのか見た目ではわからなくなった背景の新たな一つの説明を提供してくれている。Sさん(S-1)やKさん(K-1)の話だと、Korean Americanたちが「FOB」に歩み寄った側面のみのように見えたが、韓流の方もアメリカ的なり、「ユニバーサル」なものに自らを刷新していたということである。ファッションに限らず、韓流は外部市場に適応することを目的としている側面が強いため、西洋側の市場の要求に敏感に反応したという解釈もなりたつ。

次のJさんもアメリカ生まれの2世韓国系であるが、もっとも韓国に近いようだ。

Jさんの話：(J-1)

I: 以前までの「FOB」は否定的なラベルが貼られていたと思うのですが、最近になって、2世、3世のアメリカで生まれ育ったアジア系米国人がアジアのコンテンポラリー文化のトレンドを好むようになってきたと思うのです。メイクや髪型など。

J: その通り！その通り！その通りです。良い指摘です。そう。だから80年代であれば、「FOB」は、「FOB」同士でかたまっ、とても不人気だった。とてもぎこちなくて、勉強のことにのみ気にかけて、おきまりの恰好をしていて、つまり眼鏡かけて、バックパック背負ってとか。「FOB」でない人びとはまた別のグループを作っていた。

「FOB」はクールな人々ではなく、アジア的過ぎだと思われていました。それが今では変わって、「FOB」であることはある意味で良いことです。

30代や40代ではあまりないが、20代や、特に10代ではアジア系のFOBsとTwinkies(Bananas)は学校において以前のような断絶ではなく、交流を始めていて("Bananas and

‘FOBs’ are mixing together at school.” Jさんインタビューより), 交際相手としても魅力的な対象になったという。これについてはほかの調査協力者も同様の見解を示している通りである。後述の M さんの例は, 「Banana」側からの視点を提供してくれている。

もう一つ重要な要素がある。太平洋をまたいで, 親が生まれ育った国へアメリカ生まれの子供がある時期に一定期間滞在する習慣である。古くからの日系には見られない習慣(帰米 2 世などの戦前戦中までは遡らずに) であるが, 70 年代以降にそのボリュームゾーンのある韓国系や中国系, 台湾系などはその典型で, 数少ないが新 2 世と呼ばれる近年の日本系米国人にもみられる。彼らの親がアメリカ生まれの子供に故郷とアメリカ間を何度も往復させることが多く, 言語も多少なりとも話せ, 中にはルーツ国に長期の留学をすることも珍しくない (Thai 2002: 66)。そうした成果で近年のアジア系 2 世はバイカルチュラルなアイデンティティを確立しやすい。さらに言えば, ルーツ国のモノカルチュラルな若年層ほどはルーツ国間の政治的対立に関心がなく, そのような軋轢にとらわれにくいことから緩やかな意味ではパンパシフィックなアイデンティティすらも持ちえたと考えられる。

彼らにとって, 米国のポップカルチャーも同じように馴染みがあるが, 自己同一化の対象としづらく, それをしやすかったのはむしろ K-Pop の方であり, 彼らのトランスパシフィックなアイデンティティと親和性があった。それは K-Pop が今では韓国のみではなく, アジア全域で受け入れられており文字通り General Asian な音楽となっていたこと, そして AZN プライドが好んだ諸々の様式とも大きく路線が異なるわけでもなく, それを軟化させたような体裁だったため, 西海岸のアジア系にとっても親和性があった。その結果, 韓流が流入してきたとき, AZN プライドというサブカルチャーに替わって, ルーツ国で流行っている韓流に馴染んだことはむしろ自然な流れである。こうしたことが重なって, 2000 年代後半以降の西海岸のトランスパシフィックなアイデンティティを持つ若年層のアジア系にとって K-Pop はうってつけであった。

ただ一方で, 従来も AZN 時代も, そして今の時代も一貫してアジア的なものに興味を持たない同化派もかなりの数がいると思われる。

Zhou & Bankston (2016: 173) によると昨今のアジア系米国人の若年層のあいだで, Asian-American というアイデンティティを持つ人々はあまりおらず (2001 年のサンディエゴでの同氏の調査でこのアイデンティティを選んだ回答者は全体の 13%), さらに, Chinese-American などの Origin 名+American というアイデンティティ (32%) よりも, Chinese など, Origin 名のみというアイデンティティ (53%) が最も若年層には好まれているという知見を得て, 学歴と所得において白人層と似たような水準になっただけでも, 東アジア系米国人は「白人」化に向かっていないと結論づけた。Zhou らによると, Asian-American というより広範に及ぶようなアイデンティティが成立しにくいのは, 東北アジア系が高所得でも, 東南アジア系が平均よりも低い水準にとどまっており, このような社会経

済的な位置の不一致により、彼らの間で **Asian American** という大きな一括りはしっくりいかないのだという。また、アジア系は白人か黒人かという議論がよくなされる (Zhou & Bankston 2016: 172) が、たしかにステレオタイプな「黒人文化」的要素をアジア系米国人が好む傾向があるにせよ、「黒人」化というアイデンティティもしっくりくるわけではないのだという。それで太平洋を超えた先のルーツ国と一括りになるようなアイデンティティを使用することを考慮すると、これは彼らにとっての想像の共同体が緩やかながらもアメリカという領域的限界をすり抜けたのだと考えても良いだろう。すると、もちろん同化志向派 (Twinkies など) も依然として多いだろうという条件つきではあるが、もう一方の派では同化か否かという問題が従来と同じような意味で彼らに突きつけられているのではなく、同化のみに向かうのも、アメリカ化の一切を拒否することもどちらも違和感のある選択になりつつあると思われる。

もともと、長い間、アジア系米国人は彼ら以外のアメリカ社会から一枚岩のように見られ、総じてモデルマイノリティというラベルをあてがわれ、一見して賞賛されているようだが、それは賞賛しつつも、そのようなステレオタイプが当てはまるという有徴性を残すマイノリティとして、グラスシーリングが課されるという毒入りケーキのプレゼントであった (Omatsu 2000 など他多数) ことから、彼らは自らがうまく同一化できるようなアイデンティティを模索していたと考えられる。60年代・70年代の **Asian Pride** 運動が旧世代アジア系 2 世 (以降) にとっての汎アジアを謳う最初期の対抗文化的動きであったとすれば、**AZN** プライドという機運は、あまり洗練はされていなかったとは言えないが、**New 2nd Generation Asian Americans** にとっての嚆矢であったと言ってもよい。

そして 2007 年前後の **K-wave craze**. あれから 10 年近く経過し、**K** コンテンツはどのような印象を持たれているのか。KOTRA (大韓貿易投資振興公社) という日本でいえば **Jetro** に相当する機関の調べの 2016 年 2 月発表の 2015 年の成果についての報告書 (KOTRA 2016) が最も新しい。調査を請け負ったのは韓国外国語大学などの研究者らによる。それによると、韓流指数を設け、各国での韓流の受容水準を測っている。指数を構成しているのは現地での消費者アンケート結果から得た韓流心理指数と、文化コンテンツ貿易額にもとづく韓流現況指数の組み合わせでみるものだ。まず韓流心理指数でいうと、100 以上で拡大傾向を意味するが、アメリカでは 130.73 と拡大中。ちなみに最大はインドネシアで 139.13、次いでカザフスタンの 138.17。また、日本では 76.50 と衰退傾向。続いて現在の受け入れられ具合の大まかな指標としての現況指数は、最大値が 5、最小値が 1 である。それによると、2015 年の調査では平均が 3.02 であるところ、アメリカは 2.95 で、拡散途上段階。ちなみに最も高いシンガポールは 4.0 でメインストリームとして普及している段階。次いでフィリピンは 3.9 で同様。日本は 2.61 で拡散途上段階。つまり、アメリカでは現在拡散中で、前年より消費者の態度も良くなっているという。

これだけだと、米国一般で日本市場とあまり変わらない程度普及しているかのような印

象を与えてしまうが、先に示した貿易額をみれば日本の方が桁違いで購入していることが明らかである。もう少し米国内での韓流がどんなサブカルチャーであるのか述べる必要があるように思う。日本の経済産業省の通称クリエイティブ産業課の発足メンバーでもあった三原龍太郎（2014: 126-127）がエッセイのような書籍で軽めに語っている自分のアメリカでの経験の一つで、彼が2007年にアメリカ人女性に自らがアニメについて研究していると話したところ、「ああ、アメリカではアジア系アメリカ人の文化だよ（以下略）」と言われたことに衝撃を受け、「大部分の人たちにとって、日本のアニメや漫画は『眼中にない』のではないかという可能性に気づかされた」とあるが、これとさほど変わらない扱われ方をK-Pop、韓流はされていると言っても概ね誤りではないだろう。エスニックな色のついた消費財なのである。

ここでその具体例を紹介したい。まずは、日系米国人で、USC（University of Southern California）の学生である日系4世アメリカ人（父が日系3世で、母は中国系2世である）の女性（2015年のインタビュー時点で22歳）、Xさんの一例である。

（Xさんは、韓国的なトレンドには興味がないということを何度か強調していたし、また、J-popやアニメなどにも興味をもっているわけでもないとのこと。しかし、大学内サークルの日系クラブに所属。）

Xさんの話：(X-1)

I：市民権を持っているとか、アメリカ生まれであること、また英語を母語としていること以外で、アメリカ人的というのはどのような状態ですか？

X：ある意味では、cultural foodをあまり食べないとか。

I：アメリカンな人々は、cultural food以外の何を食べるのですか？

X：ハンバーガーとか、ピザみたいな（笑）

I：着るものについては？

X：（アメリカンである場合）Tシャツとかジーンズ.... よくわかりません。

（ここで、たずね方変え。）

I：Xさんのコリアンファッションについての大まかな印象を教えてください。

X：あまりそのトレンドは追っていないのでわかりません。

I：韓国ファッションをした人々は、アメリカの社会で一般的に魅力的だと思われませんか？

X：たぶん思われません。ひとつは、アジア人はまだアメリカのメインストリームカルチャーの中で大きな存在になっていないこと。それで.... 男性は、セレブリティの場合、アメリカの男性は、clean-cut（こざっぱりと清潔感ある）なスーツとかカジュアル

ルなら T シャツとか着ているけど、韓国系の男性は、over the top (やり過ぎ) で flashy な (けばけばしい) 服だと思われているので。

上記の最後で、「洗練されていない」と思われていると解釈できる様子が見えてくる。ここまでの韓国系のインタビュー協力者は、C さん以外は同化路線から距離をとっている例が多かったが、ここで、韓国系で同化路線派 (Bananas, あるいは Twinkies) に近い例も一人示したい。

韓国系 2 世米国人男性 (2015 年春のインタビュー時点で 24 歳) の M さんは韓国系協力者のなかで韓国的なものから比較的距離を置いている人である。韓流ファッションがメインストリームの非アジア系からどのようにみられていると感じているか話してくれた。既述の C さん (女性) の意見では、「悪趣味」と思われていたのは、数年前までのことだったが、M さん (男性) によると、男性については必ずしもそうでもなさそうである。

M さんは、野太い声、鍛え上げられた体格のアスレチックな人で、小学校～高校までの体育教師を非常勤でしているかたわら、ライフガードの仕事もしている。インタビュー時もフィットネス用の服装で現れた。また韓国へは毎回 2 週間程度の滞在であるが、何回か行ったことがあるとのこと。だが、必ずしも同化一辺倒かということ、そうでもなく、相手が 1 歳でも年上であれば、ヌナや、ヒョンという敬称を使って呼ぶようになったとのこと、またコリアタウンで育ったため、韓国語も完全ではないがかなり話せるというから、志向は「Twinky」に近いものの、韓国性も備える。

M さんの話 : (M-2)

(K-POP の人気についてきいていて)

M : J-POP は 2000 年あたりの時点では人気だったのが、2000 年代後半になると、K-POP の方が人気になりました。

I : それはどんな人の中で人気だったのですか？

M : 韓国からの韓国人と、韓国系アメリカ人の話です。その頃 (2005 年あたり) は、彼らの間だけで知られていました。2008 年、2009 年あたりになると、それ以外の一般のアメリカ人の間でもよく知られるようになりました。非韓国系、ヒスパニック、フィリピン、他のアジア系や、白人、ヨーロッパ人も、などなど。でもフィリピン系から一番人気があります。一度は、私もスターみたいになったと感じたことがありました。学校で PE を教えている生徒らが、何人かと聞いてくるので、私が韓国系と知ると女生徒たちに周囲を囲まれて。

I : それは何歳くらいの人たちですか？

M : (笑) 小学生の子供たちです。でも、高校でも、日本人じゃなくて、中国人でもなく、韓国人だと答えると、ベトナム系の女子が気絶しそうになってました (笑)。

ちなみに M さんは、ベトナム系アメリカ人の成人女性と交際中であり、彼女の家族の家を訪問すると、いつもベトナム語に吹きかえられた韓国ドラマが TV に映っているとのことだ。

I: では、「EXO」(※韓国ではもちろん、日本でも特に女性の間で絶大な人気を誇り、容姿、ダンス技術ともに優れていると思われる K-POP 男性グループ) は魅力的だと思われていますか、アメリカで。

M: いえ、いえ、たいていは魅力的だと思われていません。とてもフェミニンに見えるので。メイクとかもしてるし。非アジア系のアメリカ社会の大部分で、K-POP の男たちは魅力的だと思われていないと思います。K-POP の女子たちは人気ですが、男はフェミニン過ぎます。もちろん、そういう K-POP にすごくハマっている人たちもいますが、少数派です。

I: ハマっている人たちはどういう人たちですか？

M: アジア系以外でだと、多くはアフリカ系アメリカ人の女子たちです。私は、彼女たちが K-POP に興味を持つことなんて絶対にないだろうと思っていましたが、でも、大好きみたいです。白人の男は、基本的にアジア系の女子が好きなので。

X さんや、M さんの話で、(LA でさえも) 米国のメインストリームと思われている非アジア系の人々が韓流に向ける大方の態度の雰囲気はけしてよろしくないことがわかる。

M さんは、「Wannabe FOB」とエスニックな同胞をからかう側の韓国系 2 世であったが、それでも、K さんが言っていた (K-1) ように、少しでも年上であれば敬称を用いる習慣を受け入れているし、また、S さんよりもコリアナイズされている面は、韓国語が比較的流暢ということである。

K-POP と関連するが、M さんなどの同化路線派の韓国系 2 世からみて、韓流ファッションについてはどうか。

(韓国ファッションについてきいていて)

I: 韓国風のファッションについてはどうですか？髪型もふくめて、M さん自身はメディアに影響を受けたと思いますか？

M: 小学生の頃、私の母に美容院に連れて行かれて、髪の毛に黄色のハイライトを入れられました。私は嫌でしたが、母の趣味だったようです。

I: ハイライトとは？

M: 髪の毛の先っぽをいろんな色に染めるのです。先っぽだけ。青とか赤とか。私の場合は黄色。その頃の韓国系の流行で、髪の毛を伸ばして、全体じゃなく、一部だけ伸ばして、その先っぽを染めるんです。母が私にそうしたかったんです。覚えているの

は、2000年から2000年代半ば（2005年）あたりにはアジアからの、韓国とか日本からやってきた男子は、変（weird）な髪形してて、すごくフェミニンで。

I：そうした髪型は、こちらでは人気になりましたか？

M：私たち兄弟（Mさんは兄が一人いる）は嫌いでした。でも、一部の韓国系は影響を受けてました。影響を受けている人たちはすごく影響を受けて。私の友人グループの間では、1/4くらいの方が影響受けていました。そういう人たちはすごいハマっていました。私たちは、そういう人たちをからかったものです。

※ここで、話している対象の性別の確認をしたら、男性について語っているということであった。女性のファッションについては、どんな格好をしていても、女性は皆同じように見えるからわからないとのこと。

I：そういう人たちを「Wannabe FOB」とMさんは呼びましたか？

M：はい。

I：何年のことですか？

M：2000年代半ばから後半にかけてです（2005～2009年）。

I：からかうのをやめたきっかけは？

M：その頃には彼らは大学生になっていて、そうした髪型は嫌がられるとわかったのだと思います。今は彼らもアメリカナイズされています。

I：アメリカナイズされた髪型とは？

M：Fohawkという髪型です。昔はMohawkだったけど、Mohawkは髪を伸ばすのですが、Fohawkはその短い髪版です⁹。

すでに第二章3-3項で紹介済みではあるが、ここで関連するインタビュー、同化への圧力はどのように現れるのかの一端が垣間見えた会話である、(Br/R-1)を再度引用したい。Brさん、Rさんと、筆者を含めた3人での会話の一部である。

Rさんの話：(Br/R-1)

I：Rさん、ご自分の服装は、アメリカナイズか韓国風なのか、どこらへんだとお考えですか？

R：半々の真ん中らへんです。アメリカナイズされようと意識しています。

I：アメリカナイズされた服装をする理由はなんでしょうか？

R：仕事だと、いろんなバックグラウンドの人々に会う機会があります。韓国人だけでなく、仕事以外でも、多様な人々と交流する機会があるので、アメリカン・スタンダードのが良いと。

I : 韓国ファッションだと悪目立ちすると？

R : まあ、そんな感じです。

ちなみに、このときの R さんの髪型は Fohawk であった。C さん (C-1) が言っていたような、アメリカ的に歩み寄った韓流ファッションという一面もそうであるが、男性のファッションについてはアメリカ化への同化の方が強いのかもしれない。聞き取りの節々で韓流は特に若年の女性を中心に巻き込んでおり、男性も一部は影響を受けているが女性よりかは遠巻きであるような印象を受けた。

ふたたび、第二章 3-3 項ですでに紹介済みの (Br/R-0) になるが、文脈上の都合で再度ここで引用する。

Br さん、R さんの話 : (Br/R-0)

(韓流の LA での影響をたずねていて)

Br : LA 以外から来る non-Korean の人々とたくさん会う機会があるのですが、私が韓国系だと知ると、「ああ、K-Pop」という反応を最初にするので、韓流の影響で確かに韓国の知名度は上昇したと思います。

(中略)

I : 韓流が西海岸にきて、韓国系が魅力的だと思われるようになったと思いますか？

R : 非韓国系がセレブリティを見て魅力的だと思うことはあるでしょうが、韓流のセレブリティと一般の韓国人は外見もとても違うので、メディアのせいで魅力的に思われるようになったとは思いません。ただ、韓国系の女性たちは人気です。韓流の前から。

Br : 私の non-Korean の友達の多くは、韓流以降、韓国の女性をより魅力的だと思うようになったと思います。メディアで見た情報が頭に残る何かがあるようで。

R : そうかもしれない。Non-Korean にとっては、韓国の人を見たことないかも。韓流の動画が拡散して、韓国人だとわかるようになったのはあります。でも魅力的に思うようになったかどうかはわかりません。

韓流は、LA のアジア系米国人も含んだアジア系の中の特に女性の間で高く評価される一方で、非アジア系の間での評価は全般に低い。M さんや Br さんのような同化路線をとっている、あるいは R さんのようなとり始めた韓国系の特に男性にとっても、韓流のなかでもドラマと K-POP は一応消費はするが、積極的に取り入れたり、それが好きだと周囲に公言するようなことでもないようだ。

自身も韓国系アメリカ人 2 世である David C Oh (2012) は自らのエスニックな属性を活

かしてアメリカの若年層の韓国コミュニティを調査し、K-Pop が、韓流がどのように受け止められていて、彼らのアイデンティティ形成の重要な要素になっていることを調べている。それによると、若年層の韓国系アメリカ人らのエスニックな境界は3つあり、「FOBs」、「Koreans」、「Twinkies」である。青年期で来米した韓国人（つまり1.5世、年齢によっては1世が該当する）は2世以降から「FOBs」と呼ばれる。「Koreans」というアイデンティティを持つ人々は2世以降で米国メインストリームのポップカルチャーも消費するが、韓国のポップカルチャーの方を好んで消費し、韓国語の学習に意欲的で、韓国に留学したことがあるか、なくても希望している。三つ目の「Twinkies」と他称される2世以降はAmericanとかKorean Americanと自称し、韓国系であることは家系のみで維持されるものだと考えており、韓流を消費しないし、韓流ドラマの内容に共感しづらく、韓国語もほとんど解さない。「FOBs」は振る舞いや文化規範など韓国で生きていなければ身につかないほぼ生得的に近い要件でそれ以外の人々（韓国系以外も当てはまる）に対して境界線を引き、「Koreans」は韓国のポップカルチャーに対する消費度合の高さと韓国語の理解度（これも韓国系以外も当てはまる）という後天的に習得できる要素で韓国性の境界を引き、「Twinkies」を裏切者であると考えがちで、また「FOBs」に対しては信頼できない同胞（inauthentic co-ethnic）という印象を抱いている。「Twinkies」はほかの二つに区分される者たちをアメリカ人であることのありがたみがわからない者たちだと捉えるとのことである。以上を踏まえると、本研究で語ってきた韓国系アメリカ人のなかでもトランスパシフィックなアイデンティティを持つ人々はOh（2012）が紹介している分類でいえば「Koreans」に当てはまる話で、そうではない「Twinkies」というタイプもいることは念頭においておくべきである。先述のMさんは比較的「Twinky」に近い。どの程度の比率になっているのかは、先述のZhou & Bankston（2016: 173）の知見（Asian-Americanというアイデンティティ：13%、Chinese-AmericanなどのOrigin名+Americanというアイデンティティ：32%、Chineseなど、Origin名のみというアイデンティティ：53%）が参考になる。ただし、Oh（2012）の調査はアメリカ南部であり、Zhou & Bankston（2016）の調査は南部より東洋人に寛容な環境といわれるサンディエゴで行われたという違いはある。「FOBs」が境界線としている要件はようするにハビトゥスなのだ。

先述したようにOh（2012）によると、韓国系の人々は非韓国系、特に白人の友人らに韓流についてからかわれたり、拒絶された経験が多く、これらから、韓国メディアは彼らのアイデンティティの重要な一部を構成していると結論している。ただし、Ohは性別によっても大きな傾向があることを付け加えている。韓流を消費するのは女性の韓国系が多く、男性の韓国系は、特に韓流ドラマに対しては冷淡な反応であることが多いという。それは、韓流に登場する男性の描かれ方がアメリカ育ちの人々にとってあまりにもフェミニンに映るからで、女性視点からするとどこがフェミニンなのかわからないという。これは、日本人男性がフェミニンに映ると西洋人から評価されることと重なる。上述のMさんは、そのようなフェミニンな男性性をはね退ける路線の生き方を選んだ例であり、アジア系の中でも韓流

を軸にして親米同化派と、米流に距離をとる派の間の温度差が大きいことがうかがえる。

多かれ少なかれ自分が自己同一性を見出している韓流に対する興味を揶揄われたり、拒絶されたりする経験は、**Ethnic recovery** という現象に結び付けて考えると理解しやすい。あるベトナム系アメリカ人は小さい頃から白人系米国人をアメリカらしさと等しいとみており、自らも白人系米国人のように振る舞っていたが、大学生の頃にはそうした自己をデプログラムするようになった (**Thai 2002; Wong 2010**)。これは **Ethnic recovery / discovery** と表現されるわけだが、このような現象を誘発する契機はこのベトナム系アメリカ人の場合はベトナムへの一時滞在であった。また中国系についても同様のようだ (**Thai 2002; Wong 2010**)。これとよく似た現象が韓国系米国人の若年層では珍しくない。本研究でインタビューをした先述の S さん（韓国系の二世米国人）も拒絶された体験ではないが、大学入学するあたりから自分のエスニックなルーツに引き寄せられたという話を偶然語っていた。

S さんの話：(S-2)

(S さんが、もうほとんど人種差別を感じることはない。10 年前と比べればずいぶんと改善された。企業などでも以前は白人ばかりだったが、今では多くの文化が入っている、という趣旨のことを語っていて。10)

I：確かに企業内などの公共空間においてはそうなのかもしれませんが、私的な関係において差別が消滅したとはなかなか考えにくいのですが、例えば結婚...

S：そう！

I：友人関係とかソーシャル・グループとか。

S：(力強く) そうです！

I：それについてお話いただけますか？

S：話せると思いますが、ただ、私の見方はとても若い視点からですから、100%は答えられないです。でも、たぶん、居心地の良さの度合と、あとは両親から学んだことでしょう。つまり、私の親はともに韓国人です。だから私の頭の中では私が韓国人の女子と結婚することはノーマルなんです。わたしの場合、最近韓国人の女子にしか魅力を感じません。理由はたぶん、メンタリティに植え付けられているんだと、「自分が白人の女子と付き合ったり、ヒスパニック系女性と付き合ったりするよりも、良いだろう (looks nicer).」みたいな感じです。小さい頃から植え付けられている (ingrained) んです。

(中略)

たしかに、高校の時はいろいろ興味が広範だったので (**exploring a lot**)、たしかに白人の女子を何人も好きになりましたし、他の人種もいろいろ好きになりました。でも大学に入って以降はメンタリティが変わったのです。「韓国人の女子と結婚しようか

な」と。こうも言えるでしょう。両親が二人とも白人だったら、白人の女子と結婚したでしょう。自分自身に何か別の特別な要因がない限りは。

(中略)

時々見かけるでしょう、韓国人の女子や男子が、白人や黒人の男子や女子と結婚したり、あるいは黒人が白人と結婚したり、男性が男性と結婚したり、ね？

時々見かけるでしょう？

そういうのが増えてきているんです。他人種を受容です。

韓国の男性か韓国の女子が黒人の女性や黒人男性と結婚したり。

(黒人と結婚した韓国系米国人アーティストを例に出した話があり、こういう状況になるまでには時間がかかったという話。)

私の場合、韓国の文化も関係あります。

(中学の時に中国系アメリカ人の女性が好きだったのだが、中国人に否定的なステレオタイプを抱く祖母の強い反対にあい、諦めたという話があつて)

親の中には他の人種(エスニシティも含められると思われる)との結婚を受け入れない人がいます。血統/家柄(lineage)を汚す(taint)ことになるからです。それが理由です。

(たまに韓国系女性が白人男性と結婚するくらいで、とにかく多くの韓国系が韓国系同士で結婚するという話があり、再び自分のケースに戻る)

たぶん、私の場合、私のメンタリティが両親の状況(韓国系同士で結婚している状況)がわかるようになったからです。それで、両親の状況だけでなく、祖父母の状況も同じで、従妹たちも、叔母や叔父も同じで。それで「オーケー、おそらく自分も韓国系と結婚することが『正しい』んだろうな」みたいな感じです。自分自身についての理解が深まるにつれて(as I had more intellectual understanding of myself.)そういうことです。

I: 今一つまだわからないのですが。

S: 子供の時には、,, 私が気づいたのは,,, 学生の時はずりにいる友人らにオープンです。一緒に出歩く友達とかいろんな(人種・エスニシティ)人がいました。

今より若かったときは、他の人種の人にも魅力を感じました。でも年齢を重ね、「自分は何が好きなんだ?」「自分は何とともに育ってきたんだ?」みたいなことです。家族の名誉/家柄(stature)をよく考えて、自分のソーシャルな stature(名声/名誉)だけを気に掛けるのではなく。

I: その Korean には韓国人 1 世や韓国の韓国人も含まれますか?

S: 含まれます。けど、できれば韓国系米国人 2 世以降がいいです。相手の両親と言葉が通じないと困るので。

以上のように、常に「両親」や「祖母」というのがキーワードになっている様子が見える。

それは自分の両親であったり、(将来の)結婚相手の両親であったり。自分の趣向が両親に合わせて無理なく変わっていった様子も少しわかる。その過程で **Ethnic recovery** と符合する現象が現れているのも明確である。

Oh (2012) は、**Ethnic recovery** という言葉こそ使っていないが、類似の現象についてこう語っている。アジア系アメリカ人のアイデンティティ形成の過程において、最初はエスニックなアイデンティティはなく、白人社会の諸価値観の内在化から始まるが、ある時点でドミナントな社会への全面的な参加が不可能であることに気づいて、エスニック性を強めるという。アミン・マールーフ (Maalouf 1998) を引いたバウマンの次の断定を想起させる。

「マールーフの結論は、移民は、出身国の文化的伝統が受入国で尊重されていると感じれば感じるほど、嫌われることも憎まれることもなく、拒まれることも恐れられることも差別されることもなく、地元住民と隣り合わせの状態で自分たちのアイデンティティを保つことができる、というものである。」 (Bauman 2011: 99)

また、受け入れ国の文化的選択肢が彼らにとってより魅力的であればあるほど、自らの個性を頑なに保とうとはしなくなるという。

Ethnic recovery という言葉を使う Hung Cam Thai (2002: 66) や Wong (2010: 130) は、ルーツ国との接触を一つの契機としている。S さんの場合は、もちろん彼も韓国を訪れた経験はあるが、彼の場合は、むしろ両親、親類からの規範が強く (そしておそらく韓国系の長老派教会コミュニティもそのエスニックな紐帯に場と機会を提供していると思われる)、そこからエスニックなアイデンティティを強めた。つまり、ドミナント社会から部分的に拒否された体験と認識と、そして両親や親類、エスニック・ルーツから引き留められる環境が引き起こした境界線であると言える。

Ethnic recovery という視点から捉えるならば、**New 2nd generation Asian Americans** が著しく増え始めたのが 80 年代と 90 年代であるので、彼らが大学入学前後の年齢に達した時期と、AZN プライド、そして K-Pop 時代が起こった時期がちょうど重なる。

すでに登場した韓国系 2 世米国人男性の M さんは、基本的には、自分をアメリカ人であるととらえていて、アジア人だとはほとんど思っていないとのことで、韓国からきた韓国人からは、自分はアメリカ人だと見られる。しかし、アジア系以外のアメリカ人の中にいると、たとえばライフガードの職場だと M さんは唯一のアジア系で、同僚はすべて黒人かヒスパニックなので、周りの人からアジア人だと思われる。その都度、折に触れて自分は彼らと同じアメリカ人であることを証明し続ける必要があるとのことであった。

エスニックリカバリーとかぶる現象について話す S さんとは異なる話を M さんから聞くことができた。

M さんの話：(M-3)

(人種的・エスニシティ間の緊張関係についてたずねていて)

M：(人種・エスニシティ間の) 緊張関係は薄れつつあります。すべてのエスニシティ間で、2010 年頃からです。2000 年代中盤から 2010 年の間にそうなってきました。

I：なぜそうやってきたのでしょうか？

M：ソーシャル・メディアだとおもいます。テクノロジーが発達して、YouTube とか、ネットであらゆることを検索できるし、他の国の様子も見れるし。正直、そうしたテクノロジーがくる前の 2000 年あたりの頃は、緊張関係がまだ強かったように思います。テクノロジーによって、他の国、文化の人々が良い人で、攻撃してこないと思うようになって、じゃ、友達になろうかと。年齢が上がる必要があります。年月と教育。年齢を重ねると、より理解が深まるようになるのです。

I：年齢を重ねるとおっしゃいましたが、高齢になると偏見も強いのでは？

M：そう、その通りです。それは彼らが育ったのは違う文化と言ってもよいから。彼らは接する機会がなかった。でも、今私が言っているのは、他の種類の人々と一緒に過ごした時間、違う文化に触れている時間が一定の長さ以上である必要があるということです。オープンマインドになるには、慣れるまでに時間がかかるから、年齢が関係します。慣れると「変 (weird)」とか感じなくなります。

I：そうすると、ソーシャル・メディア上で異なる人々を見たりしている時間が長いということですね。

M：メディアと、あとは学校の中で。

生まれてから高校までコリアタウンで過ごした M さん自身には、どういう変化があったのかという語りは下の通りである。

I：(M さんの子供の頃のライフストーリーを聞いていて)

M：小さいころは、まだ韓国と黒人の人種的緊張が高かった。たいていのアジア人は (co-ethnic で) 集まります。だから私もアジア人に囲まれながら育ちました。韓国人は人種差別的で、アジア人は人種差別的で、意識的にそうしようとしてるわけではないのですが、彼らのメンタリティは、他の人々が悪いことをしてくると恐れていて、だから他の人々を信用しないのです。他のエスニシティと人種。

I：他の人々というのは、アジア人も入りますか？

M：他の人種 (マ)。日本人、中国人とか、フィリピン人とか他のアジア人さえ信用してません。人種間の緊張があります。コリアタウンにいるのはほとんどが韓国系です。他のエスニシティの人とも交流がありますが、友達になっても、親しい友人にはなりません。一緒に出かけたり、話したりしますが、私の場合、高校まではコリアンが私

の主なソーシャル・グループでした。

I: 今、おっしゃったコリアンというのは。

M: 韓国系アメリカ人です。

I: 韓国系アメリカ人ですか。韓国からの韓国人とはあまり交流がなかったのですか？

M: それはもう一つの人種間の緊張です。「Fresh Off the Boat」という用語を聞いたことあるでしょう？あの頃、学校でその用語を始めて耳にした時のことを覚えています。私は韓国に多くの従兄弟がいるんですが、私が彼らに会う機会があると、皆が（「FOB」の人々について）悪いことを言っていました。私の従兄弟なのに。家族なのに。高校のとき、私はそれがおかしいと思い。同じアジア人なのに。同じ人間なのに。どうしてヘイトするのかと。それで、他の世界もみようと思うようになりました。友達になろうと。今では、韓国系アメリカ人のほかにも、非韓国系アジア人や、非アジア系、ヒスパニックとか、もちろん韓国からの移民にも多くの友人がいます。

(中略)

M: 大学になって、寮に入ったんですが、そこでいろいろな種類の人々に囲まれて暮らすようになりました。黒人、ヒスパニック、アルメニア人とか。白人も、日本人、中国人、フィリピン、ベトナムなどいろいろ。それからです。いろいろな種類（のエスニシティ）の人々と友達になったり、連れ立つようになったのは。

ソーシャル・メディアが果たした役割についてはここでもたびたび現れたが、項目 8 にて論述する。上記の語りで、重要なのは年齢があがると異質性にたいする耐性が養われるという話である。いっけんしてエスニックリカバリーと矛盾しそうではあるが、同時に存在しうることは次の S さんの **to be a more well-rounded person** という規範から推測できる。S さんは、(S-2) にみるように、エスニックなリカバリーを経ているが、恋愛・結婚以外の文脈では同時にオープンでもある

S さんの話：(S-3)

(LA 蜂起についてたずねていて)

S: (LA 蜂起直後のことは生まれたばかりで) 私の記憶にはないのだけど、人種間の緊張についていうと、私がここで育って、学校に通ったりすることで、学んだのは、他者に敬意をはらうことです。他の人々を受け入れることです。それが学んだアメリカ的なことの一つです。(中略) 私がこれまでに耳にした最も賢い言葉の一つは「**to be a more well-rounded person, you have to learn other cultures.**」ということです。

S さんは、折に触れて何度かこの規範をいっていた。異なる文化の人々と接するような機

会があれば飛び込むようにしているとのことだ。それで S さんは、高校に入る以前は韓国からの韓国人と交流がなく、「白い」地区で育ったし、家族とも英語でしか話さず、韓国語もかなりつたないため、**well-rounded person** に近づくために韓国からの韓国人とできるだけ交流するようになったという。高校までコリアタウンで育ち、大学以降は非韓国系の世界と交流を深めている M さんと、白人が集住する場所で育ち、高校以降から韓国系米国人および韓国人 1 世の世界にコミットするようになった S さんは、同じ KA2 世でもちょうど正反対の順で異質性にオープンな今に至っている。

7-4 残る境界線

本稿の主旨の中で言えば、第三のカラー・ライン、つまり感覚・価値観の違いにもとづく境界線の存在と、またそれが一部で溶解し始めていることについてここまで記述してきたが、それでもまだ残っていることについて再度指摘したい。ここで扱う境界線は、アジア系の 1 世および 1.5 世のアメリカ度が相対的に不完全な人々と、2 世以降のアジア系米国人の間のもの。そしてアジア系 2 世米国人と、他の米国人との間のものの、二種類を想定している。

韓国系 2 世米国人の S さんは、あえて、人種／エスニック・カテゴリ毎にまとめて感覚的な溝について話してくれた。至極手短に紹介すると、ヒスパニック系（1 世と 2 世以降の区別なく）は、ヒスパニック系同士でつながりをもっていることが多く、互いにスペイン語で会話するので入れないし、スペイン語の響きが下品（**vulgar**）に聞こえること。また、白人（**White Americans**）とのかかわりは、楽しいのだが、自由すぎるし（**too free will**）、計画的に行動しないところに違和感がある。中国系（**Chinese**、1 世と 2 世以降の区別なく。また台湾系と本土系の区別なく。）の人々とは一定程度の居心地の良さを感じるが、しかし食べ物が合わないことと、時にとても失礼な発言をダイレクトにぶつけてくるところが合わず、交流は限定的である。日系人はそもそも数が少ないので遭遇しない。韓国系米国人は計画性あって、あまり騒がしくなく、宗教的にも合うし居心地が一番良いということであった。

また、2 世韓国系米国人視点からの「**FOB**」の否定的な有徴性について次のような語りを得た。

S さんの話：(S-4)

言語障壁は完全には無くならないため、今でも出かける行き先は 1 世（1.5 世）と 2 世以降では異なるという。次に大きな障害である文化的障壁については、今でもあるという。例えば、**Korean time** と彼は呼んでいたが、2 世以降やアメリカ人一般は時間厳守であり、遅れても 10 分程度であるが、1 世は 30～60 分遅れるため、彼は気分を害するとのことであ

る。

(※言語的側面以外で境界を作っている要因について聞いていて)

S: おそらく私たち (2世以降と1世) を隔てているのは、文化的な違いです。アプローチしようとしてもすぐに壁がある。

(中略)

S: コリアンは何か居心地の良いものを見つけると、そこから出ません。(後に明らかになったのだが、これについては部分的に2世の自分まで含まれるときがあるようだ。)

(中略)

S: (中学生の時に、中国系米国人2世の女性を好きになったときのことを再度引き合いにだし、) (Sさんの) 祖母が反対した。韓国文化は、他のエスニシティと話すなどという感じがある。

(また、友人の一人の1.5世韓国系米国人を引き合いにだし、)

S: 彼は他の韓国人(1世ら)の前だと振舞いかたが違います。静かに座ってるだけなんです。私がよりアメリカ的であることを知っているの、私の前だともっとオープンです。

また、すでに前章の第二章でも取り上げた(S-0)が、再度記載する。Sさんは、2世韓国系として、LAに代表されるアメリカのリベラリズムを不快に思っていることを語ってくれた。

Sさんの話: (S-0)

(政治的信条について尋ねていて)

S: 共和党を支持しています。同性愛結婚に反対しています。私は保守的です。

I: LAだと... つまり....

S: LAはとてもリベラルなので、LAの全体の雰囲気には反感を覚えることがあります。民主党の言う「寛容」の中に非寛容さがあるのが嫌いです。彼らの言い分は、結局、彼らの意見に同意しろ、と言っているのです。本当に寛容ならば、意見の不一致も含まれているはずですよ。

上記のSさんの同性愛に反対するという信条が単純に共和党支持者であることに回収されるべきではなく、もとより、韓国系でしかも熱心なキリスト教徒であることに帰属して解釈すべきと思われる。これは、韓国系とそれ以外のLA一般の間で引かれていそうな境界線であった。LAではなく、保守的な地域であればこれとは別の点で境界線が引かれていたであろう。

もう一つ、これと似たことで境界線があらわれたケースがある。Oさんは1.5世代韓国系

で、11歳の時にボストンに、その後、大学からLAに引っ越している。

Oさんの話：(O-1)

I: Oさんが十分にリベラルでないと思われて、(交流を)避けられたという経験はありますか？

O: あー、すごいいい質問ですねー。経験したことがあります。政治的な意見の対立とかあると友達になりたくないとか。なので、私の答えはYESですが、いつ起こったのかわからないです。

I: ですよね、わかりにくいですよね。

O: はい、とてもわかりにくいです。私に接近してきた人が、その後、接触を避けるとかあります。

I: クラスの中でですか？

O: クラスの中とか、ええ、たいていがクラスの中です。

I: Oさんのどのような発言に対して彼らは居心地の悪さを覚えて、Oさんを避けるようになったのですか？

O: あー————。今はもうしませんが、私が自分の価値観を押し付けているときです。私は伝統的な結婚観が良いと考えているので、同性愛の友達に会った時、彼らは怒ってしまい、それ以来コンタクトありません。今は、自分の意見を言わず、ただ、同意できないと言うだけにしています。

I: それが起こったのはいつのことですか？

O: 4年前、大学一年生の時のことです。

韓国系は1世にしても2世にしても、同性愛や結婚について保守的な立場をとっていることが多いのか、それとも宗教的な帰属に回収されるべきなのか、現段階では判断できない。しかし、Sさんによると、ロサンジェルス郡において、韓国系が1世でも2世でも全体の半数程が長老派教会に通っている印象だという。今回紹介した韓国系のインタビュー協力者はKさんを除き、全員教会に通っている。また、あちらこちらに韓国系が集まるメガチャーチがあり、いずれも何千人も信者を抱えている。韓国でのキリスト教徒率が2割程度なので、本当に50%近くキリスト教徒だとしたらLAの方が多いが、高(1993)や、春木育美(2015)によるとさらに高い比率で、在米の韓国人は70%がクリスチャンであるという。

次のJさんは、他の協力者よりも少し年代があがり、立場も異なる。少しだけ別の視点からの語りを提供してくれている。2世であるが、最も韓国に近い位置から話をしてくれるJさんだが、それでも感覚の違いには閉口することもあるようだ。

Jさんの話：(J-2)

I: それでも未だに FOB が批判されている側面は为什么呢？

J: ぎこちなさだと思います。ほら、キムチ食べた後、歯を磨くの忘れるとか、ほかには、ほら、どんなことを話すことが適切なのか知らない。アジアの人々は何か思ったとき、なんでも聞いてしまえと思っている。教会に女性が夫と一緒にいない場合、「旦那さんどこなの？離婚してるの？」といきなり聞いたりすることを恥ずかしいと思わないとか。アメリカ（社会）では心のなかで思うかもしれないが、言わない。すごくソーシャルな意味でぎこちない (awkward)。「FOB」と言われる人は社交的な品性 (social grace) を欠いています。

また、FOBと言われるとき、勉学のことしか考えていないと思われる。ソーシャルな側面を軽視している。アイビーリーグ校に入ることしか頭にない。多くのアジア人はトップレベルの大学に入って喜ぶが、入ってから深刻な鬱になって自殺してしまうこともあります。

上記では振る舞いによるソーシャルな場での不適応が明確に述べられており、第一章で論じた待避的人種差別そのものを、米国ではアジアからの「FOB」が今なお経験していることを示す。

すべての会話は収めきれないが、彼女の語りの中には、アメリカにある韓国スパが非アジア系にも好評であること、アジア系の女性が他の人種・エスニシティよりも最も人気があること、彼女自身が子供の頃はアジア系というだけでイジメにあったが、今は教員が目を光らせているため、少なくなったこと、また、職場においても、ステレオタイプの説明、およびしてはならない項目（例えば、黒髪を珍しがって触っていいかと頼まないなど）の研修が設けられる風潮を挙げていた。この研修とは第二章で触れた EEO&AA スペシャリストの仕事の一環である。

以前はエキゾチックであることで好意的に見られることはあったが、ここ 5 年で（インタビューは 2015 年に行われた）、今は仕事人としても、デートの相手としても「人」として好意的に見られるという。「... definitely has happened in the last 5 years,, that now we are being seen as people. We are in fashion now!」（Jさんインタビューより）。

また否定的な側面については、アメリカの教育は think outside the box が強調され、クリエイティビティが求められるが、アジア系の教育は詰め込みに力点が置かれているためか、think outside the box の訓練が足りていないとの印象を彼女自身持っていて、東アジア式の教育方針では、クリエイティビティの育成に重きをおく教育が不足していることも、米国の産業界でガラスシーリングが消えない一つの要因であると言っていた。

また、彼女自身は FOB らしさの見せ方次第で立場を変えられるという考え方をもっていた。

「ステレオタイプを打ち破ることは必要ですが、でも同時にステレオタイプは希望にもなります。肯定的にも否定的にも使えるからです。使い方次第。」（Jさんインタビューより）。

おそらくバトラーのパフォーマティビティと類似の戦略であると思われる。すなわち、FOBらしきとは社会構築物でしかないため、ステレオタイプの自己引用ではなく、エージェンシーによるズラしで、ポスト構築主義の前提を引き継ぎつつも、社会決定論的な閉鎖性に陥らない戦略である。

8 トランスナショナル・メディアとアジア系米国人

本章の冒頭で立てた仮説の第3の要因を最後に述べる。YouTubeなどがどのように脱領域的な拡散媒体として機能していたかについて、すでに述べたが、エスニック・メディア、ディアスポラ・メディア、トランスナショナル・メディアとエスニック人口のアイデンティティについてももう少し論述が必要に思われる。

東アジア系人口のメディアへの露出の頻度は特に東アジアからの移住民やそこにルーツを持つエスニック人口の間では時折話題にのぼる性質のものである。LAの東アジア系にとって近年で特に重要とみなされている出来事に、「Fresh Off the Boat」というタイトルの連続ドラマシリーズがある。2015年2月から現地のメジャーTVネットワークであるABCで放送されており、プライムタイムに放送されるアジア系アメリカ人が主人公のシットコム¹¹としては1994年の1シーズンで終わってしまったMargaret Cho¹²の「All American Girl」¹³以来である。これはアメリカで暮らす台湾系移民の家族が中心で、主人公は2世の台湾系アメリカ人の少年である。このTVドラマは現時点でシーズン3まで続いていることから、番組の人気ぶりがわかる。この番組に対するアジア系アメリカ人の関心の高さは例えば、LA在住のアジア系がこのTVドラマを礼賛するためその初回放送を集まって観ようというイベントがあったが、長蛇の列ができたらしい(Down Like JTown 2016)ことにも現れているし、またロサンゼルスにいるアジア系アメリカ人と話すときあちらからこの番組についての話が出されることが多い。この番組に限らず、アジア系アメリカ人は米国内の主要メディアで描かれるアジア人について一般的に関心があるといえる。「Walking Dead」というこれも人気のドラマシリーズだが、主要登場人物の一人に韓国系米国人がおり、従来のアジア系はステレオタイプのあまり良くない役柄であったり、良い役柄を振り当てられていた場合でも早々と死ぬ役であったりすることが批判の対象となってきたが、この「Walking Dead」上では良い役回りを与えられているし、簡単に死ぬ役でもなかった。また、2015年放送のMarvel系連続ドラマの「Daredevil」ではJapaneseはChineseとは違い、中国語を特別勉強したわけではなければ理解しないという事実が番組の進行上も登場人物同士の会話の中で指摘されるという演出がある。これも以前までは東アジア系は一枚岩のように考えられ(Lee, E. 2015: 7)たり、扱われることが当たり前であった時代と異なる様相を示している。このように映画やTVドラマのような主要メディアでは限定的だが露出が増え、以前よりかはましな扱われ方をするようになったのだが、アジア系米国人の人口割

合は6%程度ということもあって限界がある。

そのため、米国メディアのメジャーネットワークでの露出が少ないことから、東アジア系はYouTubeを積極的に活用した。YouTuber¹⁴の視聴者数別ランキングでの上位には東アジア系が不均衡なほど多いことから多少なりともその雰囲気は伝わってくる（東アジア系が作る動画は米国生まれが作っていてもアジアの色があるため、通常視聴者も東アジアに関連する人々が多い。つまり、制作側のみならず視聴者側もアジア系が不均衡に多いだろうこと）。

その代表例には日系ハワイアン系のNigahigaや、中国系米国人ISATV (Wongfu) など枚挙に暇がない。彼らが作る動画を見知っている東アジア系米国人は若年層では少なくないようで、誰もが聞いたことある、見たことあるという程度には関心が示されている。

このような変化は非アメリカ的であっても許容・寛容な受容のみならず、憧憬の対象になる範囲内に東アジア的なモダニズムも少しずつではあるが、入ってきたということではないだろうか。もちろん、「アジア的」なる範囲、内容を分節化する言説を自ら産み出す自己オリエンタリズムの問題もあるのだが、少なくとも外から一見するだけではそれは問題にされにくい。むしろ第二世代以降の東アジア系米国人が文化的にエンパワーされる契機になるケースはあるようだ。それについてシカゴの韓国系2世米国人女性とのインタビューを参照したい。

まずは、エスニックなバックグラウンドとの距離感について尋ねた。Jさんは両親の出身国である韓国文化に強いつながりを持っている。

Jさんの話：(J-3)

I：ご自分のエスニックバックグラウンドとのつながり (connected to) はありますか？

J：強いつながりがあります。みんなが私のことをFOBと呼ぶほどです。アジア系のコミュニティのなかで私はFOBと呼ばれます。

I：実際には(アメリカ生まれなので)FOBにはなれないので、エスニックアイデンティティを大切にしてくれませんか？

J：はい、もちろん。アジア料理を作るし、韓国語は流暢ですし、韓国を訪れるときも居心地よいです。

(中略)

※AZNプライドと昨今の韓流の違いについて尋ねようとしているとき。

I：それで、Asian Pride (※Jさんは西海岸でないからか、AZNという用語が通じなかったため) が2000何年頃かに消えていった後,,, (遮られ)

J：(遮りながら) いや実際、実際、それが今戻ってきたと思わないですか？韓国ド

ラマとか、いろいろ？

I: その通りだと思います.

J: ええ、確実に戻ってきてます. **K-Pop** とか韓国ドラマとかが溢れていて、アジア的なものの人気すごいです.

上記に見るように **AZN** プライド時代から昨今の **K-Pop** 時代への連続性があると捉えている. また、次では **FOB** という蔑視語が昨今では肯定的な意味合いで用いられるように変化したと切実に感じている.

J: 私の子供時代、大学時代 (20 年ほど前と思われる) においても、**FOB** というのは大変な侮辱だった. **FOB** といわれるのは、オタク (**geeky**) で浮いていて (**uncomfortable**), **FOB** であるだけで簡単にかからかわれるようなものでした. アクセントや、服装、**FOB** のように振る舞うとか.

でも、今は **FOB** と言われることは良いこと (**something to embrace**) だし誇りに思えること.

だって、アメリカの文化のなかですごく人気だから. 韓国ドラマは人気だし、**FOB** あるいは **Fresh Off the Boat** というタイトルの TV ドラマまである. 中国人家庭の話なのだけど・・・

I: エディ・ファン¹⁵のドラマですよね!

J: そう! 大変人気です. すごく面白いし、ある意味で少し人種差別的ともいえるが、でも、**Asian pride** です. どれほど私たち (**we**), 私たちの両親 (**our parents**) がアメリカで成功しようと懸命に努力したか. どれほど私たち、子供として、あるいはティーンエイジャーとしてアメリカの文化に馴染もう (**adjust**) としたか、アジアの文化もアメリカの文化も維持しようとしたか. 明らかに私たちの誇りです. また別のショーもあって・・・(中略).

J: それで、(アメリカ人全般は) アジア人の男と付き合いたい (**date**) と思っているくらいまで人気です. アジアの男性は韓国ドラマや日本のドラマに出てくるような人々だと思われています.

I: それでもアメリカのメインストリームではそのようには捉えられてはいないですよ?

J: あー、アジア人男性はアメリカでとてもサクセスフルです. 皆、アジア人の男性と付き合いたがっています.

あの、可愛い (pretty) フラワーボーイズ (ドラマ「花より男子」に出てくる校内で人気トップの4人組で **F4** と略される. 日本のドラマがあるが、後に韓国版も作られている.) みたいな人と付き合いたがっています.

それで、アメリカ女性 (おそらくは白人層を指していると思われる)、黒人女性、ヒ

スパニック女性は、最新の韓国ドラマをすべて知っていて、韓国や日本に行くのが好きです。そこで付き合えるようなアジア人男性を探したりします。以前より多くの大学教員たちがアジア人男性（付き合う対象として）を探しています。

それから、高校では非アジア系の学生もアジア人の友人を欲しがっていて、日本マーケットや、韓国レストランに一緒に行こうとして、クールなことなのです。

Jさん自身、人種差別に悩む女性のための運動に参加していたり、また先述した、当インタビューの後半で述べられた「FOB」らしさへの偏見についてのJさんの語りを考慮すれば、上記の意見はアメリカの全体像とはおよそ言えないのだが、それでも、この韓国系2世米国人、Jさんにとって、どれほど最近になって状況が変わったと感じているか伝わる。インタビュー中で、このような変化は2010年くらいに明らかになったと話していた。Jさんの言うこの2010年あたりの変化というのは、他の協力者が述べていたAZN→K-Pop時代のシフトではなく、より広範な他のエスニシティ／人種も含めたマジョリティ社会からの扱われ方が軟化したのが2010年だという意味である。この2010年あたりの現象についてはMさんも同様のことを言っていた（M-2）。

I：ドラマ **Fresh Off the Boat** の主人公家庭は、アジア系移民の家庭としてはとても裕福である設定で、大きなレストランのオーナーであったりしますが、当時の実際のアジア系移民の多くはそのような家庭は少ないし、ドラマの中で移民一世という設定なのに、FOBのような振る舞いではないですが。

J：そう。そうなんだけど、でも明らかに誇れるものです。エディ・ファンの家庭が裕福なのは知ってるし、ビジネスオーナーだし。でも、あの子供のお米の話（小学生の子供が学校のランチに母の手作り中華料理を持って行ってからかわれるエピソードを指している）はすごくわかる（**definitely familiar**）。だからこうしたエピソードがメインストリームのテレビ番組で放送されるということはとてもエンパワメントになっています。

Jさんの話：(J-4)

Jさんはまたインタビュー後のEメールの中で次のように語っている。アジア人はTV番組でも露出があり、リーダーシップを発揮する役柄で描かれる（ウォーキングデッド、グレイズ・アナトミー、セルフイー、**Fresh Off the Boat** など）。また、K-Popもメインストリーム音楽であるという。

最後のK-Popが北米でメインストリームであると捉えているのは、すでに見たように必ずしも全体を言い表しているとはいえず、彼女のこの言は、むしろ、エスニックなバブル（エスニック・エンクレイブを含む概念だろうが、現地の人々はバブルという言葉の方を用いる。）の内に入ればマイノリティであるという実感を抱かないことを示していると言えるだ

ろう。実際、彼女の親しい友人らはたいていが中国系か韓国系である。また、職業も大学教授であるためバブル外でも一定の敬意が払われることが予想される。

また、どの程度自分が「FOB」らしいと思うのか、という質問に対して次のように回答してくれている。「韓国のドラマを頻繁にみて、韓国の友人と出かけ、カラオケに行き、アジア料理を食べ、韓国のクラブ（踊る方）に行く。また、K-Pop を聞き、韓国料理を作り、ラーメンパーティを開く。夏には日光を避けるために皮膚を覆い隠す（日焼け止めクリーム、大きなつばの帽子、手袋、そして腕カバーも）。韓国製の化粧品を使用し、韓国で流行っているファッションや美の最新トレンドをチェックしている。韓国の雑誌、本、ジャーナルを読むし。また、私の親しい友人らはたいてい韓国系か中国系なので、お互いにアジア人のように話すし、ふるまい、笑い方をする。それから韓国のゲームをパソコンやスマートフォンでプレイする。」ということであった。日光を避けるための諸々の努力の仕方は、およそ米国人であることを疑ってしまう程で、通常はアメリカの多くの女性は日焼けを好む（もっとも、近年の健康志向により日焼けを避ける兆しはあるらしい）。「韓国と日本の製品とスタイル（様式）にとっても影響を私は受けていて、アメリカの化粧方法やスタイル（様式）は私の趣味に合わないの、そちらの路線はとっていません。（アメリカの方は）服装にしても物腰にしてもダラッとしていて、リラックスし過ぎている。いつでもきっちりとした化粧と服装でキメていたい。」こうしたことからこの協力者がどれほど韓国に近い2世なのかがうかがわれ、また同時に非アジア系との境界線が示唆される。

このインタビューでもインタビュー側から例として出されたように「Fresh Off the Boat」というTVドラマはアジア系アメリカ人の関心を集めており、メジャー・チャンネルのゴールデンタイムに放送されていることは彼女も言っているように「empowering」になっている。彼女自身のステレオタイプを自ら刷新していくという方針の影響なのか、アジアやアジア系が米国で肯定的に捉えられているというJさんの諸見解には多分に強調されている印象があるが、それでも米国国内のメディアにも変化がみられ、同時に東アジアからのソフト・パワーにも後押しされる形で以前のアジア系移民の同化路線への偏りに変容が生まれていることがわかる事例である。

9 小括

本章では、感覚・価値観の溝が序列をともなって発生しているケースをいくつかのケースから確認してきた。それは、アジア系アメリカ人とアジアから新たに流入した「FOB」と呼ばれる人々の間と、それからアジア系全般とメインストリームアメリカ社会との間にあった。それらの溝は急増した New 2nd generation Asian Americans の最初の波が高校生から大学生あたりの時期に、同じく増加した新規の1世、1.5世のアジアからの若年層の流入と

当初ぶつかり、それがやがて韓流と技術的に発達したトランスナショナル・メディアに媒介されて、アメリカ生まれのアジア系と「FOB」の溝は2005～2008年頃に、アジア系全般とメインストリームアメリカ社会との溝は2010年頃を画期に新しい状況を生んだ。

どちらの溝もドミナント社会から程度の違いはあれど、部分的に拒否された体験と認識が引き起こした境界線であると言える。アメリカ生まれであってもエスニックなアイデンティティへ回帰する若者たち、特に韓国系にとって（全員ではなくとも）、韓流やK-Popは渡りに船であったし、それらがルーツ国で流行している中国や東南アジア系にとっても比較的喜んで消費できる対象であり、特定のポップカルチャー消費度が重要なアイデンティティと境界線になっている彼らにとって、1世と2世以降のそれまでの圧倒的距離感は縮小し、AZNプライド世代や60年代、70年代にも試みられたがあまり成功していなかったアジア系エスニシティ間の距離感も縮小し、K-Popなど韓流を共有している人々の間では汎アジア的連帯が緩やかながらも形成されつつあると考えられる。

同じくハビトゥスによって、序列の下位に位置付けられた『ハマータウンの野郎ども』と何が異なったのか。AZN PrYdeの感覚が、いわゆるストリートの日本でいうヤンキー的な文化特徴を備えていたことが両者のイメージをダブらせる。しかし、後者が人的資本蓄積指向で、職業選択が経済的な浮揚を目指していたことが最初の相違点であり、また、1世、1.5世、そしてNew 2nd generationのアジア系アメリカ人にとっては、(両親の)ルーツ国や、ルーツ文明圏からくるポップカルチャーがエンパワメント効果をもっていたことで、同化路線以外の道、つまり環太平洋経済圏をまたにかけるような行動範囲をもつことができた。あえてブルデューになぞらえて言うと、『学校市場』の規律から自らを解き放そうとしておこなっている努力の産物であるともいえるだろう。こうして彼らの生み出す別の市場とは、独自の叙階決定機関をそなえた」(Bourdieu 1979=1990: 151)ということである。本稿での「学校市場」とは、あくまでもアメリカ的振る舞いを身につけるあらゆる場を指すが、モデルマイノリティというステレオタイプは経済的浮揚を一定程度までは許容する有徴性であったことと、また、別の市場が、太平洋を挟んだ向こう側で巨大化していたということだ。

また、同時にモデルマイノリティという有徴性を付与されていたことが、同化路線一色からの脱却を促したものの、ブルデューがというような既成のヒエラルキーへの反抗が敗北を表す、ということは必ずしも当てはまっていない。前提条件である経済浮揚は一定程度達成されたため、彼らが新たに背負い始めたコンテンポラリーな東アジア的なシニフィエが、＜帝国＞内で別の中心を作りうるのか、それともあくまでも「猿真似」のラベルが貼られるのかによって彼らのヒエラルキーも決定づけられるだろう。

別の言い方をすると、韓流そのものについては、グローバル社会からの承認を取り付けるという韓国のナショナル規模な自己実現活動という一面があったが、アメリカ全体においてその戦略は残念ながらそういった面では大きな成果はあげていないようだ。しかしそれは、韓国系アメリカ人のエスニックプライドの拠り所となり、その強化に結び付いたばかりでなく、Oh (2012) が言うように、部分的には特に白人層から中傷・拒絶され、韓流メデ

アジアがメインストリームではなく、どうしてもなくエスニックなものとして扱われた経験によって彼らとの境界線が明確になった。つまり本稿の主題に照らすならば、第三のカラー・ラインを充分には踏み越えきれなかったことで、西洋世界に包摂される方向ではなく、分裂に作用し、さらに緩やかな汎アジア的連帯を形成したことを確認できたと思う。

また、ひとつ付け加えるならば、韓流が 2 世以降の韓国系米国人に受け入れられる直前に、すでにアジアの多くの地域でメインストリームになっていたこと、その影響を多大に受けたアジアからの新移民の若年層が LA に多く流入したことで、2 世以降のアメリカ生まれの若年層の目にも、ひとつの新たな「普遍的」なものに映ったため、彼らを取り込むことに一定程度成功したのである。

しかし、一方では、韓流側が外部市場の取り込みを目指しているため、より「ユニバーサル」な市場の要求にも答えられるように、自らをすばやく刷新しながら歩み寄る側面も大きく、韓流の異種混交性は西洋的な感覚にも一部で応えており、市場経済の原理が多分に経済力という直接的なハードパワー以外の経路でもヒエラルキーに間接的な影響を与えている。

今後、東側から逆流する文化的発信物が威信を高めるような事態になったとき、ロサンジェルスがこれまでのようにエンターテインメントの〈帝国〉首都としての立ち位置を維持できるかどうかは、そうした新規のポップカルチャーを積極的に取り込んで内部化できるかによるだろう。

注

- 1 とはいえども、メディア・コンテンツ産業は複製、転用が低コストで可能なので、一つのヒットコンテンツができれば大きな収益につながる OSMU 型の高付加価値産業であり、韓国政府の韓流政策の狙いも最終的にはここにあるとみられている（高橋 2014）。
- 2 Cultural discount は文化的割引と訳されるが、詳しくは Francis LF. Lee（2009）を参照。
- 3 もちろん、背景には政策的な位置づけとして、韓流はいわば韓国の工業生産物を含めた輸出産業全体の広告塔としての役を担っているため、政府が無償で東南アジア諸国のメディアに拡散する際には韓国政府が韓国ドラマをいったん買い上げることがあり、日本のように製作者や出演者、アーティストの著作権などが絡むとこのような国家的プロジェクトを展開しづらかったということがある。
- 4 もちろん、アジア系人口の中産階級は平均所得が全体平均よりも高いが、貧困層も多い事実も忘れてはならない（村上 1997）。
- 5 これは模倣する側の主体の属性にもよるが、Cultural appropriation として批判されかねないことを補足しておきたい。
- 6 Google Trends とは、グーグルが提供している情報。検索結果を最大で 2004 年元日までさかのぼり、任意の検索語が検索された件数の時系列変動を地域別（IP アドレスによる）に絞って確認できるサービス。AZN 内・Google Trends による、「AZN」の 2004 以降 USA 内による検索結果（Retrieved August 20, 2016, <https://www.google.com/trends/explore?date=all&geo=US&q=AZN>）。
- 7 言うまでもなくベネディクト・アンダーソン（Anderson 1983=2004）の概念を念頭においている。
- 8 G-Dragon とは、韓国を代表する K-Pop 男性グループ、「BIG BANG」の中でも特に人気の高いメンバーである。個性的な髪型やファッションに身を包んだ風貌が特徴的。
- 9 Mohawk とはモヒカンのことである。Fohawk とは、Faux（フランス語で偽の意）hawk の略で、Mohawk ほどサイドの髪が短くなく、強力ジェル等でスパイクアップしていると Mohawk に近いようにも見えるが、サイドの髪を下げていればそうでもない。
- 10 2014 年 2 月にマイクロソフトの CEO に就任したのはインド生まれのアメリカ人 Satya Nadella。エスニシティはおそらくインド系である。また 2015 年 8 月、グーグルの CEO に就任したのもインド生まれのインド系アメリカ人、Sundar Pichai である。
- 11 「Situation comedy」の意で、ストーリーに多少の連続性がある、コミカルな状況が描かれるテレビドラマ。
- 12 Margaret Cho は韓国系 2 世米国人女性で、著名なスタンドアップ・コメディアン。韓国系のコミュニティを面白おかしく語り人気を博している。
- 13 1994 年放映。Margaret Cho 主演のコメディドラマ。1 シーズンのみで終了してしまった。視聴者に受けないと、多くの TV ドラマは最初のシーズンで終了するのが通例である。逆に、シーズンがいくつも続くということは、視聴者に好評であることを意味することが多い。
- 14 YouTube 上にオリジナル動画をアップロードする人々。趣味程度にアップロードする人も多いが、再生された動画から広告アフィリエイト収入がわずかであるが発生し、幸運にも人気に火がつけば大きな収入となるため、職業的に動画を製作しつづけて生計を立てている人もいる。
- 15 Eddie Huang は、ワシントン D.C.在住の台湾系 2 世米国人のエンターテイナー。有名中華レストラン BaoHaus のオーナーでもある。本章で頻出の TV ドラマ、「Fresh Off the Boat」は彼著作の自伝を元にしてしている。

インタビュー調査の全体像：

第二章と、主に第三章で引用したインタビューは、筆者が 2015 年の 3/30～4/29 と、2016 年、1/26～3/11 の 2 回のロサンジェルス郡での滞在中に行ったものである。唯一の例外は、2015 年 3 月 17 日にスカイプ（シカゴー東京間）でおこなった J さんへのインタビューである。

全員で 53 人。何人かには複数回話す機会を得た。すべてのインタビューで、インタビュー時には筆者の身分を明らかにし、学術的な論文にまとめることが目的であることを伝え、協力者の匿名性を保つことを約束してから、単なるメモ用であることわった上で本人の許可を得て会話を録音した。カフェで話す場合にはごく低価格な飲み物などを提供。カフェでない場合は、近くのフードトラックなどから低価格のものを提供した。何も周囲にない場合は、1 ドルを感謝の印と伝えて渡したが、受け取りを断られた場合は渡していない。

対象者のエスニシティ、および人種、年代、性別は多様だが、中心的な対象にしたのは本稿の主題にあわせ、韓国系米国人の 2 世と 1.5 世の若年層の男女である。聞き取りの内容は、簡単にライフストーリーを聞き、その後は相手の属性を勘案しつつ次の質問を適宜なげかけた。AZN プライドについて、「Wannabe FOB」について、韓流のドラマ、音楽、ファッション、コスメティクスについて、それから韓国系の 2 世以降と 1.5 世／1 世の間の感覚的溝、または韓国系と非アジア系メインストリームアメリカ社会との感覚的溝についてたずねた。

第四章 エスニシティ属性を超えて画一的に共有されている「普遍性」:「モダン」さの序列

1 Los Angeles 郡での調査

1-1 調査と分析方法上の制限

本章では、Los Angeles 郡でのアンケート調査から得た示唆から本稿の主旨を論ずる。

本章の調査は 2016 年 2 月～3 月上旬にかけて、米国のロサンジェルス郡で行った。アンケート用紙は、定評のある「Survey Monkey」を利用して作成したものをネット上に置いた。サンプリングは、民間の市場調査で行われがちな手法を模倣し、公道上の通行人に手当たりしだいに連続で声をかけ、筆者の身分証をみせ、学術目的であること、主旨、およびネット上に置いてある調査票の URL を伝えて、アクセスの上、回答していただけるよう協力を依頼した。最後に特に受け取りを断られない限りは 1 ドルを感謝の印とことわって渡した。口頭で伝えた主旨とは、「My purpose is to measure the possible cultural shift that might be happening in LA county.」である。調査票は英文のみであり、ネイティブチェックを経てから公開した。使用した英文は平易であるものの、LA は英語が極端に不得手な人口も比較的多く、その人々は組み込めていない。調査票（巻末資料 3 参照）の最初のページに記載されているように、対象を現時点でロサンジェルス郡在住の 18～54 歳までとした。

母集団を設定しておらず、したがって無作為抽出もないという制約のため、ここで言及する対象は得られた有効回答数 310 件のデータについてで、本研究全体のあくまでも補足として位置づけている。

上記の理由から分析の手法も極めて限定されることになった。ここで使用した統計解析ソフトウェアは「IBM SPSS Statistics Ver.20」である。

1-2 目的と仮説

本アンケート調査の目的は、LA 郡における東アジア系人口を中心とした多様な人々の社会的距離を示すこととした。社会的距離尺度というと、ボガードス尺度がよく知られているが、エスニック・ヒエラルキーで絞ると、第一章において言及した本研究が参照している Hraba ら（1989）と、Hagendoorn（1993）のオランダでの調査がある。これは回答者自身が他者にたいして主観的に抱いている距離感を問う設問にしている。通常、「I would be annoyed if my neighbors were」のような設問で、「....」の箇所にはエスニック・グループ名の各種が入れられる。また、領域も「隣人」はごく一例で、ほかにも、「上司」、「子供の結婚相手」「回答者本人の交際相手」などがしばしば問われる。

本研究における対象の領域は、「審美的に Desirable」、「恋愛対象として Attractive」、 「(親しい友人関係をもつのに) Comfortable」にした。様々な社会的距離の対象領域があるなかで、これらを特に選んだのは、本稿全体の主旨である第三のカラー・ライン／待避的人種差別、つまり、感覚による境界線の有無・距離をそれらはあらわしているからである。「Comfortable」については close friendship を持つ対象としての Comfortability とい

う感覚距離を問うている。他の二つに関しては、当然ながら、他にも一般的な友人関係の距離や、社交上の密度など多く候補は考えられるが、第三章で論述した、韓流によって魅力的に思われ始める「FOB」、という話とのつながりを意識して、審美的な外見の要素や、恋愛対象としての魅力度も含めた。

本研究でのアンケート調査では、基本的な属性や経歴以外の設問の多くは、回答者自身がつけている距離ではなく、回答者が、他者からつくられていると主観的にいっている距離感をたずねる逆社会的距離を用いている。逆社会的距離尺度 (reverse social distance scale) は、従来の社会的距離尺度を逆方向にしたものとして Motoko Y. Lee ら (1996) が考案している。逆方向とはすなわち、本稿でも採用したように、回答者が主体的につけている距離ではなく、他者によって作られていると感じている距離であり、順とはいささかことなる主観であるが、どちらも回答者の主観的現実を実証的にすくいとることを意図している。「逆」を考案した者たちの目的は、マジョリティの抱く主観的世界ではなく、マイノリティ側の視点を描写することにあつた。

Hraba ら (1989) の調査によって示されたスケログラムはマジョリティが抱く主観的世界を表していたが、本章の調査票が対象にした回答者はエスニック・マジョリティも含むほぼ全てのカテゴリを持つ人々で、主観的世界が不一致する領域と一致する領域を明らかにした。

本稿において、順ではなく逆を採用したのは、回答者のエスニック・カテゴリが多様であり、エスニック・マイノリティとマジョリティが不明瞭であることもあるが、同時に、LA の人々の感覚を考慮して人種差別的な設問になりにくいようにし、協力者が回答しやすくするためでもある。

本研究の調査票にもりこんだ社会的距離尺度は逆ではないものも一つある。「モダン」とステレオタイプで思われていると感じる距離である。第二章、第三章でみたように、「モダン」さとは、「普遍」さでもあつた。これは間主観性のなかで構成される「普遍性」の社会的配分の非対称性を素描する試みである。

したがって本章での仮説その1は、どのエスニック・カテゴリが「モダン」であるかのステレオタイプは序列を成していて、その序列は回答者のエスニックな属性から独立して共有されている、とする。仮説その2は、Foreign-born Korean 視点で、American-born Korean から受け入れられている、とする。これは上述のように、第三章でみた「FOB」が魅力的にみられるようになったことの確認である。ただし、厳密に言えば、データセットのNの極端な小ささのため、世代間比較による擬似的な時系列変化について言及することができないため、この仮説の検証は、後述のように現段階のデータではそもそも実証不可能である。ただ、Foreign-born Chinese/Taiwanese 視点の American-born Co-ethnic と White American 視点での Foreign-born White との諸距離と比較することで、Foreign-born Korean に特有の現象なのか否かだけでも示そうという意図である。

1-3 本章の読み方

最初にデータセットの概要紹介を行い、次いで全てのエスニック・カテゴリを含めた全体考察に移る。そこから本稿の仮説に結びつけた結論でしめくくる。

本稿で頻出する略号：

- ・ Fb: Foreign-born. 米国国勢調査では American-born と Foreign-born という言い方がつかわれており、文字通りの区別を指す。Fb だからといって、たとえば FbKorean が必ずしも韓国生まれを意味するわけではない。ここでは特に表中などでは Fb と省略する。また、変数名の頭に Z がつけられている場合はその変数はケース毎に標準化された意である。
- ・ Ab : American-born. 同上.
- ・ BA : Black American.
- ・ WA, あるいは WhA : White American. 調査票で Non-Hispanic であると注を付してある。
- ・ AbH, あるいは AbHis/Latin : American-born Hispanic.
- ・ AbK, あるいは AbKor : American-born Korean を指す。
- ・ AbC, あるいは AbChi : American-born Chinese/Taiwanese. 中国と台湾は本来は分けるべきではあるが、サンプル数が極端に少ないため、やむなく同じカテゴリにしてある。
- ・ AbJ, あるいは AbJpn : American-born Japanese.
- ・ AbF, あるいは AbFilip : American-born Filipino.
- ・ FbW, あるいは FbWh : Foreign-born White. 調査票で Non-Hispanic であると注を付してある。
- ・ FbWhWE : Foreign-born White (from) Western Europe.
- ・ FbWhEE : Foreign-born White (from) Eastern Europe.
- ・ FbWhSE : Foreign-born White (from) Southern Europe.
- ・ FbH, あるいは FbHis/Latin : Foreign-born Hispanic.
- ・ FbK, あるいは FbKor : Foreign-born Korean.
- ・ FbC, あるいは FbChi, もしくは FbCh/Tw なり FbChTw : Foreign-born Chinese/Taiwanese. 数の上、やむなく区分けしていない。
- ・ FbJ, あるいは FbJpn : Foreign-born Japanese.
- ・ FbF, あるいは FbFilip, もしくは FbFi : Foreign-born Filipino.
- ・ FbSAzn, あるいは FbSSEazn, もしくは FbS/SEazn : Foreign-born South/South East Asian. 数の上、やむなく区分けしていない。
- ・ Mixed : 両親が人種としては類似のルーツのカテゴリ同士の、たとえば両親が AbK と FbK の場合も Mixed に入る。

2 データセットの概観

まずは、エスニシティ・人種カテゴリ別の度数を確認する。通常、国勢調査や **American Community Survey** による回答者のエスニック・アイデンティティの決め方は、回答者の自己認識に委ねられている。しかし本調査での分類方法は、両親のアイデンティティをたずね、そこから本人エスニック・カテゴリを次の 18 つに設定した。不完全回答により本人カテゴリの判別ができないケースは分析から除外し、実際の考察の対象としたサイズは **N=297** である。

エスニック・カテゴリ別、年齢・性別別の度数は以下の通りである。

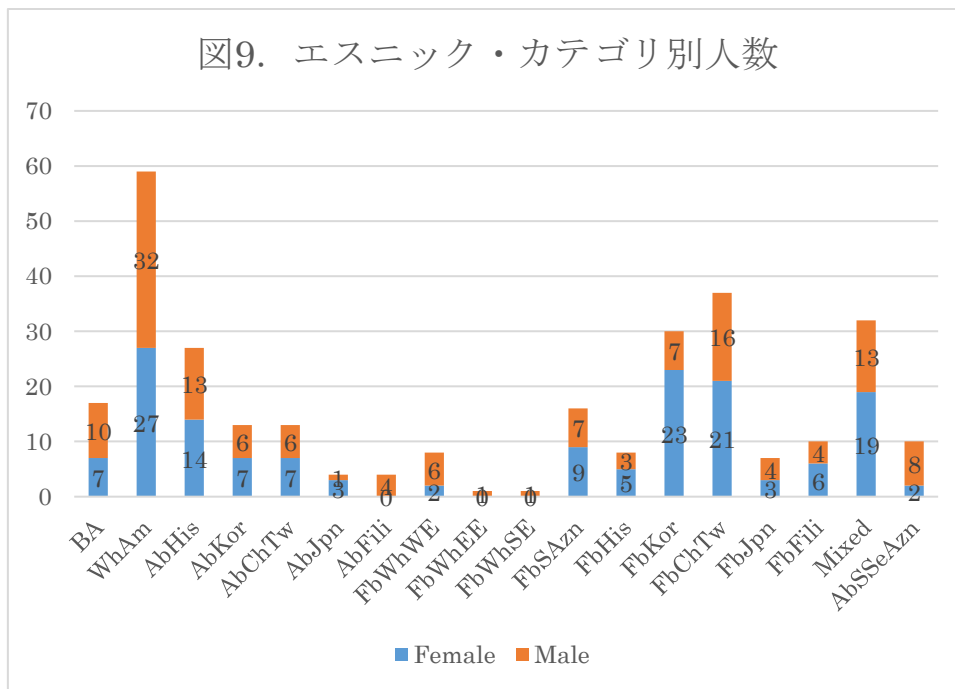


图10. 女性人数 年龄别

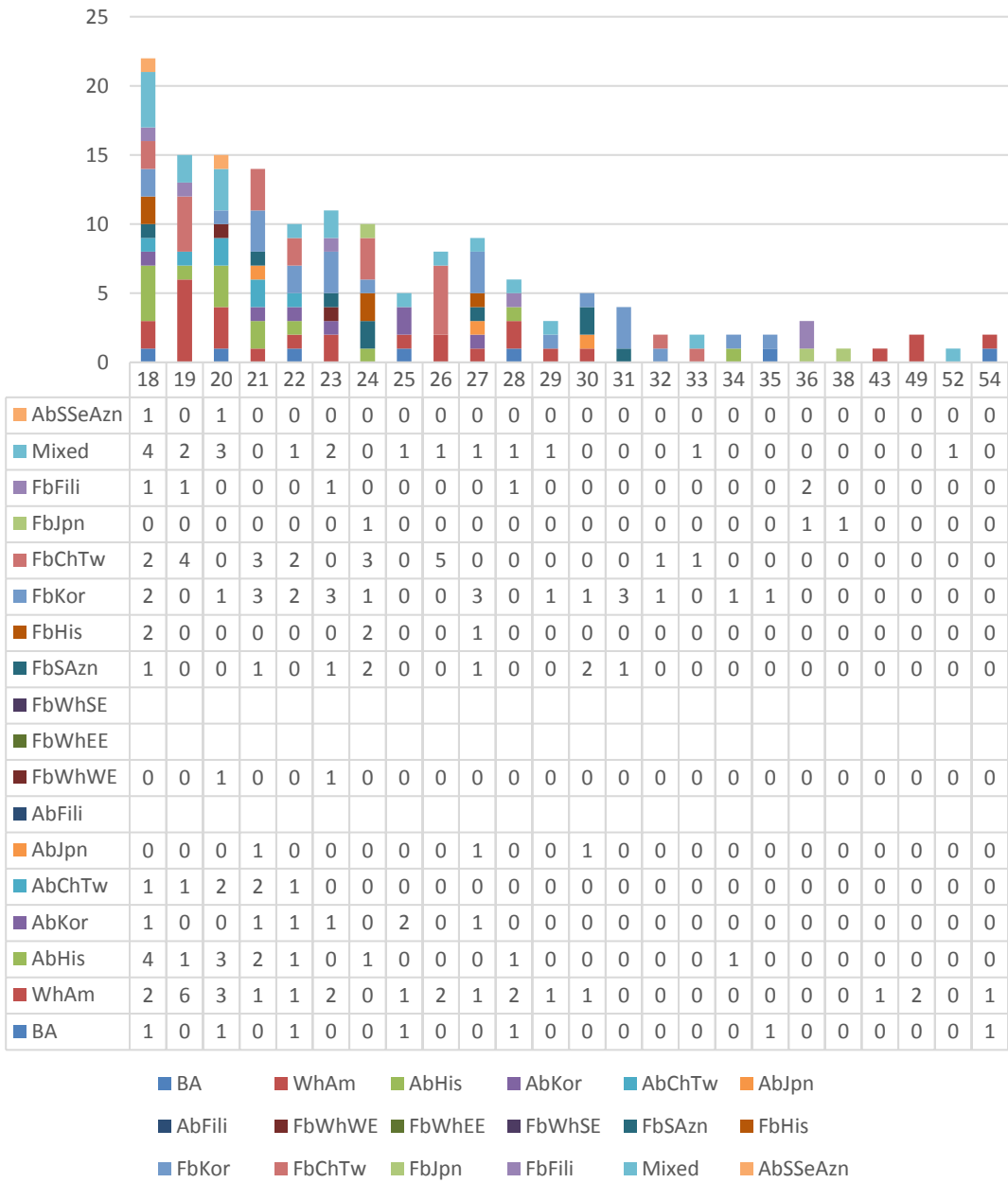
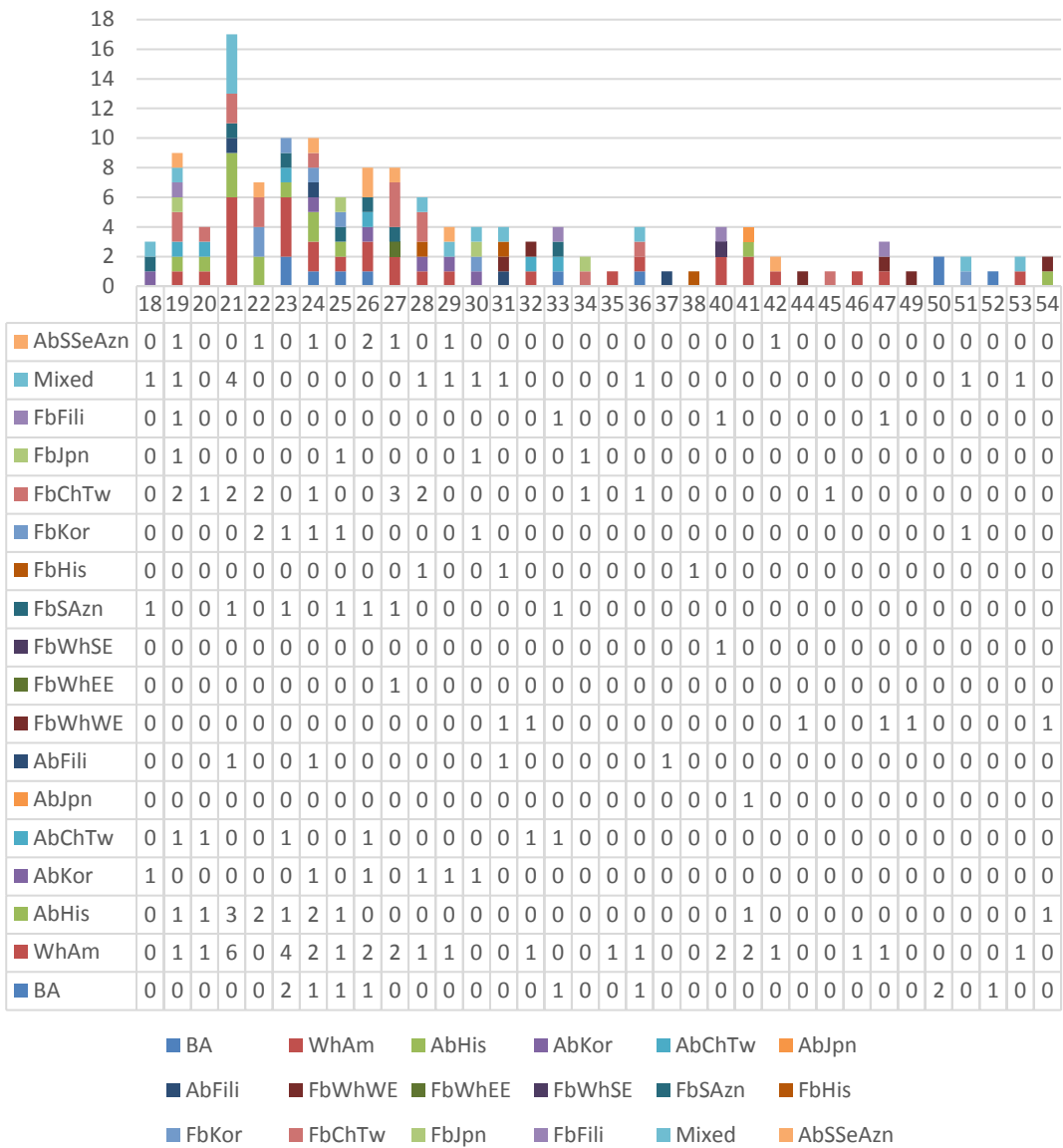


図11. 男性人数 年齢別



上記以外のプロフィールは、「その他の基礎的プロフィール」の項に記載した。American Community Survey の対応するデータは資料編にふくめたが、結論からいえば、英語力の高い層に偏り、年齢も 20 代に偏っている。所得と教育達成については高めに偏っている。

次の項より、分析にはいる。

3 分析

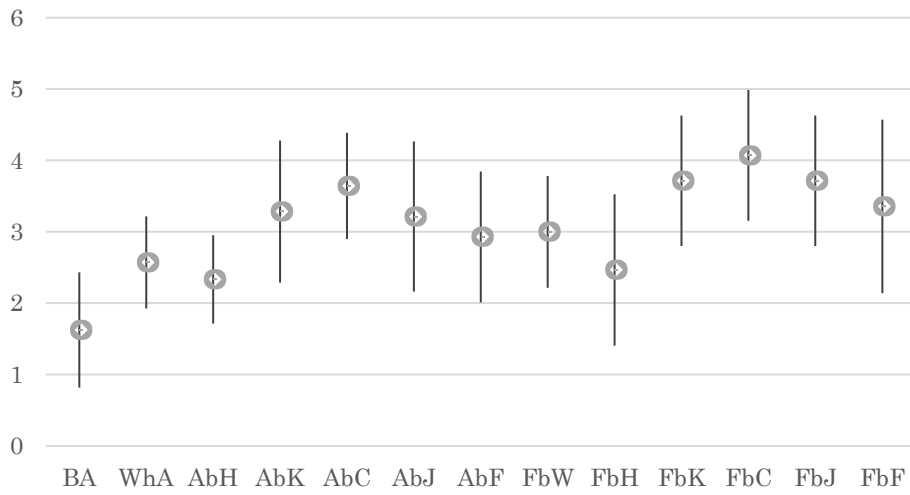
3-1 「審美的に Desirable」な距離

審美的な Desirability の逆社会的距離は次のような設問文になっている。「How often would the people of the following categories likely to perceive YOU aesthetically desirable based on your observation?」. 選択肢は五件のリカート尺度 (usually, often, occasionally, rarely, usually not) と, N/A を加えた 6 択である. 処理上, 距離が最も離れている usually not を 5 点とし, 一番距離の近い usually は最小の 1 点とした. 問うているのが, How much という量ではなく, How often という頻度にし, 比較的 to 回答が可能な内容にした.

各エスニック・カテゴリ別の視点でまとめ, 平均値を丸点で, 回答者の個人差の揺れは, 標準偏差 1 の範囲のぶれを上下のヒゲで示した. したがって, この上下の振れの区間に該当のエスニック・カテゴリの属性を持つ回答者群の約 68%が入ることになる. ブレ幅が大きく左右されるほど有効回答者数が少ない場合もあるため, N のサイズも参考までに各グラフ下に併記する.

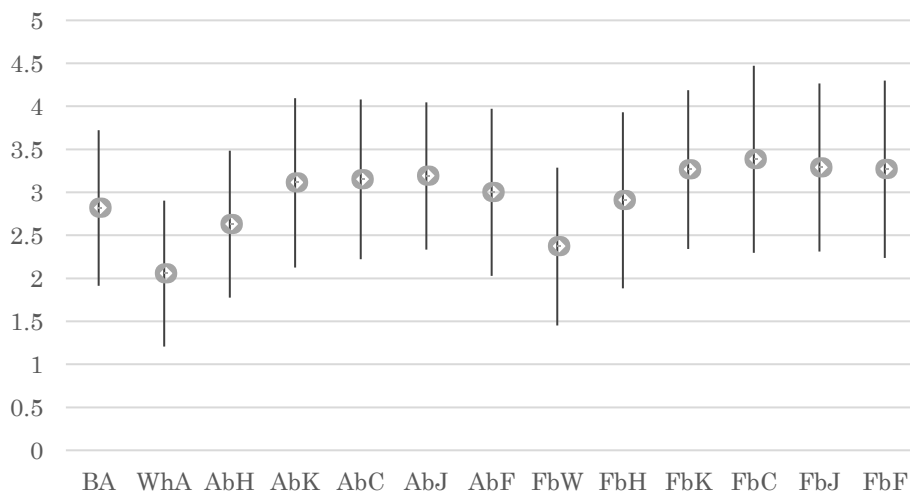
下記の「審美的な Desirability」についての傾向は, 多くのエスニック・カテゴリで, American-born と Foreign-born の垣根を越えた近接性を認めることができる. 一方で, American-born Japanese においては Foreign-born Japanese と近くはなく, 他の American-born アジア系と近かった. ほかにいくつか, AbJ と同じように Ab-Fb 間の距離が近くないカテゴリはあったが, AbJ を含めそれらはいずれも N が小さすぎるため, 断定できない. N のサイズが比較的大きめの, WhA, AbH, FbK, FbC では前者のタイプで, 基本的には Ab-Fb の生まれの垣根を越えたエスニックな近接性がみられた. AbH についてのみ, BA, WhA, FbWh と近く, Ab だろうと Fb だろうとアジア系とは遠いという人種の遠近がみられた. Mixed も N のサイズは相対的に大きい, BA, WhA, AbH と最も近く, 次いで FbW, FbH. アジア系とは遠く, なかでも Fb アジア系からは最も離れている.

図12. Desirable (BA視点)



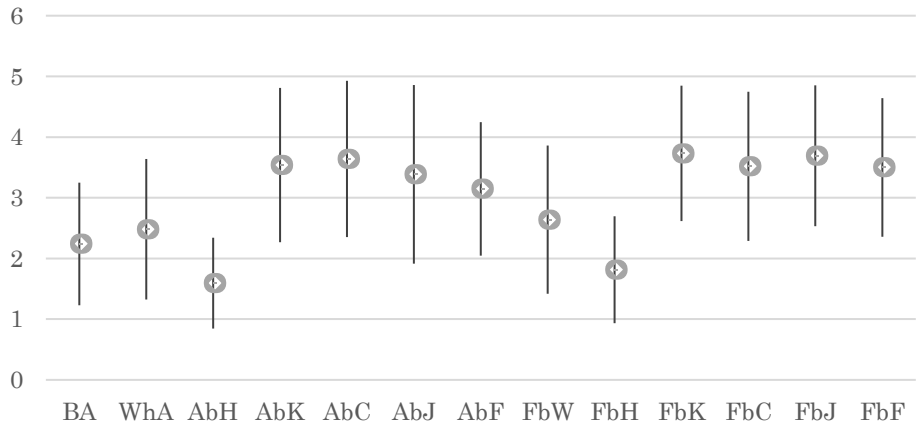
BA 視点	B A	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	16	14	15	14	14	14	14	14	15	14	14	14	14
欠損	1	3	2	3	3	3	3	3	2	3	3	3	3

図13. Desirable (WhA視点)



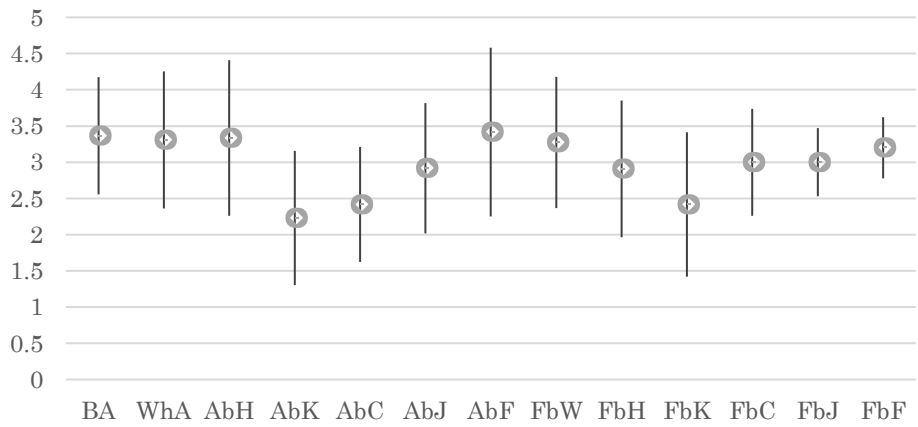
WhA 視点	B A	W A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	55	55	54	54	53	53	52	54	53	53	52	52	52
欠損	4	4	5	5	6	6	7	5	6	6	7	7	7

図14. Desirable (AbH視点)



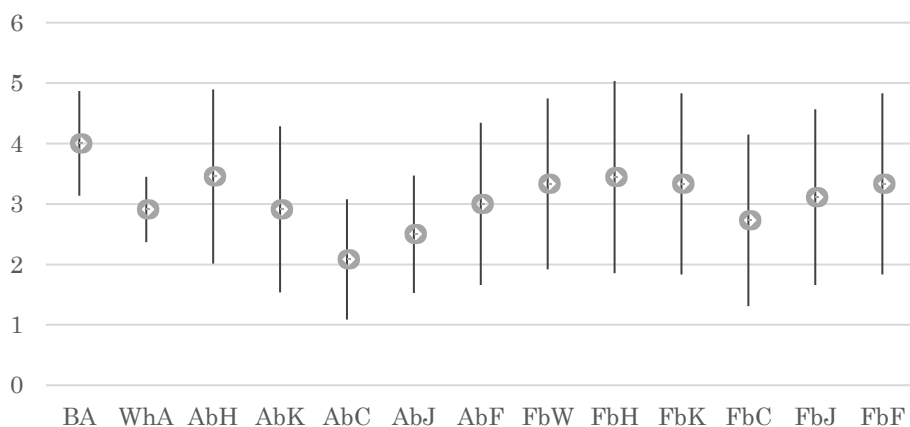
AbH 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	25	27	27	26	25	26	27	25	27	26	25	26	26
欠損	3	1	1	2	3	2	1	3	1	2	3	2	2

図15. Desirable (AbK視点)



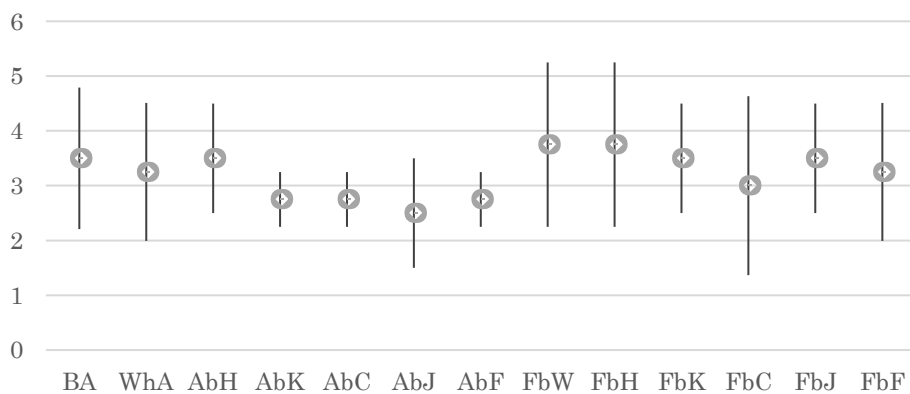
AbK 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	11	13	12	13	12	12	12	11	11	12	12	10	10
欠損	2	0	1	0	1	1	1	2	2	1	1	3	3

図16. Desirable (AbChTw視点)



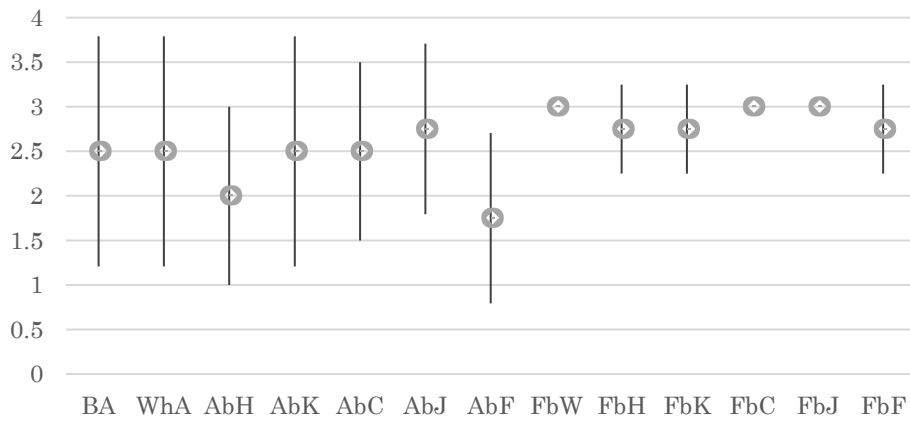
AbC 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	9	11	11	11	12	10	11	9	9	9	11	9	9
欠損	4	2	2	2	1	3	2	4	4	4	2	4	4

図17. Desirable (AbJ視点)



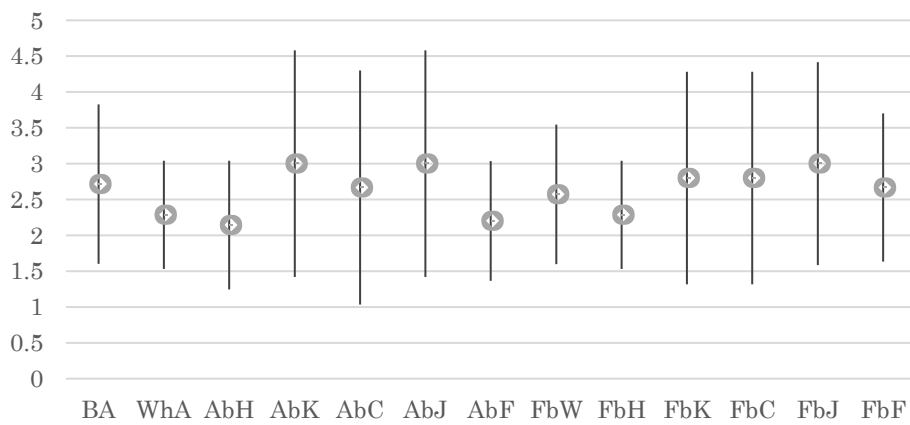
AbJ 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図18. Desirable (AbF視点)



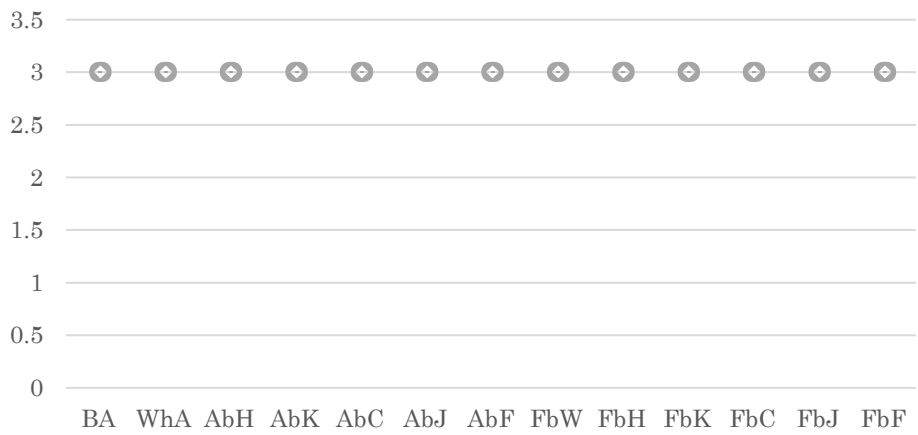
AbF 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	4	4	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
欠損	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図19. Desirable (FbWhWE視点)



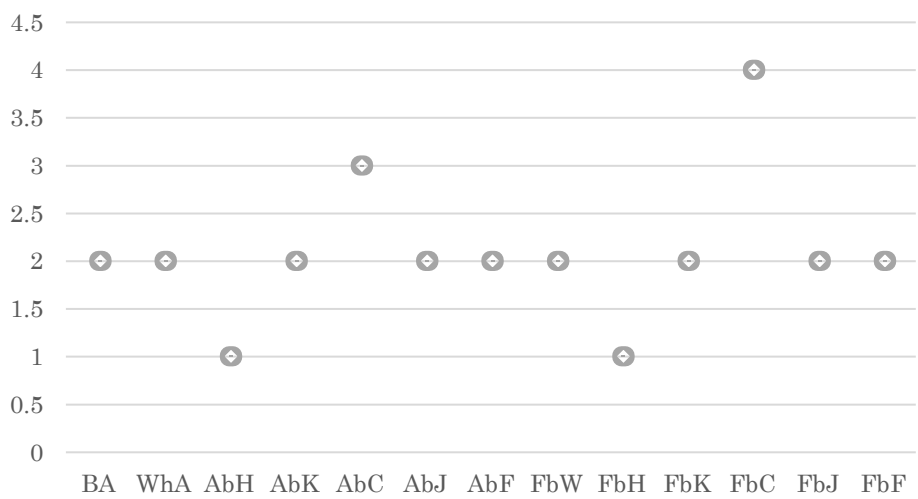
FbWhWE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	7	7	7	5	6	5	5	7	7	5	5	6	6
欠損	1	1	1	3	2	3	3	1	1	3	3	2	2

図20. Desirable (FbWhEE視点)



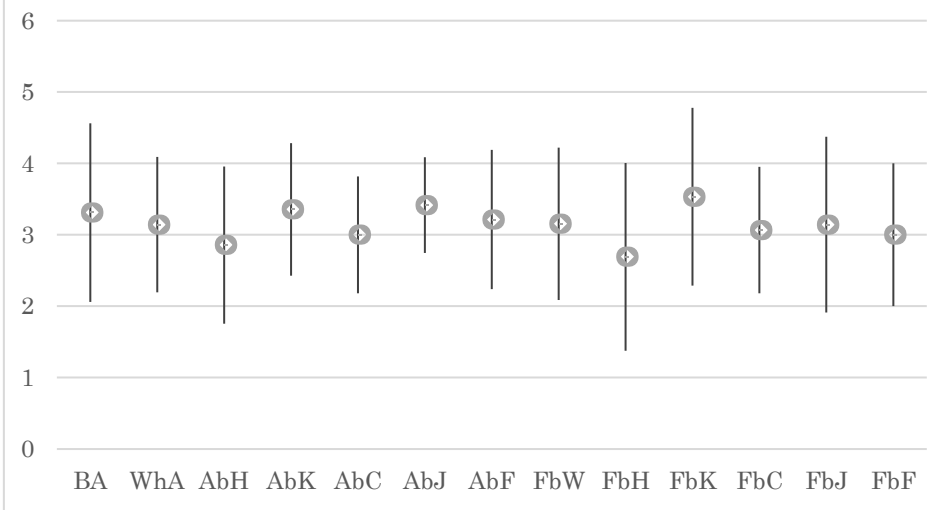
FbWhEE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図21. Desirable (FbWhSE視点)



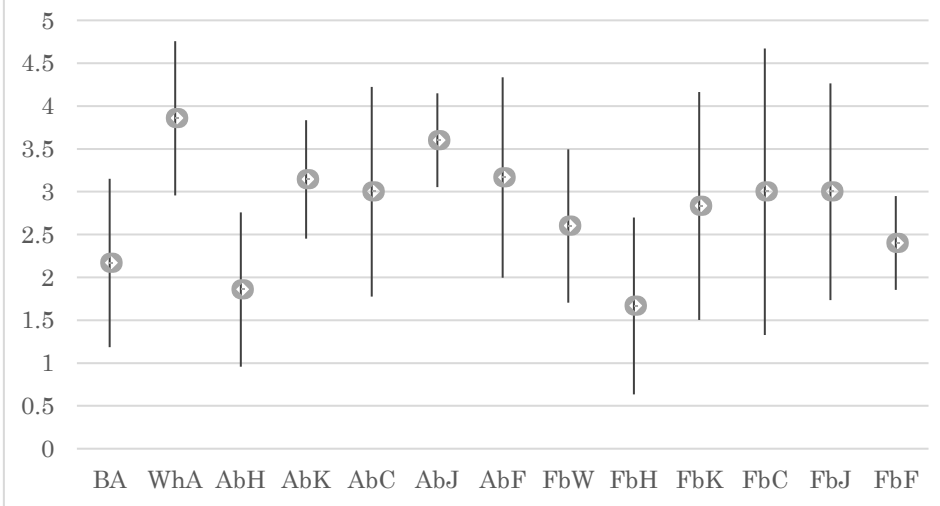
FbWhSE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
欠損値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図22. Desirable (FbS/SEazn視点)



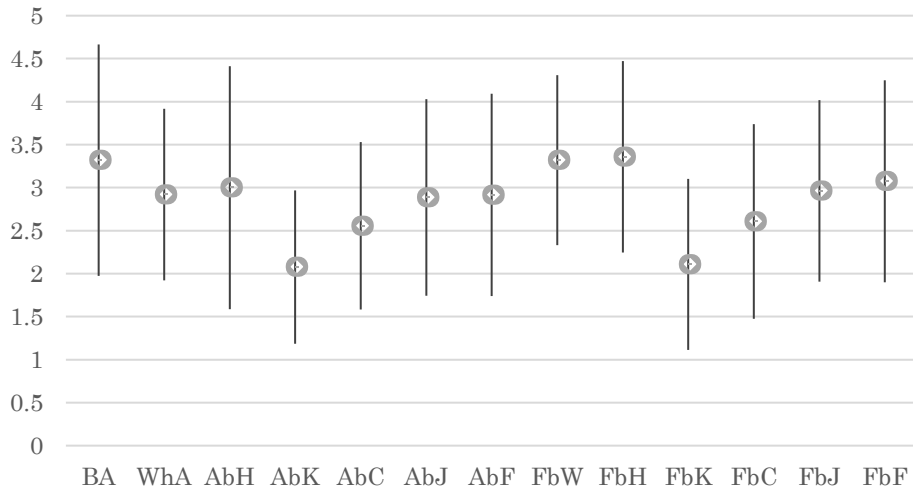
FbS/SE azn 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	16	14	14	14	13	12	14	13	13	15	15	14	11
欠損値	0	2	2	2	3	4	2	3	3	1	1	2	5

図23. Desirable (FbHis視点)



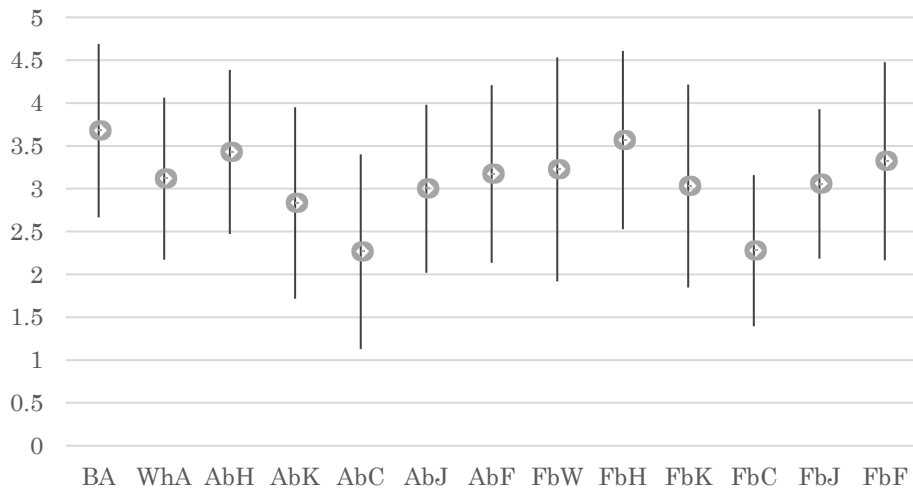
FbH 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	6	7	7	7	5	5	6	5	6	6	6	6	5
欠損	2	1	1	1	3	3	2	3	2	2	2	2	3

図24. Desirable (FbK視点)



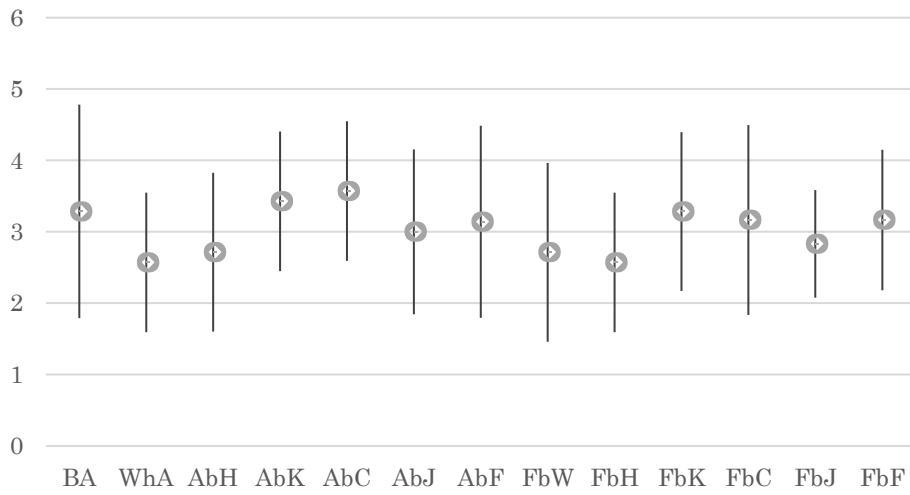
FbK 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	25	25	22	26	27	26	24	25	25	28	28	27	27
欠損	5	5	8	4	3	4	6	5	5	2	2	3	3

図25. Desirable (FbChTw視点)



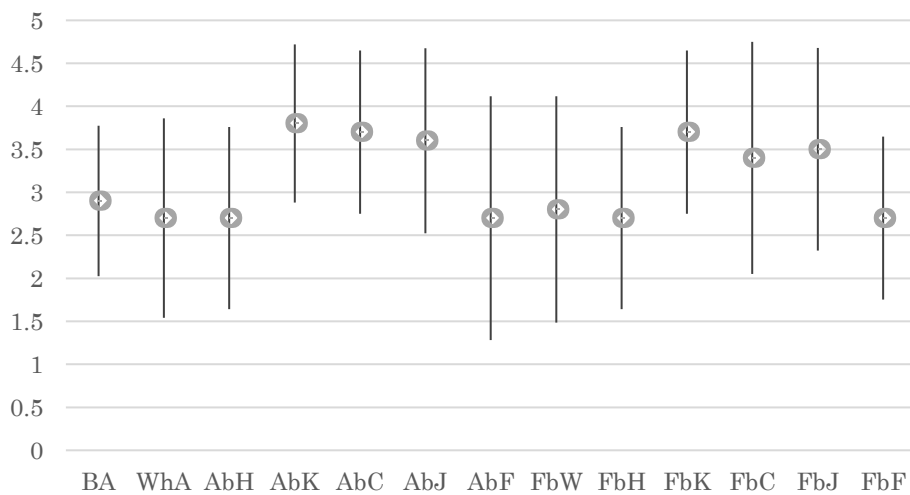
FbC 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	31	34	28	30	34	28	29	31	30	33	36	35	28
欠損	6	3	9	7	3	9	8	6	7	4	1	2	9

図26. Desirable (FbJ視点)



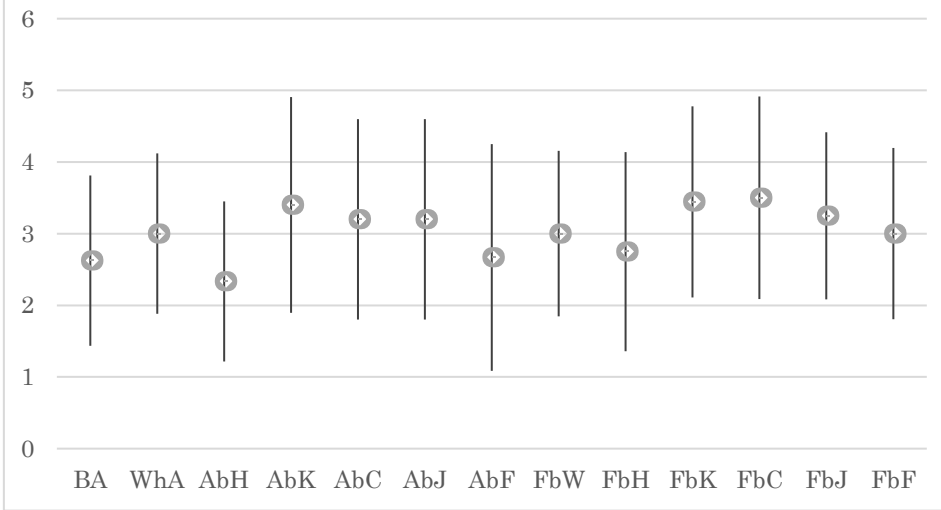
FbJ 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	6	6	6
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1

図27. Desirable (FbF視点)



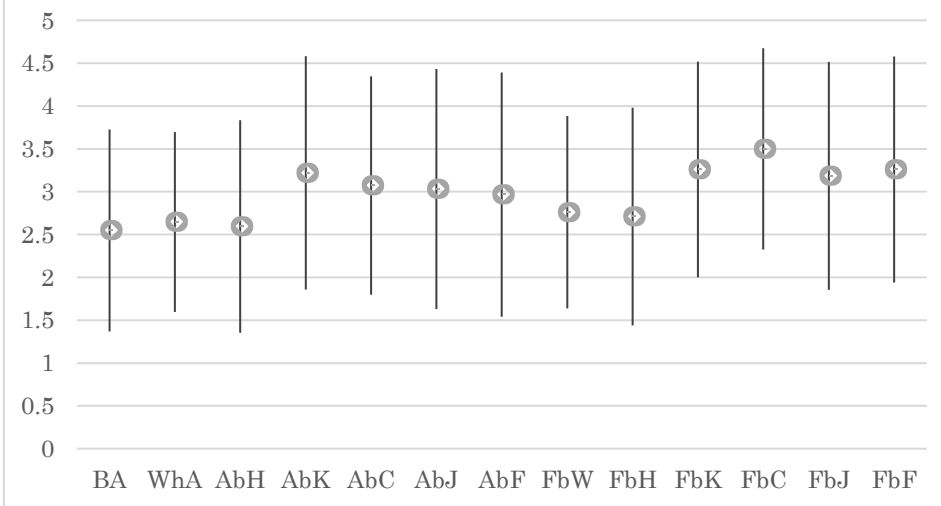
FbF 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図28. Desirable (AbS/SEazn視点)



AbS/Sezn 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	8	9	9	10	10	10	9	7	8	9	8	8	8
欠損値	2	1	1	0	0	0	1	3	2	1	2	2	2

図29. Desirable (Mixed視点)

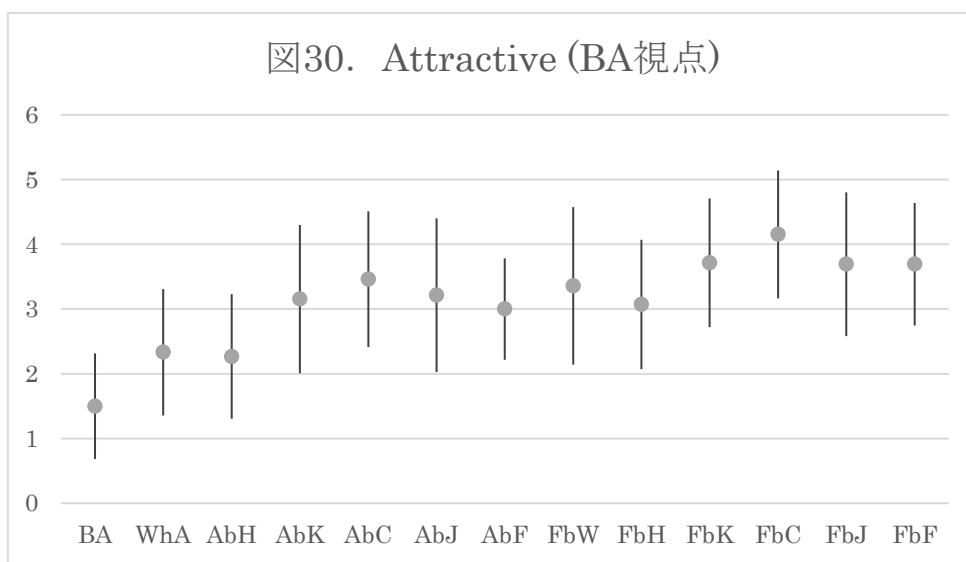


Mixed 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	31	31	32	32	28	32	30	29	31	27	26	27	27
欠損	1	1	0	0	4	0	2	3	1	5	6	5	5

3-2 「恋愛対象として Attractive」な距離

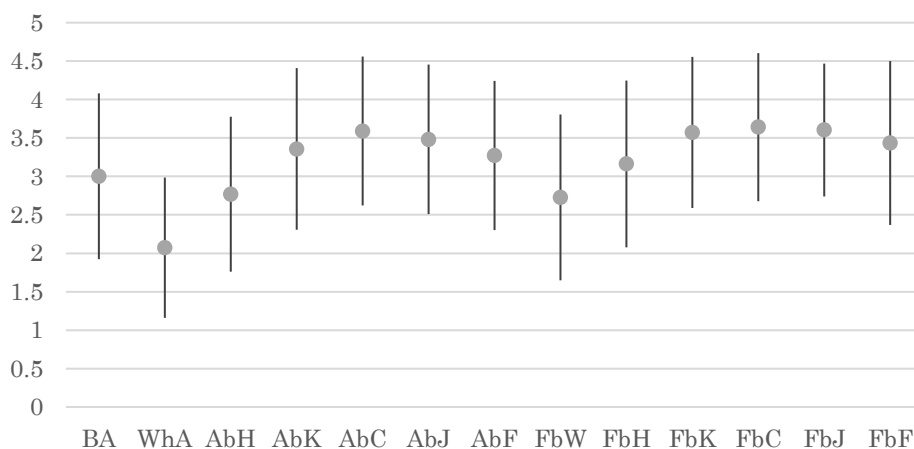
設問文は次のとおりである。「How often would the people of the following categories find YOU attractive to have a ROMANTIC RELATIONSHIP with in LA county based on your observation?」以下，前項の「審美的に Desirable」と同様。

Ab の東北アジア系（中国／台湾，韓国，日本）は AbJ を除いたほかの二つは Fb の同一エスニックと最も近いのだが，それ以外だと Ab 東北アジア系同士の方が距離が近い。アジア系以外の視点では，基本は Ab は Fb よりも Ab に近いのだが，WA 視点からのアジア系との距離は Ab アジア系か Fb アジア系の差がほとんどない。Fb 東北アジア系視点だと，同じ Fb アジア系だからといって距離が近いわけではないことがみえる。



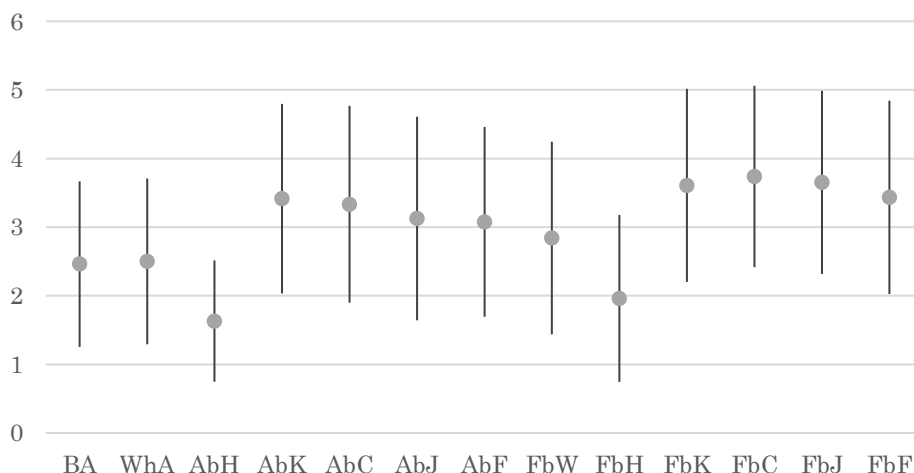
BS 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	16	15	15	13	13	14	14	14	14	14	14	13	13	13
欠損	1	2	2	4	4	3	3	3	3	3	3	4	4	4

図31. Attractive (WhA視点)



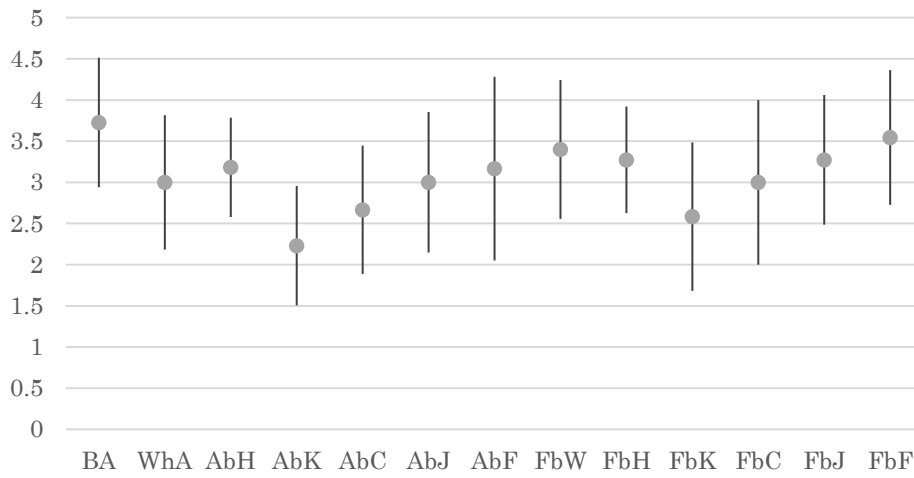
WA 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	56	56	56	56	56	56	55	55	55	54	53	53	53
欠損	3	3	3	3	3	3	4	4	4	5	6	6	6

図32. Attractive (AbHis視点)



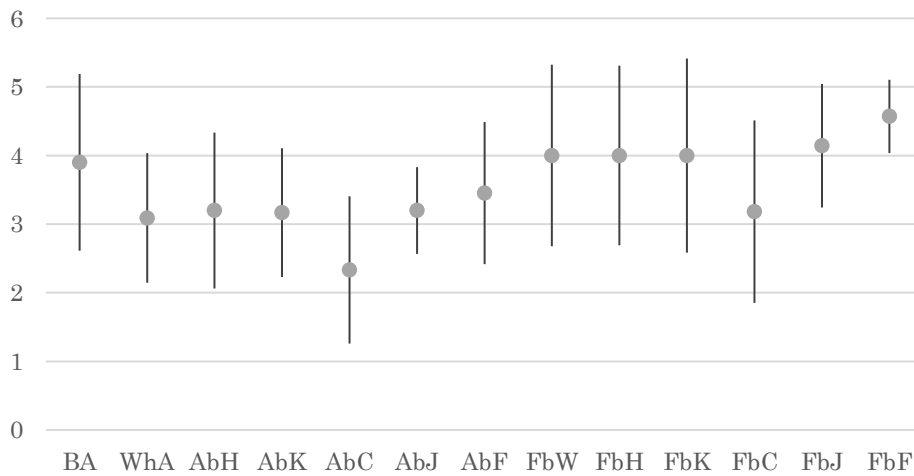
AbH 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	26	26	27	24	24	24	26	25	26	23	23	23	23
欠損	2	2	1	4	4	4	2	3	2	5	5	5	5

図33. Attractive (AbK視点)



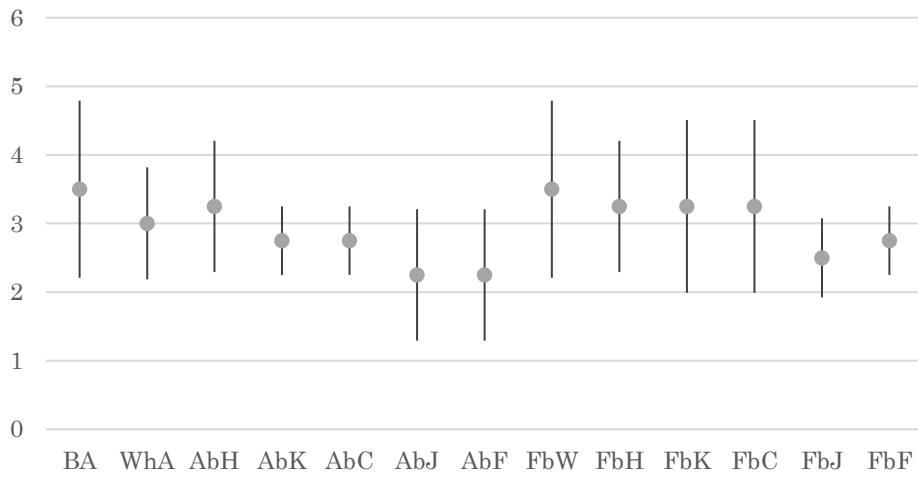
AbK 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	11	13	11	13	12	12	12	10	11	12	11	11	11
欠損	2	0	2	0	1	1	1	3	2	1	2	2	2

図34. Attractive (AbCh/Tw視点)



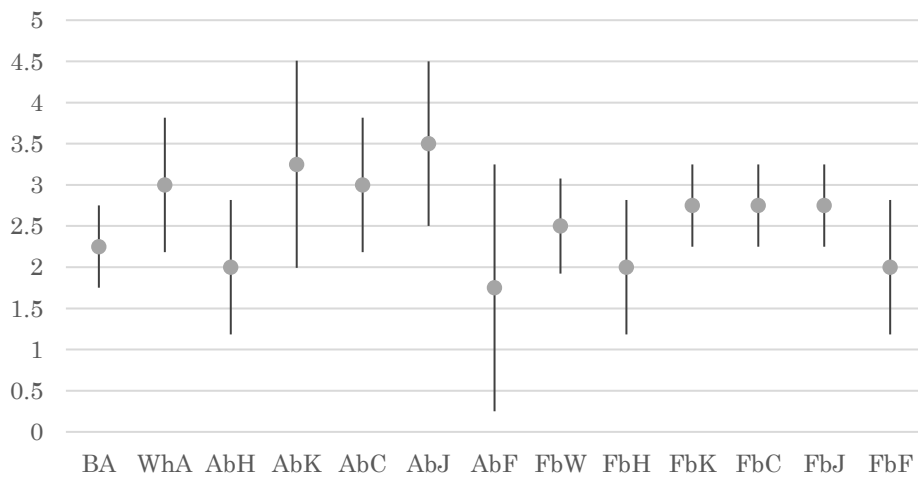
AbC 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	10	11	10	12	12	10	11	9	8	10	11	7	7
欠損	3	2	3	1	1	3	2	4	5	3	2	6	6

図35. Attractive (AbJ視点)



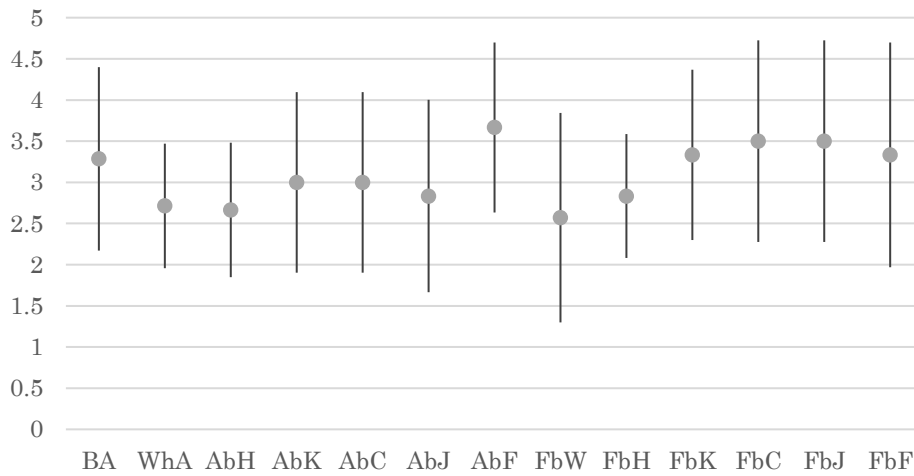
AbJ 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図36. Attractive (AbF視点)



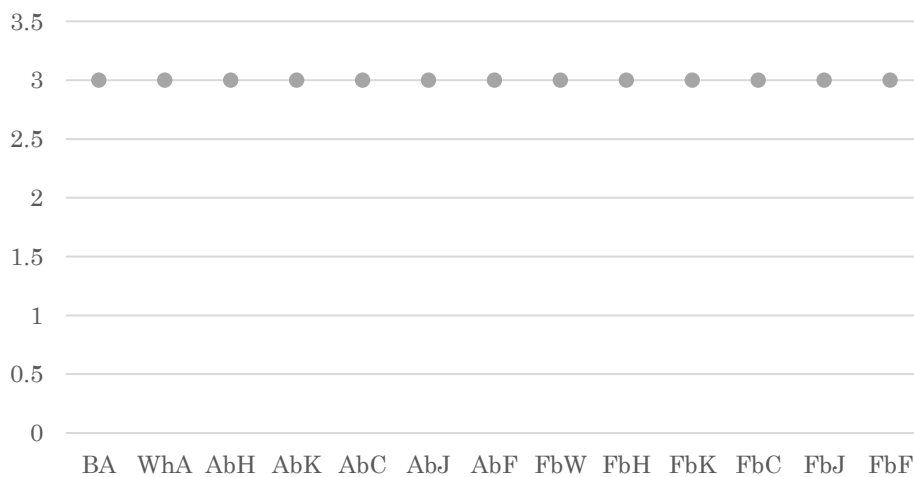
AbF 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図37. Attractive (FbWhWE視点)



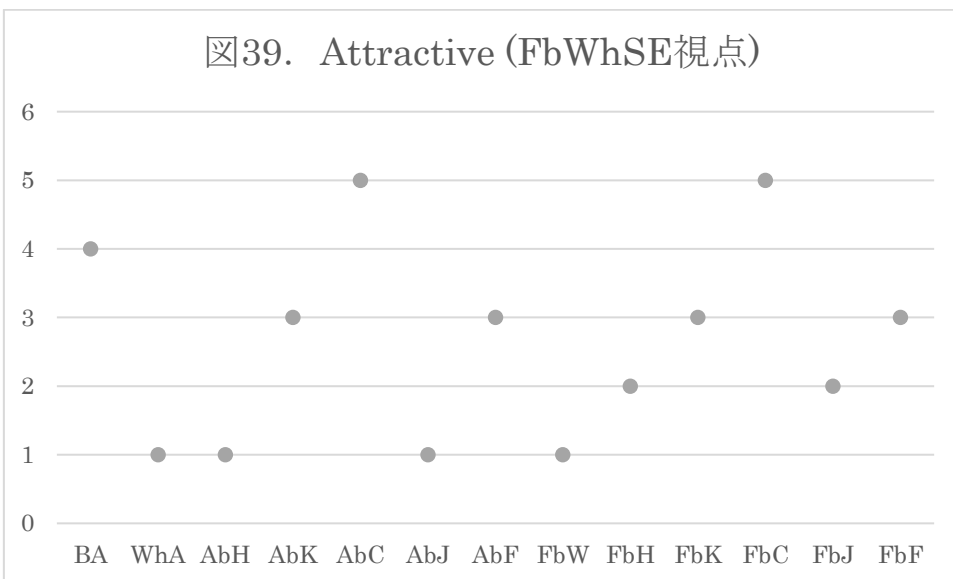
FbWhWE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	7	7	6	6	6	6	6	7	6	6	6	6	6
欠損	1	1	2	2	2	2	2	1	2	2	2	2	2

図38. Attractive (FbWhEE視点)



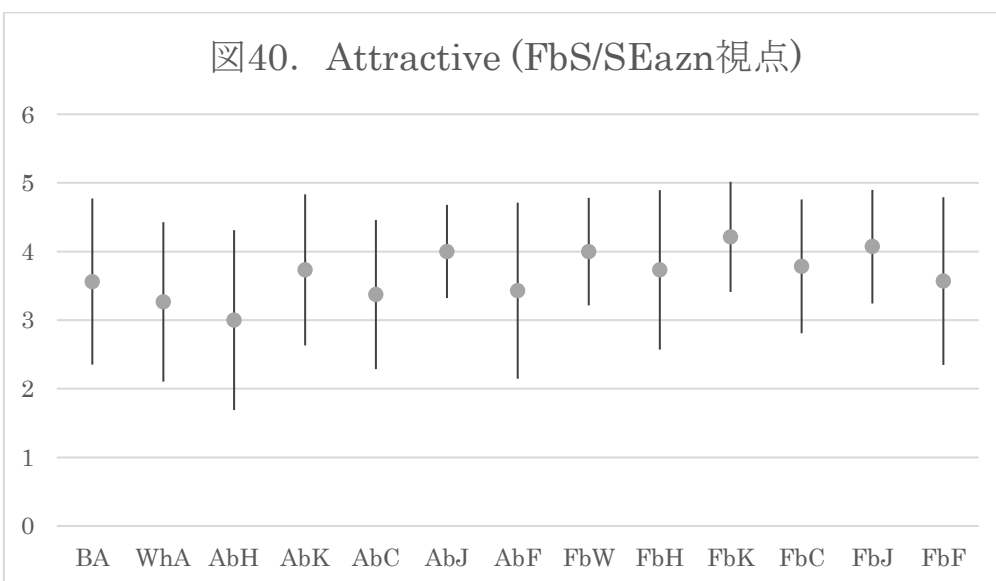
FbWhEE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
欠損値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図39. Attractive (FbWhSE視点)



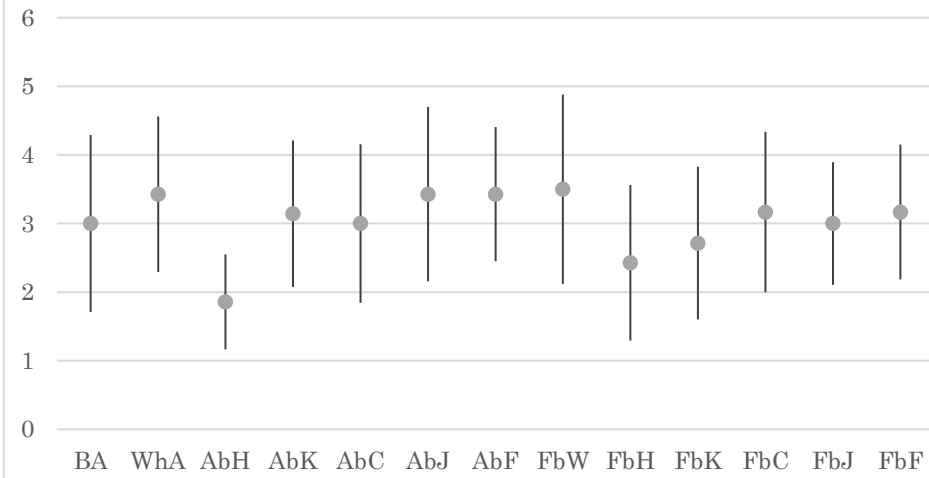
FbWhSE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
欠損値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図40. Attractive (FbS/SEazn視点)



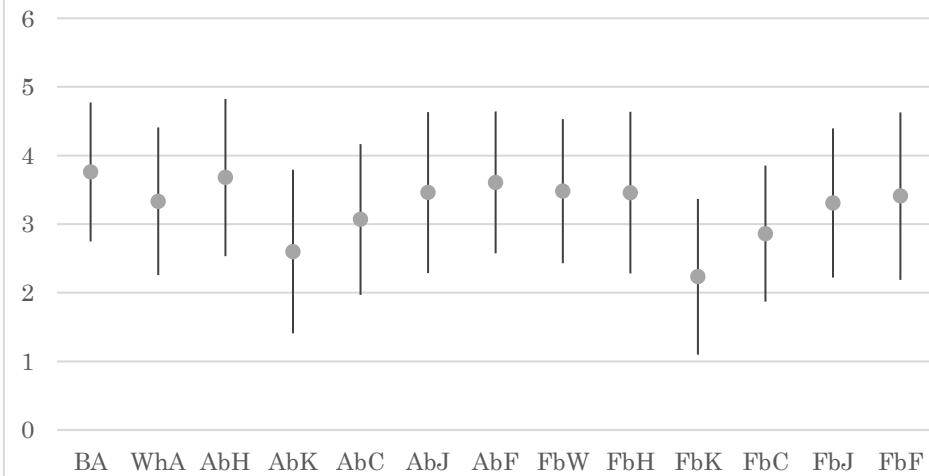
FbS/Seazn 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	16	15	15	15	16	14	14	14	15	14	14	14	14
欠損値	0	1	1	1	0	2	2	2	1	2	2	2	2

図41. Attractive (FbHis視点)



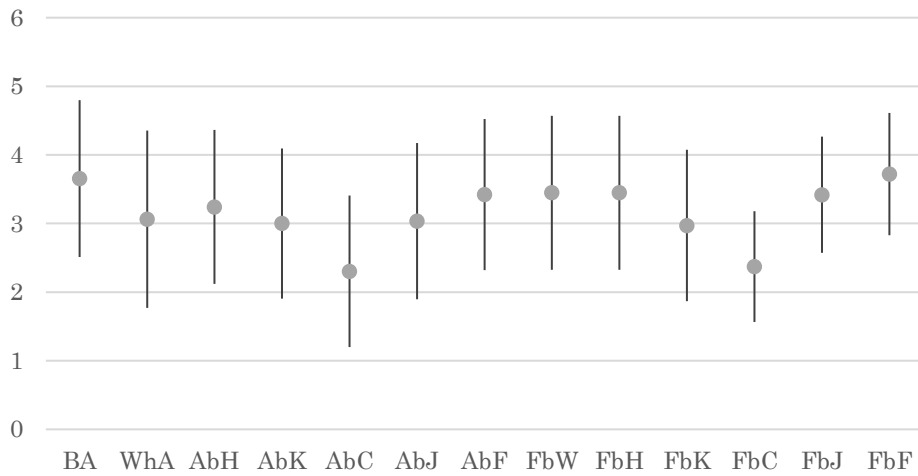
FbH 視点	BA	Wh	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab	Fb	Fb	Fb	Fb	Fb	Fb
		A	H	K	C	J	F	W	H	K	C	J	F
有効	7	7	7	7	7	7	7	6	7	7	6	6	6
欠損	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	2	2

図42. Attractive (FbK視点)



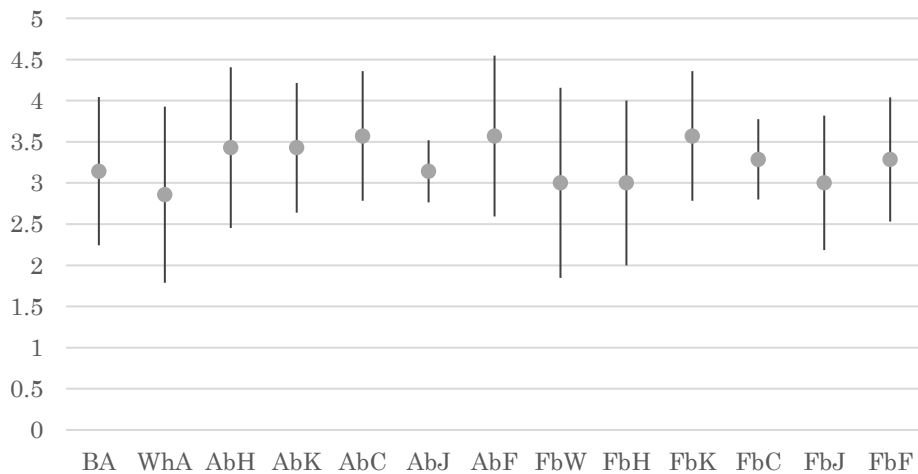
FbK 視点	BA	Wh	Ab	Ab	Ab	Ab	Ab	Fb	Fb	Fb	Fb	Fb	Fb
		A	H	K	C	J	F	W	H	K	C	J	F
有効	25	27	25	30	29	26	23	27	24	30	29	26	22
欠損	5	3	5	0	1	4	7	3	6	0	1	4	8

図43. Attractive (FbCh/Tw視点)



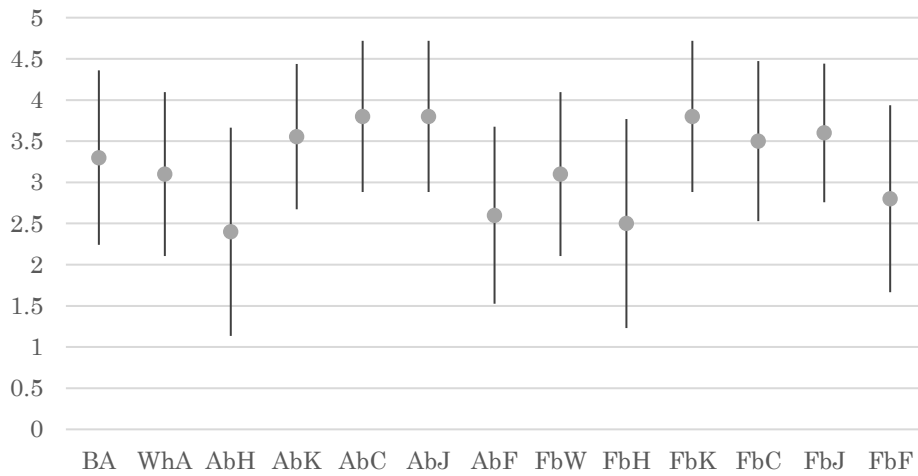
FbC 視点	BA	WhA	AbH	AbK	AbC	AbJ	AbF	FbW	FbH	FbK	FbC	FbJ	FbF
有効	29	32	29	31	33	28	26	29	29	33	35	31	25
欠損	8	5	8	6	4	9	11	8	8	4	2	6	12

図44. Attractive (FbJ視点)



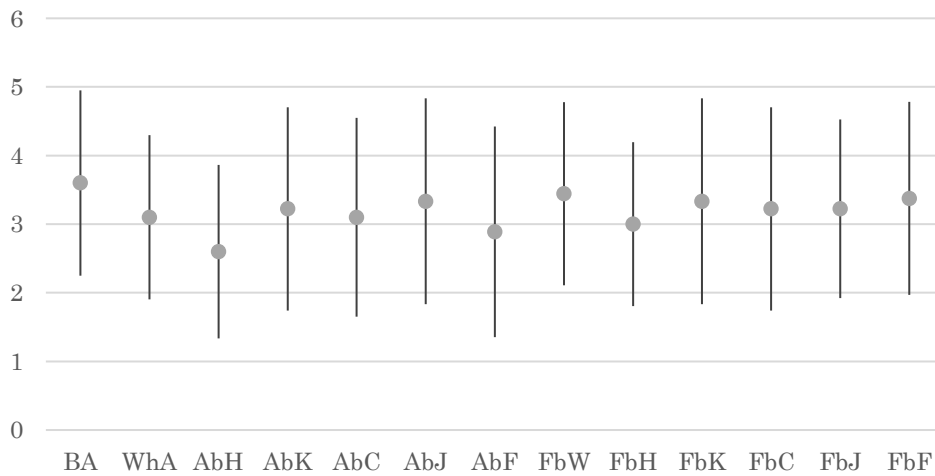
FbJ 視点	BA	WhA	AbH	AbK	AbC	AbJ	AbF	FbW	FbH	FbK	FbC	FbJ	FbF
有効	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図45. Attractive (FbF視点)



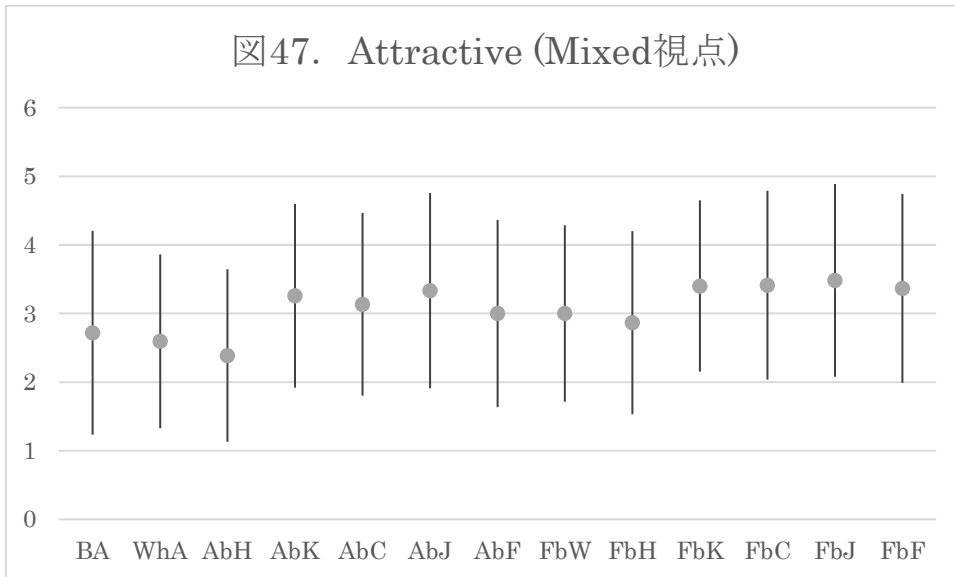
FbF 視点	BA	WhA	AbH	AbK	AbC	AbJ	AbF	FbW	FbH	FbK	FbC	FbJ	FbF
有効	10	10	10	9	10	10	10	10	10	10	10	10	10
欠損	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図46. Attractive (AbS/SEazn視点)



AbS/SEazn 視点	BA	WhA	AbH	AbK	AbC	AbJ	AbF	FbW	FbH	FbK	FbC	FbJ	FbF
有効	10	10	10	9	10	9	9	9	8	9	9	9	8
欠損値	0	0	0	1	0	1	1	1	2	1	1	1	2

図47. Attractive (Mixed視点)



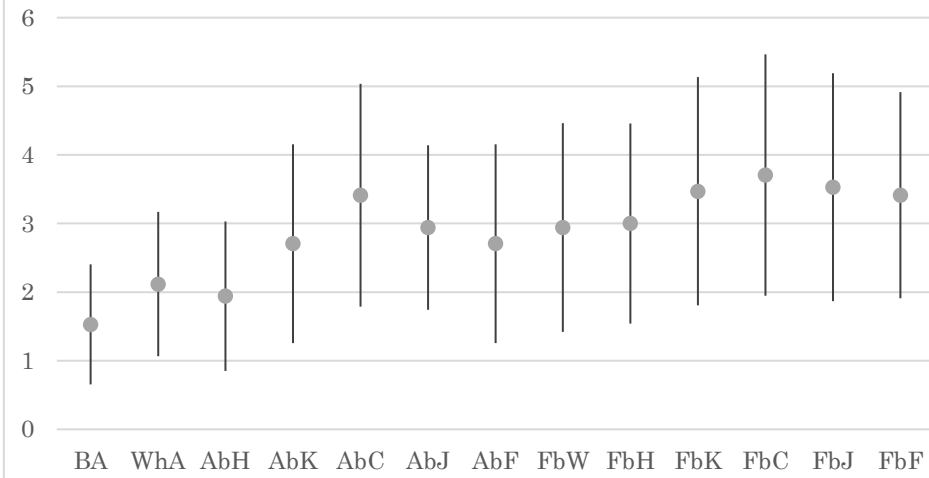
Mixed 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	32	32	31	31	30	30	31	30	30	30	29	29	30
欠損	0	0	1	1	2	2	1	2	2	2	3	3	2

3-3 「(親しい友人関係をもつのに) Comfortable」な距離

設問文は次のとおりである。「How often would the people of the following categories find YOU comfortable to have a CLOSE FRIENDSHIP with in LA county based on your observation?」以下、前項までと同様。

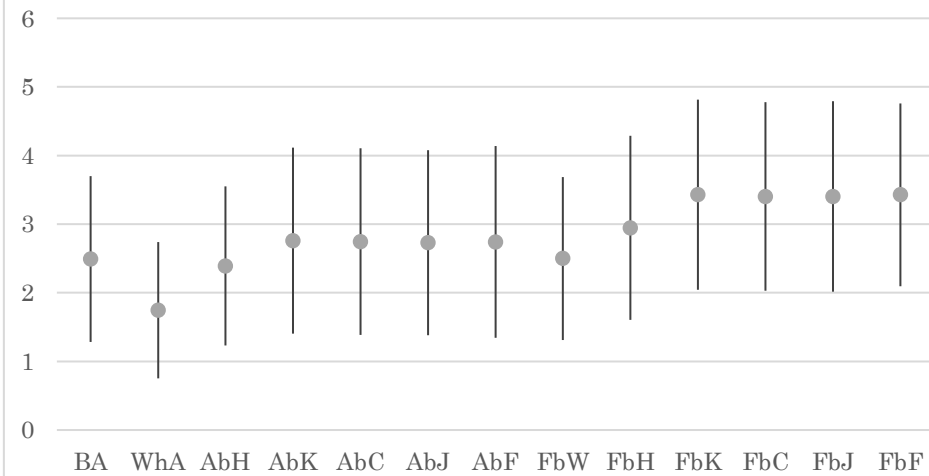
「審美的に Desirable」と「恋愛対象として Attractive」な距離は比較的に似通った結果がみられたが、こちらの「(親しい友人関係をもつのに) Comfortable」な距離は Ab か Fb かの違いが明瞭であった。前項では、Ab のアジア系と Fb のアジア系のあいだに差がなかった WA 視点の結果も、こちらの項では明らかに Ab アジア系との方が近い。そしてだからといって、Fb 東北アジア系視点においては、やはりここでも他の Fb 東北アジア系と距離が近いというわけではなかった。Ab 東北アジア系は他の Ab 東北アジア系と距離が近かった。そのため、総体としては WA, AbH か、あるいは Ab アジア系により全体が居心地の良さを覚えているという偏りがあるようにも見える。これが後述の第 4 項で示すクロンバックの α (Z 化処理済値) の高さにあらわれている。

図48. Comfortable (BA視点)



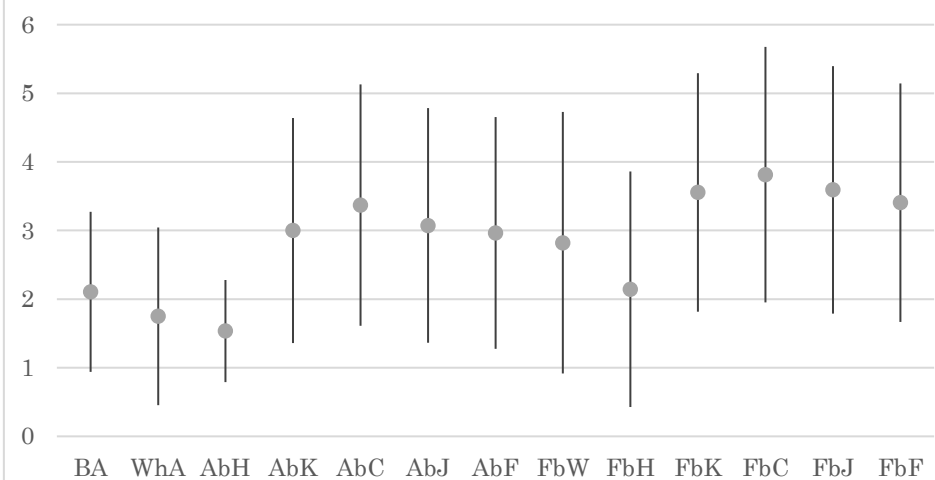
BA 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17	17
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図49. Comfortable (WA視点)



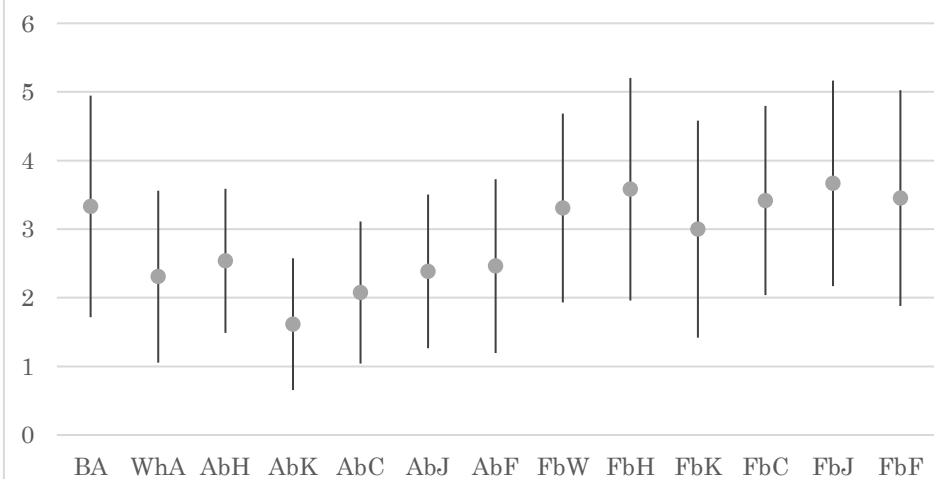
WA 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	59	59	59	58	59	59	58	58	56	56	57	57	56
欠損	0	0	0	1	0	0	1	1	3	3	2	2	3

図50. Comfortable (AbHis視点)



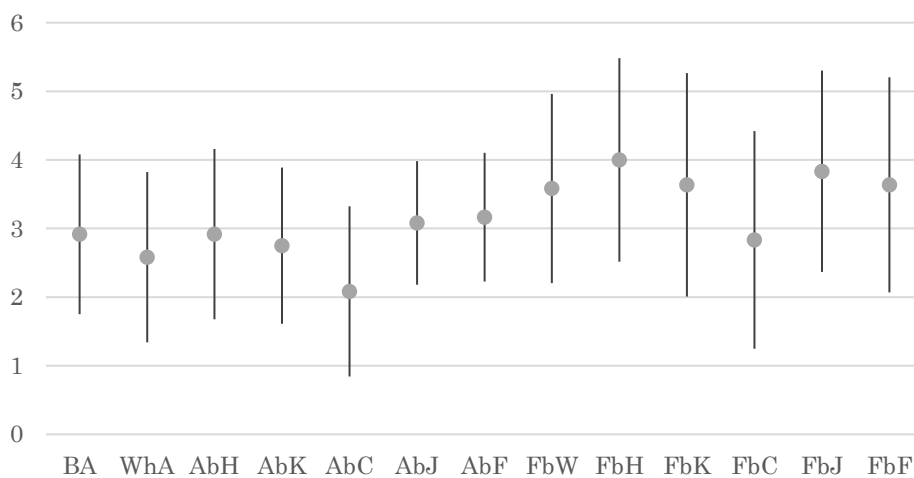
AbH 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	28	28	28	27	27	27	28	28	28	27	27	27	27
欠損	0	0	0	1	1	1	0	0	0	1	1	1	1

図51. Comfortable (AbK視点)



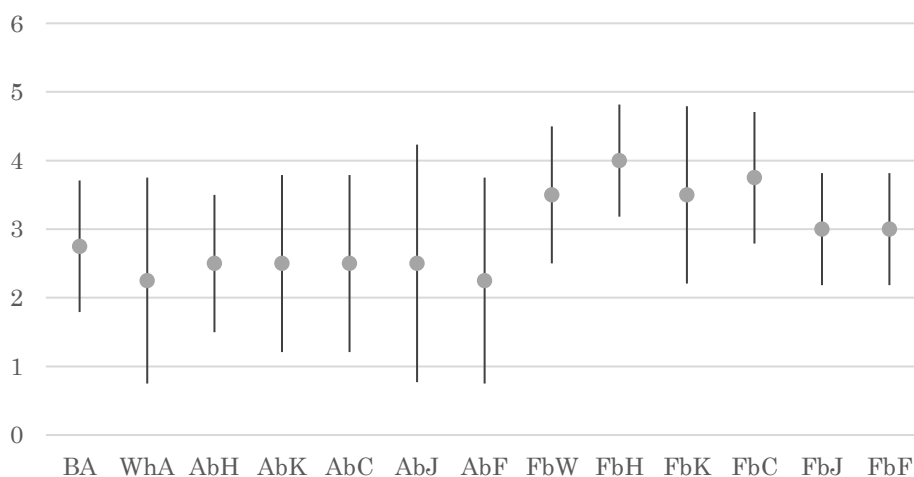
AbK 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	12	13	13	13	13	13	13	13	12	13	12	12	11
欠損	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	2

図52. Comfortable (AbChTw視点)



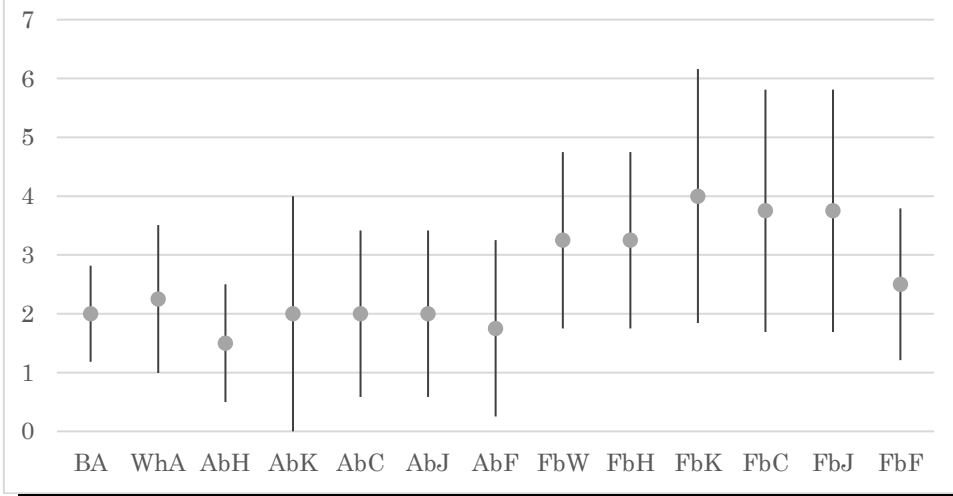
AbC 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	12	12	12	12	12	12	12	12	11	11	12	12	11
欠損	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	2

図53. Comfortable (AbJ視点)



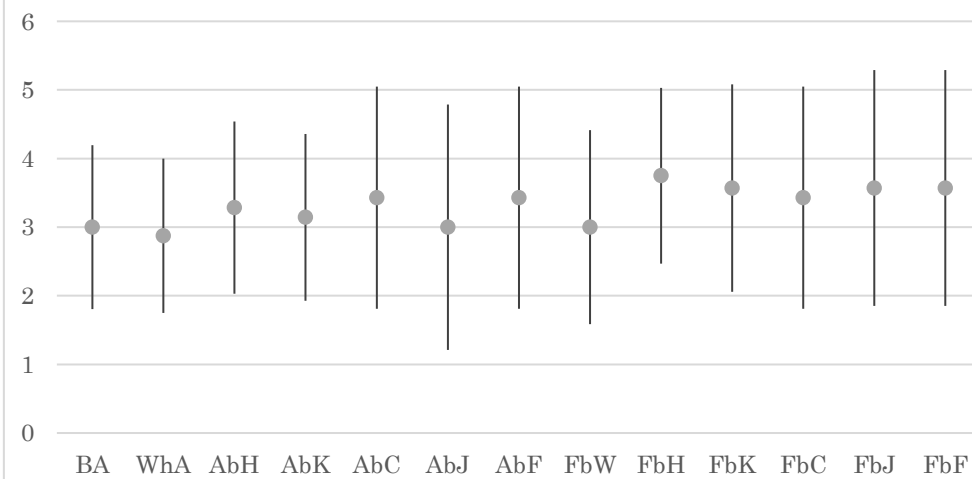
AbJ 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図54. Comfortable (AbF視点)



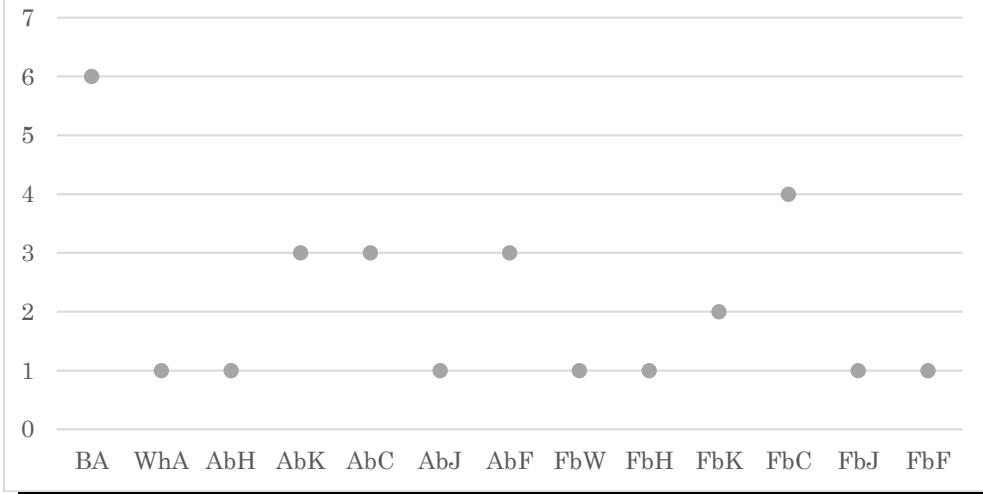
AbF 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図55. Comfortable (FbWhWE視点)



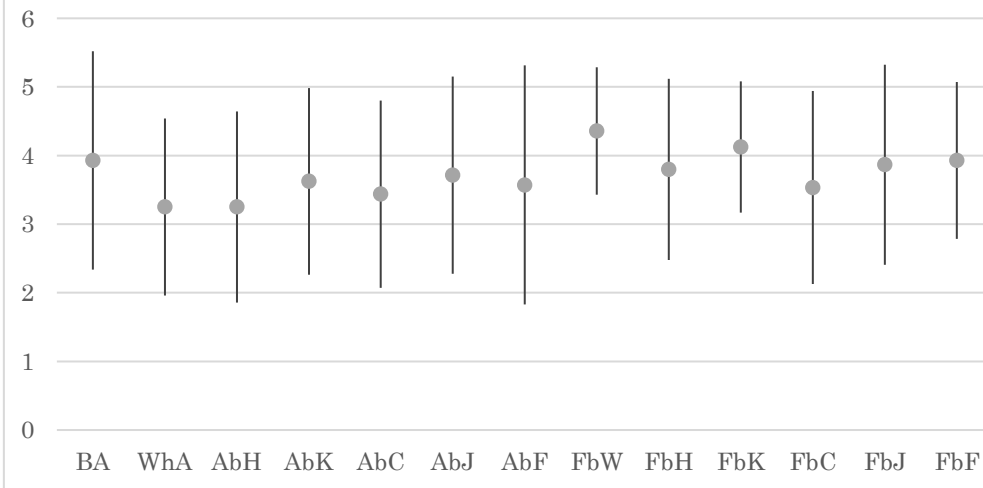
FbWhWE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	8	8	7	7	7	6	7	8	8	7	7	7	7
欠損値	0	0	1	1	1	2	1	0	0	1	1	1	1

図56. Comfortable (FbWhSE視点)



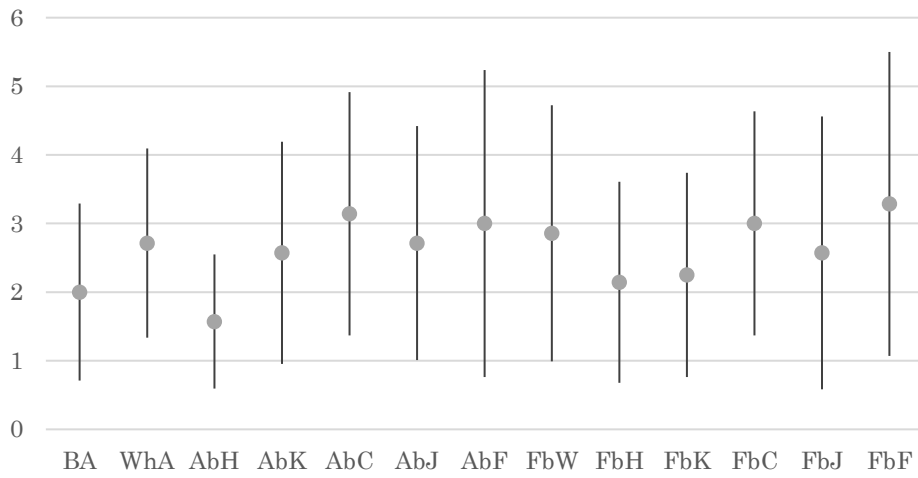
FbWhSE 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
欠損値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図57. Comfortable (FbS/SEazn視点)



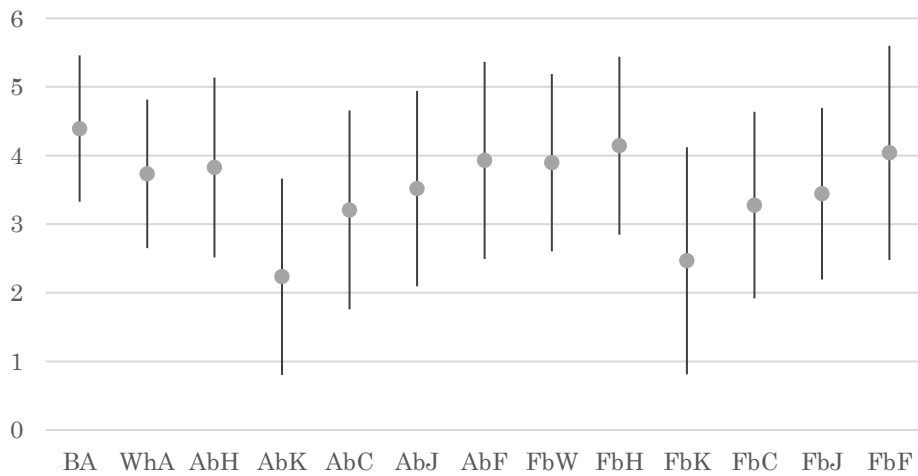
FbS/SEazn 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	14	16	16	16	16	14	14	14	14	15	16	15	15
欠損	2	0	0	0	0	2	2	2	2	1	0	1	1

図58. Comfortable (FbHis視点)



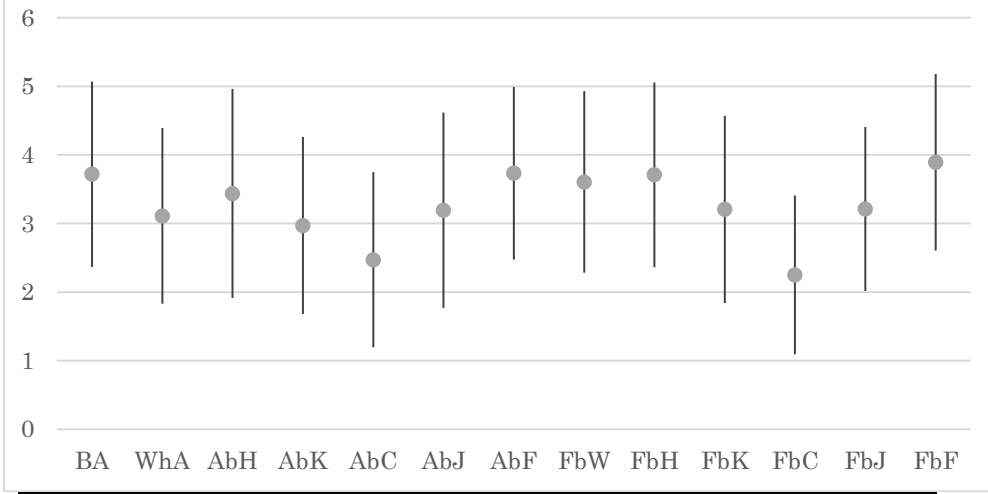
FbH 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	7	7	7	7	7	7	7	7	7	8	7	7	7
欠損	1	1	1	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1

図59. Comfortable (FbK視点)



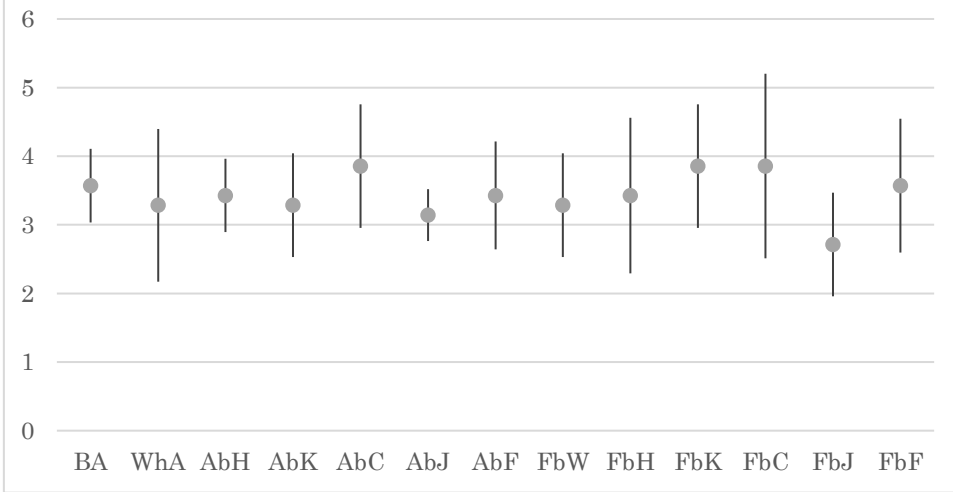
FbK 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	28	30	29	30	29	27	28	29	28	30	29	27	26
欠損	2	0	1	0	1	3	2	1	2	0	1	3	4

図60. Comfortable (FbCh/Tw視点)



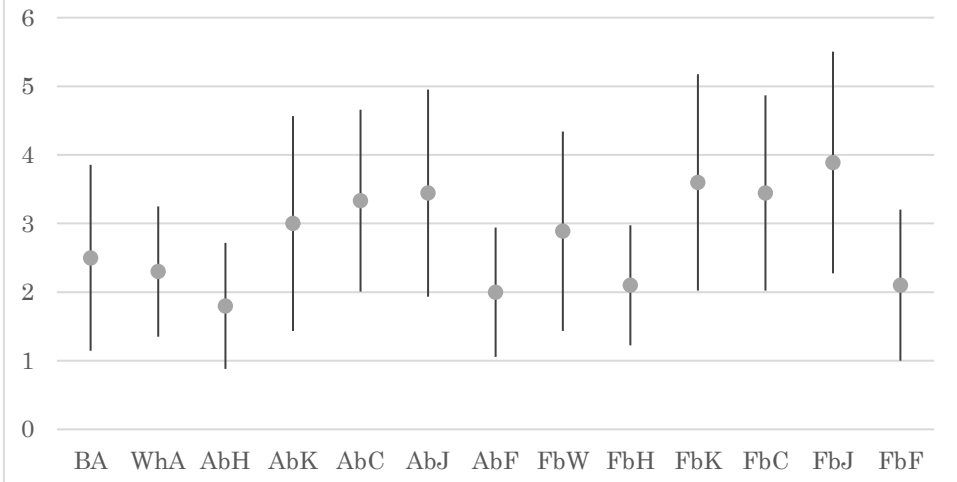
FbC 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	32	36	32	34	36	31	30	33	31	34	36	33	28
欠損	5	1	5	3	1	6	7	4	6	3	1	4	9

図61. Comfortable (FbJ視点)



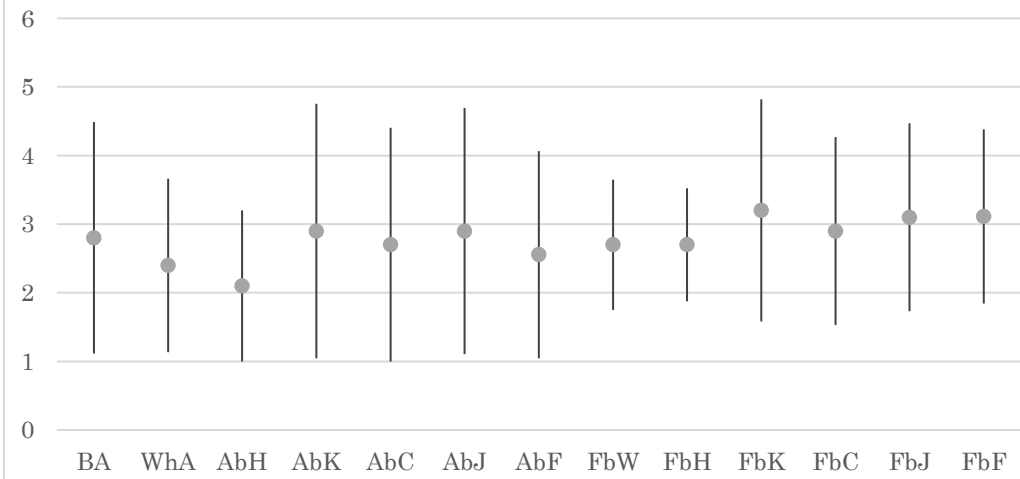
FbJ 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7	7
欠損	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

図62. Comfortable (FbF視点)



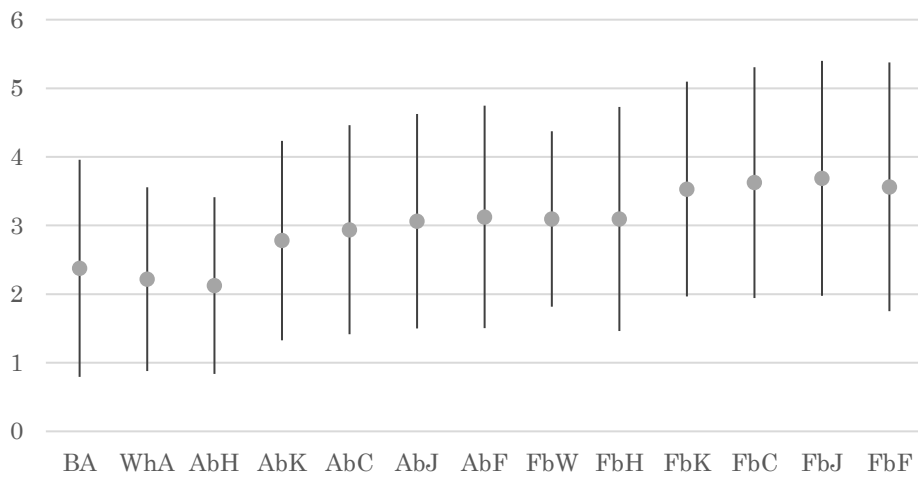
FbF 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	10	10	10	10	9	9	10	9	10	10	9	9	10
欠損	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	1	1	0

図63. Comfortable (AbS/SEazn視点)



AbS/SEazn 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	10	10	10	10	10	10	10	9	10	10	10	10	9
欠損値	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

図64. Comfortable (Mixed視点)



Mixed 視点	BA	Wh A	Ab H	Ab K	Ab C	Ab J	Ab F	Fb W	Fb H	Fb K	Fb C	Fb J	Fb F
有効	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32	32
欠損値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

4 仮説検証その1：クロンバックの α による一致度の分析

本章の仮説その1は、「モダン」と思われている順にエスニック・カテゴリの序列を形成し、その順序は回答者自身のエスニック・カテゴリ属性に依存せず、共有されている、であった。ここではその検証のために、「Modern」というステレオタイプの設問と、クロンバックの α を用いる。

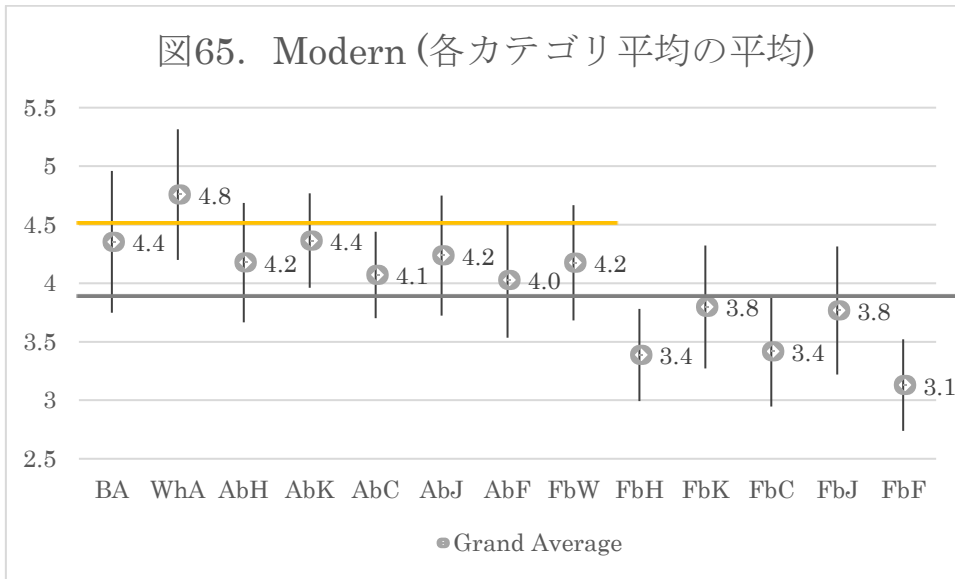
通常、クロンバックの α は、複数の設問が同じ「モノ」を評価しているかを調べるために使われ、複数の設問間の評価の一致度をあらわし、0.8以上あると一致度が高く、同じものを計測しているだろうとされている。ここではその原理を利用し、エスニック・カテゴリ平均間の各エスニック・カテゴリに対するステレオタイプな「モダン」さ評価の一致度をみることに使用する。

そのため、通常、変数として設問群を分析の対象に入れる代わりに、回答者のエスニック・カテゴリ属性毎の平均を17~18項目を対象に入れた（たとえば、FbWhEE属性の回答者のModernに対する回答など一部で、有効回答ゼロの項目があったため、全てを18項目にはできなかった）。エスニック・カテゴリの平均は、回答者のエスニック・カテゴリの属性ごとにまとめ、エスニック・カテゴリ間の回答者人数の偏りの影響を除去するために平均値になおしたもので、前項でグラフ化して記したものである。SPSSの処理上でいうと、回答者のエスニック・カテゴリ属性ごとの平均を変数に、そして、評価対象のエスニック・カテゴリ13種がケースになるようにした。

このような手法で、クロンバックの α の原理を利用して、エスニック・カテゴリ平均間の回答の不一致・一致度合いをみた対象は、「審美的に Desirable」「恋愛対象として Attractive」「(Close friends として) comfortable」「Modern」の4つの距離である。

「Based on the stereotypes, how often are most of the people of following categories viewd as being “modern” in LA county?」で、五件法にN/Aをあわせた6択で問うた。

「Modern」の項目は設問の仕方からしてステレオタイプを問うているため、厳密には他の逆社会的距離設問と並置して比較することにさほど意味はないが、クロンバックの α において、回答者のエスニック・カテゴリ間の一致度をみると、Modernさについての合意が飛びぬけて強いことを明示するために並べた。つまり、非対称な偏りが、Modernさにおける合意について確認された。他の社会的距離において合意は見られないか、少ない。これが本研究において前章までに論述してきた「普遍性」言説の非対称性を反映しているといえる。もっと言えば、これがエスニックな属性を超えて共有されている大枠、本稿でいう多様性に対置する画一性である。



※この距離については得点が高い方が「modern」である。

表 2.

各種距離 (Raw Score)	項目の数	クロンバックの α
審美的に Desirable	18	.617
恋愛対象として Attractive	18	.637
親しい友人として Comfortable	17	.768
Modern	17	.963

そして次は「Modern」の各エスニック・カテゴリ平均の平均（素点）から順序に変換したものである。平均値から標準偏差 1 つ分の上値と下値も併せて記載したが、どの項目に対しても平均値からのぶれ幅は奇妙なほどに少ない。それほどに「Modern」はエスニック・カテゴリ的な視点から独立していると考えてよいだろう。したがって本章の仮説その 1 は支持された。これが、第四章における最大の知見である。

上図をみれば、おおまかに 3 段階の序列があるように見える。Foreign-born は基本的に 4 未満だが、Foreign-born でも White だけが例外的に他の American-born 各種と同等の 4-4.5 の範囲の高い評価を獲得している。American-born の中でも頭一つ突出しているのは、White American で、4.5 以上である。

順位にすると、大きな三つの序列が分かりにくくなるが、参考までに上図を順位に変換したものを行列で下に示しておく。

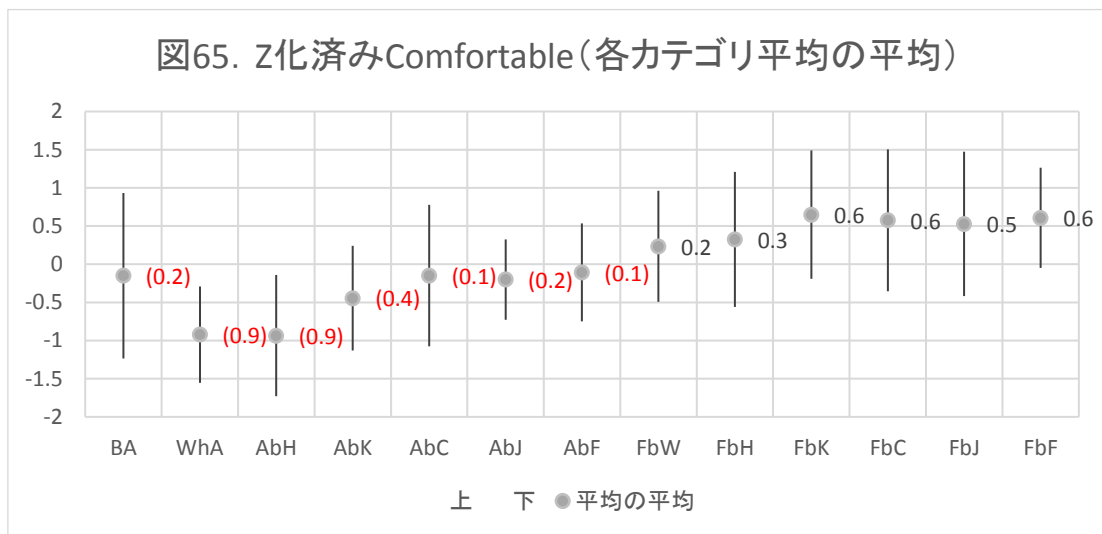
表 3.

順位	BA	WhA	AbH	AbK	AbC	AbJ	AbF	FbW	FbH	FbK	FbC	FbJ	FbF
Grand Average	3	1	5	2	7	4	8	6	12	9	11	10	13
上	2	1	5	3	8	4	7	6	12	9	11	10	13
下	3	1	7	2	5	4	8	6	11	9	12	10	13

※「上」とは、平均より S.D. 1つ分の上値で、「下」はその下値である。

逆社会的距離の 3 つの領域については、回答者のエスニック・カテゴリ間の不一致度がみられた。これが仮に.8 以上の高い一致度をみせていたらそれこそむしろ瞠目に値する。つまり、この 3 つの領域で逆社会的距離が仮に一致した場合、どの視点からも距離が近い特定のエスニック・カテゴリの雑食性を示し、逆にどの視点からも距離が離れているエスニック・カテゴリの単食性を示すからである。いずれの視点からも全てのカテゴリが近距離であれば、この結果のみ単体で切り取って安直にとらえてしまえば、全てのカテゴリが雑食になり、文化的嗜好は人々の属性的縛りが低下したという解釈すら成り立つだろう。実際の結果はいずれの領域でも不一致している。ただし、「親しい友人として Comfortable」の距離については、標準化した値であればという条件つきだが、クロンバックの α かけると、0.853 になってしまい、White American と American-born Hispanic がもっとも距離が近く、Foreign-born の諸アジア系は遠いことに、エスニック・カテゴリ間でそれなりの意見の一致がみられたといえる。参考までに下に示しておく。

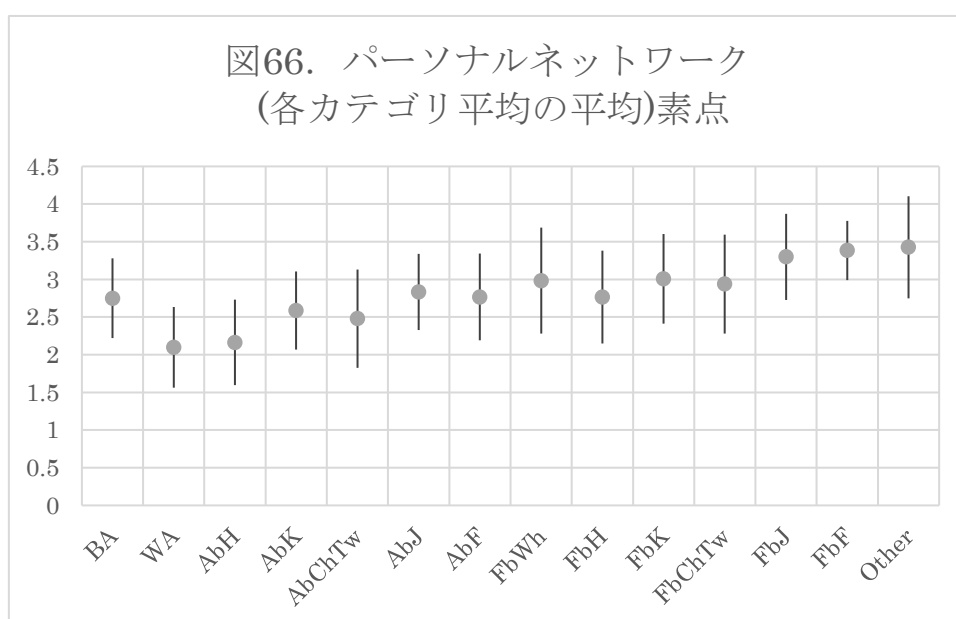
この含意は、White American と American-born Hispanic 系は相対的に、親しい友人関係を築く上で相手のエスニック・カテゴリの属性に関わらず抵抗を示さず、Foreign-born の諸アジア系は相手のエスニックな属性についての嗜好が相対的に強いと思われると読み解くことが可能である。



5 接触量

設問文は、「If you were to measure the amount of time you interact with each ethnic group, either for professional, friendship or any other kinds of relationship, what would it be?」である。選択肢から N/A を省いた以外は他の距離尺度と同様である。

実は、この接触量を問う設問もエスニック・カテゴリ間で意見の差が少ない距離である。特にネットワークと呼ばなければならないような人々のつながり方を測っているわけではないが、ここでは仮に **Personal network** の距離とした。各カテゴリ平均間の一致度をあらわす、クロンバックの α の値は.903（項目数：18）になった。



これは回答者のエスニック・カテゴリ属性がいずれの場合でも、**White American** と **American-born Hispanic** との接触度合いが高いことを意味する。LA ではエスニック・バブル内でなにごとにも用がたされる傾向が強い印象であったが、今回の調査協力者のなかではそうではないことが示された。

6 政治的に正しい回答傾向

下の表中の4つの距離尺度の設問において、すべてのエスニック・カテゴリにたいして同じ値（すべて N/A も含む）をつけた回答者の率である。これを政治的に正しい（PC）回答としてここで定義し、その率を確認したい。以下の表は、全体 N が二桁に満たない回答者 Ethnicity 属性、および不明確な場合は省略した。

表 4.

Ethnicity1 と PC 回答傾向					
回答者 Ethnicity 属性	Modern	Desirable	Attractive	(Close Friendship) Comfortable	全 体 N
BA	23.5%	11.8%	11.8%	17.6%	17
WhAm	20.3%	20.3%	6.8%	23.7%	59
AbHis	3.6%	7.1%	7.1%	10.7%	28
AbKor	30.8%	7.7%	7.7%	7.7%	13
AbChTw	23.1%	7.7%	15.4%	30.8%	13
AbSSeAzn	30.0%	10.0%	40.0%	20.0%	10
Mixed	12.5%	3.1%	6.3%	15.6%	32
FbKor	16.7%	3.3%	10.0%	0.0%	30
FbChTw	13.5%	10.8%	5.4%	10.8%	37
FbSAzn	6.3%	0.0%	12.5%	25.0%	16
FbFili	30.0%	20.0%	20.0%	10.0%	10

全体 N が小さい程、極端にぶれることを考慮すべきだが、全体としても、「Modern」の距離については、PC 回答傾向が相対的に強いといえるだろう。クロンバックの α の項で、みたような一致度の高さの反面、全てのエスニック・カテゴリに対して同じ値を回答したケースが少なくないこともまた事実である。

忘れてはならないのが、「Modern」以外は「逆」距離である。つまり、自分が他のエスニック・カテゴリから距離を置かれやすいかという主観である。そのため、「逆」ではない「Modern」と同質とはいえない。

7 仮説検証その2 : Foreign-born Korean 視点をめぐって

本章の仮説その2は第三章を意識し、Foreign-born Korean が American-born Korean から社会的距離の3つの領域において受け入れられている、であった。具体的な判断は、FbK 視点において、AbK からの3種の逆距離（受け入れられ度）が小さければ受け入れられているといえる。距離の大小の判断は、FbK 視点からみた場合、同じ FbK からの逆距離をひとつの比較対象とした。また、Fb が Ab の Co-ethnic に受け入れられていることが当たり前なのかについては、Foreign-born Chinese/Taiwanese 視点の逆距離の対応する部分と比較することにした。比較対象として同じく東北アジアの Foreign-born Japanese はこの場合は適当ではない。FbJ からの回答者数が非常に少なかったこと、また American-born Japanese とは言語グループが完全に異なっているからである。

第三章の知見の量的な検討であれば、時系列の比較が必須であるが、一時点でのサンプリングで、その比較ができないし、また、世代別に処理して擬似的な時代比較をすることさえも、N のあまりの小ささのためいささか無理がある。そのため、第三章が示唆する変化によるものか否かにまで言及することができなかった。このように制限は強いが、現状の確認として次に図示するのは、男女別の3つ領域の逆社会的距離である。性別で分けたのは、「審美的に Desirable」、「恋愛対象として Attractive」な距離については性差が目視でも明らかであったためである。比較対象として FbCh/Tw と、また同じく N が大きい White American も比較のために併せて示す。

7-1 「審美的に Desirable」な逆社会的距離

この項目は男女で回答傾向の揺れが大きかった。仮説2の通り、FbK は性別に関わらず、AbK に受け入れられてもらっているという実感をもっていることが多い。FbK の男性については、同属性の FbK とは特別近くなく、むしろ AbH や AbK との距離の方が近い。ただ、Fb が Ab の Co-ethnic に受け入れられている実感をもっている傾向は FbK 固有の現象でもなく、FbCh/Tw でも同様であった。FbCh/Tw でも男性は、同属性の FbC よりも AbC からより受け入れられていると感じている。

White American については、Fb の Co-ethnic にやはり特別に距離が近いと感じている。FbK や FbC と異なっているのは、男女差が FbW にたいして逆転している。男性よりも、女性の WA の方が、FbW に受け入れられている印象をもっている。

図 67. Desirable (FbK男女別視点)

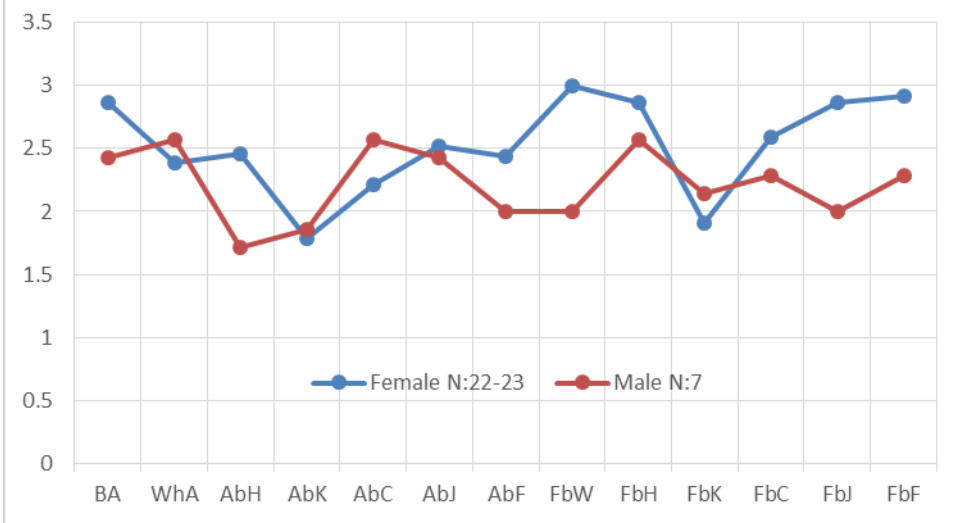


図 68. Desirable (FbCh/Tw男女別視点)

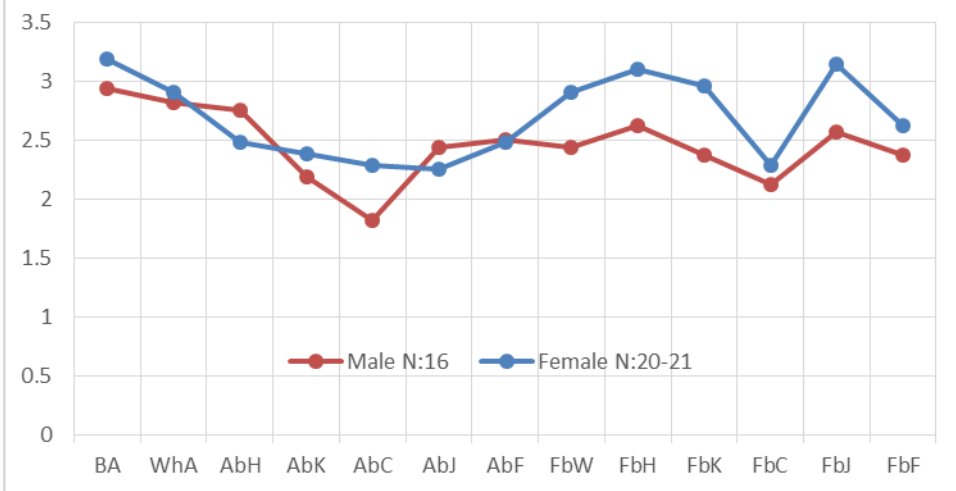
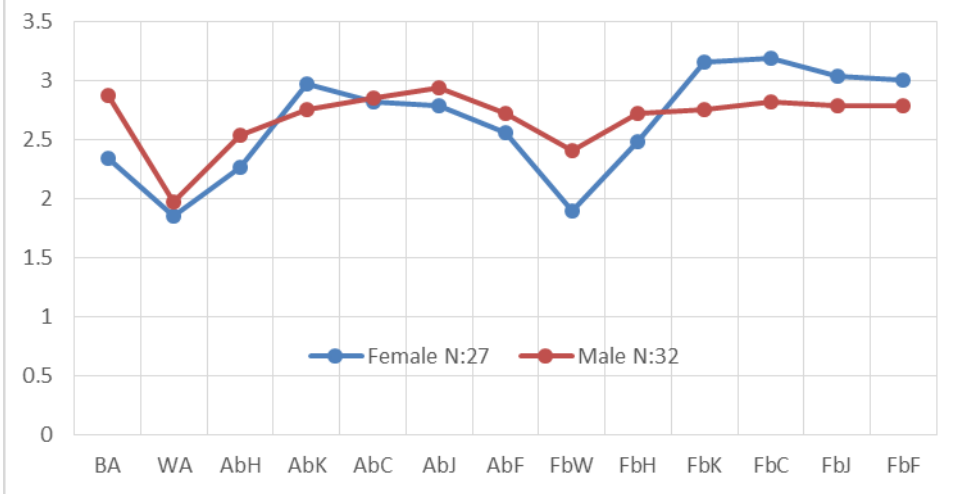


図 69. Desirable (WhA男女別視点)



7-2 「恋愛対象として Attractive」な逆社会的距離

この領域でも、仮説 2 の通り、FbK は AbK に受け入れられている印象を男女ともにもっている。女性の方が、対象のカテゴリに関わらず、(一部の例外を除き) 全般的に男性 FbK よりも受け入れられている実感をもっているようだ。

ただし、Desirable の距離と同じく、Ab の Co-ethnic に受け入れられている様子は、FbK だけに特有な現象ではなく、FbC 視点でも AbC に距離が近いし、WA においても同様である。したがって、「審美的に Desirable」でも「恋愛対象として Attractive」な距離の領域についても仮説 2 が支持されたとは言い難い。

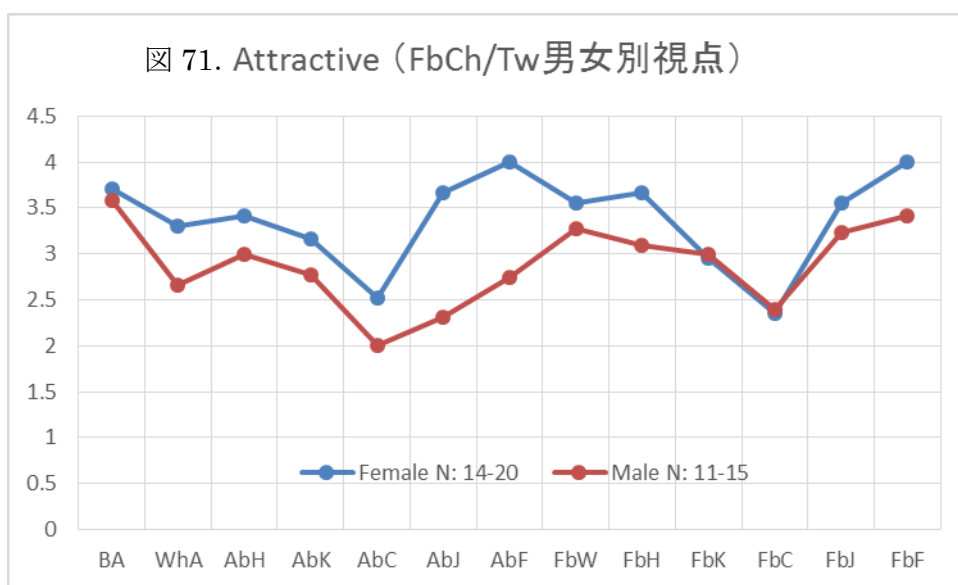
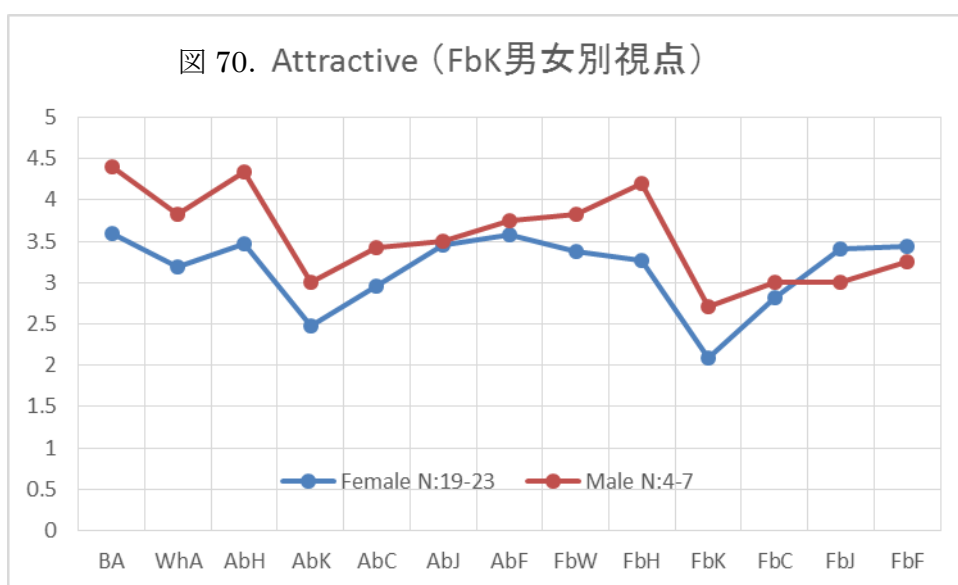
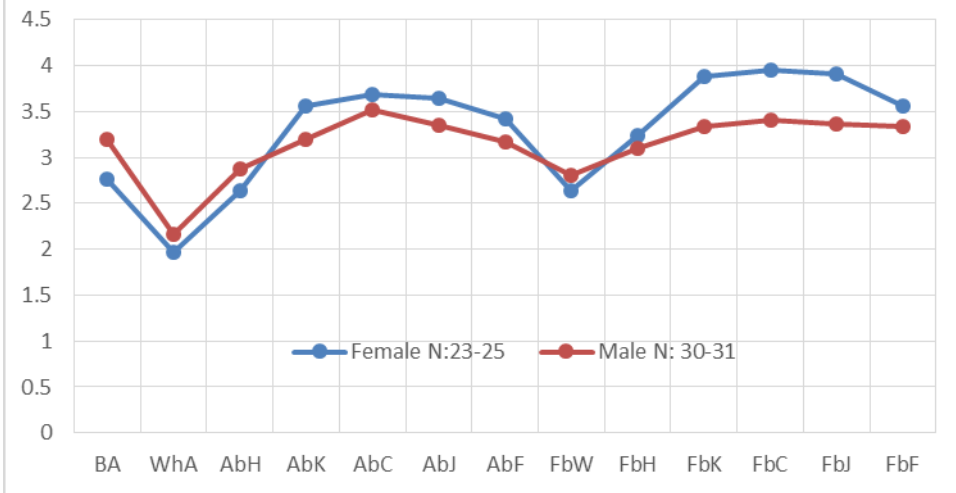


図 72. Attractive (WhA男女別視点)



7-3 「親しい友人関係をもつのに Comfortable」な逆社会的距離

この領域についても、上記の二つの領域の距離と同じことが言える。異なる点は、この距離においては性差が顕著に少なかったことである。

このように、いずれの領域の距離においても、東北アジア系の Fb が Ab の Co-ethnic に受け入れられている状況は確認できた (FbJ は除く)。しかしそれが Foreign-born Korean に特有の現象ではなかったうえに、肝心の世代間比較も困難なため、この現象が何の影響を受けているのかの含意についてはほとんど言及できない。第三章でみたように、蔑まされた時期を脱したために、Ab の Co-ethnic に受け入れられるように変化したのか、それが、FbK のみならず、FbC にまで波及するようなものであったのか、検証材料が欠けている。

仮説 2 は棄却できないものの、支持されたとも言い難いという結果になった。

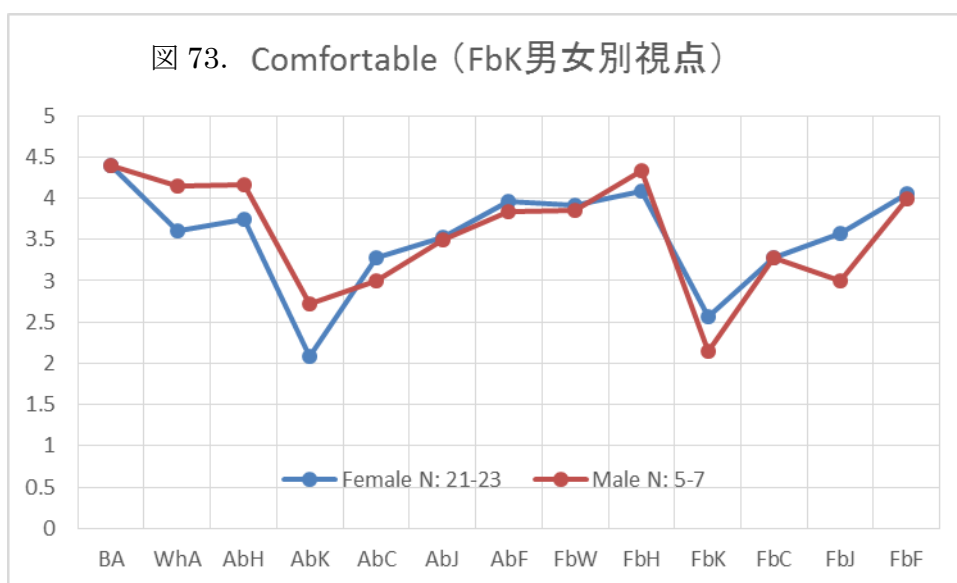


図 74. Comfortable (FbCh/Tw男女別視点)

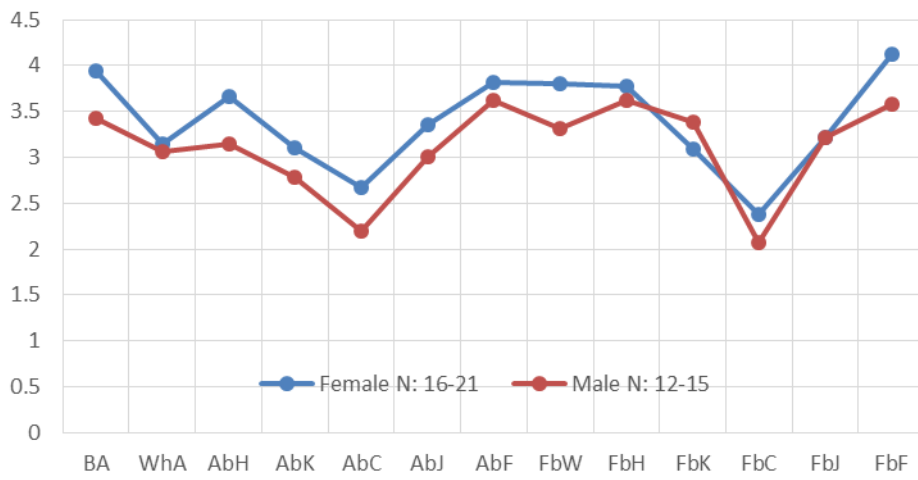
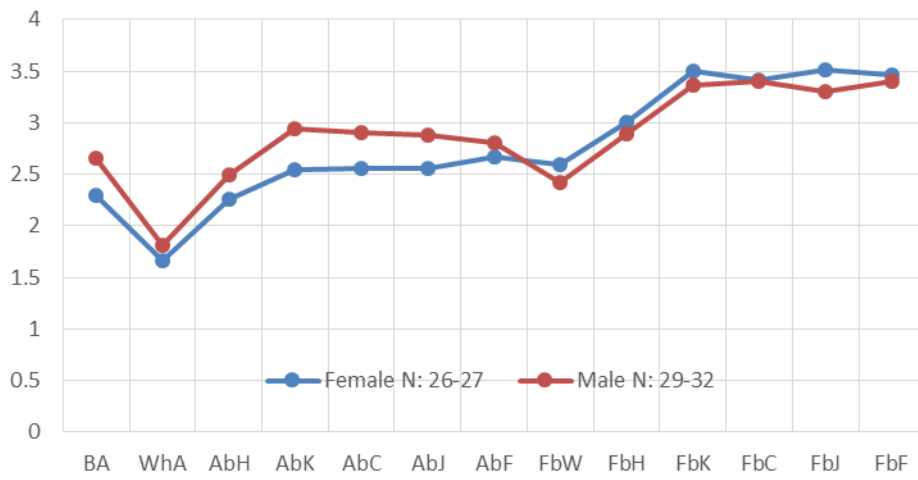


図 75. Comfortable (WhA男女別視点)



8 小括

本章の仮説のその 1 は支持された。「モダン」のステレオタイプは WA を頂点に、続いて American-born の各カテゴリと, Foreign-born White を含めた準「モダン」なグループと, 最も「モダン」と思われていない Foreign-born のアジア系のグループで成す, 大きく分けると三段階の序列がみられた。また, そのヒエラルキーは回答者のエスニック・カテゴリ属性から独立して共有されていた大枠で, 本稿でいう画一性を図示したものである。

本章の仮説その 2 は, 判断材料に欠けており, 棄却はできないものの, 支持もできないとなった。Foreign-born Korean はたしかに American-born Korean に受け入れられている様子が確認できたが, それが, 以前は受け入れられていなかったものが変化して現状に至っているのか確認できなかった。また, FbC も同様に AbC に受け入れられているようで, それが, 以前は受け入れられておらず, 近年になって受け入れられたのか, Chinese 系については時代の変化を受けずに変わらず受け入れられ続けてきたのかも確認できない。現時点からいえることは, FbK に特有の現象で, American-born の Co-ethnic に受け入れられているように変わったと言うには材料が足りていないということである。

また, クロンバックの α を用いた諸距離についての回答者のエスニックな属性間の意見の一致度合いは上述の通りだが, 同時にそのほかの諸距離の一致・不一致度合いも併せて示すことができた。標準化するという条件付の「親しい友人関係をもつうえでの Comfortable」さと, 条件付きではなくとも, あらゆる人間関係を含む接触頻度は一致度が高かった。また, 本章の前半に示した各エスニック・カテゴリ属性視点の各距離もそれぞれがばらついており, 回答者のエスニックな属性の効果を示していた。

終章

この章では、ここまでの第一章から第四章で確認した議論と知見を振りかえり、続いて、序章で展開した本研究全体の目的に照らしながら全体の結論を述べる。

本研究の主題は、グローバル社会において、文化の画一化が拡大しているのか、多様性が拡散しているのか、という社会学の典型的論点をエスニック・ヒエラルキーという概念によって再考することであった。

第一章では、エスニック・ヒエラルキーという概念と同時に、それに密接に関わる待避的人種差別、または第三のカラー・ラインとして知られる概念を導入し、それが経済的な境界線まではとうに踏み越えているだろう「日本人」にもまだ有効であることを確認した。それをつうじて、本研究全体で扱った感覚的な異なりは、西洋的な文化規範からのズレ度合いという序列をなして存在することを論じ、この研究がもつ価値に言及した。

第二章では、実証からはなれ、文化論と消費社会、差別・抑圧論についての先行研究を論じ、第一章で導入した類いのヒエラルキー、序列との関連をしめした。主として、グローバル化と消費社会化が一層に深化した現在におけるバウマンの文化論を検討した。ブルデュエーのディスタクシオンに描かれているような文化資本による序列は第一近代の特徴であり、液状化近代とも呼ばれる第二近代においては、そのようなものは希薄化し、むしろ文化の雑食傾向があるというのがバウマンの主張であった。多様性を礼賛し、創造、生産と消費のサイクルの原動力として駆動させる、そうした命題に関して、本研究では、消費と生産の様態の変化にいち早く対応しているとおもわれる、経営学のいくつかの潮流に分析の目を向けた。それは、消費の場についてはマーケティング論で、生産の場についてはダイバーシティ・マネジメント（部分的には異文化コミュニケーション論から援用されている）と、現場監督向けのリーダーシップ論にみいだされ、＜帝国＞における多様性の管理体制が差異と均質性の両方を奉ずる力学の一端をこのように確認した。

本研究の第三章において、実態はバウマンの文化論は必ずしもあてはまらないことが確認された。実際にみられた文化による序列、あるいは第一章でいう、感覚のズレによるヒエラルキーは、一つは特定の文化的な特徴や趣味が「悪趣味」であるという否定的なラベリングをとまなうときと、もう一つはもっとずっとわかりにくい類いのもの、つまり、無関心という態度か、リベラルな「寛容」という態度と、恣意的な「普遍性」を主張し、認めさせる諸力によって維持されていた。一方で、序列がいまだに維持されていることのみならず、それが変化していることも同時に確認された。かつて「FOB」とは、アジア系1世、(1.5世もしばしば)に向けられる蔑称であったが、そこに付着していたはずの否定的なコンnotationが少なくとも薄らぎ、中には積極的にその表象を消費する2世以降の韓国系米国人が現れたことである。その意味するところを第三章で追ったわけだが、韓国のソフト・パワー戦略の機軸である、韓流の世界市場への流布が関係していた。括弧付きの「普遍性」が恣意的に設定され、そこからのズレの度合いで序列がつくられる。そのズレこそが差異であり、多様性であるが、感覚の異なりにもとづいて行われる待避的差別と、また、「寛容」か、多様

性を礼賛する「リベラル」な態度によっても差異は維持される。しかし、このような序列は画一性の拡大にも同時に作用している。「普遍」的であるという装いを整えているため、多様な参加者の間で共有されている事実は、「下流」とされた人々を同化に向かわせ、また、米国での韓流自体の市場戦略にみられたように、特定の文化が「普遍性」の衣を纏っている市場社会では、市場原理を媒介して、差異化と均質化が同時に行われていた。

第四章でみいだされたことは、「モダン」の度合いの程度の違いで、エスニック・カテゴリのヒエラルキーがあり、その序列は回答者のエスニックな属性にかかわらず共有されていて、あいかわらず「FOB」性は否定的な位置に置かれていることであった。

本研究全体の仮説の前半は、「普遍的」なるものを中心とした、そこからの「ズレ」の程度にもとづく、待避的人種差別とも言われる、ハビトゥスによるエスニック・ヒエラルキーはある、であった。以上でみたように支持された。そして仮説の前半と連続性のある後半の仮説はこうであった。リベラルで多様性を称揚する言説により、あるいは文化産業・文化政策により、エスニック・ヒエラルキーは消失するか、変化する兆しはあるのか、それとも、その序列はむしろ階層間の分断を維持するか創造することで、多様性の増進に一役買っているのか。消失する兆しがあるとまでは言えないが、第三章でみた韓国系 2 世米国人らの態度・同化志向への距離の置き方の変化は確認され、変化はあるし、また階層間の分断を維持し、多様性の増進に一役買っていた、同時に、画一性の増進にも寄与していたといえる。

「経済の多様性が高まり、グローバル化が進んでも、集約的消費の源泉が力を失うことはないだろう。多くの消費者は、変化に抗ったり、互いに寄り集まったりすることによって、自分たちに関わる文化を保全しようとする。彼らは強い忠誠心や伝統、習慣、あるいは偏見といった理由からローカルな文化に寄与する。こうしたローカルな客層の基礎にあるのは、地域主義や、世界市民主義的なものに対する不信感である。」(コーエン 2011: 170.)

コーエンの議論で扱われる差異には序列がつけられている現状認識は全体的に薄いですが、上で引用した箇所はマジョリティからの排除が、異質性を保持するという序列の効果への言及である。3章、4章で私たちが確認したことは、コーエンが挙げた忠誠心、伝統、習慣、偏見という排除が序列を形成して人々を分断し、差異を維持し、また変化をつくる原動力になっている詳細である。それらは多様性を作る方向に作用しているが、(序列は多様性を担保する絶対条件とは考えにくく、) 序列がなくても多様性は維持されるであろうが、それを助長しているし、また、分断がおこると序列が生まれやすいことは否定し難い。

本研究はロサンゼルス郡での人々の感覚の境界線をめぐる動きの移ろいに焦点をあてた。特に、韓国系アメリカ人がこの時期にその境界線上で揺れた存在であったため対象になることが多かった。LA は世界を覆いつくすような<帝国>の首都の一つ、エンターテイン

メントの首都である。少なくともこれまではそうだった。ネグリらによると、＜帝国＞の諸首都はすべて西半球（しかも全てアメリカ合衆国内）にあることになっているが、それ自体、普遍性言説の偏りを示唆する。LAは西側にありながらも東半球に最も開けており、東西の境界線上といってもいい多様性の集積地である。この地では感覚の違いによる境界線が縦横無尽に走っている。多様性の管理を担っているのは共有されている大枠での画一性である。画一性が普遍的であるという言説が広く流通することで、多様性を内包しても機能する。その画一性とは非文化であるという神話があることで、多様な諸価値を束ねる「普遍性」を纏えているのだが、実は西半球から派生しているイデオロギーであるゆえに、西洋的なものからの「ズレ」は多分に遅延として解釈され、ヒエラルキーを形成する。このヒエラルキーにより、下に位置付けられた存在は承認を求めて、または序列内での上昇を期待して、同化路線に引き寄せられる。しかし、彼らの同化の試みはしばしば部分的な達成にとどまり、たえず不満分子を社会に生み出す。つまり、同列ではなくヒエラルキーの存在が変動を起こす原動力となっている。序列の低位置におかれる側は、そのヒエラルキーに抗ってその正当性に異議を唱え、その行為が新しい普遍性・価値観を広げる活動の動力源となり、既存の普遍性に揺らぎが起こる。マイノリティの同化欲求に対する主流社会の部分的な受容は、どの部分が達成され、どの部分が達成できないのかが交渉されるが、これまでは三つの段階を経て少しずつその許容範囲が広げられてきた。今もなお制限がかかっているのは親密圏と社交の場におけるハビトゥスによる違いである。

これまでの流れの順を追うと次のようになる。①（これまで、そして今も）既存の普遍性は自らの正統的位置を維持しようとし、不満分子の取り込みを始め、寛容性が高まる。60年代後半の公民権運動がこれに相当する。②寛容性はあくまでもあからさまな差別のみを排除し、不満分子を取り込みながらもヒエラルキーの中で低位に位置づける作用を持つ。普遍性言説は維持される。③（今起こり始めている状態のことだが、）別の新しい普遍性言説が存在感を増す可能性が現れるとき、不満分子は既存の普遍性言説から自らの待遇を改善するだろう別の新しい普遍性言説に移動する。

東半球世界の普遍性が数世紀ぶりに世界規模での普遍性を主張し始めている。LAが東西をまたいでなお今後も引き続き普遍性を主張することを欲するのであれば、東側から押し寄せる新しい普遍性を取り込んでの懐柔になるが、それはヒエラルキーの刷新が迫られるだろうし、ヒエラルキーが従来のまま維持されるならば、それは取り込みの失敗を意味し、LAの普遍性は規模を縮小し、従来ほどの普遍性を主張することが困難になるだろう。

本研究の主題は序章でしめたように、グローバル化の深まりにともなって、文化が画一化しているのか、あるいは多様化しているのか、という議論に資する材料を提供することであった。これへの結論は本研究の実証部分については、あくまでもロサンジェルスという一都市（郡）での例でしかないという制限付きであるが、序章で紹介した第三の立場、すなわ

ち、多様性と画一性は同時に進行しているという議論が概ね実態にそぐうことを確認した。多様性を維持しつつ、画一性も同時に進められる仕組みには、エスニック・カテゴリ間の象徴的な序列構造が駆動装置になっていたことも繰り返しみられた。一方で、同時に第三章に素描されたような韓国系 2 世米国人らの中で少なくない人数が、同化路線から距離をおきはじめていた。それは、既存の「普遍性」言説のゆらぎと、また別のもうひとつの「普遍性」がリアリティをもって共有される世界の立ち上がりを反映している。それは、韓流をとおした韓国のナショナルなソフト・パワーが東・東南アジア全域を覆うような規模になったからこそ、アジアからの第一世代の多い西海岸に住む 2 世以降の韓国系米国人の目にも、ひとつの「普遍性」をもった美的感覚として映りはじめたと考えられる。しかし、それは現時点では東アジア以外も含めた多様な人々の間で共有されるような性質のものにまだ充分にはなり得ていなかったことを第四章は示唆していた。

冒頭でも述べたように本稿が取扱う普遍性とは、アプリアリな普遍性ではない。問題に挙げたのは、そうではないものが、アプリアリ風を装うために必要としている舞台装置がまだ生きていることを取り扱っている。恣意的な確信による特殊な規範・基準・感覚を「普遍的」と捉える向きである。

画一化を進める諸力をつきつめることは、普遍性を規定する諸力の分析になるが、今あるデータからではそれほど深く踏み込まず、無理に言及すればそれは理論とデータの水準違い問題を起こしてしまうだろう。しかし、次のことであれば推し量れる範囲内であろう。

第三章の S さん、X さん、M さんなどの発言にもあったように、確実に韓流には否定的なラベルが「他者」によって割り当てられていた。しかし、その後の韓流側の西洋的世界への歩み寄りによって、以前よりかは「普遍」なものであるという認識も、C さんや J さんにみるように、一部では可能になってきた。韓流が西洋的な感覚に歩みよることが必然な選択肢であったことは三章で述べたとおりであるが、歩みよらなければならなかったのである。

バウマン他の後期近代社会を論じている諸説では、いずれも脱領域的になった支配アクターや超エリートらはすでに多元主義的手法を採用しており、以前のモダンな時代のような一方的な確信にもとづいた同化主義的アプローチには興味を失って撤退しているという論調がほとんどであるが、われわれがここまで見てきた諸々の知見は、必ずしもそれを常に裏書しているとは言いがたかった。少なからぬ場面において、西洋側の恣意的な確信による「普遍性」と「普遍的以外のモノ」が、消費行動、消費対象、消費者を分節化している様子が見受けられ、市場原理を通して駆動していた。大枠で共有されている最もわかりやすい「普遍性」の具体例のひとつは、四章のステレオタイプで「modern」とみられているエスニック・カテゴリ（※この設問中のモダンとは、社会学などの専門用語として使用するような第二近代に対置させられる近代を指してはいないことに注意。）にみられた序列に図示されたものであるが、この序列は頑強であったし、また、X さんや、Br さん、R さんらの語りは、明確な「普遍性」が西洋的なモノと疑念をはさむこともなく接合される例であった。

彼らは地球規模の支配的アクターであるとは言えないのだが、それでも人的資本の蓄積は相当に高い人たちである。量的な調査の対象者でも属性にかかわらず広く序列は共有されていた。これだと、同化主義が多元主義に支配と管理の手法として支配的な座を譲ったようには、はなはだ見えなかったのである。また、「普遍性」を規定する場として市場は大きな力を振るっていたが、しかし購買力の高さのみが豪腕を振るっているわけでもなかった。今回のデータでは一都市での状況で、またサンプリング方法等の限界もあり、文化産業の一部をとりあげ、国民国家による普遍性を再規定する企図を主として考察したため、これ以上に普遍性全般を語りえず、今後の課題としたい。

本稿は変化の兆しを追った。まず日本列島からの日本人が西洋圏でひかれる境界線が中国の経済的台頭をはさんで、あくまでも「相対的に」向上したようにみえることを記述した。次いで、グローバル秩序のうえで重要な意味がある都市と思われ、かつ東西の感覚的境界線の変化を期待する LA 郡をフィールドにした。そこでは 2000 年代後半におこった韓国人と米国人の間の境界線の変化を確認した。今後もこのような東西のソフト・パワーによる変化の兆しを追うならば、当然に中国人、台湾人を対象にすべきだろう。

文献

- 阿部潔, 2001, 『彷徨えるナショナリズム——オリエンタリズム ジャパン グローバリゼーション』世界思想社.
- Aberson, Christopher L., & Sarah C. Haag. 2007, "Contact, Perspective Taking, and Anxiety as Predictors of Stereotype Endorsement, Explicit Attitudes, and Implicit Attitudes." *Group Processes & Intergroup Relations*. 10(2): 179-201.
- Adorno, Theodor, [1956] (1991), *Dissonanzen: Musik in der Verwalteten Welt* [*Dissonances: Music in the Administered World*], Göttingen: Van-Denhoeck & Ruprecht. (=1998, 三光長治・高辻知義訳『不協和音』平凡社.)
- Anderson, Benedict, 1983, *Imagined Communities*. (=2004, 白石さや・白石隆訳『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版.)
- 朝日新聞社メディアビジネス局, 2013, 「韓国のブランド価値向上につながる コンテンツへの熱い思い——韓国コンテンツ振興院 日本事務所 所長 金泳徳氏」, 朝日新聞社メディアビジネス局ウェブサイト, (2016年8月10日取得, <http://adv.asahi.com/modules/feature/index.php/content0663.html>).
- Balibar, Etienne & Immanuel Wallerstein, 1990, *Race, Nation, Classe*, Paris. (=2014, 若森章孝他訳『人種・国民・階級——「民族」という曖昧なアイデンティティ』唯学書房.)
- Bassett-Jones, Nigel, 2005, "The Paradox of Diversity Management, Creativity and Innovation," *Creativity and Innovation Management*, 14(2): 169-75.
- Bauman, Zygmunt, 2011, *Culture in A Liquid Modern World*, Wroclaw, Poland: Polity Press. (=2014, 伊藤茂訳『リキッド化する世界の文化論』青土社.)
- , 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press. (=2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ—液状化する社会』大月書店.)
- Beck, Ulrich, Anthony Giddens, & Scott Lash, 1994, *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, UK: Polity Press. (=1997, 松尾他訳『再帰的近代化—近現代における政治, 伝統, 美的原理』而立書房.)
- Beck, Ulrich, 1992, *Risk society: Towards a New Modernity*, 17, Sage. (=1998, 東廉・伊藤美登里訳『危険社会—新しい近代への道』法政大学出版局.)
- Bennett, Milton J., 1993, "A Developmental Model of Intercultural Sensitivity."
- Berger, P.L. & Luckmann, T, 1966, *The Social Construction of Reality - A Treatise in the Sociology of Knowledge*, New York: Anchor Books. (=2008, 山口節郎訳『現実の社会的構成』新曜社.)
- Blumer, Herbert, 1965, "The Future of the Color Line." John C. McKinney and Edgar T.

- Thompson eds., *The South in Continuity and Change*, Durham: Duke University Press, 322-36.
- Bogardus, Emory Stephen, 1933, "A Social Distance Scale," *Sociology & Social Research*, 17: 265-71.
- Bonilla-Silva, Eduardo, 2014, *Racism without Racists: Color-Blind Racism and the Persistence of Racial Inequality in the United States*, Rowman & Littlefield Publishers.
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction, Critique Sociale du Jugement*, Editions de Minuit. (=1990, 石井洋二郎訳, 『ディスタクシオン—社会的判断力批判 I・II』藤原書店.)
- Brown, Wendy, 2006, *Regulating Aversion: Tolerance in the Age of Identity and Empire*. (=2010, 向山恭一訳 『寛容の帝国』法政大学出版社.)
- 韓国文化体育観光部, 2013, 「2013 コンテンツ産業統計 (2012年データ)」.
- Butler, Judith, 1993, *Bodies that Matter: On the Discursive Limits of "Sex"*, Routledge.
- Casimir, F. L., 1993, "Third-Culture Building: A Paradigm Shift for International and Intercultural Communication," In S.A. Deetz ed., *Communication Yearbook*, 16: 407-28. Newbury Park: CA: Sage.
- 中央日報, 2016, 「女優ユ・インナ、撮影中の中国ドラマ降板…「THAAD 報復」か」, 2016年8月31日 (2016年9月10日取得, <http://japanese.joins.com/article/072/220072.html?servcode=700§code=740>).
- Cowen, Tyler, 2009, *Creative Destruction: How Globalization is Changing the World's Cultures*, Princeton University Press. (=2011, 浜野志保訳・田中秀臣監訳 『創造的破壊—グローバル文化経済学とコンテンツ産業』作品社.)
- 戴 二彪 (2005) 「改革・開放以降の中国からアメリカへの人口移動--政策要因, 規模, 特徴と在米中国系社会への影響」 『華僑華人研究』 2: 34-50.
- Deleuze, Gilles, 1986, *Foucault*, Les Editions de Minuit. (=2007, 宇野邦一訳 『フーコー』河出書房新社.)
- DePree, Max, 1989, *Leadership is an Art*, New York: Bantam Doubleday Dell Publishing Group.
- DiStefano, Joseph J., & Martha L. Maznevski, 2000, "Creating Value with Diverse Teams in Global Management," *Organizational Dynamics*, 29(1): 45-63.
- Dovidio, John F., Kerry Kawakami, and Samuel L. Gaertner., 2000, "Reducing Contemporary Prejudice: Combating Explicit and Implicit Bias at the Individual and Intergroup Level," Stuart Oskamp ed., *Reducing Prejudice and Discrimination*, Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates Publishers: 137-63.
- Down Like JTown, 2016, "Taking a Pause at the LA Fresh Off The Boat Screening," February 5, 2015, (Retrieved February 26, 2015,

- <http://www.downlikejtown.com/first/2015/2/5/fresh-off-la>).
- Dupagne, M. & D. Waterman, 1998, "Determinants of U.S. Television Fiction Imports in Western Europe," *Journal of Broadcasting & Electronic Media*, 42(2): 208-20.
- 遠藤薫編, 2010, 『グローバル化と文化変容——音楽, ファッション, 労働からみる世界』世界思想社.
- Featherstone, Mike, 1995, *Undoing Culture: Globalization, Postmodernism and Identity*, Sage. (=2009, 西山哲郎・時安邦治訳『ほつれゆく文化: グローバリゼーション, ポストモダニズム, アイデンティティ』法政大学出版局.)
- Florida, Richard, 2003, "Cities and the Creative Class," *City & Community*, 2(1): 3-19.
- Foucault, Michel, 1975, *Surveiller et Punir. Naissance de La Prison*, Editions Gallimard. (=1977, 田村俣訳『監獄の誕生—監視と処罰』新潮社.)
- FungBros, 2014a, "23 Signs You Grew Up With AZN PRIDE!" YouTube Channel FungBros, May 3, 2014, (Retrieved August 3, 2014, https://www.youtube.com/watch?v=pHeFRx-YVrY&index=100&list=PLZjoE8dJHyDtFHRQP3lCAGS_JKTFK3jFB).
- , 2014b, "Signs You Grew Up With AZN PRIDE (PART 2)," YouTube Channel FungBros, May 3, 2014, (Retrieved August 3, 2014, https://www.youtube.com/watch?v=FSKzRkBabu0&list=PLZjoE8dJHyDtFHRQP3lCAGS_JKTFK3jFB&index=101).
- Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Diane Pub Co. (=1995, 松尾精分・松川昭子訳『親密性の変容——近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房.)
- , 1999, *Runaway World*, Profile Books. (=2001, 佐和隆光訳『暴走する世界——グローバル化は何をどう変えるのか』ダイヤモンド社.)
- Gilroy, Paul, 1993, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*, Harvard University Press. (=2006, 上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識』月曜社.)
- Hagendoorn, Louk, 1993, "Ethnic Categorization and Outgroup Exclusion: Cultural Values and Social Stereotypes in the Construction of Ethnic Hierarchies," *Ethnic and Racial Studies*, 16(1): 26-51.
- Hagendoorn, Louk, & Joseph Hraba 1987, "Social Distance toward Holland's Minorities: Discrimination against and among Ethnic Outgroups 1," *Ethnic and Racial Studies*, 10(3): 317-33.
- Hardt, Michael & Antonio Negri, 2000, *Empire*, Harvard University Press. (=2003, 水嶋一憲他訳『<帝国>』以文社.)
- 春木育美, 2016, 「コリアンエスニック教会と米国の韓国系移民者」『人文・社会科学論集』

33 : 19-40.

- Harvey, David, 1989, *The Condition of Postmodernity: An Enquiry into the Origins of Social Change*, Malden, MA: Blackwell.
- Hammer, Mitchell R., Milton Bennett, and Richard Wiseman, 2009, "The Intercultural Development Inventory," M.A. Moodian ed., *Contemporary Leadership and Intercultural Competence*, CA: Thousand Oaks Sage, 16: 203-18.
- Hammer, Mitchell R., 2012, "The Intercultural Development Inventory: A New Frontier in Assessment and Development of Intercultural Competence," M. Vande Berg, R.M. Paige, & K.H. Lou, ed., *Student Learning Abroad*, Sterling, VA: Stylus Publishing, 115-36.
- Hebdige, Dick, 1995, "Subculture: The Meaning of Style," *Critical Quarterly*, 37(2): 120-24.
- Hing, Leanne S. Son, Winnie Li, & Mark P. Zanna, 2002, "Inducing Hypocrisy to Reduce Prejudicial Responses among Aversive Racists." *Journal of Experimental Social Psychology*, 38(1): 71-8.
- Horkheimer, Max, & Theodor W. Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung: Philosophische Fragmente*, S. Fischer Verlag. (=2007, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法—哲学的断想』岩波書店.)
- Hraba, Joseph, Louk Hagendoorn, & Roeland Hagendoorn, 1989, "The Ethnic Hierarchy in the Netherlands: Social Distance and Social Representation," *British Journal of Social Psychology*, 28(1): 57-69.
- Huntington, Samuel P., 1997, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, Penguin Books India. (=1998, 鈴木主税訳『文明の衝突』集英社.)
- 百本和弘, 2015, 「世界のビジネス潮流を読む—エリアレポート韓国—化粧品が輸出モデルに」『ジェトロセンサー』 12: 74-5.
- 櫛本崇恵, 2009, 「海外における日本人留学生が体験した社会的・文化的異質性嫌悪に関する一考察」『天理大学人権問題研究室紀要』 12: 13-28.
- 稲村博, 1980, 『日本人の海外不適應』日本放送出版協会.
- Institute of International Education, 2016, "International Student Enrollment Trends, 1948/49-2015/16." Open Doors Report on International Educational Exchange. (Retrieved March 6, 2017, <http://www.iie.org/opendoors>).
- 石井敏・久米昭元・遠山淳, 2001, 『異文化コミュニケーションの理論——新しいパラダイムを求め』有斐閣.
- 岩崎信彦, ケリ・ピーチ, & 宮島喬編, 2003, 『海外における日本人, 日本のなかの外国人: グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂.
- Jang, Gunjoo, & Won K. Paik, 2012, "Korean Wave as Tool for Korea's New Cultural

- Diplomacy,” *Advances in Applied Sociology*, 2(3): 196.
- Jung, Eun-Young, 2009, “Transnational Korea: A Critical Assessment of the Korean Wave in Asia and the United States,” *Southeast Review of Asian Studies*, 31(2009): 69-80.
- Kant, Immanuel, 1787, *Kritik der Reinen Vernunft 2 Auflage*. (=2010, 中山元訳『純粹理性批』1, 光文社.)
- 経済産業省商務情報政策局文化情報関連産業課, 2016, 「コンテンツ産業の現状と今後の発展の方向性」, (2016年9月1日取得, http://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/contents/downloadfiles/shokanjikou.pdf).
- Kelly, Erin, & Frank Dobbin, 1998, “How Affirmative Action Became Diversity Management Employer Response to Antidiscrimination Law, 1961 to 1996,” *American Behavioral Scientist*, 41(7): 960-84.
- Kim, Janine Young, 2007, “Are Asians Black?” Zhou, Min and J.V. Gatewood eds., *Contemporary Asian America: A Multidisciplinary Reader*, New York University Press, 331-53.
- 高賛侑, 1993, 『アメリカ・コリアタウン——マイノリティの中の在米コリアン』社会評論社.
- Kocca Korea Creative Content Agency USA, 2014, *Consumer Research Report on Korean Contents in the U.S. Market (K-POP)*, Kocca.
- Kotter, John P., 1999, *Kotter on What Leaders Really Do*, Harvard Business Press. (=1999, 黒田由貴子監訳『リーダーシップ論—いま何をすべきか』ダイヤモンド社.)
- Korea International Trade Association, 2016, “K-Statistics: 3304, US,” KITA.ORG, (Retrieved September 15, 2016, http://kita.org/kStat/byCom_SpeCount.do).
- 小坂井敏晶, 1996, 『異文化受容のパラドックス』朝日新聞社.
- Kotler, Philip, Hermawan Kartajaya & Iwan Setiawan, 2010, *Marketing 3.0—From Products to Customers to the Human Spirit*, John Wiley & Sons. (=2010, 恩藏直人・藤井清美訳, 『コトラーのマーケティング 3.0 ——ソーシャル・メディア時代の新法則』朝日新聞出版.)
- KOTRA, 2016, *2015 한류의 경제적 효과에 관한 연구*, (=2016, KOTRA/韓国文化産業交流財団, 「2015 韓流の経済的効果に関する研究」.)
- Kovel, Joel, 1970, *White Racism: A Psychohistory*, New York: Pantheon. Reprinted in: Kovel, Joel, 1988, *White Racism: A Psychohistory*, London: Free Association Books.
- 栗田知宏, 2007, 「『エミネム』の文化社会学——ヒップホップ/ロックの真正性・正統性指標による『差別』表現の解釈」『ポピュラー音楽研究』11: 3-17.
- Kyung-Sup, Chang, 1999, “Compressed modernity and its discontents: South Korean

- society in transition,” *Economy and Society*, 28(1): 30-55.
- Kyung-Sup, Chang (チャン・キョンスプ), 2010, “Individualization without Individualism,” *Journal of Intimate and Public Spheres*, (= 2013, 柴田悠訳「個人主義なき個人化」落合編『親密圏と公共圏の再編成——アジア近代からの問い』京都大学学術出版会.)
- Lai, Him Mark, 2004, *Becoming Chinese American: A History of Communities and Institutions*, Rowman Altamira.
- Lash, Scott, 1990, *Sociology of Postmodernism*, Routledge (=1997, 田中義久監訳『ポスト・モダニティの社会学』法政大学出版局.)
- Lee, Francis LF., 2009, “Cultural Discount of Cinematic Achievement: The Academy Awards and US Movies’ East Asian Box Office,” *Journal of Cultural Economics*, 33(4): 239-63.
- Lee, Erica, 2015, *The Making of Asian America – A History*, Simon & Schuster.
- イ・ミジ (李美智), 2010, 「韓国政府による対東南アジア『韓流』振興政策—タイ・ベトナムへのテレビ・ドラマ輸出を中心に—」『東南アジア研究』48(3): 265-93.
- Lee, Motoko Y., Stephen G. Sapp, and Melvin C. Ray., 1996, “The Reverse Social Distance Scale,” *The Journal of Social Psychology*, 136(1): 17-24.
- Maalouf, Amin, 1998, *Les Identités Meurtrières*, Grasset, Paris.
- Maeda, Daryl J., 2005, “Black Panthers, Red Guards, and Chinamen: Constructing Asian American Identity through Performing Blackness, 1969-1972,” *American Quarterly*, 57(4): 1079-103.
- Maeda, Daryl J., 2009, *Chains of Babylon: The Rise of Asian America*, University of Minnesota Press.
- 前田悟志, 2015, 『第三のカラー・ラインと「日本人」カテゴリー—〈帝国〉の振る舞いコードの共有度合いによるヒエラルキー』社会学論考(35).
- Magda, Rosa María Rodríguez, 2001, “Transmodernity, Neotribalism and Postpolitics.” *Interlitteraria*, 6: 9-18.
- 松井剛, 2001, 「消費論ブーム—マーケティングにおける『ポストモダン』(特集 ポストモダンとは何だったのか—80年代論)」『現代思想』29(14): 120-29.
- 間々田孝夫, 2007, 『第三の消費文化論: モダンでもポストモダンでもなく』ミネルヴァ書房.
- McCracken, Grant, 1988, *Culture and Consumption: New Approaches to the Symbolic Character of Consumer Goods and Activities*. (=1990, 小池和子訳『文化と消費とシンボルと』勁草書房.)
- Memmi, Albert, 1982, *Le Racisme: Description, Définition, Traitement*, Gallimard. (=1996, 菊地昌実・白井成雄訳『人種差別』法政大学出版.)

- 毛利嘉孝, 2012, 『増補 ポピュラー音楽と資本主義』 せりか書房.
- 村上由見子, 1997, 『アジア系アメリカ人』 中公新書.
- 三原龍太郎, 2014, 『クールジャパンはなぜ嫌われるのか—「熱狂」と「冷笑」を超えて』 中公新書ラクレ.
- 三橋修, 1988, 「差別」 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』 337-8.
- 宮原浩二郎, 1994, 「エスニックの意味と社会学の言葉」『社会学評論』 44(4): 6-19.
- 長崎励朗, 2012, 「ソフト・パワーの視点から読むポピュラー音楽研究」『京都大学生涯教育学・図書館情報学研究』 11: 17-23.
- 中村美亜, 2010, 「<音楽する> とはどういうことか?—多文化社会における音楽文化の意義を考えるための予備的考察」『東京藝術大学音楽学部紀要』 36:161-78.
- Nye, Joseph S., Jr., 2004, *Soft Power: The Means to Success in World Politics*. (=2004, 山岡洋一訳『ソフト・パワー—21世紀国際政治を制する見えざる力』 日本経済新聞出版社.)
- 内閣官房知的財産戦略推進事務局, 2013, 「知的財産戦略に関する論点整理 参考資料 3」, (2016年9月3日取得, http://www.kantei.go.jp/jp/singi/titeki2/tyousakai/contents_kyouka/2013/dai4/sansan3.pdf).
- 内閣府大臣官房政府広報室, 2016, 「外交に関する世論調査 表10-2 韓国に対する親近感(時系列)」(2016年8月10日取得, <http://survey.gov-online.go.jp/h27/h27-gaiko/2-1.html>).
- 日本記者クラブ, 2014, 「記者ゼミ第17回 冬ソナから10年~韓流の新戦略とは 金泳徳氏 韓国コンテンツ振興院日本事務所長」, (2016年9月1日取得 <http://www.jnpc.or.jp/files/2014/05/b379b61cab31ac815dc9ca3c481a0fa1.pdf>).
- 日本貿易振興機構, 2011, 『韓国のコンテンツ振興策と海外市場における直接効果・間接効果の分析』 JETRO.
- 落合恵美子, 2013, 「近代世界の転換と家族変動の論理」『社会学評論』 64(4): 533-52.
- Oh, David C., 2012, “Mediating the Boundaries Second-Generation Korean American Adolescents’ Use of Transnational Korean Media as Markers of Social Boundaries,” *International Communication Gazette*, 74(3): 258-76.
- 大西貢司, 2003, 「日韓ポピュラー音楽 K-POP and J-POP: Influence and Hybridity JASPM 大会 2002 ワークショップ (B) 各報告の要約」『ポピュラー音楽研究』 7: 66.
- 岡崎早由里・西尾珠里・和田林総一郎, 2015, 「クール 코리아 政策にみる日本のコンテンツ輸出政策」『早稲田社会科学総合研究 別冊 2014年度学生論文集』.
- Omatsu, Glenn, 2000, “The ‘Four Prisons’ and the Movements of Liberation,” Min Zhou & J.V. Gatewood eds., *Contemporary Asian America: A Multidisciplinary Reader*, New York University Press, 56-88.

- Park, Young-Seon, 2014, "Trade in Cultural Goods: A Case of the Korean Wave in Asia" *Journal of East Asian Economic Integration*, March 2014, 18(1): 83-107.
- Park, Young-Seon, 2015, "Does the Rise of the Korean Wave Lead to Cosmetics Export?" *Journal of Asian Finance, Economics and Business*, 2(4): 13-20.
- Pearson, A. R., J. F. Dovidio & S. L. Gaertner, 2009, "The nature of contemporary prejudice: Insights from aversive racism," *Social and Personality Psychology Compass*, 3(3): 314-38.
- Putnam, Robert D., 2001, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon and Schuster.
- Pyke, Karen, & Tran Dang, 2003, "FOB' and 'Whitewashed': Identity and Internalized Racism among Second Generation Asian Americans," *Qualitative Sociology*, 26(2): 147-72.
- Ritzer, George, 1993, *The McDonaldization of Society*, Pine Forge Press. (=1999, 正岡寛司監訳『マクドナルド化する世界』早稲田大学出版部.)
- Rorty, Richard, 1999, *Achieving Our Country: Leftist Thought in Twentieth-Century America*, Harvard Press: 88.
- Ruiz, Neil G., 2016, "The Geography of Foreign Students in U.S. Higher Education: Origins and Destinations," August 29, 2014, BROOKINGS, 1775 Massachusetts Ave., NW, Washington, DC 20036: The Brookings Institution, (Retrieved September 11, 2016, <https://www.brookings.edu/interactives/the-geography-of-foreign-students-in-u-s-higher-education-origins-and-destinations/>).
- Rosenbloom, Susan Rakosi, & Niobe Way., 2004, "Experiences of Discrimination among African American, Asian American, and Latino Adolescents in an Urban High School," *Youth & Society*, 35(4): 420-51.
- 坂本佳鶴恵, 2005, 『アイデンティティの権力——差別を語る主体は成立するか』新曜社.
- サーマン, オーエン& バーガー D & ルアノ P., 2001, 「座談会 在日外国人の精神構造と海外渡航日本人の心理 (異文化ストレスとの遭遇)」『現代のエスプリ』412: 5-33.
- Said, Edward W., 1978, *Orientalism*, (=今沢紀子訳, 1995, 『オリエンタリズム』平凡社.)
- , 1993, *Culture and Imperialism*, Vintage.
- 酒井直樹・ブレット・ド・バリー・伊豫谷登士翁編, 1996, 『ナショナリティの脱構築』5, 柏書房.
- Salak, John, 1993, *The Los Angeles Riots: America's Cities in Crisis*, Millbrook Press.
- 産経新聞・産経デジタル, 2016, 「中国、THAAD 配備の韓国に報復か「韓流」見直しを」, 産経ニュース, 2016.8.10, (2016年9月4日取得, <http://www.sankei.com/world/news/160810/wor1608100022-n1.html>).

- 佐藤裕, 2005, 『差別論—偏見理論批判—』 明石出版.
- Schiller, Herbert I. 1979, “Transnational Media and National Development,” in Kaarle Nordenstreng and Herbert I. Schiller eds., *National Sovereignty and International Communication*, Ablex, 21-32.
- 関根政美, 1994, 「脱工業社会とエスニシティ——『遠隔地ナショナリスト』と新人種差別」『社会学評論』44(4): 36-51.
- Shelton, J. Nicole, Jennifer A. Richeson, & Jessica Salvatore, 2005, “Expecting to be the target of prejudice: Implications for interethnic interactions,” *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31(9): 1189-202.
- 進藤久美子, 1976, 「日系米人集団立ち退き政策に関する試論」『アメリカ研究』, 10: 131-54.
- Simmel, Georg, [1904] 1919, “Philosophische Kultur”: *Gesammelte Essays*, Zweite um Einige Zusätze Vermehrte Auflage, Leipzig: Alfred Kroer Verlag, (=1994, 円子修平, 大久保健治訳「文化の哲学」『ジッメル著作集』7, 白水社.)
- 園田節子, 2006, 「北アメリカの華僑・華人研究——アジア系の歴史の創出とその模索」『東南アジア研究』.
- 白水繁彦, 1996, 『エスニック・メディア, 多文化社会日本をめさして』 明石書店.
- Statista, 2016, “Revenue of the Cosmetic/Beauty Industry in the United States from 2002 to 2016 (in billion U.S. dollars),” The Statistics Portal, (Retrieved September 15, 2016, (<http://www.statista.com/statistics/243742/revenue-of-the-cosmetic-industry-in-the-us/>)).
- 杉渕忠基, 2006, 「アジア系アメリカ人概説: ロサンゼルス暴動の醸成」『亜細亜大学学術文化紀要』10: 25-84.
- 高橋哲郎, 2014, 「韓国のコンテンツ産業の現状と輸出振興策に関する一考察」『富山国際大学現代社会学部紀要』6: 127-42.
- 高野陽太郎, 2008, 『「集団主義」という錯覚: 日本人の思い違いとその由来』 新曜社.
- 竹下修子, 2000, 『国際結婚の社会学』 学文社.
- 竹沢泰子, 1993, 「日系アメリカ人におけるエスニシティ再生とアメリカ化」『アメリカ研究』27: 171-88.
- Thai, Hung Cam, 2002, “Formation of Ethnic Identity among Second-Generation Vietnamese Americans,” Pyong Gap Min ed., *The Second Generation: Ethnic Identity among Asian Americans*, Lanham, MD: Altamira Press, 53-83.
- Thomas, R. Roosevelt, Jr., 1990, “From Affirmative Action to Affirming Diversity,” *Harvard Business Review*, March-April, 107-17.
- Thorsten, Marie, 2012, *Superhuman Japan: Knowledge, Nation and Culture in US-Japan Relations*, NY: Routledge.

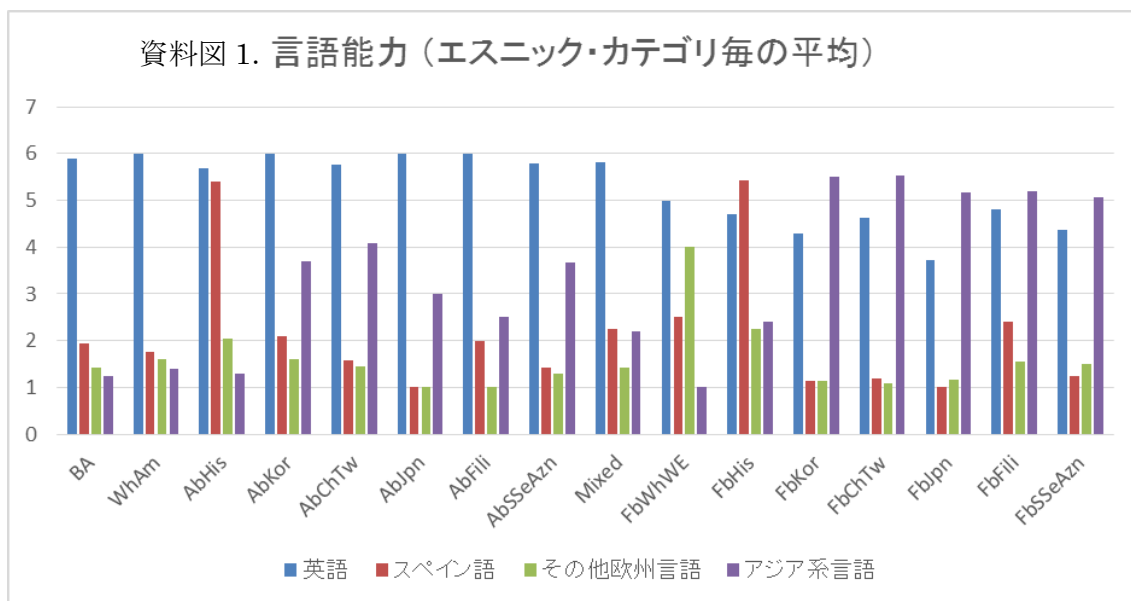
- Tomlinson, John, 1991, *Cultural Imperialism: A Critical Introduction*, Pinter Publishers.
 (=1997, 片岡信訳『文化帝国主義』青土社.)
- Tomlinson, John, 1999, *Globalization and Culture*, Polity Press. (=2000, 片岡信訳『グローバル化——文化帝国主義を超えて』青土社.)
- Touraine, Alain, 1997, “Faux et Vrais Problèmes.” in Michel Wieviorka, ed., *Une Societe Fragmentee. Le Multiculturalisme en Debat*, la decouverte. Poche/Essais: 289-320.
- 津久井要, 2001, 「海外勤務者のメンタルヘルス (異文化ストレスとの遭遇)--(海外勤務, 海外渡航に伴うストレスをめぐる諸問題).」『現代のエスプリ』 412: 34-45.
- 植村邦彦, 2001, 『マルクスを読む』青土社.
- Urry, John, 2003, *Global Complexity*, London: Polity Press. (=2014. 吉原直樹監訳『グローバルな複雑性』法政大学出版社.)
- U.S. Census Bureau, 2015, “2010-2014 American Community Survey 5-Year Estimates. U.S. Census Bureau’s American Community Survey Office. Web,” (Retrieved Oct 28, 2016, <https://factfinder.census.gov/>).
- United States Census Bureau / American FactFinder, 2015, “2015 American Community Survey. U.S. Census Bureau’s American Community Survey Office. Web,” (Retrieved Oct 29, 2016, <https://factfinder.census.gov/>).
- Useem J., Donahue D.J., & Useem H.R., 1963, “Men in the middle of the third culture: The Roles of American and Non-Western People in Cross-Cultural Administration,” *Human Organization*, 22, 169-79.
- Veblen, Thorstein, 1899, *The Theory of the Leisure Class*, New York: Dover Publications.
 (=1961, 小原敬士訳『有閑階級の理論』岩波書店.)
- Wallerstein, Immanuel Maurice, 2006, *European Universalism: The Rhetoric of Power*. The New Press. (=2008, 山下範久訳, 『ヨーロッパの普遍主義——近代世界システムにおける構造的暴力と権力の修辞学』明石書店.)
- Wang, Kimberly and Tanya Chen, 2016, “23 Signs You Grew Up With AZN Pride ‘Got rice?’” BuzzFeed, April 17, 2014, (Retrieved July 5, 2016, https://www.buzzfeed.com/kimberlywang/signs-you-grew-up-with-azn-pride?utm_term=.icDD5D5xnG#.fcMA5A5byD).
- ウェーバー, マックス (阿閉吉男訳), 1987, 『官僚制』恒星社厚生閣.
- Willis, Paul E., 1977, *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Columbia University Press. (=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』ちくま学芸文庫.)
- Wong, Deborah, 2010, “GenerAsians Learn Chinese,” Dimaggio, P. & Fernandez-Kelly, P. eds., *Art in the Lives of Immigrant Communities*, New Brunswick, New Jersey, and London: Rutgers University Press, 125-54.

- 山本崇記, 2009, 「差別の社会理論における課題」『Core Ethics』5: 381-91.
- 嘉本伊都子, 2006, 「『あるかもしれない』 時を求めて: カナダ・モントリオール在住国際結婚のケース・スタディ (前編)」『現代社会研究』9: 93-119.
- 嘉本伊都子, 2007, 「『あるかもしれない』 時を求めて: カナダ・モントリオール在住国際結婚のケース・スタディ (後編)」『現代社会研究』10: 77-104.
- 吉野耕作, 1994, 「消費社会におけるエスニシティとナショナリズム——日本とイギリスの『文化産業』を中心に」『社会学評論』44(4): 20-35.
- 吉野耕作, 1997, 『文化ナショナリズムの社会学——現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会.
- Young, Iris Marion, 1989, “Polity and Group Difference: A Critique of the Ideal of Universal Citizenship,” *Ethics*, 99(2): 250-74. (=1996, 施光恒訳「政治体と集団の差異」『思想』9(867): 97-128.)
- Zhou, Min, & Carl L. Bankston III, 2016, *The Rise of the New Second Generation*, Polity Press.

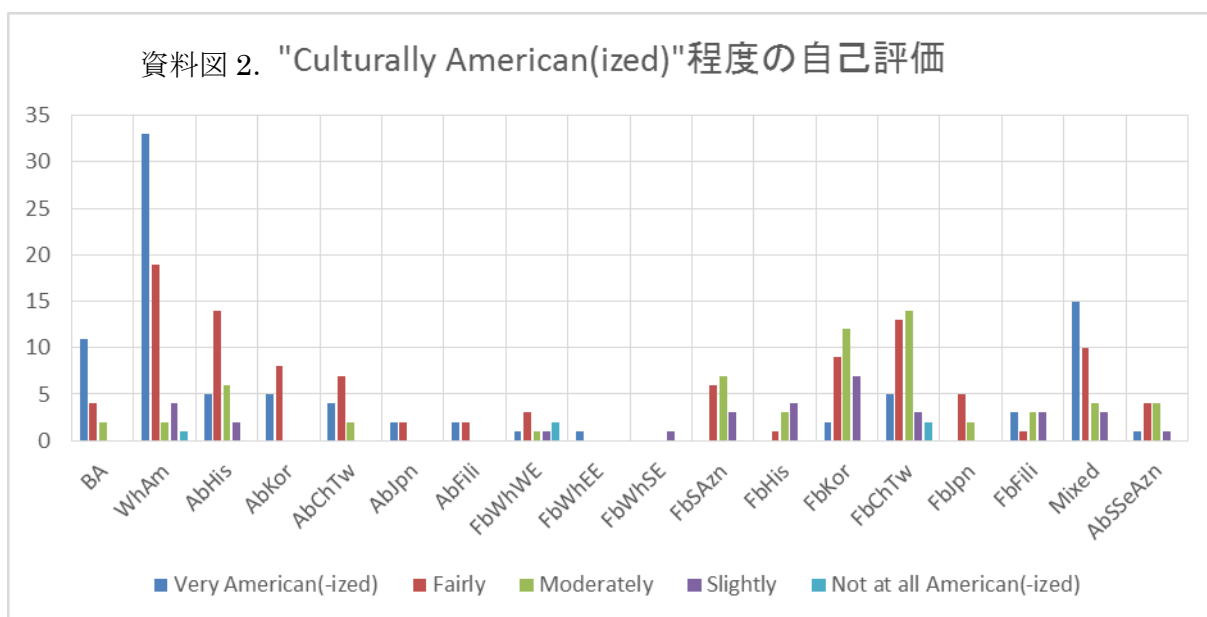
資料：第四章について

1：第四章の調査対象のその他の基礎的なプロフィール

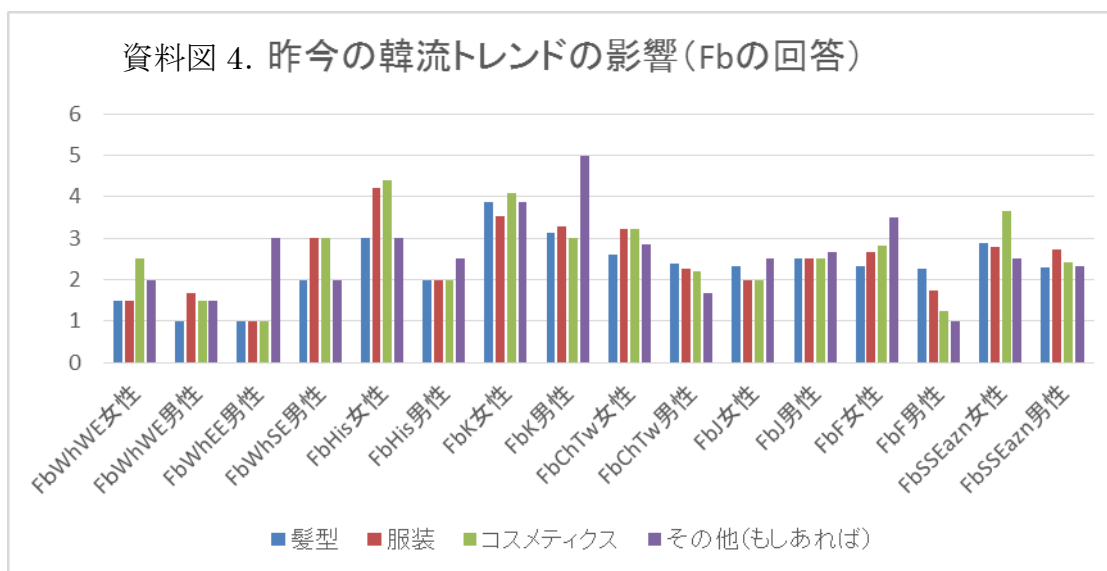
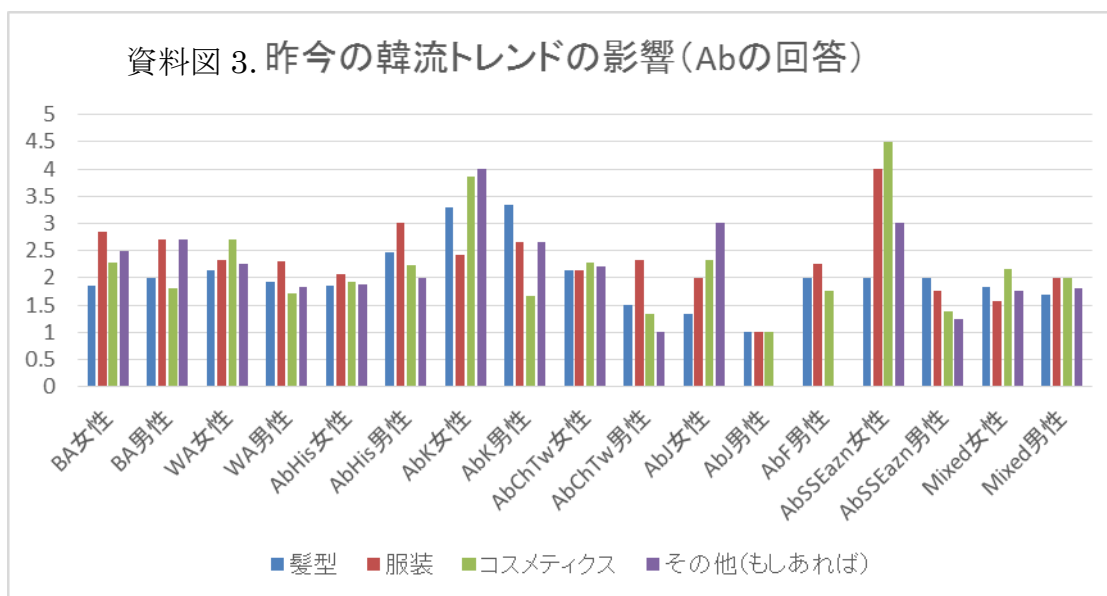
この全体にたいする資料編においては本編との混乱をさけるため、図を資料図と記載し、通し番号を新たに1から振りなおす。



※上図中の Y 軸の数値は次のことを示す。6=Native, 5=Next to native level, 4=Fluent, 3=Business level, 2=Survival level, 1=Entry level to none.

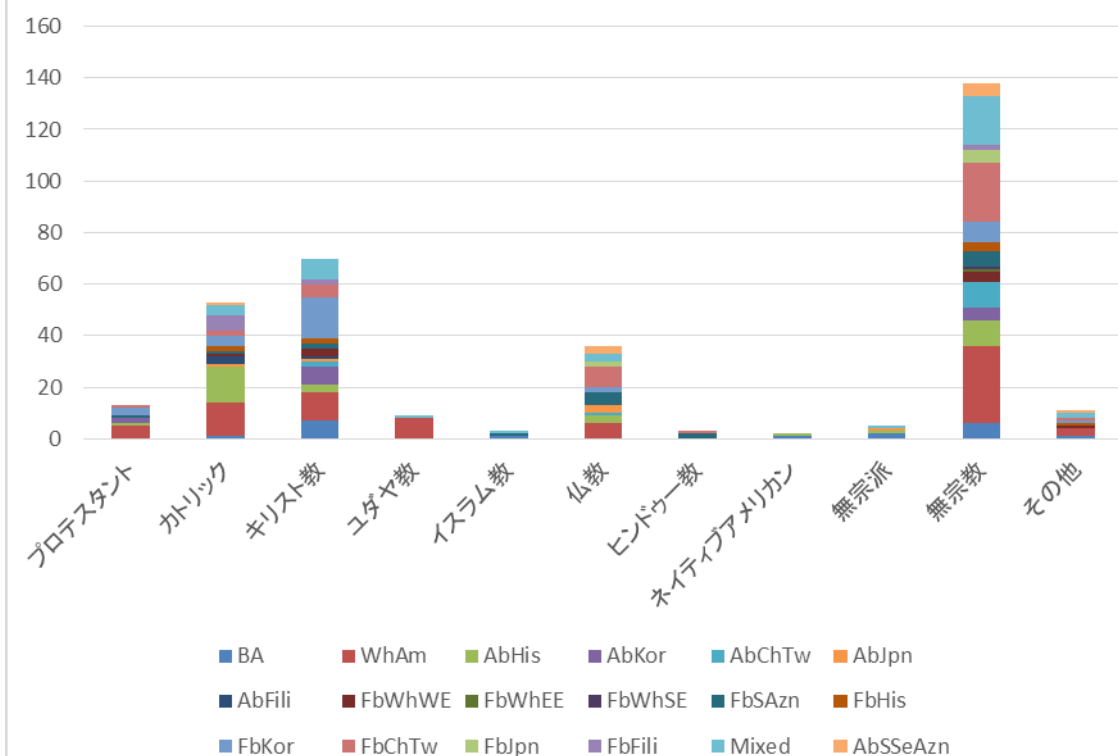


設問：「Do you think your taste in fashion is either directly or indirectly affected by contemporary Korean fashion (hairstyle, clothing, cosmetics) trends?」

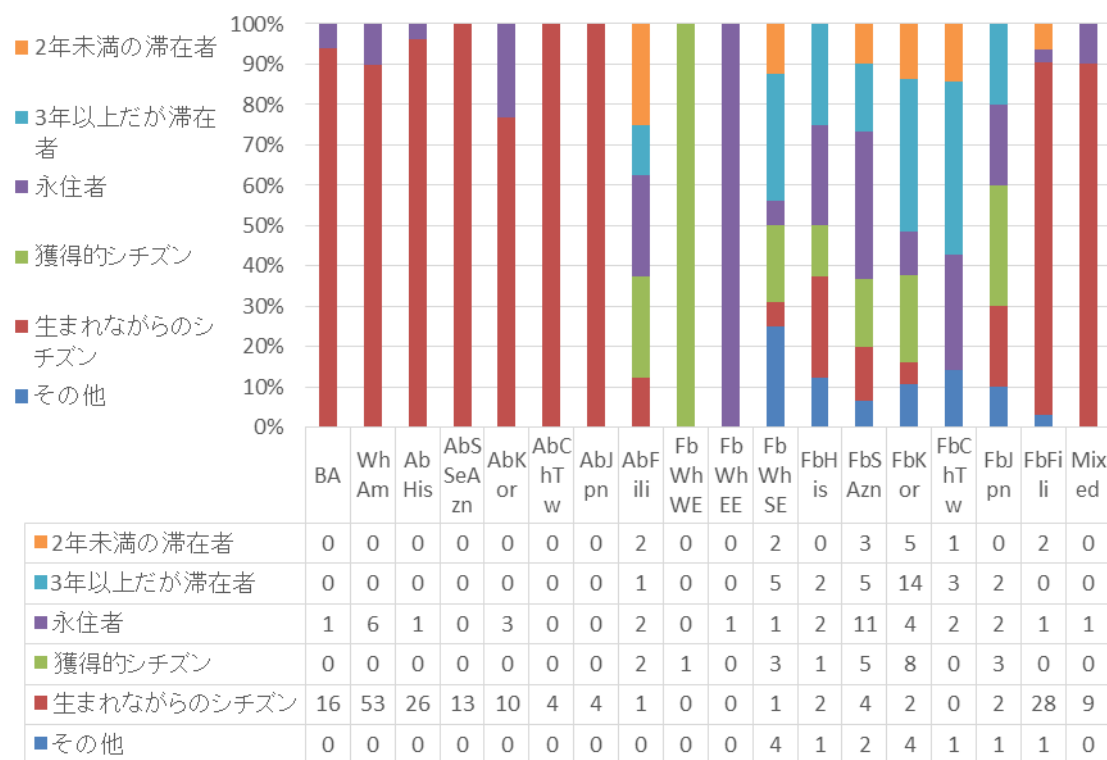


※上図における Y 軸の数値は次を示す. 5=Definitely, 4=Probably, 3=Possible, 2=Probably not, 1=Definitely not. 各カテゴリの平均値である.

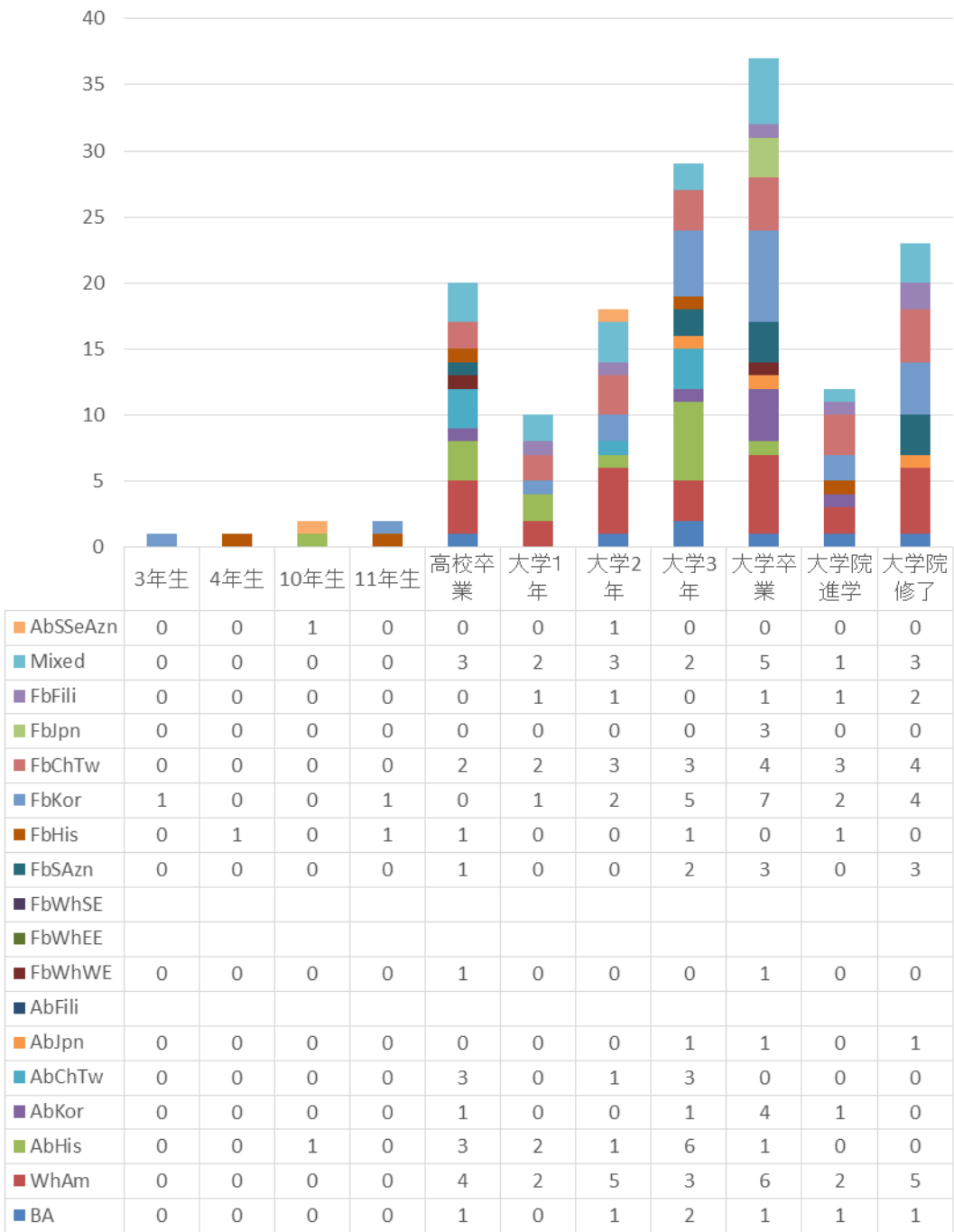
資料図 5. 宗教



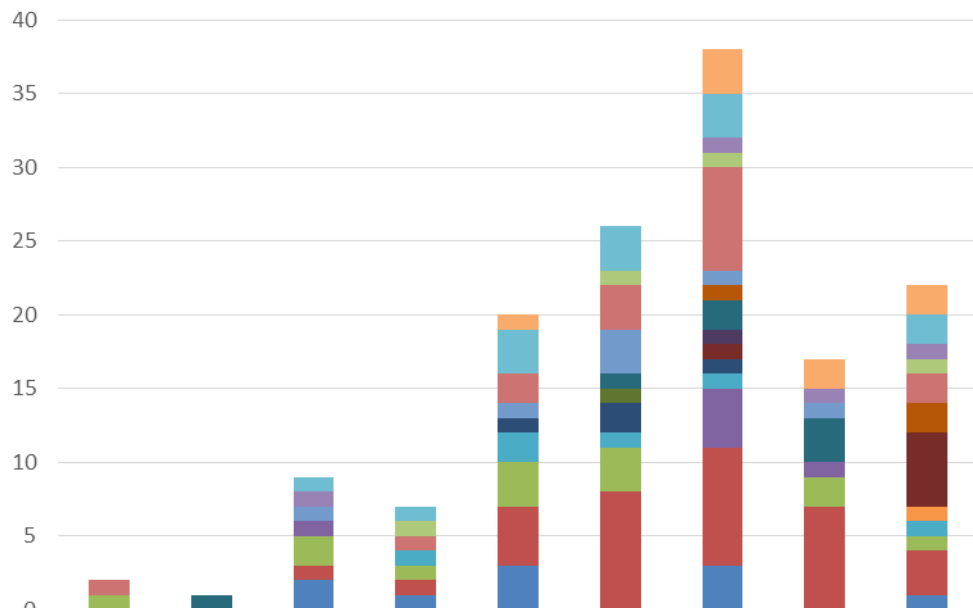
資料図 6. 滞在・居住状況



資料図 7. 教育達成 (女性)

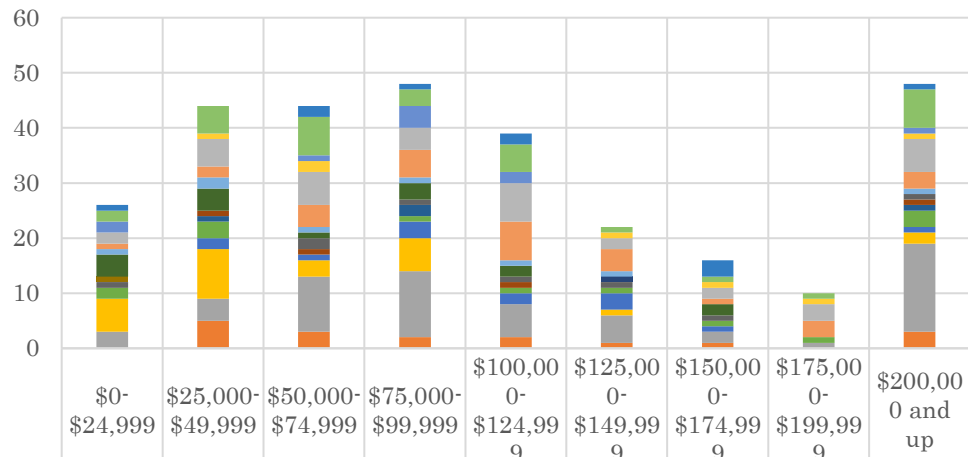


資料図 8. 教育達成 (男性)



	義務教育未滿	11年生	高校卒業	大学1年	大学2年	大学3年	大学卒業	大学院進学	大学院修了
AbSSeAzn	0	0	0	0	1	0	3	2	2
Mixed	0	0	1	1	3	3	3	0	2
FbFili	0	0	1	0	0	0	1	1	1
FbJpn	0	0	0	1	0	1	1	0	1
FbChTw	1	0	0	1	2	3	7	0	2
FbKor	0	0	1	0	1	3	1	1	0
FbHis	0	0	0	0	0	0	1	0	2
FbSAzn	0	1	0	0	0	1	2	3	0
FbWhSE	0	0	0	0	0	0	1	0	0
FbWhEE	0	0	0	0	0	1	0	0	0
FbWhWE	0	0	0	0	0	0	1	0	5
AbFili	0	0	0	0	1	2	1	0	0
AbJpn	0	0	0	0	0	0	0	0	1
AbChTw	0	0	0	1	2	1	1	0	1
AbKor	0	0	1	0	0	0	4	1	0
AbHis	1	0	2	1	3	3	0	2	1
WhAm	0	0	1	1	4	8	8	7	3
BA	0	0	2	1	3	0	3	0	1

資料図 9. 本人所得／世帯収入，どちらか大きい方



	\$0-\$24,999	\$25,000-\$49,999	\$50,000-\$74,999	\$75,000-\$99,999	\$100,000-\$124,999	\$125,000-\$149,999	\$150,000-\$174,999	\$175,000-\$199,999	\$200,000 and up
AbSSeAzn	1	0	2	1	2	0	3	0	1
Mixed	2	5	7	3	5	1	1	1	7
FbFili	2	0	1	4	2	0	0	0	1
FbJpn	0	1	2	0	0	1	1	1	1
FbChTw	2	5	6	4	7	2	2	3	6
FbKor	1	2	4	5	7	4	1	3	3
FbHis	1	2	1	1	1	1	0	0	1
FbSAzn	4	4	1	3	2	0	2	0	0
FbWhSE	0	0	0	0	0	1	0	0	0
FbWhEE	1	0	0	0	0	0	0	0	0
FbWhWE	1	0	2	1	1	1	1	0	1
AbFili	0	1	1	0	1	0	0	0	1
AbJpn	0	1	0	2	0	0	0	0	1
AbChTw	2	3	0	1	1	1	1	1	3
AbKor	0	2	1	3	2	3	1	0	1
AbHis	6	9	3	6	0	1	0	0	2
WhAm	3	4	10	12	6	5	2	1	16
BA	0	5	3	2	2	1	1	0	3

■ BA ■ WhAm ■ AbHis ■ AbKor ■ AbChTw ■ AbJpn
■ AbFili ■ FbWhWE ■ FbWhEE ■ FbWhSE ■ FbSAzn ■ FbHis
■ FbKor ■ FbChTw ■ FbJpn ■ FbFili ■ Mixed ■ AbSSeAzn

2 : American Community Survey によるロサンジェルス郡

国勢調査および毎年行われている American Community Survey(ACS)と比較をし、第四章で使用したサンプル群の偏り具合を把握する。

国勢調査は 10 年毎に行われ、ACS はそれを補完する目的で毎年行われている。ここでは、入手できるなかで最新の 2015 年のデータ（推計）を下で示した。ソースは全て **United States Census Bureau / American FactFinder (2015)** のロサンジェルス郡に絞ったデータをオンラインで取得し、それにもとづいて筆者がグラフを作成した。一つ一つへの出典は略記にするが、各グラフ下部にソースの詳細の ID および、**Table, File or Document Title** を記す。

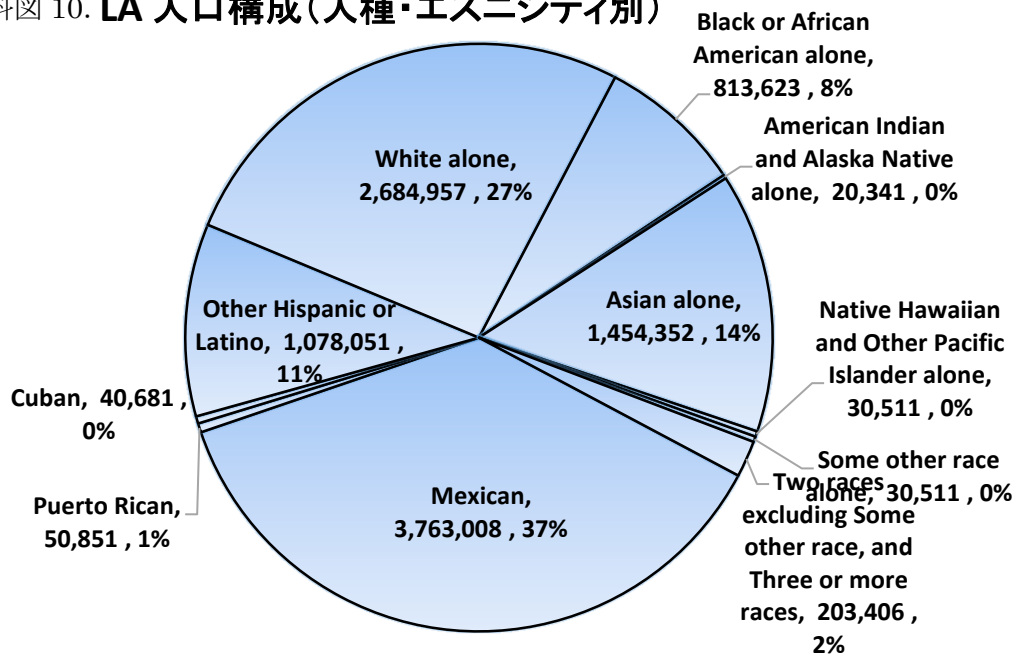
分類は LA 郡全体をまず図示し、続いて第四章で主として分析の対象としたエスニック・カテゴリと対応する、白人系（非ヒスパニック）、韓国系、中国系の 3 つを引用した。それぞれ、年齢階級別の人口分布、**Foreign-born/American-born** の割合、家庭での英語使用と英語力、教育達成分布、1 年前の年収を確認する。

偏り：

韓国系と中国系人口では、かなりまとまった人数が“**very well**”以下の英語運用力にとどまっていることがわかるが、本研究第四章で使用したデータセットはその層をほとんどすくいとれていない。

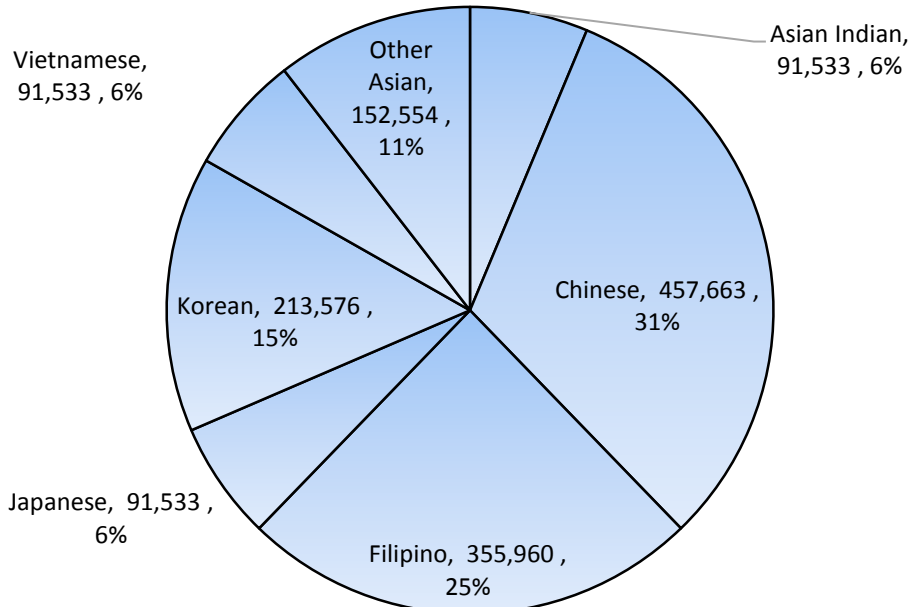
3-1 ACS による LA 郡全体

資料図 10. LA 人口構成(人種・エスニシティ別)

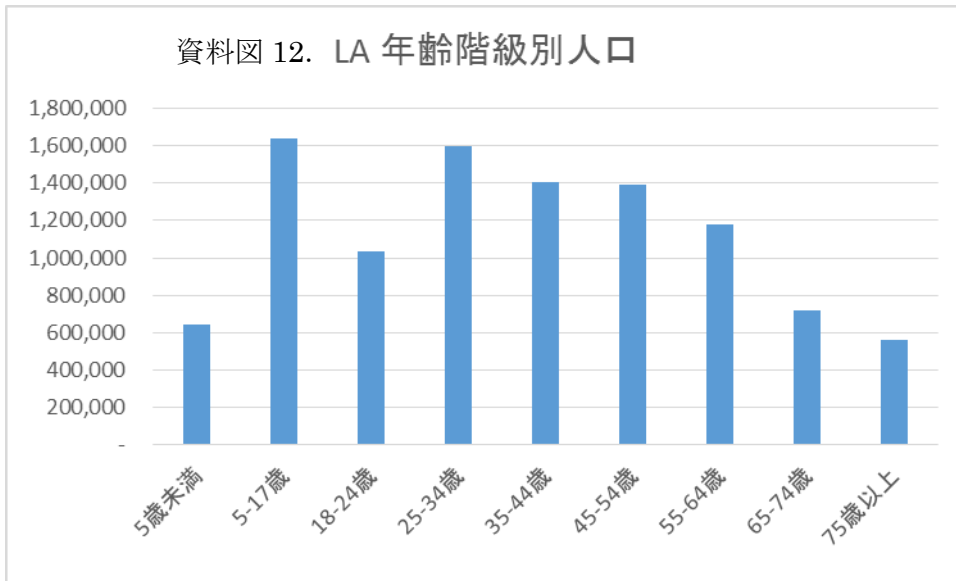


(ACS2015: CP05 - COMPARATIVE DEMOGRAPHIC ESTIMATES より筆者作成)

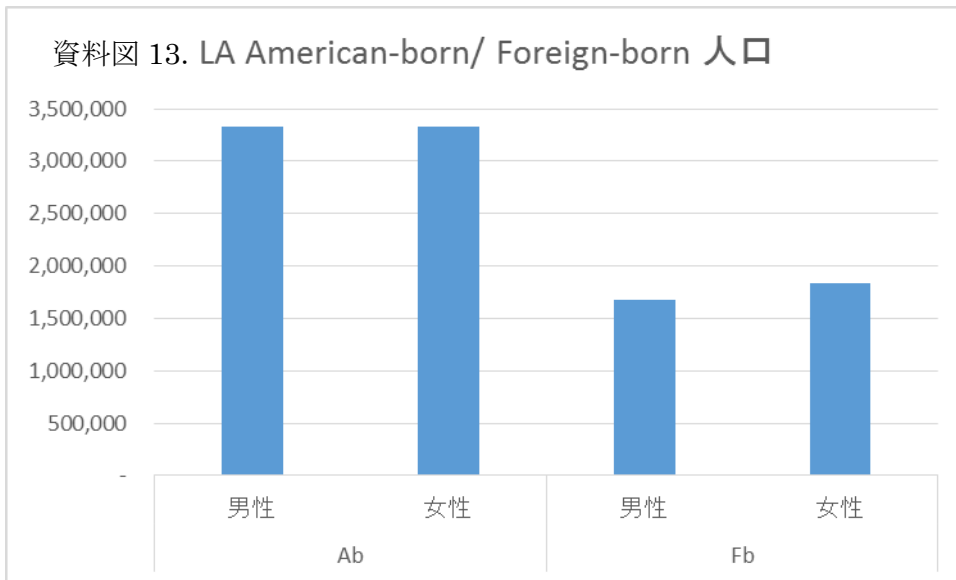
資料図 11. LA アジア系人口構成(エスニシティ別)



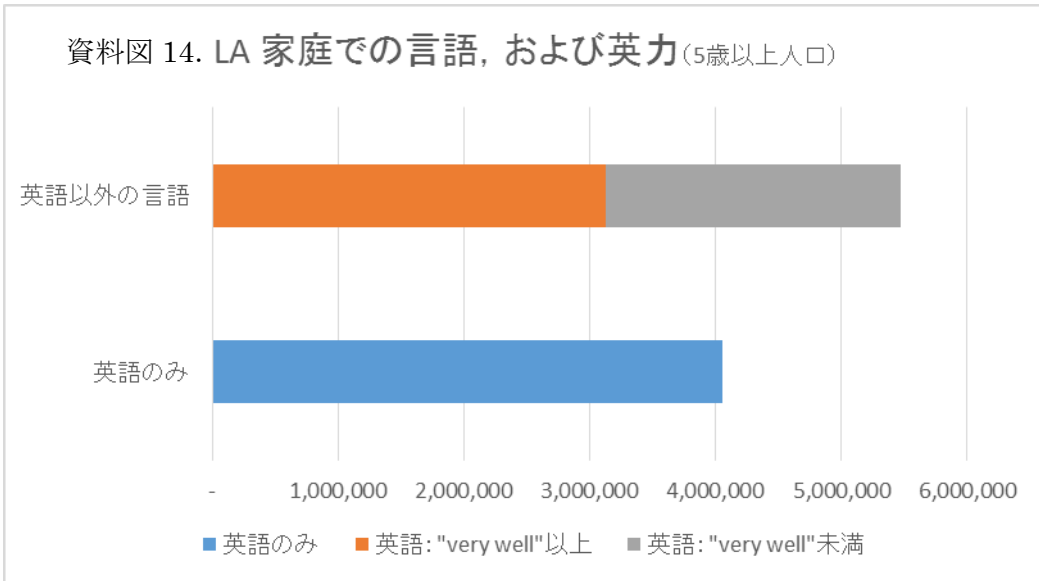
(ACS2015: CP05 - COMPARATIVE DEMOGRAPHIC ESTIMATES より筆者作成)



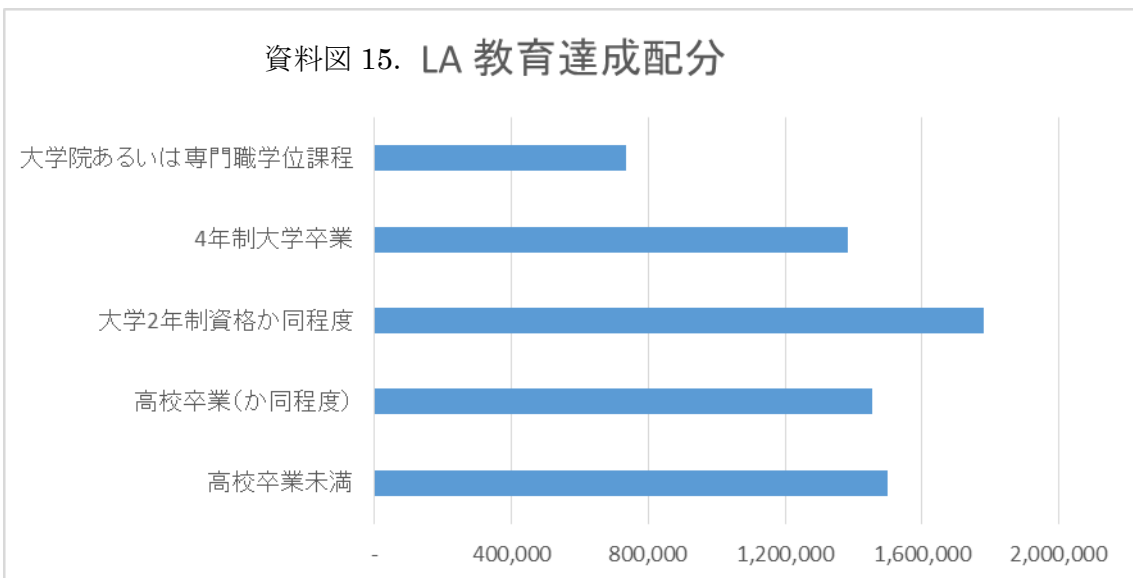
(ACS2015: S0201- SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES
より筆者作成)



(ACS2015: S0201- SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES
より筆者作成)

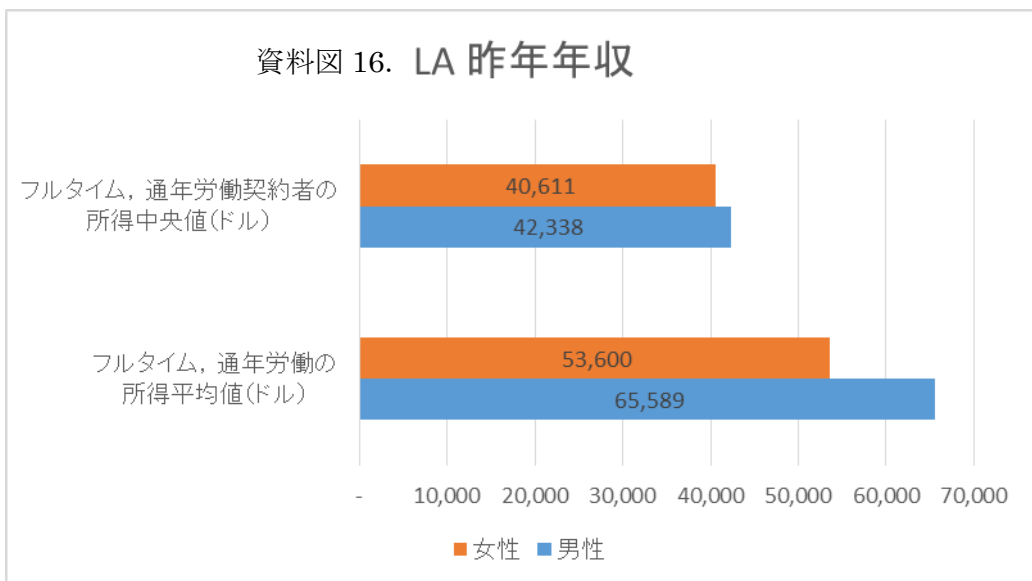


(ACS2015: S0201- SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES
より筆者作成)



(ACS2015: S0201- SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES
より筆者作成)

資料図 16. LA 昨年年収



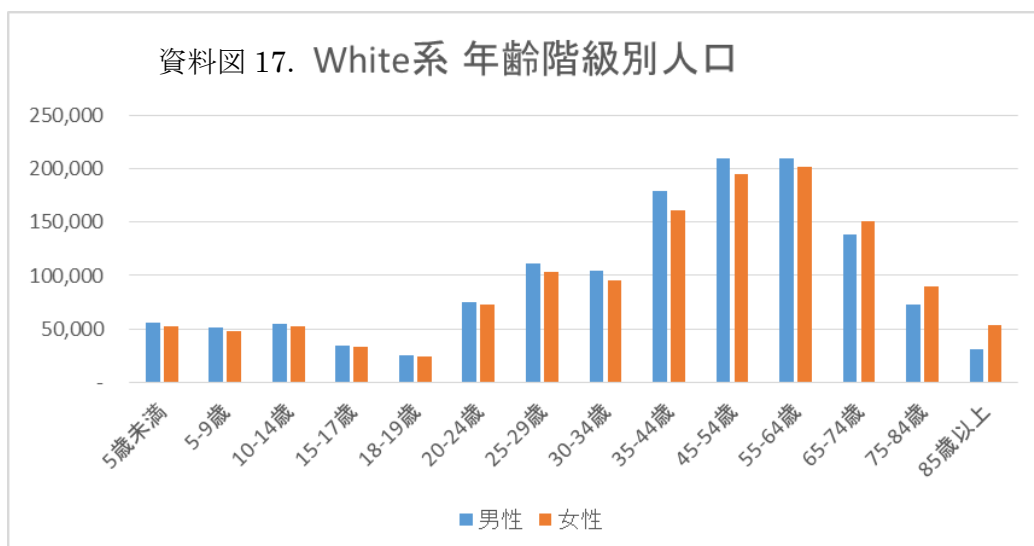
世帯数 3,293,095

世帯収入中央値 (ドル) 59,134

(ACS2015: S0201- SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES
より筆者作成)

3-2 ACS による White 系 (アメリカ人以外も含む)

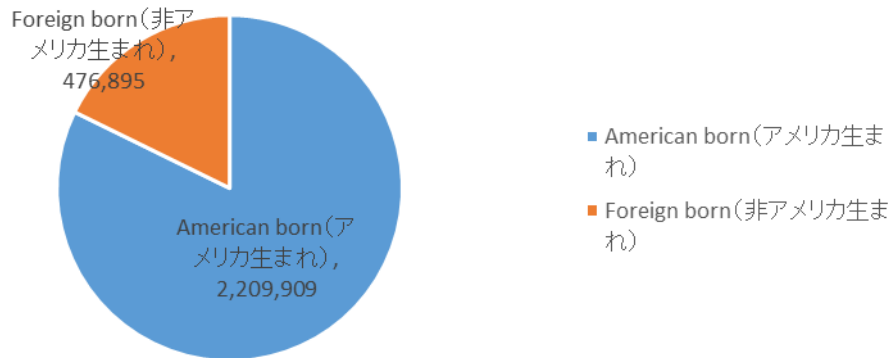
資料図 17. White系 年齢階級別人口



(「B01001H: SEX BY AGE (WHITE ALONE, NOT HISPANIC OR LATINO)

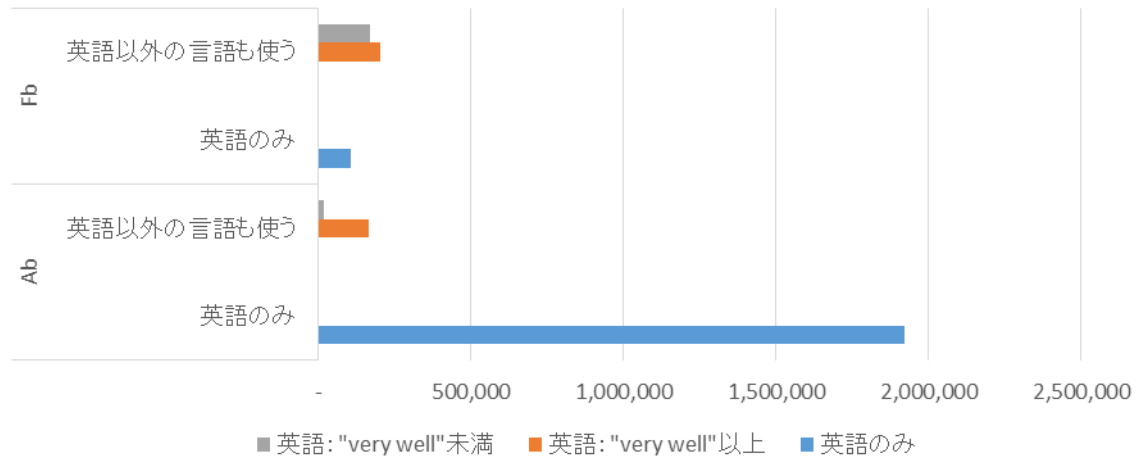
Universe: White alone, not Hispanic or Latino population more information
2015 American Community Survey 1-Year Estimates」をもとに図は筆者作成.)

資料図 18. White系 Foreign-born/American-born 人口

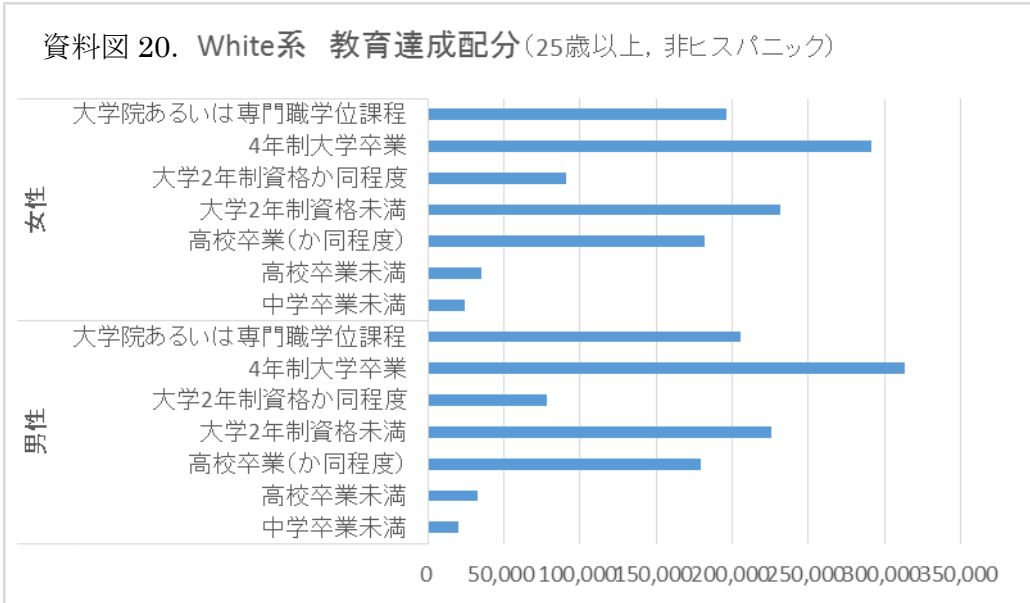


(「B06004H, PLACE OF BIRTH (WHITE ALONE, NOT HISPANIC OR LATINO) IN THE UNITED STATES, Universe: White alone, not Hispanic or Latino population in the United States more information, 2015 American Community Survey 1-Year Estimates」をもとに図は筆者作成.)

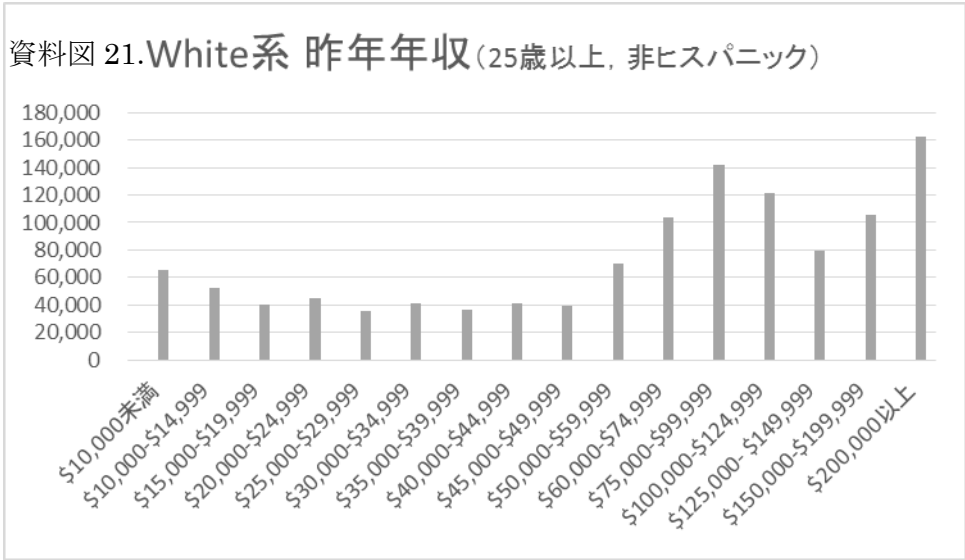
資料図 19. White系 家庭での言語, および英語力 (5歳以上人口)



(「B16005H, NATIVITY BY LANGUAGE SPOKEN AT HOME BY ABILITY TO SPEAK ENGLISH FOR THE POPULATION 5 YEARS AND OVER (WHITE ALONE, NOT HISPANIC OR LATINO), Universe: White alone, not Hispanic or Latino population 5 years and over more information, 2015 American Community Survey 1-Year Estimates」をもとに図は筆者作成.)

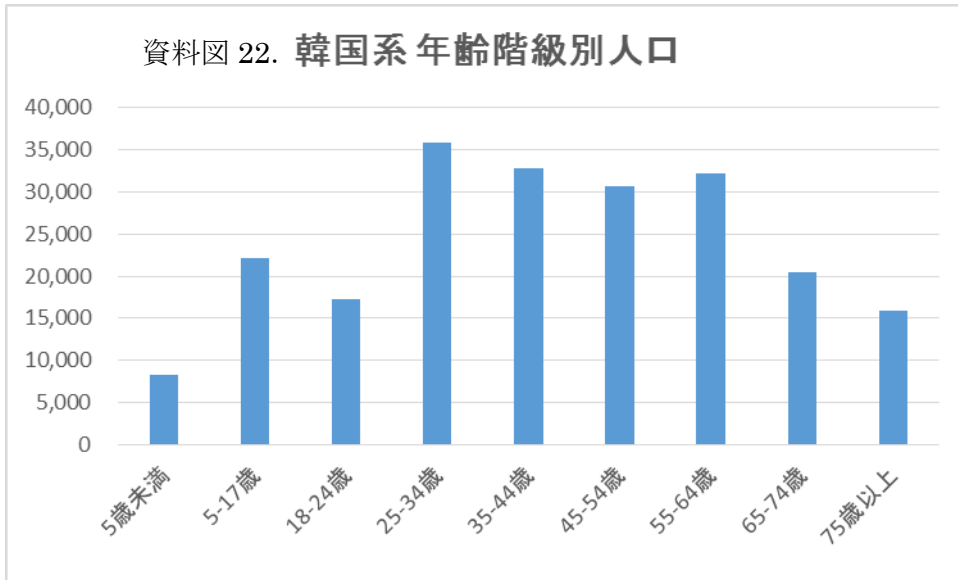


(「B15002H, SEX BY EDUCATIONAL ATTAINMENT FOR THE POPULATION 25 YEARS AND OVER (WHITE ALONE, NOT HISPANIC OR LATINO), Universe: White alone, not Hispanic or Latino population 25 years and over more information 2015 American Community Survey 1-Year Estimates」をもとに図は筆者作成.)

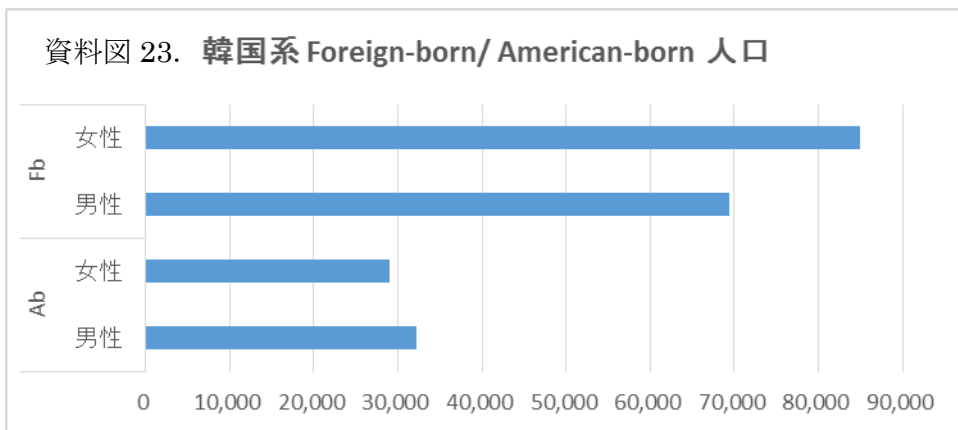


(「ACS2015, B19001H: HOUSEHOLD INCOME IN THE PAST 12 MONTHS (IN 2015 INFLATION-ADJUSTED DOLLARS) (WHITE ALONE, NOT HISPANIC OR LATINO HOUSEHOLDER) - Universe: Households with a householder who is White alone, not Hispanic or Latino」をもとに図は筆者が作成.)

3-3 ACS による韓国系

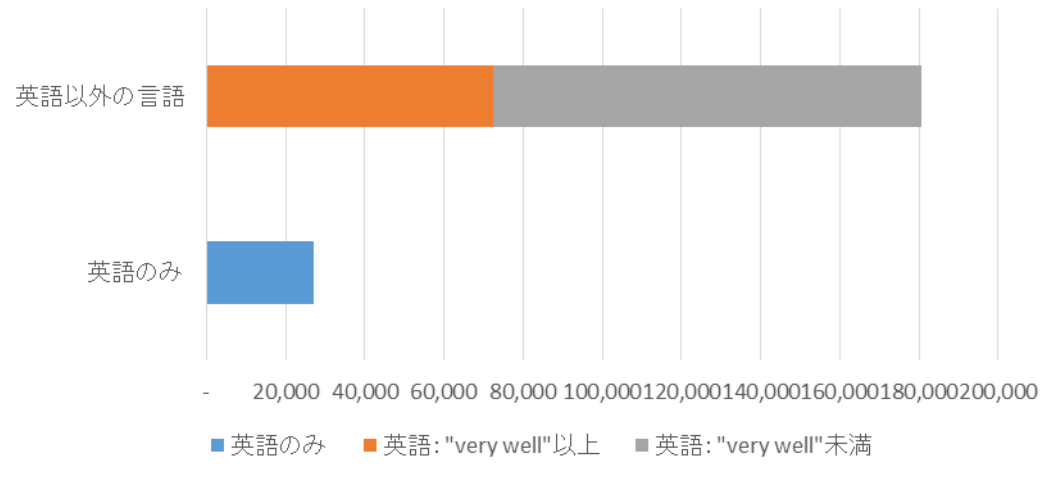


(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)



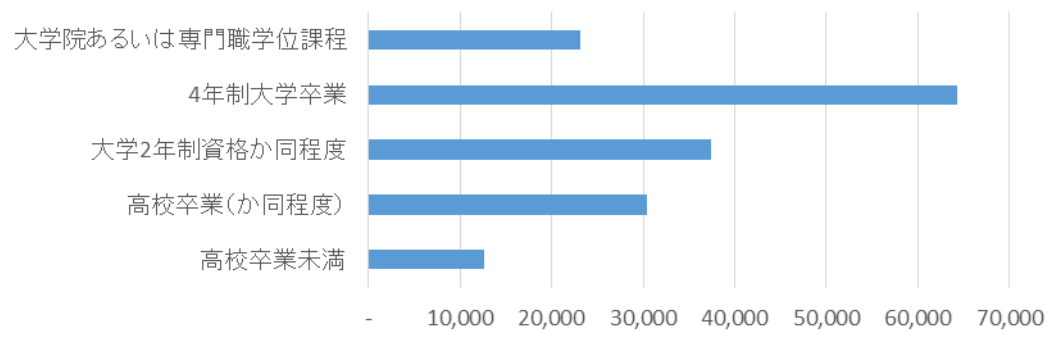
(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)

資料図 24. 韓国系 家庭での言語, および英語力 (5歳以上人口)

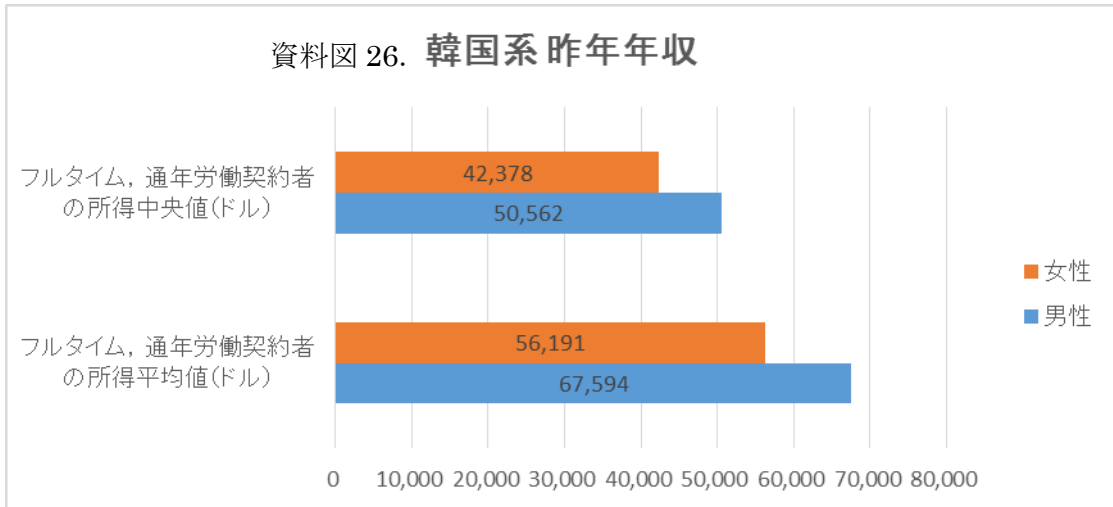


(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)

資料図 25. 韓国系 教育達成配分 (25歳以上)

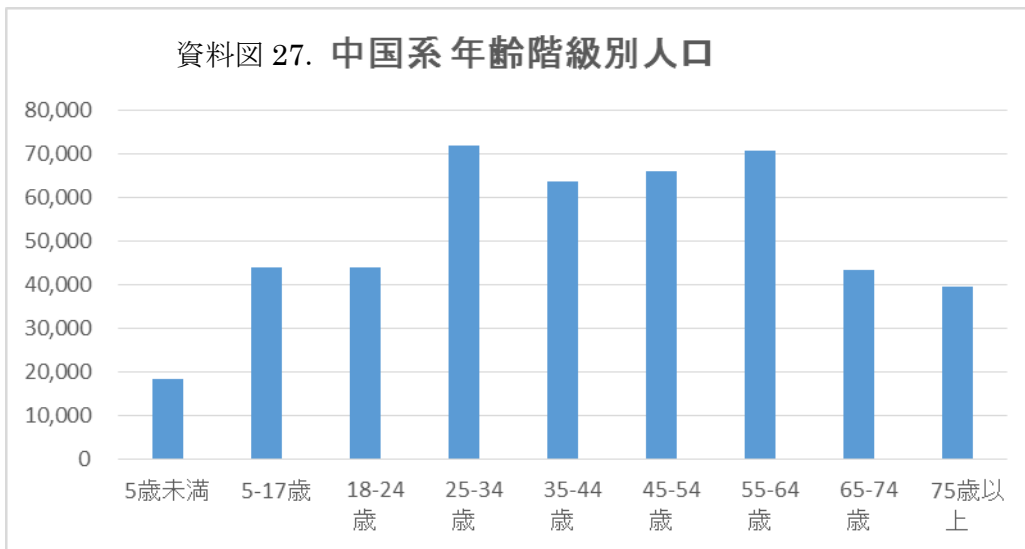


(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)

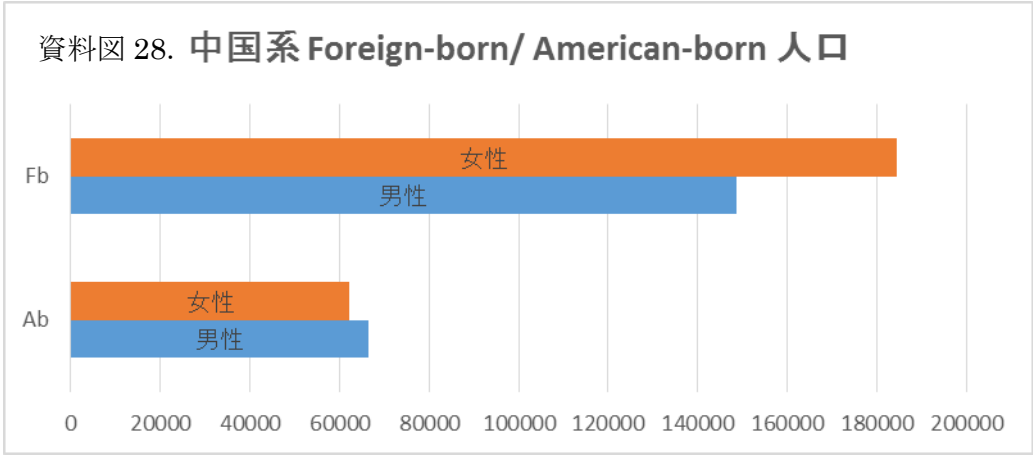


(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに図は筆者作成.)

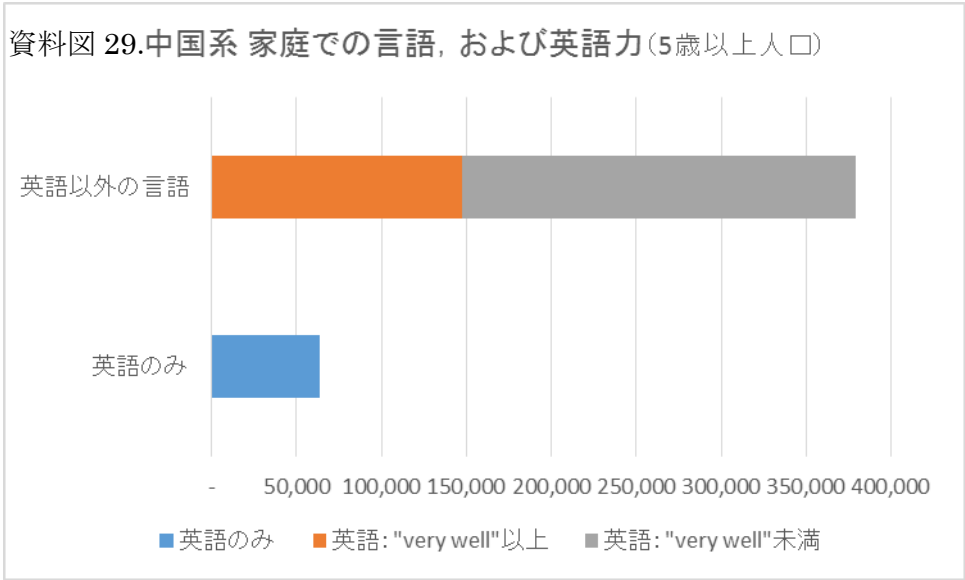
3-4 ACS による中国系 (台湾系含まず)



(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに図は筆者作成.)

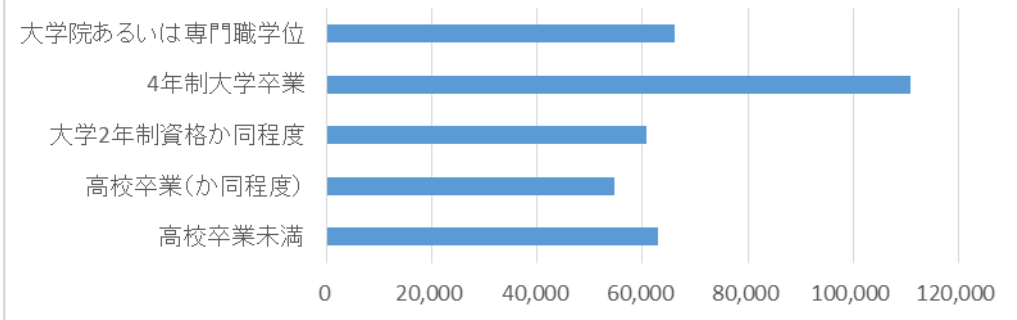


(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)



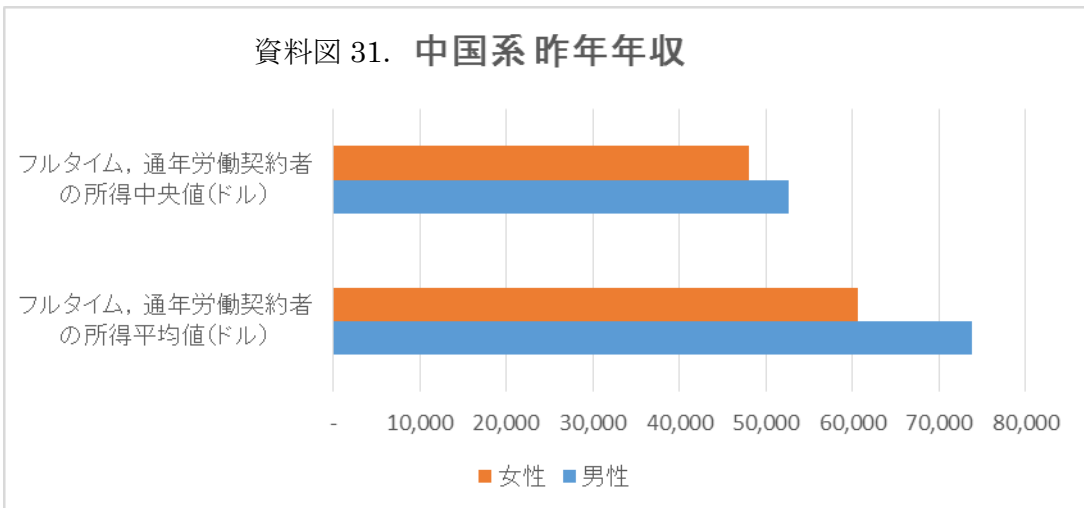
(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)

資料図 30. 中国系 教育達成配分(25歳以上人口)



(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)

資料図 31. 中国系 昨年年収



(「S0201: SELECTED POPULATION PROFILE IN THE UNITED STATES」をもとに
図は筆者作成.)

3 : 第四章の調査票

Welcome to Sociological Survey in LA 2016

Thank you for participating in our survey.

This research is about social ties and also to capture the possible convergence of cultures in LA county.

Your anonymity will be preserved throughout this survey.

It will be by far easier on PC than on a mobile device to take this survey.

Please proceed if you match the following criteria:

- Currently residing in Los Angeles county.
- Aged 18-54.

Cultural Bio

* 1. How much culturally American(-ized) would LA people generally view you in your observation?

*If you are taking this survey on a mobile device, you may need to scroll the screen to the right to see all the options to choose from.

	Very American(-ized)	Fairly	Moderately	Slightly	Not at all American(-ized)
Culturally American(-ized)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

* 2. What qualities constitute the state of "being culturally American(-ized)" in your opinion? Check all important aspects.

- life values
- being confident
- value equality among gender, races/ethnicity
- open to diversity
- democratic
- colloquial fluency
- sense of humor
- fashion
- body size
- multicultural
- execution of individual rights
- Other (please specify)

Contemporary Korean Trends

* 3. Do you think your taste in fashion is either directly or indirectly affected by contemporary Korean fashion (hairstyle, clothing, cosmetics) trends?

	Definitely.	Probably.	Possibly.	Probably not.	Definitely not.
Hairstyle	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Clothing	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Cosmetics	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Other (if any)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

Disclaimer

- * 4. Although this survey is NOT supporting any sort of stereotyping, it is necessary to ask the following questions from next page inevitably in this "stereotyping" manner in order to capture the existing reality.

It can be very easily mistaken as potentially racist and morally wrong to inquire aesthetic desirability in this way, however, those are NOT the intention of this survey. We rather wish those to be eradicated someday.

*At any point of this questionnaire, should you experience discomfort and opt to exit, there is an exit button on the top right corner on every page.

- Yes, I have read the above explanation and proceed to the actual questions.
- No, I haven't read. ->Then, please read the above note.

Your Evaluation of Your Own Aesthetics

Although this survey is NOT supporting any sort of stereotyping, it is necessary to ask next question in order to capture the existing reality.

It can be mistaken as potentially racist or morally wrong to inquire aesthetic desirability in this way, however, those are not the intention of this survey. We rather wish those to be eradicated someday.

* 5. How often would the people of the following categories likely to perceive YOU aesthetically desirable based on your observation?

	usually	often	occasionally	rarely	usually not	N/A
Black/African American would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
White American would find me desirable. (*non Hispanic)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Hispanic/Latin would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Korean would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Chinese and Taiwanese would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Japanese would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Filipino would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born white would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Hispanic/Latin would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Korean would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Chinese/Taiwanese would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Japanese would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Filipino would find me desirable.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Other (if any)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

Personal Network

- 6. Living in LA, you must have contacts/ relationship with quite many people of diverse ethnicity, however, if you were to measure the amount of time you interact with for each ethnic group, either for professional or friendship or any other kinds of relationship, what would it be?

	usually	often	occasionally	rarely	usually not
Black/African American	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
White American (*non Hispanic)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Hispanic/Latin	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Korean	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Chinese and Taiwanese	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Japanese	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Filipino	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born white	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Hispanic/Latin	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Korean	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Chinese or Taiwanese	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Japanese	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Filipino	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Other	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

Your Attractiveness

Again this survey is NOT supporting any sort of stereotyping, however, it is necessary to ask this question in order to capture the existing reality.

* 7. How often would the people of the following categories find YOU attractive to have ROMANTIC RELATIONSHIP with in LA county based on your observation?

	usually	often	occasionally	rarely	usually not	N/A
Black/African American would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
White American would find me attractive. (*non Hispanic)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Hispanic/Latin would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Korean would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Chinese and Taiwanese would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Japanese would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Filipino would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born white would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Hispanic/Latin would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Korean would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Chinese and Taiwanese would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Japanese would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Filipino would find me attractive.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

Your Comfortability

Again this survey is NOT supporting any sort of stereotyping, however, it is necessary to ask this question in order to capture the existing reality.

- * 8. How often would the people of the following categories find YOU comfortable to have CLOSE FRIENDSHIP with in LA county based on your observation?

	usually	often	occasionally	rarely	usually not	N/A
Black/African American would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
White American would seem comfortable with me. (*non Hispanic)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Hispanic/Latin would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Korean would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Chinese and Taiwanese would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Japanese would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Filipino would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born white would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Hispanic/Latin would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Korean would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Chinese and Taiwanese would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Japanese would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

	usually	often	occasionally	rarely	usually not	N/A
Foreign-born Filipino would seem comfortable with me.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Other (please specify)	<input type="text"/>					

Face Sheet

* 9. Tell us your gender.

- Female
 Male
 Other (please specify)

* 10. Tell us your age.

* 11. How old were you when you began living in US? *Put "0" if you were born in US.

* 12. Your linguistic abilities.

	Native	Next to native level	Fluent	Business level	Survival level	Entry level to none
English	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Spanish	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Another European language	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Asian language	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

* 13. Your biological parent(s)' ethnic background(s).

	Mother	Father
Black/African American	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
White American (*non Hispanic)	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
American-born Hispanic/Latin	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
American-born Korean	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
American-born Chinese or Taiwanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
American-born Japanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
American-born Filipino	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born white West or North European	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born white East European	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born white South European	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born South or South-East Asian	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born Hispanic/Latin	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born Korean	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born Chinese or Taiwanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born Japanese	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Foreign-born Filipino	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
Other	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

Other (please specify)

* 14. What is your document status in US?

- Citizen from birth
- Acquired citizen
- Permanent resident
- Expat/ Temporary resident for some years (3 years or longer)
- Visitor (2 years at maximum)
- Other (please specify)

* 15. Do you identify with any of the following religions? (Please select all that apply.)

- Protestantism
- Catholicism
- Christianity
- Judaism
- Islam
- Buddhism
- Hinduism
- Native American
- Inter/Non-denominational
- No religion
- Other (please specify)

* 16. What is the highest level of education you have completed?

* 17. What is your PARENT(S)' average gross household annual income before tax?

- \$0-\$24,999
- \$25,000-\$49,999
- \$50,000-\$74,999
- \$75,000-\$99,999
- \$100,000-\$124,999
- \$125,000-\$149,999
- \$150,000-\$174,999
- \$175,000-\$199,999
- \$200,000 and up

* 18. What is YOUR personal gross household income in 2015 before tax?

- \$0-\$24,999
- \$25,000-\$49,999
- \$50,000-\$74,999
- \$75,000-\$99,999
- \$100,000-\$124,999
- \$125,000-\$149,999
- \$150,000-\$174,999
- \$175,000-\$199,999
- \$200,000 and up

* 19. Who are currently in your household?

	Yes.	No.
mother	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
father	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
spouse	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
sibling(s)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
your children	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
other	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

* 20. How many people currently live in your household? *Including yourself.

Basic Bio

- * 21. What is your height in feet and inches? Or alternatively in centimeters. (Remove shoes before measuring.)

Feet

Inches

cm

- * 22. What is your current weight in pounds? Or alternatively in kilograms.

pounds

kg

Modernity Stereotypes

This is the last question. Again this survey is NOT supporting any sort of stereotyping, however, it is necessary to ask this question in order to capture the existing reality.

* 23. Based on the stereotypes, how often are most of the following people of categories viewed "modern" in LA county?

	almost always	usually	often	occasionally	rarely	usually not	N/A
Black/African American would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
White American would be viewed modern. (*non Hispanic)	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Hispanic/Latin would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Korean would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Chinese and Taiwanese would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Japanese would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
American-born Filipino would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born white would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Hispanic/Latin would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Korean would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Chinese and Taiwanese would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Japanese would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
Foreign-born Filipino would be viewed modern.	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

Other (please specify)

End of the questionnaire

Here's the end of this questionnaire.

24. If you have any comment, please kindly let us know in the box below.

This is the end of the questionnaire. Thank you so much for your time and generous contribution!!

Researcher: Satoshi Maeda
Tokyo Metropolitan University,
Graduate School of Humanities,
Department of Behavioral Social Sciences (Sociology)
email: satslaca@gmail.com

